

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十五冊

龍川四条遺跡

1995.3

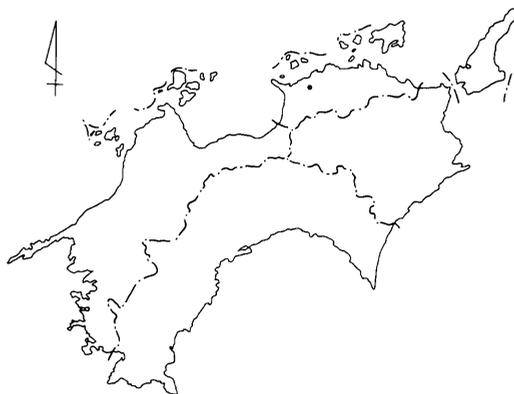
香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十五冊

龍川四条遺跡



1995.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

序 文

四国横断自動車道は、高松～善通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が結ばれることになり、本格的な高速交通時代の幕開けとなりました。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道高松～善通寺間の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。3年6ヶ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了しました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行っているところであります。

今回、『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十五冊』として刊行いたしますのは、善通寺市原田町、木徳町に所在する龍川四条遺跡についてであります。龍川四条遺跡の調査では、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されております。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成7年3月

香川県教育委員会

教育長 田中壮一郎

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第十五冊で、香川県善通寺市原田町・木徳町で実施した龍川四条遺跡（たつかわ しじょういせき）の発掘調査の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、（予備調査を平成元年4月から5月まで実施し、本調査を）平成元年6月1日から平成3年6月18日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

西岡達哉，大西義則，大林修三，真下拓也，木下晴一，森下英治，大前智司，
細川ルミ，白川悦代

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土木部横断道対策室，同善通寺土木事務所横断道対策課，善通寺市都市計画課，四国横断自動車道建設善通寺市龍川地区対策協議会，各地元自治会

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告の編集は、西岡が担当し、執筆は下記のとおり分担した。

第1章第1節 真鍋昌宏

第2節 木下

第2章 木下

第3章 木下

第4章 西岡

第6章 西岡

6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

国立歴史民俗博物館 西本豊弘，香川県教育委員会事務局義務教育課（前香川県三木町立田中小学校）古市光信，京都文化博物館 南 博史

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により、表示している。

SA 柵列, SB 掘立柱建物跡, SD 溝状遺構, SE 井戸, SK 土坑,
SP 柱穴, SR 自然河川, ST 埋葬遺構, SX 不明遺構

8. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「丸亀」(1/50,000)及び国土基本図を使用した。また、図版の一部に建設省国土地理院撮影の空中写真を使用した。
9. 本報告書の土器実測図のうち、断面が黒く潰されているものは須恵器・須恵器系土器及び瓦質土器を、断面が空白のものは弥生土器・土師器・土師器系土器及び瓦器を表す。また、石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の廻りの破線は敲打痕を、実線は摩痕と擦滅の範囲を表す。

目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	5
第2章 遺跡の立地と環境	13
第3章 A地区の調査	
第1節 土層序	20
第2節 中部地区の遺構・遺物	34
第3節 東部地区の遺構・遺物	63
第4節 西部地区の遺構・遺物	81
第5節 包含層の遺物	87
第6節 A地区のまとめにかえて	95
第4章 B地区の調査	
第1節 土層序	114
第2節 遺構・遺物	119
第3節 推定旧坪界の調査	184
第4節 B地区のまとめ	186
第5章 自然科学調査の成果	198
第6章 まとめ	204

挿図目次

第1図	四国横断自動車道埋蔵 文化財包蔵地（善通寺～高松）……4	第21図	S R 02 出土遺物実測図②……43
第2図	グリッド配置図……11～12	第22図	S R 02 出土遺物実測図③……44
第3図	龍川四条遺跡の位置……13	第23図	S R 02 出土遺物実測図④……45
第4図	龍川四条遺跡周辺10cm等高線図 ……15～16	第24図	S R 02 出土遺物実測図⑤……46
第5図	龍川四条遺跡周辺の微地形 分類予察図……17	第25図	S R 02 出土遺物実測図⑥……47
第6図	A地区 遺構配置略図・土層 断面模式図……21	第26図	S R 01 平面図……49～50
第7図	土層断面取得位置図……23	第27図	S R 01 出土遺物実測図①……52
第8図	3ライン土層断面図①……24	第28図	S R 01 出土遺物実測図②……53
第9図	3ライン土層断面図②……25	第29図	S R 01 出土遺物実測図③……54
第10図	3ライン土層断面図③ Cライン土層断面図①……26	第30図	S R 01 出土遺物実測図④……55
第11図	Cライン土層断面図②……27	第31図	S R 01 出土遺物実測図⑤……56
第12図	Cライン土層断面図③……28	第32図	S R 01 出土遺物実測図⑥……57
第13図	Gライン土層断面図①……31	第33図	実験に使用した陶器……58
第14図	Gライン土層断面図②……32	第34図	S R 04・05・06断面図……60
第15図	東部地区 調査区南壁土層断面図……33	第35図	S K 01 平面，断面図・ 出土遺物実測図……61
第16図	中部地区 遺構配置図……35～36	第36図	S D 02 断面図……62
第17図	S R 03 出土遺物実測図①……37	第37図	東部地区 遺構配置図……65～66
第18図	S R 03 出土遺物実測図②……38	第38図	S B 01 平面・断面図……67
第19図	S R 02 遺物取り上げ用 グリッド図……40	第39図	S B 02 平面・断面図……68
第20図	S R 02 出土遺物実測図①……42	第40図	S B 02・S P 01 平面・断面図 S B 02 出土遺物実測図……69
		第41図	S P 33・S K 02 平面・断面図 S P 33・50・S K 02 出土遺物実測図 ……70
		第42図	S K 03・04 平面・断面図……71

第43図	S D 07	断面・出土遺物実測図①	72	第70図	S R 08	伴出遺物実測図①	120
第44図	S D 07	出土遺物実測図②	73	第71図	S R 08	伴出遺物実測図②	121
第45図	S D 08	断面図	74	第72図	S B 03	平面・断面図	122
第46図	S D 08	出土遺物実測図	75	第73図	S B 04	平面・断面図	123
第47図	S D 09～11	断面・ 出土遺物実測図	77	第74図	S B 05	平面・断面図	124
第48図		近代以降の遺構平面図	80	第75図	S B 06	平面・断面図	125
第49図	S D 03	断面図	81	第76図	S B 07	平面・断面図	126
第50図	西部地区	遺構配置図	82	第77図	S B 08	平面・断面図	127
第51図	S D 04	断面・出土遺物実測図	83	第78図	S B 09	平面・断面図	128
第52図	S D 05	断面図	83	第79図	S B 10	平面・断面図	129
第53図	S D 06	出土遺物実測図	84	第80図	S B 11	平面・断面図	130
第54図	S D 06	断面図及び包含層堆積状況 ……………	85	第81図	S B 03・06・10・11 伴出遺物実測図	……………	131
第55図	S X 01	平面図	86	第82図	S B 12	平面・断面図	132
第56図	中部地区	包含層出土土器実測図①	87	第83図	S B 13	平面・断面図	133
第57図	中部地区	包含層出土土器実測図②	88	第84図	S B 14	平面・断面図	134
第58図	中部地区	包含層出土土器実測図③	90	第85図	S B 12～14	伴出遺物実測図	135
第59図	東部地区	包含層出土土器実測図	91	第86図	S K 28	平面・断面図	136
第60図	西部地区	包含層出土土器実測図①	92	第87図	S K 29	平面・断面図	136
第61図	西部地区	包含層出土土器実測図②	93	第88図	S K 30	平面・断面図	137
第62図		包含層出土土器実測図①	93	第89図	S K 29・30	伴出遺物実測図	137
第63図		包含層出土土器実測図②	94	第90図	S K 31	平面・断面図	138
第64図		龍川四条遺跡付近の旧河道	96	第91図	S K 32	平面・断面図	138
第65図	B地区	調査区割り・ 土層序観察位置図	114	第92図	S K 33	平面・断面図	138
第66図	B地区	土層序実測図①	115	第93図	S K 34	平面・断面図	139
第67図	B地区	土層序実測図②	116	第94図	S K 35	平面・断面図	140
第68図	B地区	土層序実測図③	117	第95図	銅鏡・板状木製品実測図	……………	141
第69図	S R 08	断面図	119	第96図	S K 36・37	伴出遺物実測図	141
				第97図	S K 35	青磁椀・銅鏡実測図	142
				第98図	S K 36	平面・断面図	142

第99図	S K 37	平面・断面図	143	第126図	西部柱穴群伴出遺物実測図①	169
第100図	S T 01	平面・断面図	143	第127図	西部柱穴群伴出遺物実測図②	170
第101図	S E 05	平面・断面図	145	第128図	東部包含層出土石製品実測図①	171
第102図	S E 05	井筒見通し図	146	第129図	東部包含層出土石製品実測図②	172
第103図	S E 05	伴出遺物実測図①	147	第130図	東部包含層出土土師器実測図①	174
第104図		曲物の構造・名称模式図	148	第131図	東部包含層出土土師器実測図②	175
第105図	S E 05	伴出遺物実測図②	149	第132図	東部包含層出土土師器実測図③	176
第106図	S E 05	伴出遺物実測図③	149	第133図	東部包含層出土黒色土器・瓦器・ 灰釉陶器実測図・須恵器実測図①	178
第107図	S E 05	伴出遺物実測図④	149	第134図	東部包含層出土須恵器実測図②	179
第108図	S D 15・16	断面図	150	第135図	東部包含層出土須恵器実測図③	180
第109図	S D 15・16	伴出遺物実測図	151	第136図	東部包含層出土陶器・磁器・ 土製品・金属製品実測図	181
第110図	S D 17・18	断面図	152	第137図	西部包含層出土遺物実測図	183
第111図	S D 19	断面図	152	第138図	推定旧坪界土層序実測図	185
第112図	S D 19・20	伴出遺物実測図	153	第139図	香川県出土の曲物実測図①	193
第113図	S D 20	断面図	154	第140図	香川県出土の曲物実測図②	194
第114図	S D 22・23	断面図	155	第141図	香川県出土の曲物実測図③	195
第115図	S D 24・25	断面図	155	第142図	香川県出土の曲物実測図④	196
第116図	S D 27	断面図	155	第143図	香川県出土の曲物実測図⑤	197
第117図	S D 21・24・25・27・31~34・37	伴出遺物実測図	158			
第118図	S D 38	断面図	159			
第119図	S D 38	伴出遺物実測図①	160			
第120図	S D 38	伴出遺物実測図②	161			
	S D 39	伴出遺物実測図	161			
第121図	S D 41	断面図	161			
第122図	S D 42	平面・断面図	162			
第123図	S D 40~46	伴出遺物実測図	163			
第124図	S X 02~04・08・09・12	伴出遺物実測図	166			
第125図		東部柱穴群伴出遺物実測図	168			

図版目次

- 図版 1 龍川四条遺跡周辺空中写真(1) ④ S D 01掘削状況 (南から)
- 図版 2 龍川四条遺跡周辺空中写真(2) ⑤ S D 01断面
- 図版 3 ① A地区調査前風景 (西方から) 図版12① S D 02掘削状況 (東から)
② A地区遠景(1) (南方から) ② S K 01掘削状況
- 図版 4 ① A地区遠景(2) (北方から) 図版13① 東部地区土層断面
② A地区遠景(3) (西方から) ② 作業風景
- 図版 5 ① 開折谷西肩断面 ③ S B 01掘削状況 (東から)
② 開折谷西肩検出状況 (東南から) 図版14① S B 02掘削状況 (西から)
- 図版 6 ① 開折谷埋積土上面 ② S B 02遺物出土状況
② 開折谷断面 (上部) 図版15① 東部地区ピット集中部掘削状況
③ Gライン土層断面 (その1) ② S P 33掘削状況
- 図版 7 ① Gライン土層断面 (その2) 図版16① S K 02掘削状況
② S R 03遺物出土状況 (その1) ② S D 07・08掘削状況
③ S R 03遺物出土状況 (その2) 図版17① S D 07掘削状況
- 図版 8 ① S R 02掘削状況 (北西から) ② S D 07断面
② S R 02遺物出土状況 ③ S D 07遺物出土状況
- 図版 9 ① S R 01掘削状況 (北西から) 図版18① S D 08掘削状況
② S R 01遺物出土状況 (その1) ② S D 08断面
③ S R 01遺物出土状況 (その2) ③ S D 08遺物出土状況
- 図版10① S R 01遺物出土状況 (その3) 図版19① S D 03・04・05掘削状況
② S R 01遺物出土状況 (その4) ② S D 04断面・遺物出土状況
③ S D 05掘削状況
- 図版11① 下川津遺跡第4低地帯流路6 遺物出土状況 図版20① 土取り跡・S D 06掘削状況
② 延命遺跡八反地地区 S K 18 遺物出土状況 ② S X 01掘削状況
③ S R 04掘削状況 (東南から) ③ S D 06断面
④ 獣骨出土状況

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------|
| 図版21 | S R03出土遺物 (その1) | ② | M・N9～11区, O10・11区 |
| 図版22 | S R03出土遺物 (その2) | 図版41① | S R08(1) |
| 図版23① | S R03出土遺物 (その3) | ② | S R08(2) |
| ② | S R02出土遺物 (その1) | 図版42① | S R08 昇降施設状遺構(1) |
| 図版24 | S R02出土遺物 (その2) | ② | S R08 昇降施設状遺構(2) |
| 図版25 | S R02出土遺物 (その3) | 図版43① | S B03 |
| 図版26 | S R02出土遺物 (その4) | ② | S B03 伴出遺物 |
| 図版27 | S R01出土遺物 (その1) | 図版44① | S B04 |
| 図版28 | S R01出土遺物 (その2) | ② | S B05 |
| 図版29 | S R01出土遺物 (その3) | 図版45① | S B06 |
| 図版30 | S R01出土遺物 (その4) | ② | S B07 |
| 図版31① | S R01出土遺物 (その5) | 図版46① | S B08 |
| ② | S K01出土遺物 | ② | S B09 |
| 図版32 | S B02, S P33, S P50出土遺物 | 図版47① | S B10 |
| 図版33① | S D07出土遺物 | ② | S B10 伴出遺物 |
| ② | S D08出土遺物 | 図版48① | S B11 |
| 図版34① | S D10出土遺物 | ② | S B12 |
| ② | S D03出土遺物 | 図版49① | S B13 |
| ③ | S D06出土遺物 | ② | S B14 |
| ④ | 包含層出土遺物 (その1) | 図版50① | S E05(1) |
| 図版35 | 包含層出土遺物 (その2) | ② | S E05(2) |
| 図版36① | 包含層出土遺物 (その3) | 図版51① | S E05 井筒(1) |
| ② | 包含層出土獣骨 (牛) | ② | S E05 井筒(2) |
| 図版37① | H・I8区 | 図版52① | S T01 |
| ② | I・J8区 | ② | S T01 人骨 |
| 図版38① | I・J6・7区 | 図版53① | S K28 |
| ② | M・N9・10区 | ② | S K29 |
| 図版39① | L・M11・12区 | 図版54① | S K30 |
| ② | N10・11区 | ② | S K35 |
| 図版40① | N・O10・11区 | 図版55① | S K35 伴出遺物 |

- ② SK35, SD42
- 図版56① SD15
- ② SD17
- 図版57① SD18(1)
- ② SD18(2)
- 図版58① SD41
- ② SD32~36・59~61, SX06
- 図版59① SD19(1), SX09
- ② SD19(2)
- 図版60① SD20・38・63
- ② SD67~69
- 図版61① 石鏃出土状態
- ② 推定旧坪界トレンチ調査
- 図版62① 調査風景(1)
- ② 調査風景(2)
- 図版63 土師器(1)
- 図版64 土師器(2)
- 図版65 土師器(3)
- 図版66 土師器(4)
- 図版67 黒色土器
- 図版68 瓦器(1)
- 図版69 瓦器(2)
- 図版70 瓦器(3)
- 図版71 瓦器(4)
- 図版72 瓦器(5)
- 図版73 灰釉陶器
- 図版74 須恵器
- 図版75① 墨書須恵器
- ② 回転糸切り痕
- ③ 漁網錘
- 図版76 青磁
- 図版77 打製石庖丁
- 図版78① 打製石鏃
- ② 打製石鏃
- 図版79① 磨石
- ② 砥石
- 図版80① 鉄製刀子
- ② 銅鏡・板状木製品
- 図版81 曲物桶側板
- 図版82 銅鏡
- 図版83 龍川四条遺跡出土木製品の材顕微鏡写真
- 図版84 川津中塚遺跡出土木製品の材顕微鏡写真

表目次

第1表	四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(1).....	2
第2表	四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(2).....	3
第3表	発掘調査・整理調査体制.....	7
第4表	発掘調査工程.....	8
第5表	整理作業工程.....	9
第6表	実験結果集計表.....	58
第7表	近代以降の遺構 観察表(1).....	78
第8表	近代以降の遺構 観察表(2).....	79
第9表	A地区出土遺物観察表.....	98
第10表	香川県出土の曲物一覧表.....	190
第11表	掘立柱建物跡一覧表.....	206
第12表	土坑一覧表.....	207
第13表	土坑墓一覧表.....	208
第14表	井戸跡一覧表.....	208
第15表	B地区土器・陶器・磁器類・土製品観察表.....	209
第16表	B地区石製品観察表.....	227
第17表	金属製品観察表.....	229
第18表	木製品観察表.....	229

付 図

- 付図1 龍川四条遺跡A地区遺構配置図①
- 付図2 龍川四条遺跡A地区遺構配置図②
- 付図3 龍川四条遺跡B地区遺構配置図①
- 付図4 龍川四条遺跡B地区遺構配置図②
- 付図5 龍川四条遺跡B地区遺構配置図③

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会は、これを受けて路線内の埋蔵文化財包蔵地の状況を確認する目的で、国庫補助事業として分布調査⁽¹⁾を実施した。これらの成果をもとに、路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、日本道路公団と文化庁の協議が行なわれ、基本的には記録保存で対応することが決定した。路線内での対象面積はこの時点で39万㎡余りと判断した。また、香川県教育委員会は、同事業に対応するため香川県土木部横断道対策室並びに日本道路公団高松建設局管理課、同高松工事事務所と昭和62年度の早い時期から調査体制等について協議を開始した。

協議の結果、昭和63年度当初から2ヶ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した⁽²⁾。このため香川県教育委員会では、調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置し、専門職員の増員等の措置を順次実施した。

本調査開始から2年目にあたる平成元年度は、善通寺市の龍川地区の龍川五条遺跡と龍川四条遺跡の調査に着手した。同地区は平成元年4月27日～5月18日の期間で実施された予備調査によって遺跡内容が把握され、本調査対象面積を44,700㎡に確定している。

今回報告する龍川四条遺跡は、調査対象面積22,200㎡を測る。本調査は、都合上、A地区・B地区に分けて行い、平成元年6月1日にA地区から着手し、平成3年6月18日に同遺跡全体の調査を終了した。

調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施された。

註(1) 香川県教育委員会『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』1987

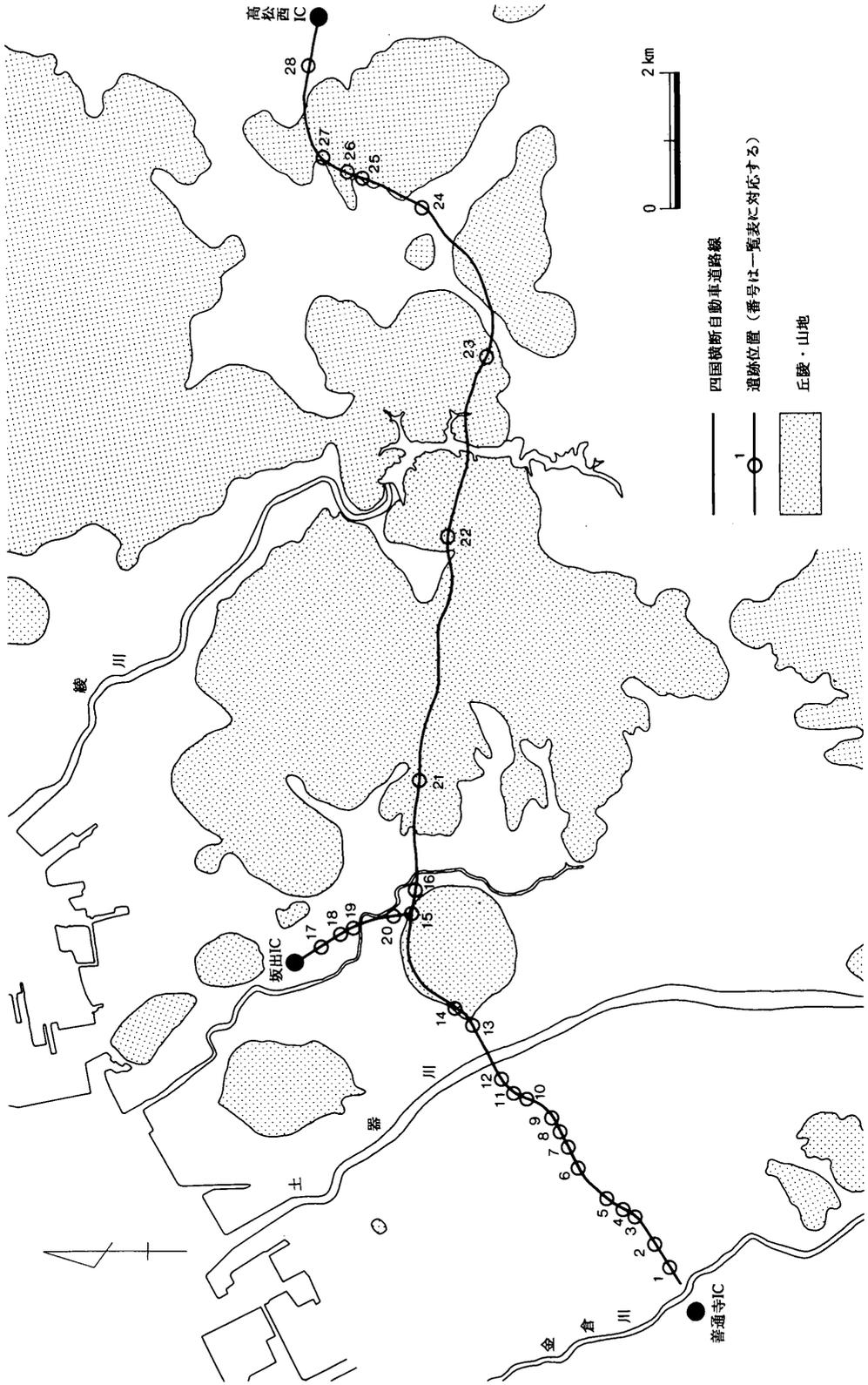
(2) 最終的に、用地買収・家屋退去等の関係で調査期間は3年6ヶ月を要し、本調査面積は、予備調査による遺跡内容の確定を随時実施したことから、319,201㎡になった。

第1表 四国横断自動車道（普通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要（1）

No	遺跡名	所在地	面積（㎡）	調査期間	主たる遺構	主たる遺物
1	龍川五条遺跡	普通寺市原田町	12,300 10,200	元. 6.26～2. 3.31 2. 4. 9～2.12. 5	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・弥生時代墓・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器
2	龍川四条遺跡	普通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元. 7. 1～2. 3.31 2. 5.28～2.10.24 3. 4. 4～3. 6.18	古代掘立柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・和鏡・磁器・瓦器
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63. 4.18～元. 2.10 元. 4.10～2. 3.31	竪穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63. 5.15～63.11.26	旧石器ユニット・溝状遺構・掘立柱建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町・郡家町	17,099 2,600	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～2. 3.31	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑軸土器・斎串
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～2. 3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有舌尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑軸土器・灰軸土器
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63. 6.15～元. 3.22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63. 6.15～元. 2.17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033	63.12.12～元. 3.25	掘立柱建物跡・溝状遺構	
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町	4,034	63.12.13～元. 3.27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	4,760	元. 2. 2～元. 3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構	土師器
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	12,208	元. 4.10～元. 8.11	中世掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	3,366	63.12.13～元. 3.27	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2. 3. 1～2. 3.31		

第2表 四国横断自動車道（普通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要（2）

No	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2. 8. 2～3. 3. 20 3. 9. 2～3. 9. 4	弥生～中世掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝状遺構	弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5. 10～3. 1. 17	古墳時代竪穴住居跡・溝状遺構 古代～中世建物跡・溝状遺構	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨書土器
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5. 10～3. 2. 28 3. 4. 4～3. 9. 13	弥生時代竪穴住居跡・溝状遺構・土坑 古代～中世掘立柱建物跡・土塚墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5. 10～3. 1. 31 3. 7. 1～3. 7. 16	弥生時代水田・井堰・溝状遺構・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5. 10～3. 3. 8	弥生時代溝状遺構・自然河川・中世建物跡・溝状遺構	弥生土器・石器・土師器・須恵器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2. 4. 12～3. 3. 28 3. 7. 18～3. 9. 27	弥生時代竪穴住居跡・掘立柱建物跡 古墳時代竪穴住居跡・溝状遺構・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元. 4. 17～元. 5. 16		弥生土器・須恵器・土師器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2. 10. 30～2. 12. 26	時代不詳柱穴・土坑	
23	綾南奥下池南遺跡	綾歌郡綾南町	2,900	元. 5. 22～元. 7. 24	須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元. 8. 19～2. 2. 28	弥生時代溝状遺構・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2. 4. 11～2. 10. 2	円墳・中世土師器窯・掘立柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元. 9. 1～元. 12. 28	前方後円墳(主体部3基)	古式土師器・鉄器
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元. 10. 1～2. 2. 28	中近世掘立柱建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元. 8. 19～2. 3. 25 2. 5. 10～3. 3. 25 3. 4. 5～3. 7. 18	旧石器ブロック・埴輪焼成土坑・古墳(3基) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑	旧石器・弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・陶 棺



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地 (善通寺～高松)

第2節 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

龍川四条遺跡は、平成元年4月27日～5月18日に行われた予備調査によって、調査面積が確定された。予備調査は、龍川地区（善通寺市原田町・木徳町地内）の約41,600㎡について、この付近で東西に走る四国横断自動車道の路線の南北際に幅2mのトレンチを掘削し、遺構の有無・遺物の包含の状況などについて調査した。その結果、未退去家屋及び未買収地の約7,500㎡の保留部分を含む22,200㎡が調査対象となり、平成元年6月1日から本調査を開始した。平成元年には20,200㎡の調査を2班で行い、平成2年度以降は退去した宅地の調査を継続し、平成3年6月18日に調査を終了した。

龍川四条遺跡の整理作業は、A地区が平成4年10月1日に開始し、平成5年3月31日に終了、B地区が平成5年10月1日に開始し、平成6年3月31日に終了した。

龍川四条遺跡の調査・整理の体制は第3表に、調査箇所、期間及び調査担当者については第4表に、整理作業の工程については第5表に掲げる通りである。

(2) 調査の方法

龍川四条遺跡は、諸般の事情により、遺跡中央やや西より南北に湾曲して走る「市道原田・四条一号線」を境に、西側をA地区、東側をB地区に分割した。そしてA地区が掘削を専門業者に委託する工事請負方式で、B地区および平成2年度以降の調査が作業員の雇用・労務管理まで当方で行う直営調査方式で行った。

A地区の調査は、掘削深度の深い旧河道の調査が主体となったが、一部、護岸のための鋼矢板の打設、休日や降雨時の排水などの作業が請負業者によって行われ、調査担当者では施工しにくい工事や負担が軽減されるというメリットがあった。一方、積算の大きな部分が人力掘削の土量によっているため、作業員の掘削土量を上げるという営利目的と丁寧に掘るという埋蔵文化財調査の側の意向との調整に思わぬ気苦労をするという側面があった。

調査区画は、国土座標（第Ⅳ系）に基づいて20m方眼の調査区画を設定し、南北ラインにはAから順にアルファベットを、東西ラインには1から順に数字を附して、交点をA-5、D-2などと呼称している。また、20m方眼の調査区画には、その西北隅のグリッド名を附している。したがって、遺構の実測図に用いられる方位は、国土座標による東西南北を表している。

掘削は、原則として人間の力によって行ったが、表土の掘削および遺物の包含が希薄な包含層の一部については重機を使用し、作業の効率化を図った。

調査区および検出した遺構の平面実測作業は、業者に委託し、航空写真測量を主として行った。航空写真測量によって縮尺1/50の平面図を図化し、必要に応じて縮尺1/20の平面図化を行っている。また、断面図や個別の遺構の平面図については適宜、調査担当者が手書きの図面を作製した。

写真撮影は、35mm（白黒・カラーリバーサルフィルム）、60×70mm（白黒フィルム）カメラを併用して行った。

調査成果については、調査年度毎に「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」、「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報」において概要を速報した⁽¹⁾。

出土遺物、各種の図面、写真は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが保管している。

発掘調査に参加した方々

現場整理作業員 香川 桂子、石崎 嘉子

直営作業に携わった方々

進藤 豊、高岸 春雄、谷 数夫、辻郷 政明、土井 末弘、沼野 正一、濱岡 岩夫、福本 正道、藤井 勝、三村 旺、六車 肇、森井 和夫、横井 等、川北 綾子、北村シヨリ、黒川フジエ、小林クニコ、小林巳代子、佐藤 文美、高木ノブエ、中居シズエ、橋詰ヒサ子、平池真知子、平畑ユキエ、廣瀬サエ子、福家スエミ、前堀 磯江、松井美智子、松本チエ子、水澤チエコ、山下千代子、山下 初代、山下 博子、山地カズエ、山地フジ子、山地ミドリ、山本ユキエ、由佐 久子

註(1) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成元年度』1990
香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局
『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成元年度』1990 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターなど

第3表 発掘調査・整理調査 体制

香川県教育委員会 文化行政課		年度	年度	年度	年度	年度	年度	
		平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	年度	
総務	包括	彰一 太田 尚 高木 二郎 野網朝二 宮内 憲生 榎田 秀幸 水本久美子	彰一 太田 弘 野網朝二 宮内 憲生 榎田 秀幸 水本久美子	仁 中村 良弘 菅原 克己 宮内 憲生 榎田 和幸 櫻木 新士 石川恵三子 藤原 和子 (6.1~)				
	埋蔵文化財	長 彰一 補佐 尚 主 二郎 副 憲生 係 秀幸 主 美子	長 彰一 補佐 尚 主 二郎 副 憲生 係 秀幸 主 美子	長 幹 補佐 佐 主 長 係 長 主 幸 主 新士 主 三子 主 一郎 主 一郎	長 幹 補佐 佐 主 長 係 長 主 幸 主 新士 主 三子 主 一郎 主 一郎	長 幹 補佐 佐 主 長 係 長 主 幸 主 新士 主 三子 主 一郎 主 一郎	長 幹 補佐 佐 主 長 係 長 主 幸 主 新士 主 三子 主 一郎 主 一郎	長 幹 補佐 佐 主 長 係 長 主 幸 主 新士 主 三子 主 一郎 主 一郎
総務	包括	泉 道雄 十川 正修 安藤 浩司 加藤 三浩 山地 政好 三宅 好 齋藤 好 (6.1~)	泉 道雄 十川 正修 安藤 浩司 加藤 三浩 山地 政好 三宅 好 齋藤 好 (6.1~)	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	
	整理	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		年度	年度	年度	年度	年度	年度	
		平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	年度	
総務	包括	泉 道雄 十川 正修 安藤 浩司 加藤 三浩 山地 政好 三宅 好 齋藤 好 (6.1~)	泉 道雄 十川 正修 安藤 浩司 加藤 三浩 山地 政好 三宅 好 齋藤 好 (6.1~)	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	豊 鳳 松本 真鍋 安藤 齋藤 加藤 井藤 土井 好 山地 修 今田 修 齋藤 政好 渡部 昌哉 真鍋 昌哉 西岡 達也 真白 拓也 岡下 悦代	
	整理	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川	専 護 門員 昌哉 長 達則 師 三 師 一 師 智 師 司 師 大 師 前 師 細 師 川

第4表 発掘調査工程



第5表 整理作業工程

年度・月 作業内容	平成4年度						平成5年度					
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺物接合・復元	////						////					
遺物実測・拓本		////					////	////	////			
遺物実測図レイアウト				////	////						////	////
遺構実測図レイアウト				////	////						////	////
遺物観察表					////						////	////
遺物写真撮影			////						////			
遺物トレース				////	////						////	////
遺構トレース				////	////						////	////
図版製作				////	////						////	////
原稿執筆				////	////				////	////		
編集						////						////
整理収納												////

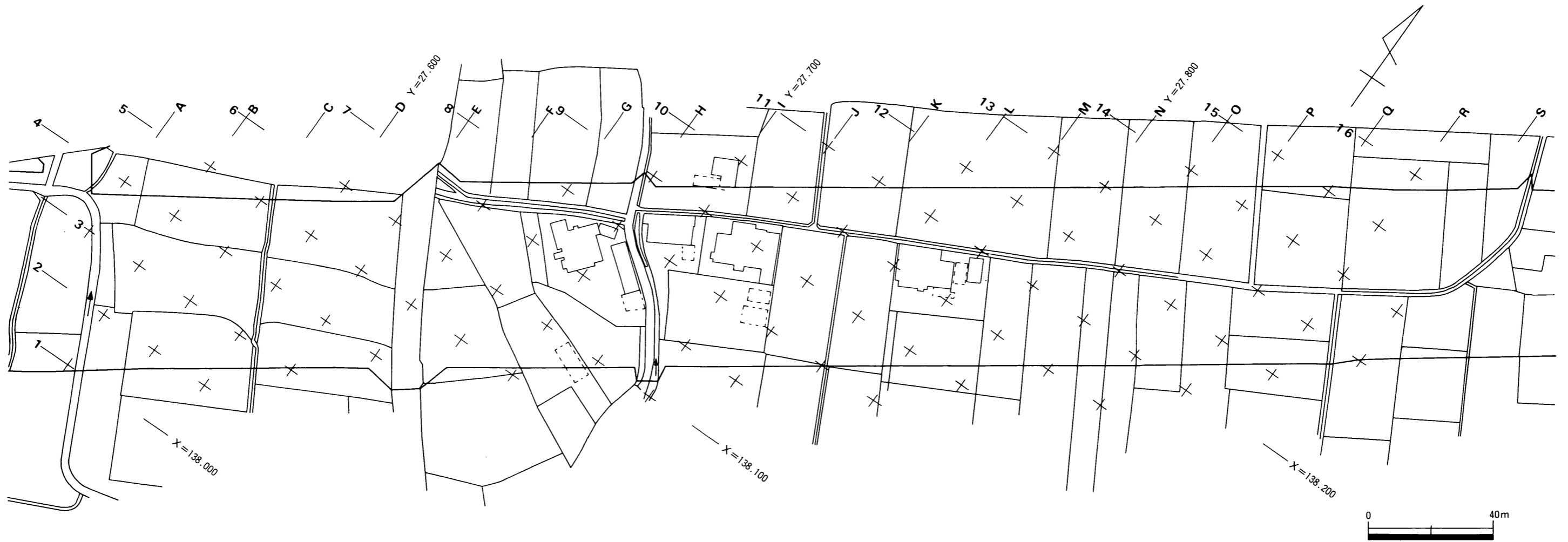
整理作業に携わった方々

A地区

赤熊久子、石原まり子、大沢多鶴子、大田和子、岡崎江伊子、小畑三千代、若山淳子

B地区

大林由佳、小谷収子、西桶右子、白玖昇子、林 揚子、吉田育代



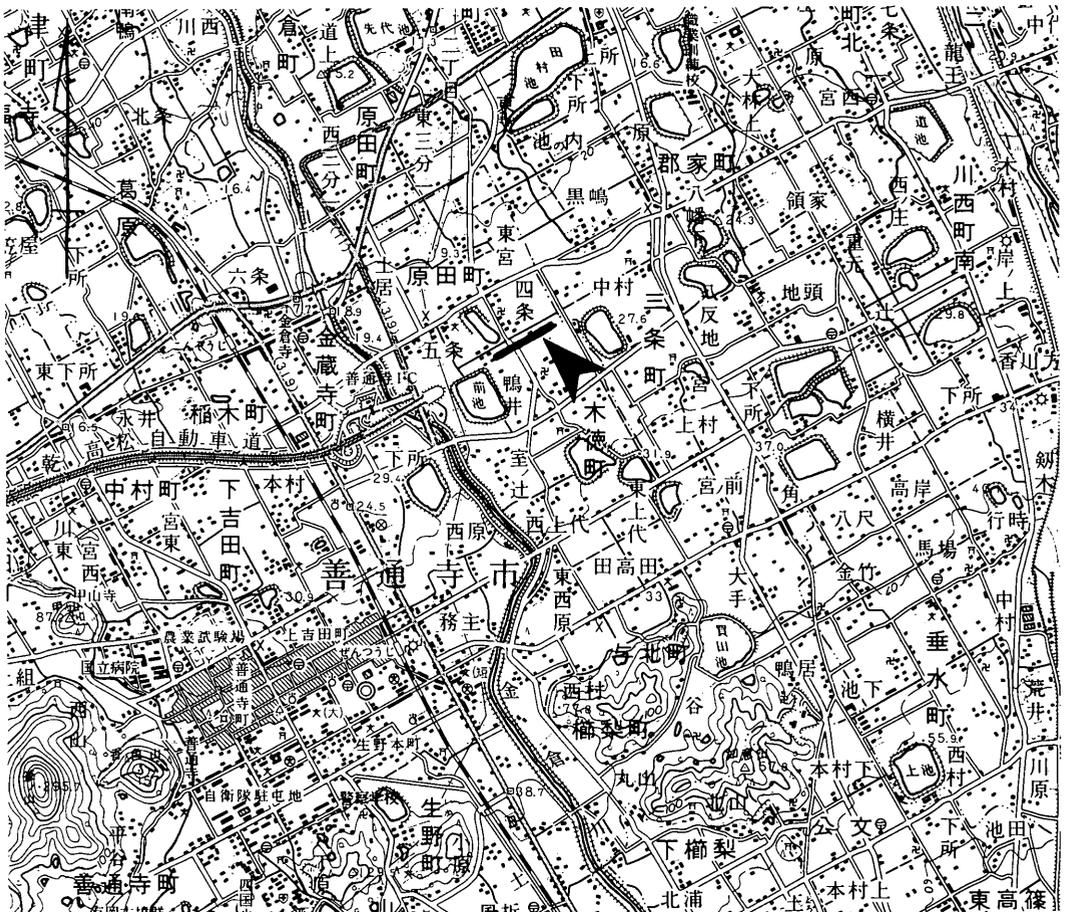
第2図 グリッド配置図

第2章 遺跡の立地と環境

(1) 概況

龍川四条遺跡は、香川県善通寺市木徳町及び原田町に所在する。

善通寺市は、主として土器川が形成した幅約10km・長さ約13km，平均勾配約8%をはかる扇状地上の西部に位置し，北は多度津町，東は丸亀市，南は満濃町・琴平町に接している。この扇状地上は，広い範囲が水田化されており，寡雨の気候とあいまって多くの溜池や伏流水を取水する出水と呼ばれる施設が点在している。村落は，集村と呼べるほどには密集せず，散村と呼ぶほどには散在しない疎塊村と呼ばれる形態を呈している。また，水田を主とする耕地や家屋は一町方格の経溝によって区画される，いわゆる条里地割が認められる。



第3図 龍川四条遺跡の位置（建設省国土地理院1：50,000「丸亀」を使用）

(2) 10cm等高線による遺跡立地の検討

緩傾斜の扇状地は旧中州・旧流路・網状流跡といった微地形がその骨格をなし、表面を粘土・シルトなどの細粒堆積物が覆っているというのが一般的な姿である。これらの微地形は人間生活に影響を与えていて、旧中州が集落・畑地、旧流路・網状流跡が水田といったように土地利用に差が生じている場合が多い。時代が遡れば遡るほど人間は自然に密着して生活を営んでいたという前提にたてば、遺跡の立地や検出遺構から推定される遺跡の性格と微地形の違いによる土地条件の違いとの間に何らかの相関関係がある可能性が考えられる。

龍川四条遺跡についてこの点を検討する場合、周辺のひとつが水田化され微地形の抽出が困難であるという問題がある。そこで横断道の線形図（工事用設計図）に記される水田の標高を割り込んで10cm間隔の等高線を引いたのが第4図である。水田の標高のみを用いるのは、灌漑の関係で局所的な盛り土や地下げをする可能性が宅地や畑地にくらべて一般に低いと考えられるからである。第4図をみると、尾根状の凸地や谷状の凹地を読み取ることができる。後述するように龍川四条遺跡周辺は、地表面から遺構面までの深度が20～50cm内外と比較的浅く、遺構面の堆積物も礫・砂質土・粘質土などさまざまである。10cm等高線に表れる相対的な土地の微起伏は微地形の違いを表しているものと考えられる。試みに10cm等高線のパターンから微高地と微凹地を推定したものが第5図である。また、龍川四条遺跡とその周辺の龍川五条遺跡・三条番ノ原遺跡の検出遺構のうち、特に建物跡を抽出して第4図に記した。本来ならば、等高線に表れる微起伏と調査によって知られる堆積層との関係から微地形分類を行い、それと検出遺構との関連を検討すべきであるが、以下に微起伏と検出遺構との関連を中心に述べる。

三条番ノ原遺跡では、10cm等高線の微高地部分に対応するところから弥生時代後期の堅穴住居4棟が検出されている。堅穴住居は狭い範囲に集中しているが、ここでは耕作土直下に礫層が上がっている。三条番ノ原遺跡では他からは堅穴住居は検出されておらず、同じ時期の溝状遺構が周辺で検出されていることから周辺が著しい削平をうけているとは考えられない。つまり、10cm等高線の微高地部分に対応する礫層の盛り上りを選んで住居を構えたものと推定される。なお、礫層の盛り上がりは旧中州に分類するのが妥当と思われる。

龍川五条遺跡は整理作業が次年度以降の予定で、正式報告が刊行されていないため詳細は不明である。概要報告によると、弥生時代前期から中期にかけての土壌墓（群）、弥生時代終末の堅穴住居などが礫層上に検出されており、その部分は微高地になっている。微高地



第4図 龍川四条遺跡周辺10cm等高線図



1. 五条遺跡 2. 龍川四条遺跡 3. 龍川四条遺跡 4. 三條番ノ原遺跡

第5図 龍川四条遺跡周辺の微地形分類予察図

[建設省国土地理院 国土基本図Ⅳ-F-E-36, 37, 46 (昭和44~49年) を使用]
参考文献

五条遺跡
松本豊胤 「讃岐弥生式土器研究一前期一」 『香川県考古学会報告一』 1961年
香川県教育委員会編 『新編 香川叢書 考古篇』 1983年
龍川五条遺跡
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成元年度』 『同 平成2年度』
1990年 1991年 香川県教育委員会 財香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団高松建設局
三條番ノ原遺跡
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十一冊 三條番ノ原遺跡』1992年
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団

上で検出された旧河道は等高線に暗示的に現れている。(ただし、等高線を引く際の点の取り方によって、この程度の凹地は出来たり出来なかったりする。) 龍川五条遺跡の東部で検出された旧河道は弥生時代前期から中世にわたる数条の流路からなるが、等高線にも明瞭な凹地として現れている。

昭和34年に調査された五条遺跡は、弥生時代前期から中期にかけての遺物が多量に出土した遺跡である。不時発見のため遺跡の内容については不明であるが、等高線図では微凹地部分にあたり旧河道であると思われる。(ただし、遺物が出土したのは旧河道の埋積土からなのか、旧河道の埋積土に掘り込まれた遺構からなのかはわからない。)

龍川四条遺跡ではA地区東部からB地区にかけての地域で中世前半を中心とする時期の掘立柱建物を15棟検出している。これらの建物跡の位置と等高線図によって推定される微起伏との関連をみると、A地区東部においては南側からはりだす微高地の存在を推定できるものの、B地区の建物跡は明瞭な微高地とはいえない箇所に立地している。また、A地区で調査された開折谷は、明瞭な微凹地として認められるが、B地区で縄文時代晩期の土器片を出土した幅約6mの迂曲する旧河道は等高線には現れていない。

以上を簡単にまとめると、等高線に現れる微起伏は調査によって知られる微高地や旧河道とほぼ整合し、弥生時代の住居は微高地に立地し、中世前半を時代の中心とする住居は微高地とは直接の関連が認められない所に立地していることが指摘される。また、旧河道は規模の大きいものについては等高線に現れるものの、小規模のものについては等高線には現れない場合が多い。

(3) 金倉川沿いの氾濫原

第4図の左下に僅かに見えるのが、現在の金倉川の河道である。金倉川はこの付近で平水時の幅約10m程度の河川であるが、河道の両側に100～360m程度の幅で、比高差1.0～2.5mの崖が連続している(等高線の密な部分)。この崖によって比高の高い地形面と低い地形面にわけられる。高い地形面は先に記述した龍川四条遺跡などが立地する地形面にあたる。低い地形面、つまり金倉川の河道沿いは治水事業が完了するまでは増水のたびに冠水していたため氾濫原に分類される。この面には丸亀平野に広範囲に遺存する条里地割は認められない。

金倉川に沿う地形面は、扇状地上を熊手のように乱流していた多くの河道のうち的一条が、相対的な河床の低下によって一条の有力な河道となるとともに、河床と河岸を侵食し

た結果形成されたものと考えられる。瀬戸内海の臨海平野においては、同様な段丘崖の存在が確認されており、その形成時期は弥生時代中期と古代末の2時期と推定されている⁽¹⁾。丸亀平野においても主要な河川である土器川、金倉川、大東川、弘田川などに河道に沿う段丘崖が存在している。このうち、大東川は下流域に所在する下川津遺跡の第4低地帯と呼ばれる遺跡西部の旧河道群が段丘崖下の河道にあたっており、先の古代末に形成されたという時期に相当するものと考えられる。金倉川の段丘崖については、その形成時期を知る手がかりは今のところ得られていないが、仮に古代末に形成されたものであるとすれば、それまでは洪水時には冠水していた面が、洪水のほとんどのらない面に変化（段丘化）したことが考えられ、その場合段丘面全域が微高地、氾濫原が微凹地という状況に変わると考えられる。つまり、それ以前の微高地だけでなく、より広域が以前の微高地と同じような土地条件に変化したことになる。もしそうだとすれば、中世前半の住居（集落）が以前の微高地とは異なるところに立地することが説明できる。もっともこれは、仮説の域を出ず、また、集落の選地は自然現象だけでなく、政治的・社会的要因も影響を与えているであろうから、今後の実証的な検討が必要であろう。

(4) 遺跡の立地と微地形

以上のように10cm等高線に現れる微起伏をひとつの根拠にして、遺跡の立地や性格と微地形の間に何らかの関係がある可能性を指摘した。遺跡の立地や性格について考える場合に有効な方法と考えられる。しかし、等高線に現れる微起伏は長い時間の中で変化してきた微地形の総体であって、埋蔵文化財の対象となる時代の微地形をストレートに表しているわけではなく、また、すべての微起伏が捉えられるわけでもない。等高線に現れる平面的な微起伏の解釈とともに垂直的な検討が必要である。垂直的な検討とは、この程度の縮尺の微起伏の検討をする場合には発掘調査における堆積状況の検討が最も有効な方法で、平面的に捉えられる微起伏の確からしさをはじめ、成因・形成時期・範囲などを推定し、その上で検出遺構や遺跡の立地・性格を検討するという手続きが必要である。その意味では本章の記述は十分な検討を経たものでなく、今後はより詳細で広域の検討が必要となる。

註(1) 高橋学「地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点」『条里制研究』第6号 1990など

第3章 A地区の調査

第1節 土層序

(1) 土層図作製の概要

龍川四条遺跡A地区においては、先述した20mのグリッドに合わせて土層観察用の畔を残し、堆積状況を観察しながら調査を進めた。このうち40m毎のグリッド畔について土層断面図を作製したが、東部においては時期を変えての小面積の調査となったため、適宜必要と考えられるグリッド畔や調査区周囲の壁の断面図を作製して、これに変えた。

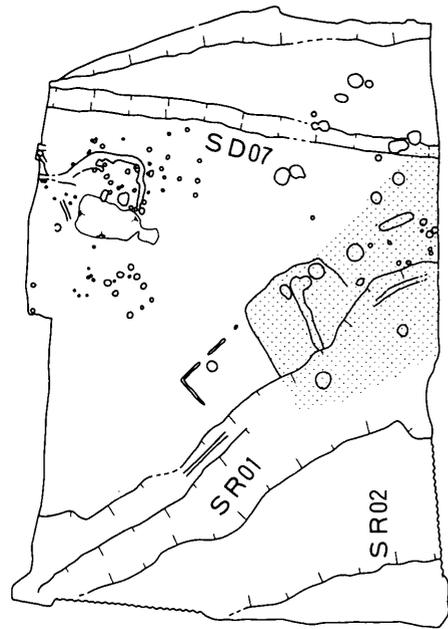
土層序は、断面図をもとに作製した模式図によって、まず概要を報告する。さらに第7図に示す位置の断面図を掲載し、堆積状況をやや詳しく報告するとともに、後節における遺構の報告の際にも説明に用いることにしたい。

土層の観察にあたっては微細な堆積物の変化に捉われず、巨視的に堆積層を把握するように努め、その後、堆積層の微細な変化を観察するように努めた。なお、断面図の注記に用いている略号の意味は以下の通りである。

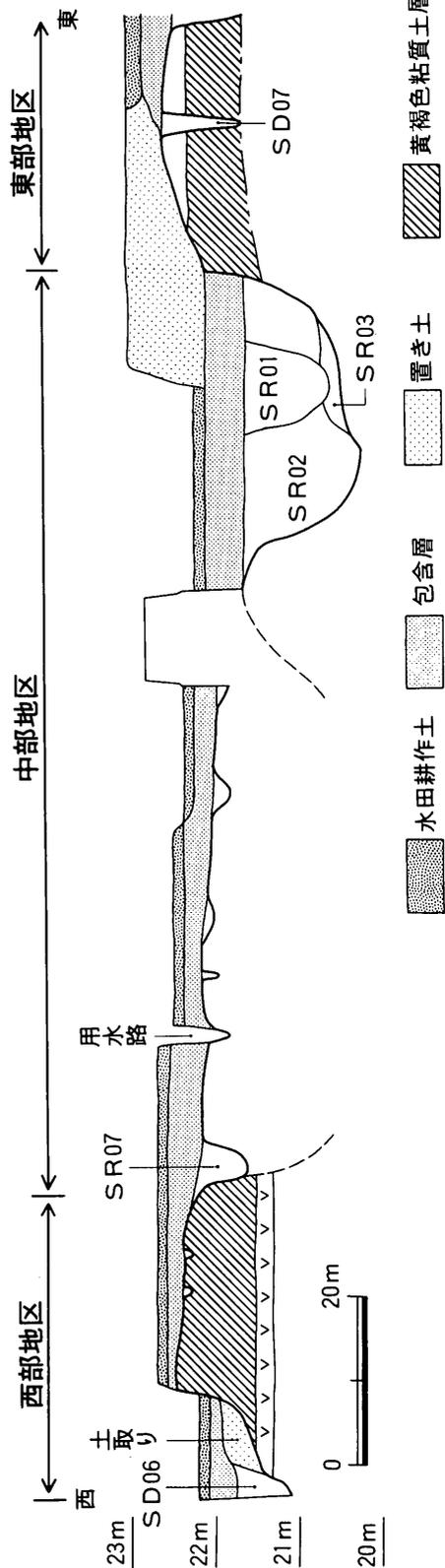
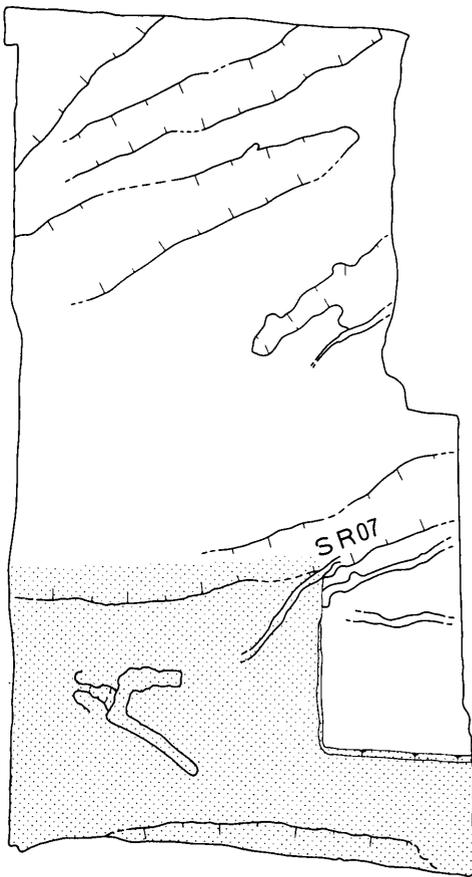
Fe=鉄分, Mn=マンガン, G=級化構造(グレイディング)が認められる。S=堆積粒の淘汰が良い(ソーティング), M=礫層ならば礫と礫の間を充填する堆積物(マトリックス), I=礫層に互重ね構造が認められる(インプリケーション), ㄨ=地山(この層より下層に遺構・遺物は認められない)。また、層界の点線は、層界が不明瞭である場合と上部を調査中に削ってしまったため本来の層界が不明になっていることを示す。

(2) A地区の土層の概要

第6図はA地区の東西方向の堆積状況の模式図と遺構配置略図である。A地区の土層は調査区中央部の開折谷部分とその東西両岸部に三大別される。開折谷に分断された調査区の東部と西部には四国横断自動車道の丸亀平野中の調査区においてよく見かけられる黄褐色粘質土が堆積している。その下層には火山ガラスを多く含む火山灰層(紫灰色粘質土)が堆積し、さらに下層にはよくしまった細砂質土が堆積している。火山灰層は、東方約2kmに所在する郡家一里屋遺跡で検出された始良Tn火山灰層と層位的にも層相においてもほぼ同一なもので、バブルウォール型の火山ガラスを主とするものである。火山ガラスの屈折率の測定を行っていないため断定的なことは言えないが、始良Tn火山灰と考えられる。



県道原田・琴平線



第6図 A地区遺構配置略図・土層断面模式図

調査区西部においては水田一筆を除いて削平を受けており、黄褐色粘質土層が削り取られている。その上面には、恐らく客土と考えられる明灰色系の粘土・シルト質土・砂質土が堆積している。この層には遺物細片が比較的多く含まれていた。削平を免れた部分からは数条の溝状遺構が検出されている。

調査区中央部には幅約90mの開折谷が検出された。開折谷の兩岸の肩部は、黄褐色粘質土層が急傾斜で落ち込んでいる（図版5）。開折谷の内部は砂礫で埋積されている。平面的には細長い舌状の礫層とその間の砂層が交互に認められる状況で、断面においては淘汰の良い灰色中砂や粗砂からなる部分、礫からなる部分が複雑に堆積している。湧水が激しく、底まで掘削したのは一部分であるが、底以下の基盤は径15cm程の砂岩亜円礫を含み3cm程の亜円礫を中心とする灰色礫層である。調査中は、開折谷の埋積土である礫層と基盤の礫層との区別がつけられず、平面的に舌状にのびる礫層を河岸部、礫層間の砂層を旧河道の埋積土と考えて調査を進めたところ（図版6）、砂層が礫層下にもぐりこんでいき、想定した堆積状況と逆の状況であったりした。堆積層の様相が把握できたのは調査も終盤になってからである。開折谷の埋積土上面の凹地は、暗茶褐色シルト質土・砂質土といった細粒堆積物で埋積されている。以上の堆積層中からは遺物が全く検出されなかった。底付近から採集した木片のC¹⁴年代測定を行ったところ、2950±80y.B.P.という測定結果が得られている⁽¹⁾。

開折谷内の東側では縄文時代晩期の土器片を含むS R03・弥生時代後期の遺物を含むS R02・古代末頃の遺物を含むS R01が検出されている。県道を挟む東西の層序の関係は、やや不明確であるが、底の礫層が県道下でやや盛り上がっているようである。

開折谷の東部も西部と同じように黄褐色粘質土層を開折している状況が認められる。この部分では、黄褐色粘質土層の上層に一部で径2cm程の礫層を挟んでやや濁った黄褐色の極細砂質土層が認められる。この礫層は幅数mの南北方向の紡錘形の平面形を呈するものが数条並ぶ状況で、やや濁った黄褐色極細砂質土とセットで自然堤防堆積物と考えられる。なお、これは第4図の10cm等高線に現れる東南から西北方向の微高地を構成するものと考えられる。

開折谷の東部は、近代に家屋建築のため造成されている。造成は濁った黄褐色極細砂質土層を削平し平坦化した後に置き土をしており、この部分では遺構面が乱されている。

註(1) 年代測定は、(社)日本アイソトープ協会に委託した。(日本アイソトープ側のコードはN-6325である)

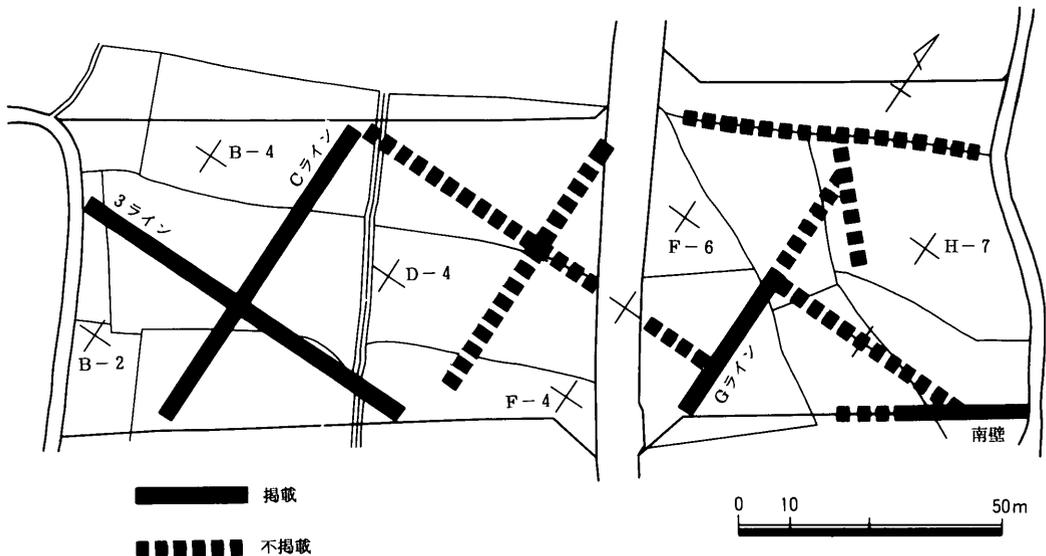
(3) 土層観察による堆積状況

第7図に示す位置の土層断面図を掲げ、堆積状況を報告する。なお、土層に付している番号は、各土層断面図毎に付している。

① 3ライン土層 (第8～10図)

3ラインは、A地区西部の東西方向のグリッドラインである。第8・9図のNa3層が丸亀平野の四国横断自動車道路線周辺にみられる黄褐色粘質土層である。下層に始良Tnと考えられるテフラ層が堆積している (Na6層)。この付近でのテフラ層の厚さは約40cmである。黄褐色粘質土層は、平面的に追跡するとシルト質に変化したり、礫が混ざるようになったりし、同時異相と考えられる場合と、後述する東部地区の遺構面である黄褐色砂質土層の下層に黄褐色粘質土層が堆積し、明瞭な層境が認められることから異なる時期のものであると判断される場合がある。善通寺市永井遺跡のように同様の堆積層と考えられる層から縄文時代後期以降の土器片が出土していることなどから⁽¹⁾、本層の堆積時期、対比などの検討を深める必要がある。また、始良Tnと考えられるテフラ層は、広範囲に認められるものであるが、東部地区南側では認められるものの北側では認められないなど、凹地部分に堆積しているようで断続がある。

Na3層は、3ライン土層断面の中央部のみに見られ、西部と東部では認められない。西部においては、土取りによって削平をうけており、その後客土をしている。客土中のNa2f層

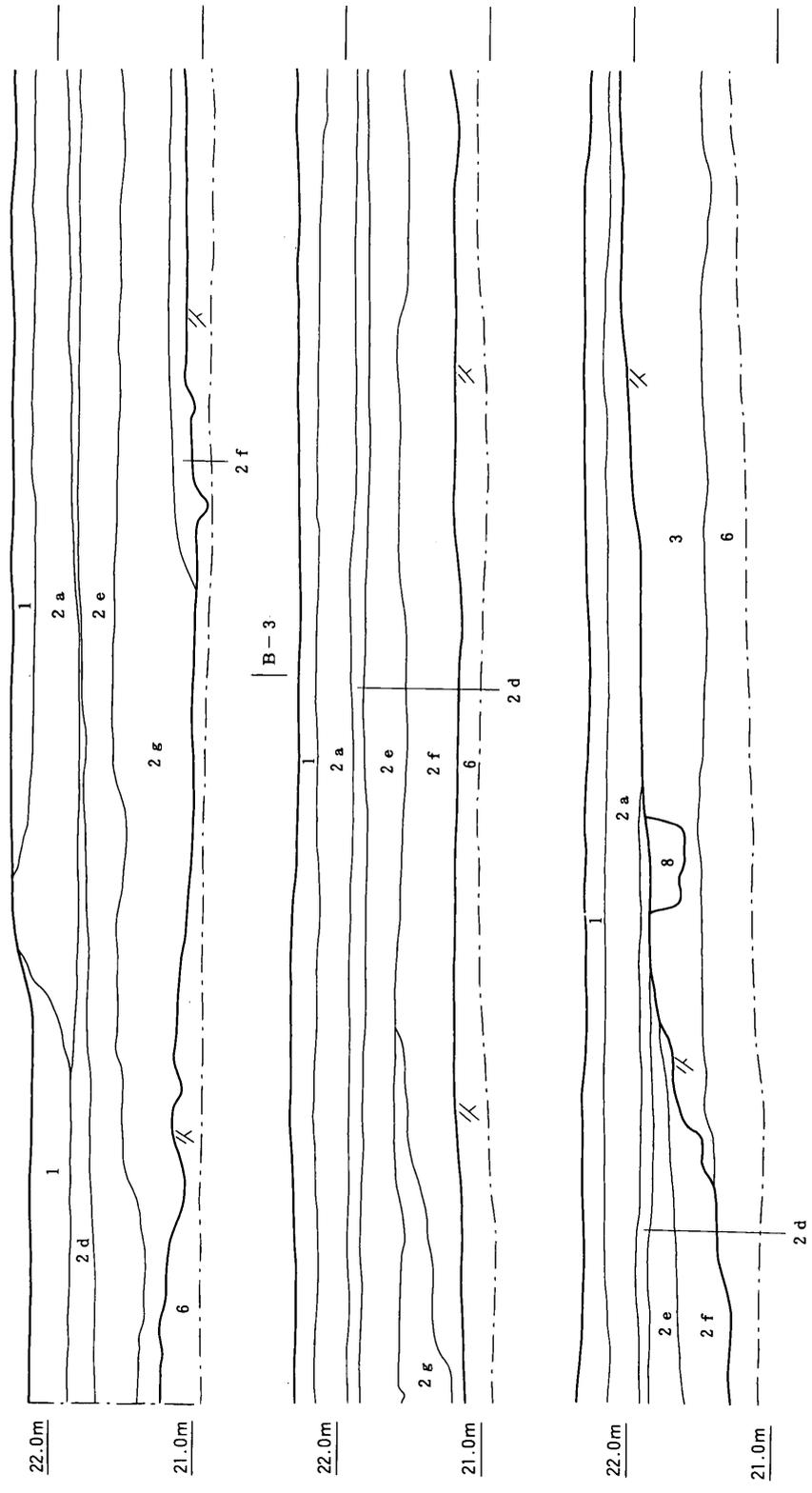


第7図 土層断面取得位置図

註(1) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第九冊 永井遺跡』
1990 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

東

西

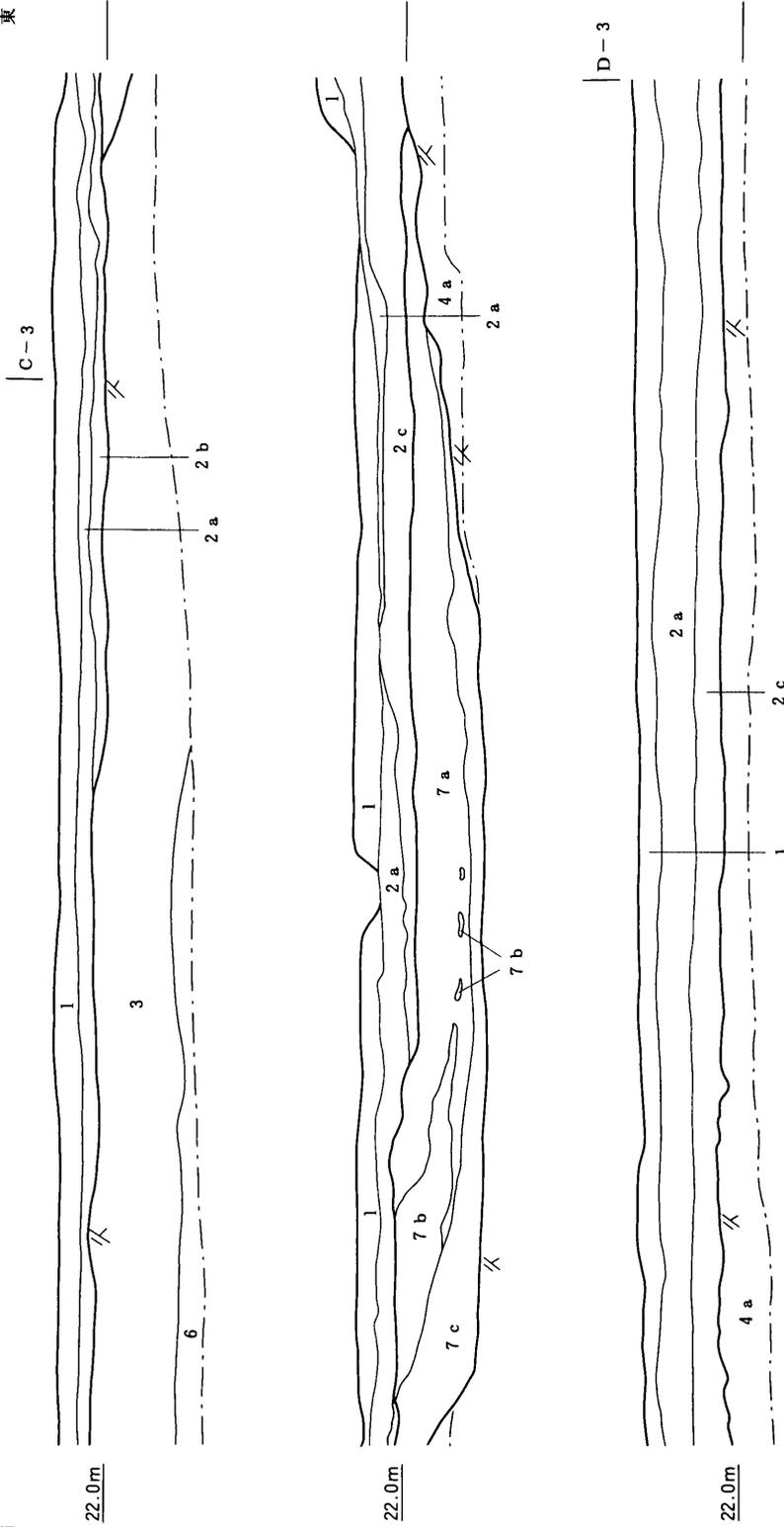


- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 a 灰色極細砂質土 (Fe多く含む、Mnわずかに含む)
- 2 d 灰色極細砂質土 (Fe多く含む)
- 2 e 灰色シルト質土 (上にMn多く含む)
- 2 f 灰色シルト質土 (Fe、Mn含む)
- 2 g 灰色砂質土 (攪乱あり、Fe、Mn含む、ラミナ状)
- 3 明黄褐色粘質土 (Fe多く含む、地山)
- 6 紫灰色シルト質土 (テフラ)
- 8 暗茶灰色シルト質土 (G) —— S-D05

第8図 3ライン土層断面図①

東

西



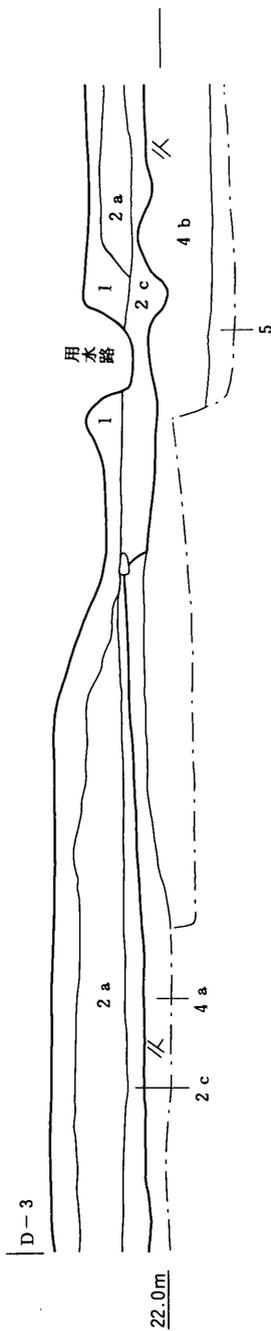
- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 a 灰色極細砂質土 (Fe多く含む、Mnわずかに含む)
- 2 b 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む)
- 2 c 暗灰色シルト質土 (Fe, Mn含む)
- 3 明黄褐色粘質土 (Fe多く含む)
- 4 a 暗茶褐色礫混じりシルト質土 (くさり礫多く含む)
- 6 紫灰色シルト質土 (テフラ)
- 7 a 暗茶褐色シルト質土
- 7 b 明黄褐色粘質土と暗茶褐色シルト質土のブロック
- 7 c 暗茶褐色シルト質土 (くさり小礫多く含む)

SR07

第9図 3ライン土層断面図②

西

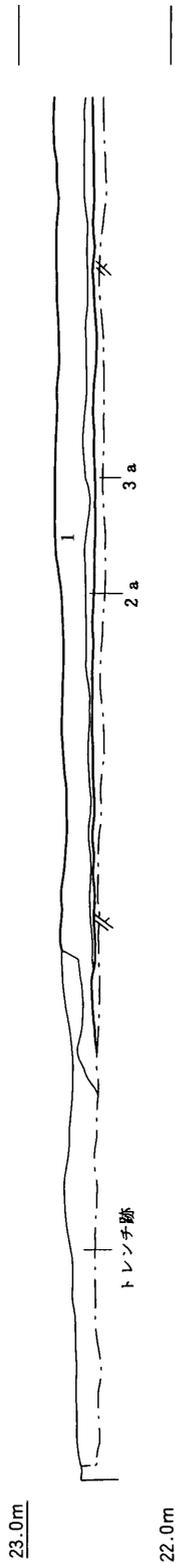
東



- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 a 灰色極細砂質土 (Fe多く含む、Mnわずかに含む)
- 2 c 暗灰色シルト質土 (Fe、Mn含む)
- 4 a 暗茶褐色礫混じりシルト質土 (くさり礫多く含む)
- 4 b 暗灰色礫 (径1~5cm重円礫、Mは細=中砂、くさり礫多く含む)
- 5 灰色中砂 (S)

南

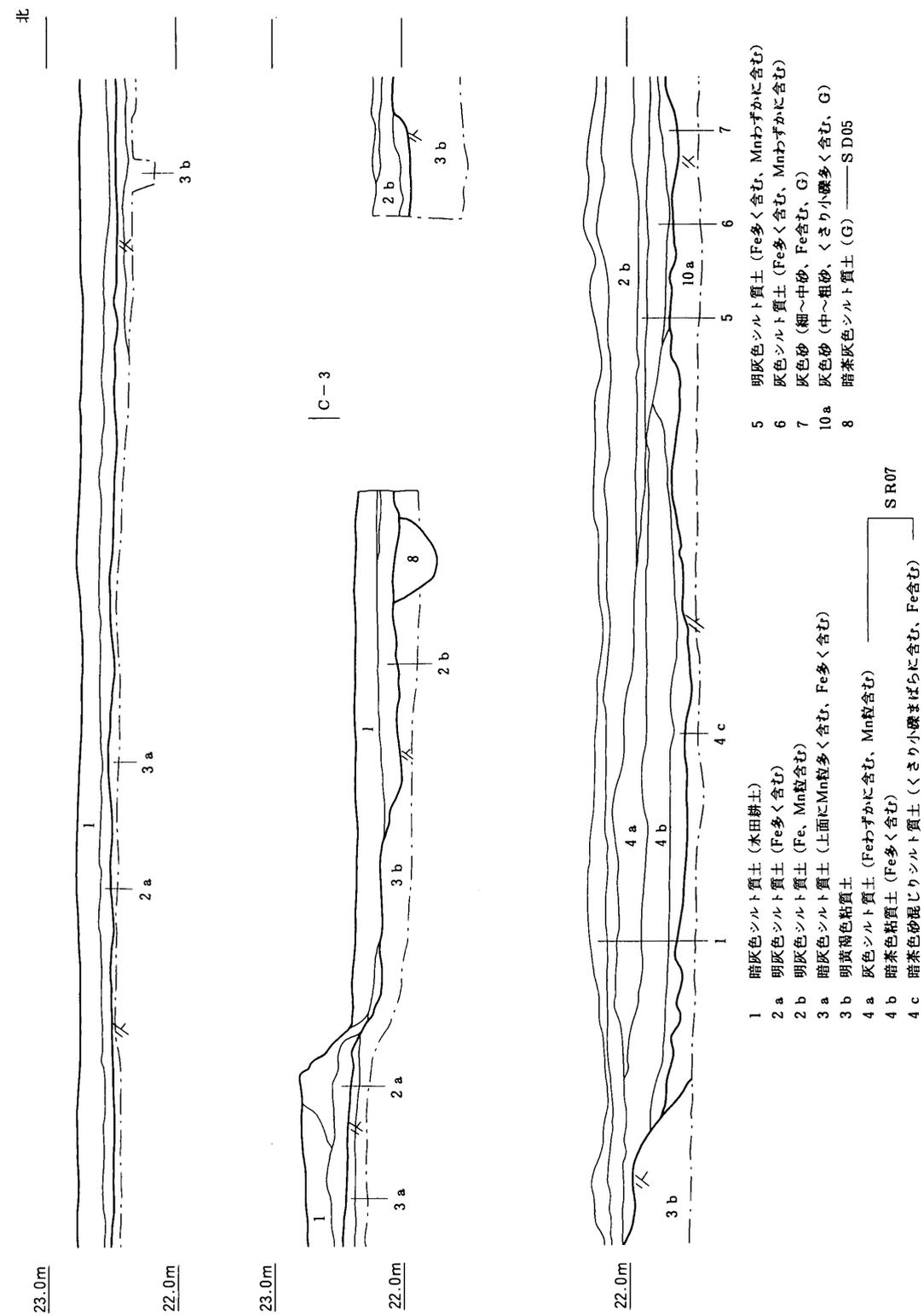
北



- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 a 明灰色シルト質土 (Fe多く含む)
- 3 a 暗灰色シルト質土 (上面にMn粒多く含む、Fe多く含む)

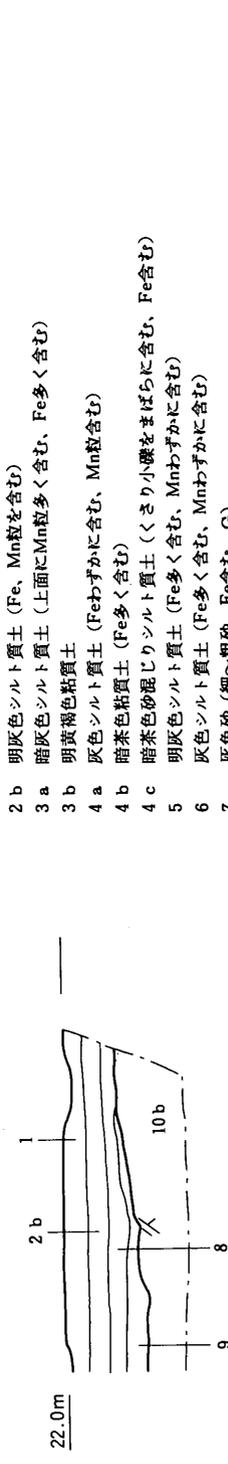
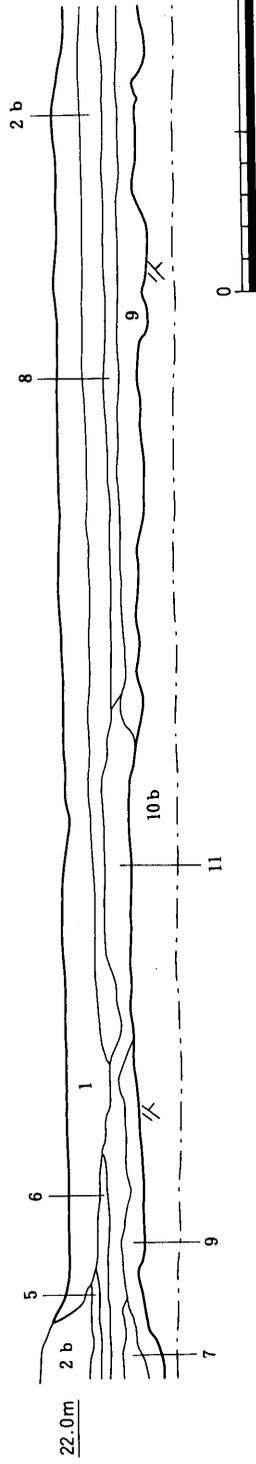
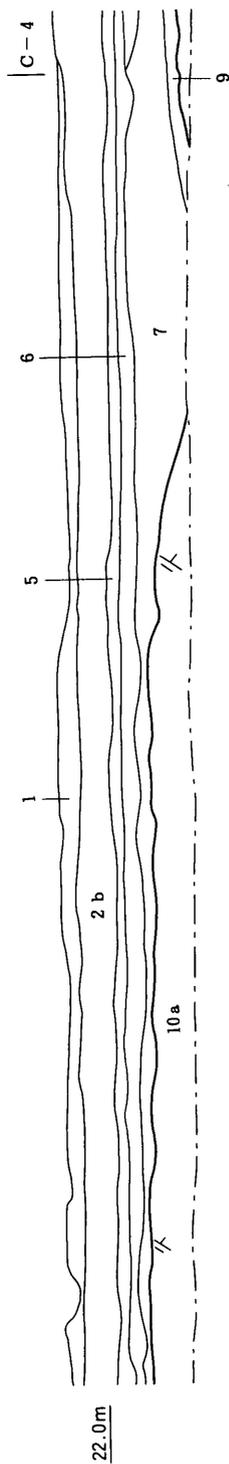


第10図 3ライン土層断面図③・Cライン土層断面図①



第11図 Cライン土層断面図②

北



南

第12図 Cライン土層断面図③

- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 a 明灰色シルト質土 (Fe多く含む)
- 2 b 明灰色シルト質土 (Fe, Mn粒を含む)
- 3 a 暗灰色シルト質土 (上面にMn粒多く含む, Fe多く含む)
- 3 b 明黄褐色粘質土
- 4 a 灰色シルト質土 (Feわずかに含む, Mn粒含む)
- 4 b 暗茶色粘質土 (Fe多く含む)
- 4 c 暗茶色砂混じりシルト質土 (くさり小礫をまばらに含む, Fe含む)
- 5 明灰色シルト質土 (Fe多く含む, Mnわずかに含む)
- 6 灰色シルト質土 (Fe多く含む, Mn含む, G)
- 7 灰色砂 (細~粗砂, Fe含む, G)
- 8 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む)
- 9 灰色粘土 (径5 cm程の亜円礫まばらに含む)
- 10 a 灰色砂 (中~粗砂, くさり小礫多く含む, G)
- 10 b 灰色礫 (径1~4 cm程の亜円、亜角礫よりなる、くさり小礫多く含む, Mは灰色細砂)
- 11 不明

には後述するS X01が存在する。また、Na 2 f・2 g層には、時期幅をもった土器片が比較的多く包含されていた。

東部においてNa 3層が見られないのは、開折されているからである。第9図には記載されていないが、S R07の西肩から急激な落ち込みが存在し(図版6)、砂礫で埋積されている。埋積土の上面の凹地には暗茶褐色シルト質土が堆積しているが、遺物は全く検出されなかった。S R04・05・06・07が凹地である。

第10図に記される現代用水路は、現地表面に認められる条里地割の坪界線に相当すると考えられる溝である。3ライン土層の他、2ヶ所で断面観察を行ったが、掘削時期を推定する手がかりは得られなかった。

② Cライン土層(第10～12図)

Cラインは、A地区西部の南北方向のグリッドラインである。3ラインで述べたものとはほぼ同様の堆積状況を示している。

3ライン土層のNa 3層はCラインのNa 3 b層に該当する。Na 3 a層は、3 b層が変質したものと考えられる。C-3ポイントの南5 m付近で現地表面に段差があるが、北側が削平をうけているためである。Na 4 a～4 c層はS R07の埋積土である。

③ Gライン土層(第13, 14図・図版6③, 7①)

Gラインは、A地区東部の南北方向のグリッドラインである。ここでは、その南部のみを掲載する。

第13図のNa10層は、3ラインのNa 3層・CラインのNa 3 b層に相当するものである。Na 10層が落ち込んで、S R01～03の埋積土が堆積している。Na 9 a～d層がS R03の埋積土で、Na 9 b層が主体となる埋積土である。暗茶色を呈し、未分解の木質を含む木本質泥炭層で、灰色砂がラミナ状に挟在している。本層の下部および河底の灰色砂礫層の上面から縄文時代晩期後半の突帯文土器が出土している。

Na 8 a～d層が、S R02の埋積土である。S R02は、S R03埋没後に03の埋積土を開折していることが断面からわかる。上から茶褐色砂質土・黒色粘土・暗灰色砂質土・黒色粘質土の順で堆積している。Na 8 b層の黒色粘土は草本質泥炭で、非常に緻密なものである。遺物は全く認められなかった。S D01は、本層上面から掘り込まれたもので、本層上面で水田耕作などの土地利用がされていた可能性が考えられる。下層は径1 cm程の亜円礫をま

ばらに含む暗灰色砂質土を挟んで黒色粘質土(Na 8 d層)が堆積している。Na 8 d層は、未分解の木質を多量に含む木本質泥炭層である。Na 8 b層が緻密であるのに対し「ボワボワした」と表現されるような軟らかい層である。本層から弥生時代後期の遺物が出土している。

Na 7 a～d層が、SR01の埋積土である。SR02の埋積土を開折している。上層から茶灰色シルト質土(Na 7 a層)・灰色砂礫(Na 7 b層)・灰色粘質土(Na 7 c層)・灰色砂礫(Na 7 d層)の順である。Na 7 c層とNa 7 d層はラミナが連続することから同一層が級化構造をなすと考えられる。Na 7 c層には灰色細砂のラミナが多数認められる。SR01は、比較的速い流速で埋没したものと考えられる。主としてNa 7 c層と7 d層から古代末を中心とする時期の遺物を検出した。

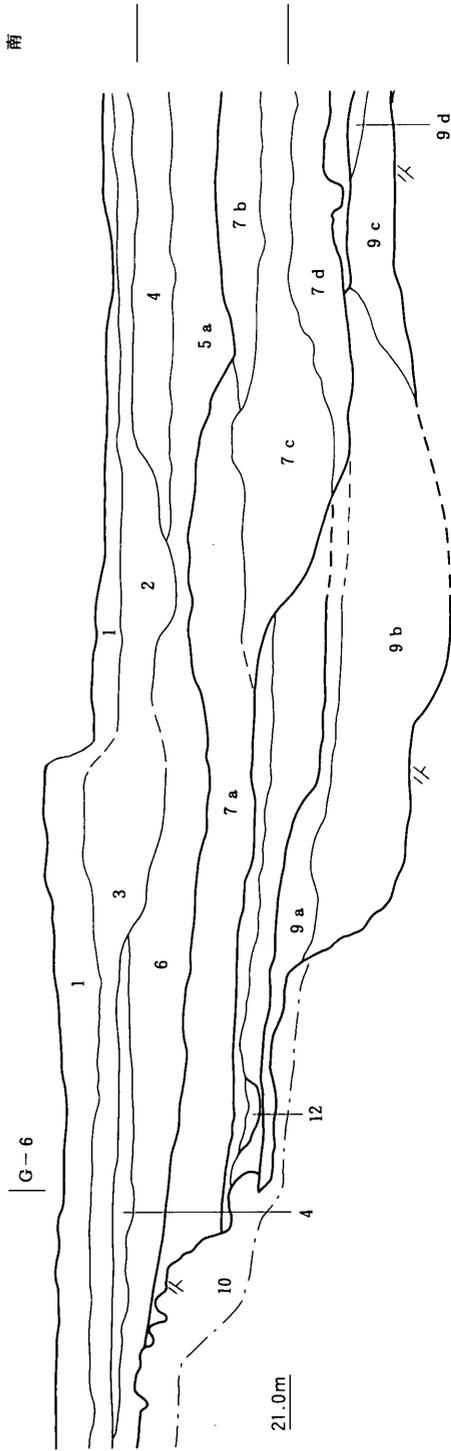
SR01・02より上層のNa 4・5 a・5 b層には遺物がほとんど認められなかったが、Na 4層の東際とNa 6層には時期幅をもった土器片が比較的多く包含されていた。

④ 東部地区 調査区南壁土層(第15図)

調査区南壁の土層断面の一部を掲載する。Na 5層が、3ライン土層のNa 3層・CラインのNa 3 b層・GラインのNa 10層に相当する。東部地区で注意されるのはNa 4層である。Na 4層は、東部地区のみに見られるやや濁った黄褐色砂質土層である。径1～3cmの礫が集中する部分が数ヶ所存在する。中砂、粗砂が主体で淘汰は良くない。当初は、この層は後述する置き土層と同様のものと考えていたが、東部地区で検出した遺物はすべて本層上面より掘り込まれていることがわかった。堆積状況から自然堤防の堆積物と思われ、第4図の10cm等高線図の微高地部分の堆積層であると考えられる。蛇足になるが10cm等高線図に現れる微高地は、ほとんどが礫層の盛り上がる部分(旧中州)であり、始良Tn降灰以前に形成されたと考えられる。龍川四条遺跡周辺は、このような凸地間の凹地が埋積され、後に開折されるという順序で微地形変化したと考えられるが、一方で始良Tn降灰以降にも微高地を形成するような営力があったようである。詳細は不明であるが、今後類例の増加をまちたい。

Na 2 a～g層は、明治時代初期に造成された屋敷にかかわる削平および堆積層である。Na 2 a, b層部分は屋敷地の東限にあたる。屋敷地西限には半倒壊した築地塀が存在したが、東限にも築地塀もしくは土塁状のものが存在していたようである。Na 2 c～g層は、ほぼ水平に堆積しており、どの層が造成時のもので、どの層がそれ以後の堆積層なのか明かに出来なかった。

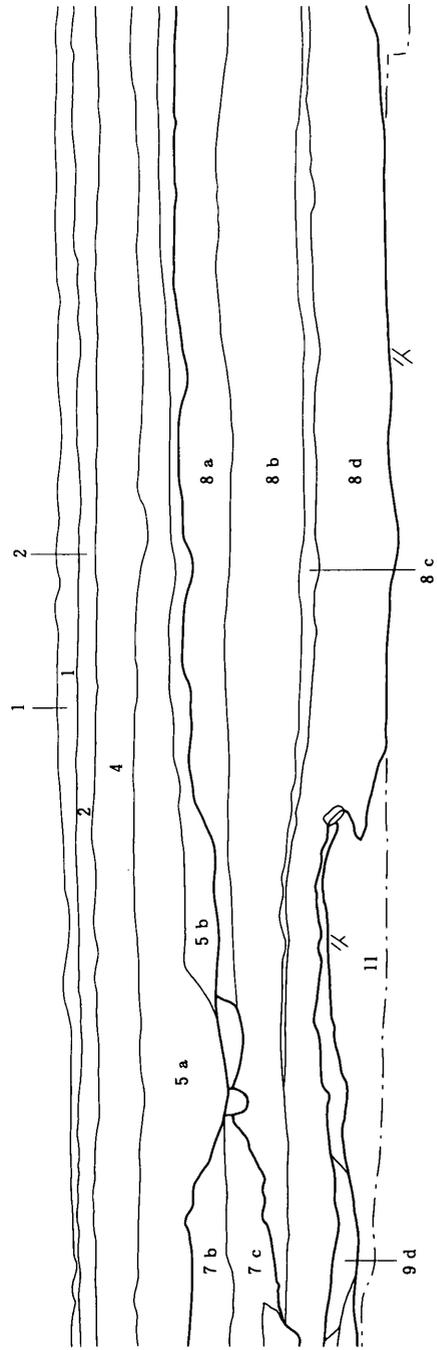
北



22.0m

21.0m

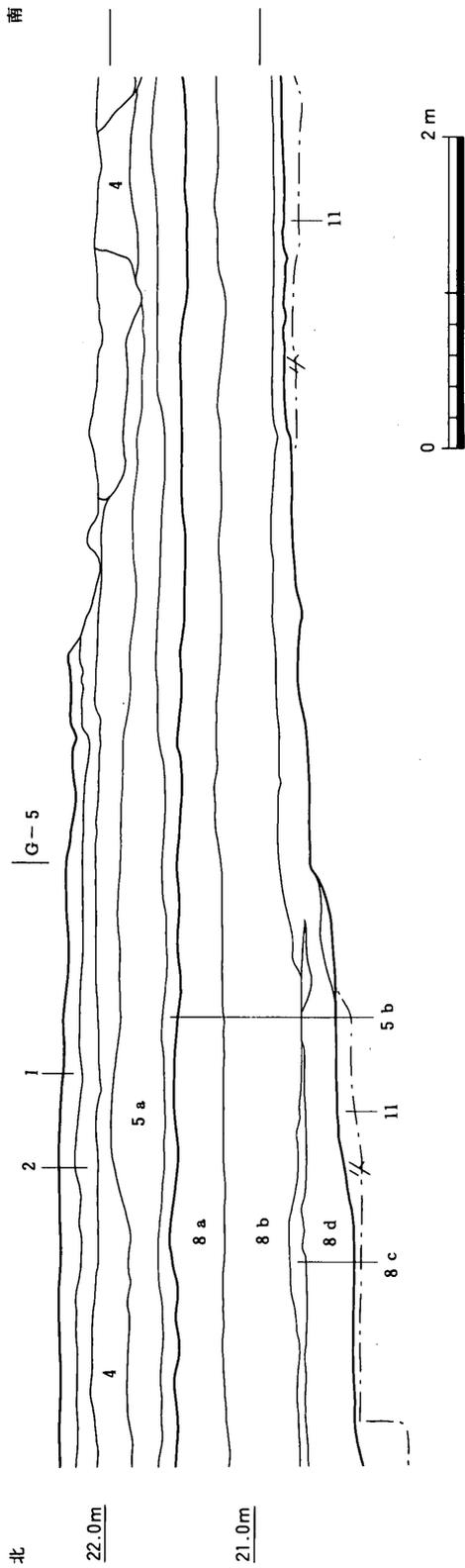
南



22.0m

21.0m

第13図 Gライン土層断面図①



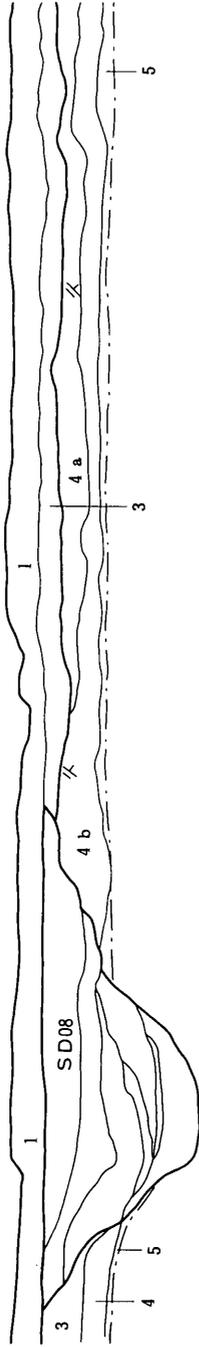
- 1 暗灰色シルト質土 (木田耕土)
- 2 灰色シルト質土 (Fe含む)
- 3 明灰色シルト質土 (Fe, Mn含む)
- 4 灰色シルト質土 (東方でくさり小礫含む、Fe, Mn含む)
- 5 a 明灰色粘質土 (Fe含む)
- 5 b 灰色砂質土 (Fe, Mn含む)
- 6 茶灰色礫混じりシルト質土 (径1~2 cmの角礫多く含む)
- 7 a 茶灰色シルト質土 (径2~5 cmの面円礫含む、Mn含む)
- 7 b 灰色砂礫
- 7 c 灰色粘質土 (ラミナ多く認められる)
- 7 d 灰色砂礫 (径0.2~2 cmの面円礫含む、Mn含む)
- 8 a 茶褐色砂質土 (Fe, Mn多く含む)
- 8 b 黒色粘土 (草本質泥炭)
- 8 c 暗灰色砂質土 (径1 cm程の面円礫まばらに含む)
- 8 d 黒色粘質土 (木本質泥炭、未分解の木質を多く含む)
- 9 a 黒色礫混じり砂質土 (径2~3 cm程の角礫含む)
- 9 b 暗茶色粘質土 (木本質泥炭)
- 9 c 灰色砂 (中~粗砂、ラミナあり)
- 9 d 灰色細砂 (G)
- 10 明黄褐色粘質土
- 11 灰色砂礫 (径0.5~3 cmの面円礫含む、15cm程の面円礫まばらに含む
Mは灰色粗砂、小礫、I)
- 12 灰色細砂——S D01

第14図 Gライン土層断面図②

西

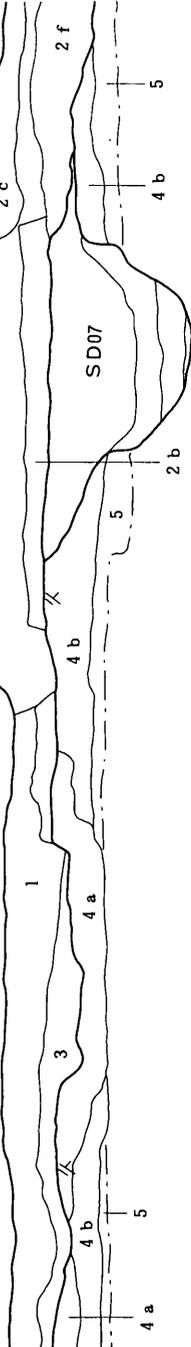
東

23.0m



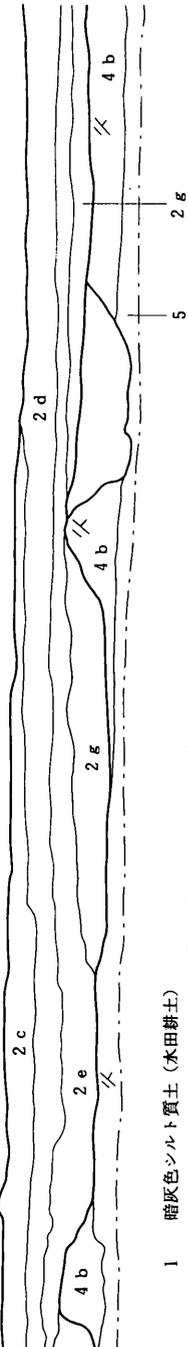
22.0m

23.0m



22.0m

23.0m



22.0m

- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 a 暗灰色シルト質土 (20cm程の垂門礫まばらに含む、樹根多い)
- 2 b 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む、攪乱)
- 2 c 黄灰色砂質土 (2 d層のプロック多く含む、攪乱)
- 2 d 暗灰色粘質土 (攪乱)
- 2 e 明灰色粘質土 (攪乱)
- 2 f 灰色砂質土 (Fe含む、攪乱)
- 2 g 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む、攪乱)
- 3 明灰色極細砂質土 (Fe含む、径1~3cmの円礫を一部で多く含む)
- 4 a 黄褐色砂質土 (くさり小礫多く含む、中・粗砂主体)
- 4 b 明黄褐色シルト質土 (Fe多く含む、Mn含む)
- 5 明黄褐色粘質土



第15図 東部地区 調査区南壁土層断面図

第2節 中部地区の遺構・遺物

(1) 自然河川

① SR03 (第13, 16~18図・図版7①~③)

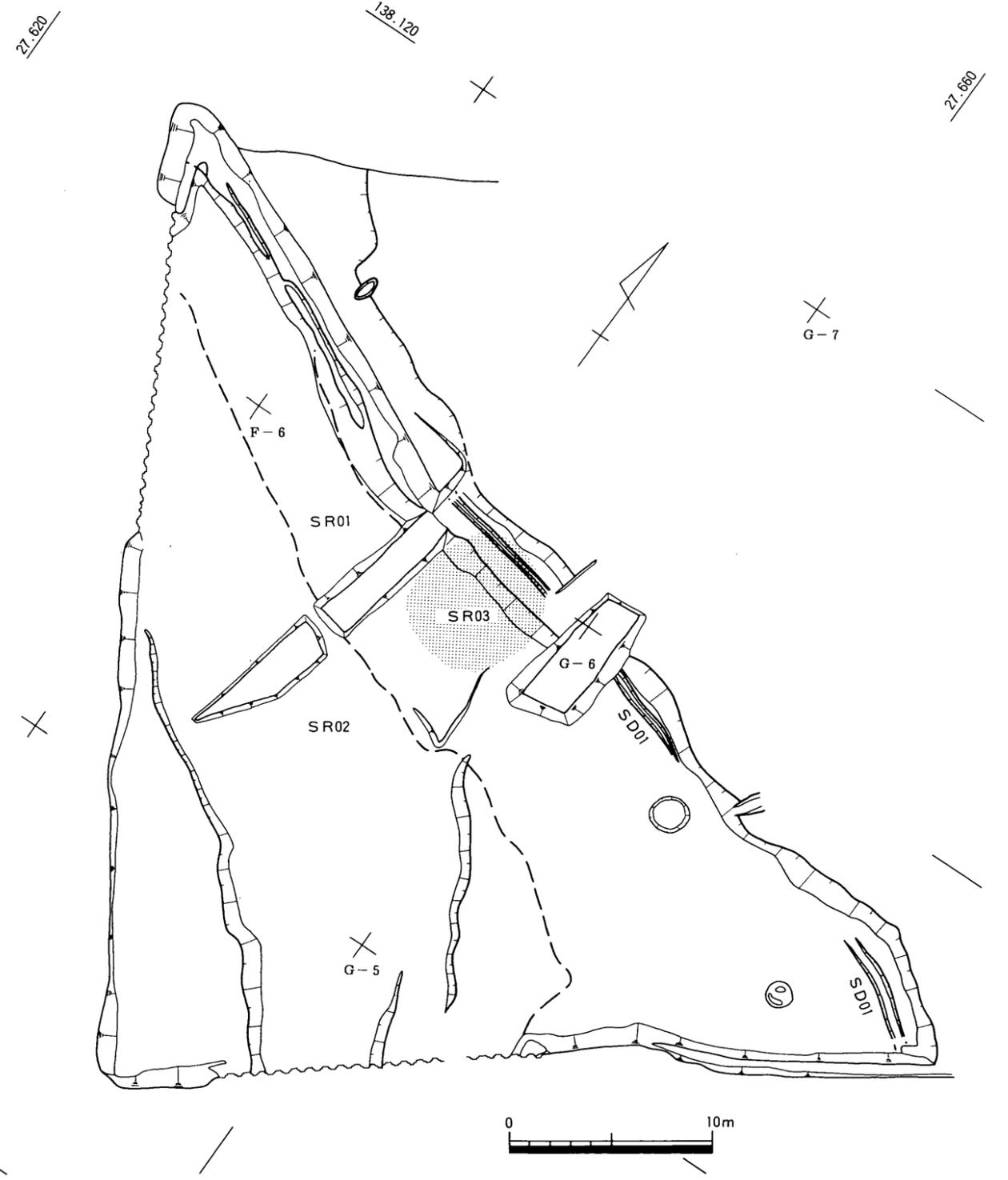
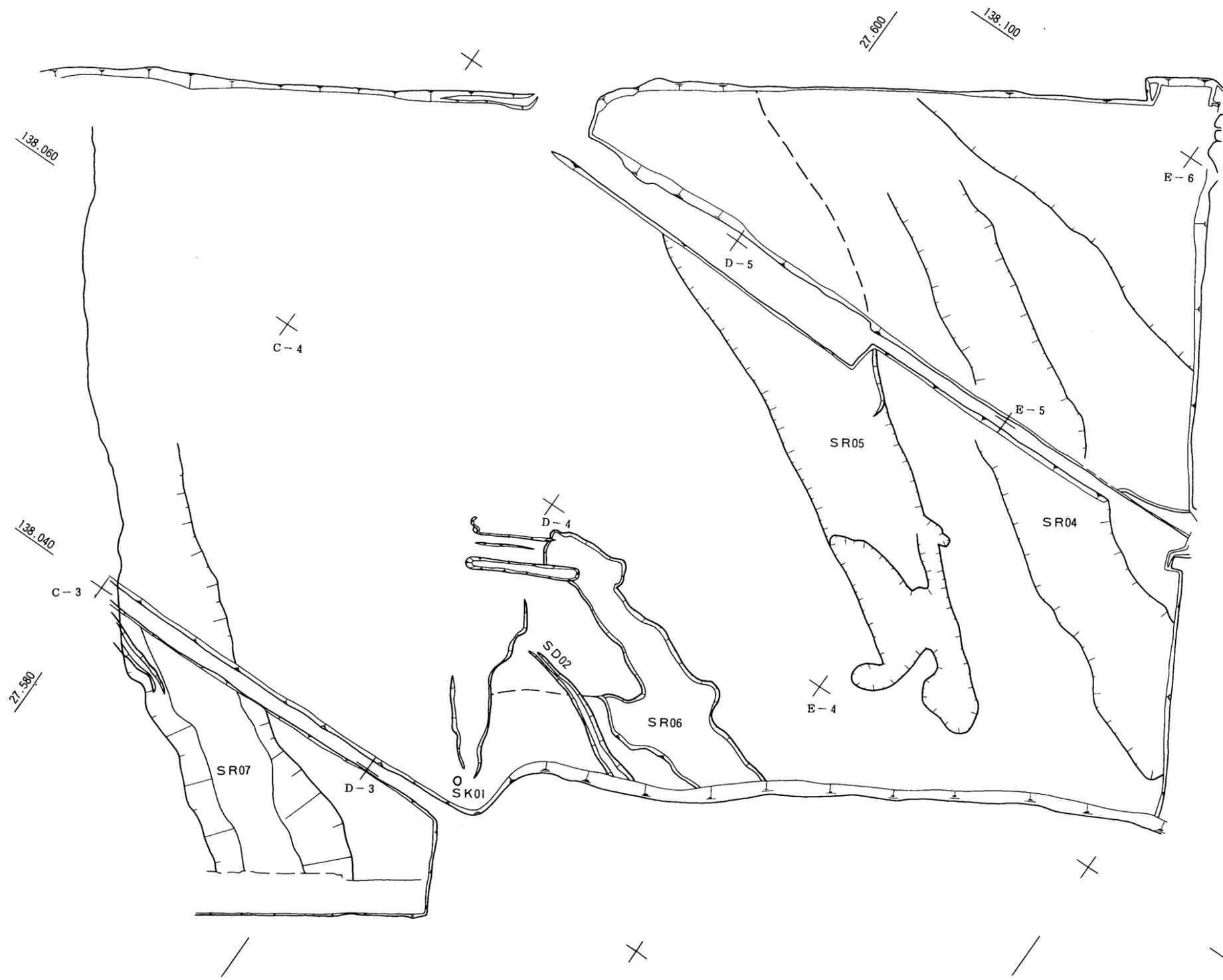
開折谷の東半には比較的細粒の堆積物からなる三条の旧河道が検出された。このうち最も古い旧河道がSR03で、縄文時代晩期後半の土器片が検出された。のちに流れたSR02によって埋積土の大半が侵食されているため、川幅・深さは不明である。出土土器片は約500点で、木本質泥炭層中と河床の礫層上面から散在する状態で出土した。出土状況からみて、SR03中には本来は相当な量の遺物が包含されていた可能性がある。埋積土の残存が悪く、埋積土の状況や出土状況からみても、遺物の一括性について積極的に肯定も否定もできない。なお、河床が礫層であるため石器の採集には充分留意したが、採集されなかった。

出土土器は小片のため器形の不明のものがあるが、浅鉢・深鉢・壺の3種類が認められる。図化可能な破片を出来るだけ掲載した。その中には接合出来ないが同一個体と考えられるものがあり、これについては観察表に所見を記載している。

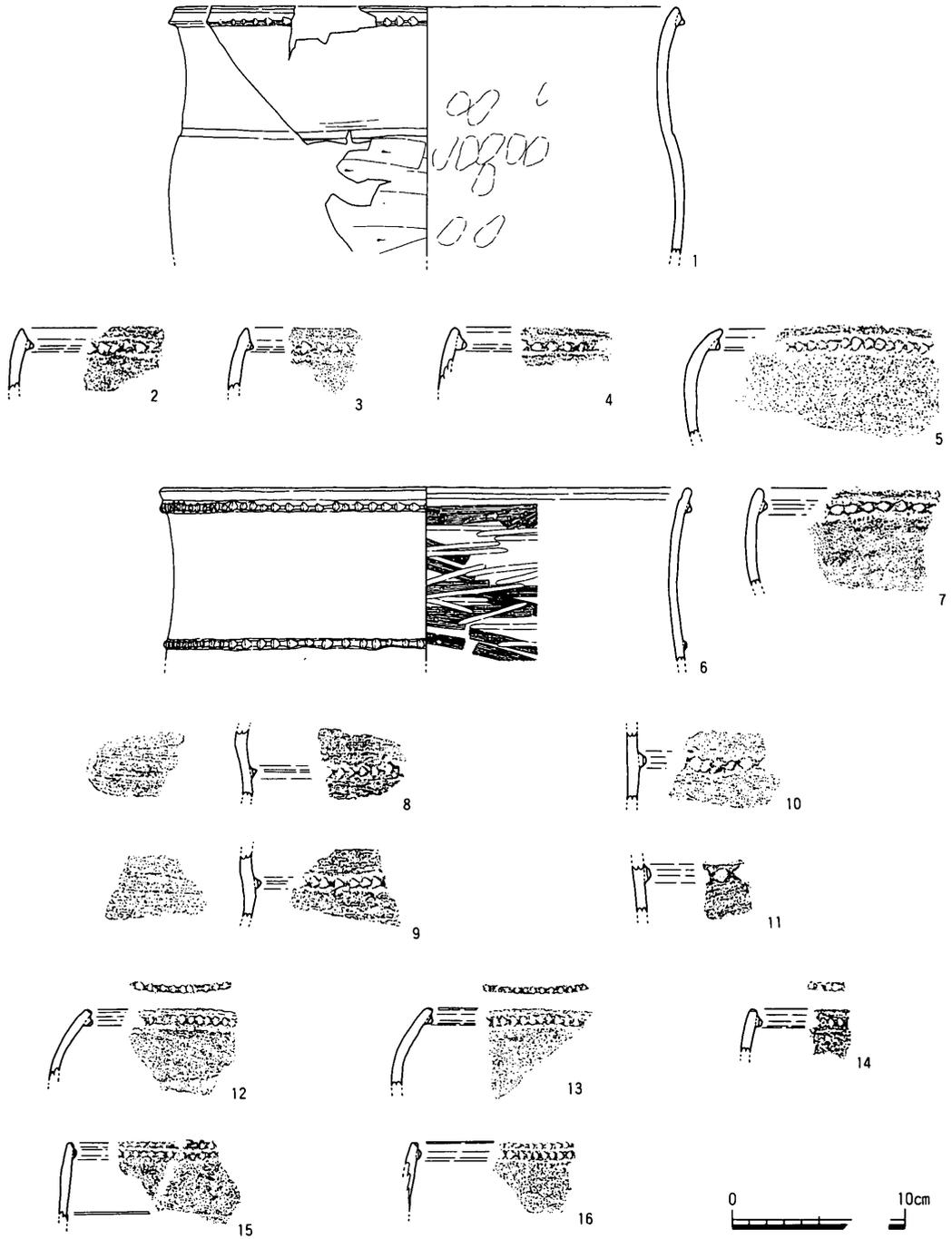
第17図の1~16は深鉢である。胎土は径2mm以下の石英・長石を多く含むものが大多数である。口縁端部を尖り気味に仕上げるもの(1~5)、丸味をもって平坦に仕上げるものがある。平坦に仕上げるものの中には、端部頂面に刻み目を施すもの(12~14)、端部外面に刻み目を施すもの(15, 16)がある。口縁部ののこる破片には、口縁端部から、0.2~0.5cm下がったところに突帯が貼りつけられ、突帯にはすべてD字状ないしO字状の刻み目が施されている。6, 8~11は体部に突帯の貼りつけられた二条突帯の資料である。なお、11, 14, 16には外面に炭化物が付着している。

第18図の17~25は浅鉢である。17~19は波状口縁を呈する浅鉢である。口縁端部を面取りし、口縁部外面に一条、内面に二条のやや粗雑な沈線を巡らせている。21も波状口縁を呈する浅鉢である。内面は丁寧にヘラミガキされ、波頂部内面に三角形の窪みを形づくっている。22も波状口縁を呈する平面方形の浅鉢である。全体的に丁寧に作りで、波頂部から左右0.5cm程下がった所を指もしくは丸棒状の工具で窪ませているのが注意される。

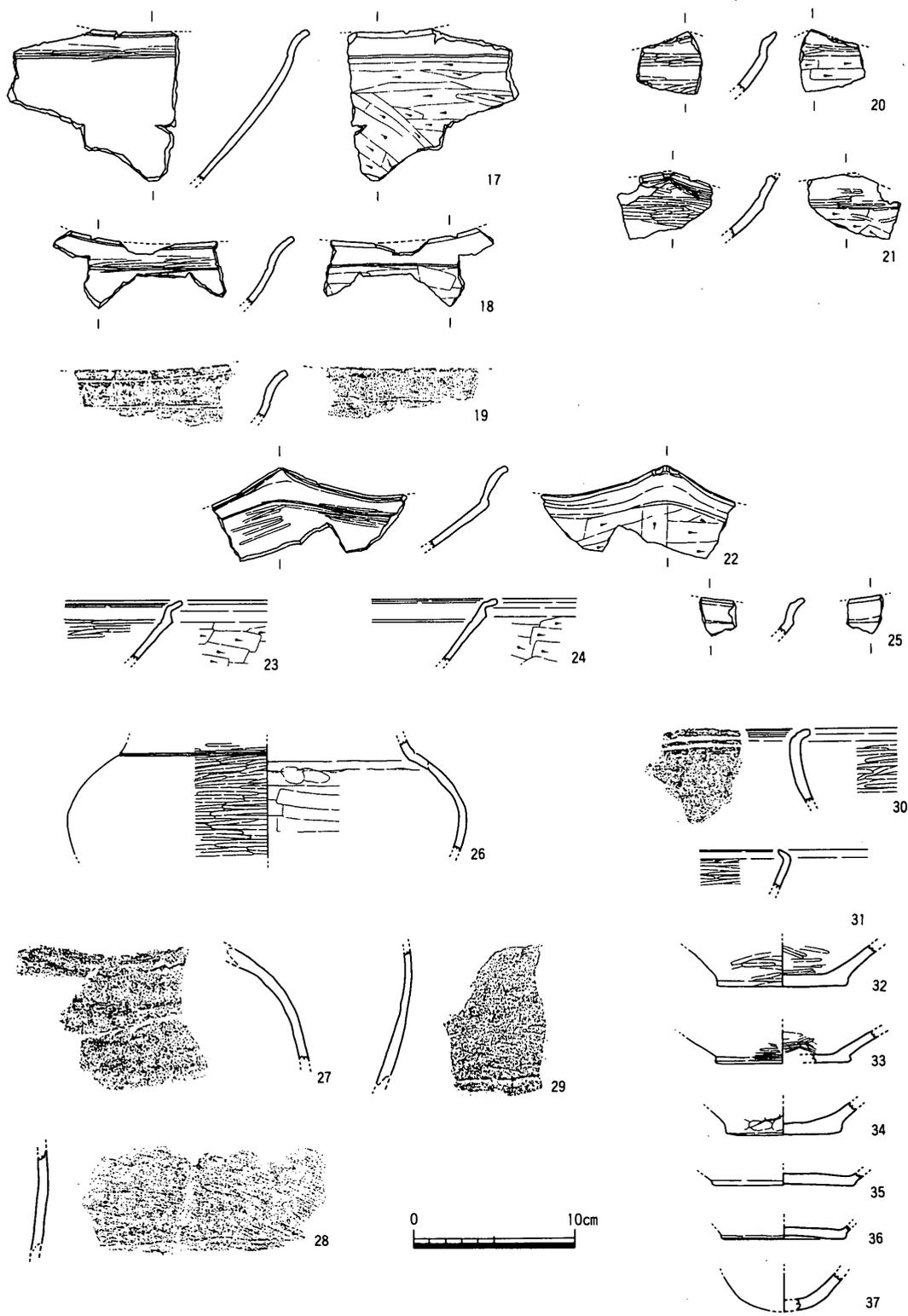
26は壺である。2mm以下の砂粒を含む胎土で微細な金雲母を多く含んでおり、他の深鉢や浅鉢の胎土とは異なっている。27~29も壺の体部の破片と考えられる。これらの胎土中にも若干の金雲母が含まれている。なお、27~29は粘土紐(帯)の接合部で割れた資料であるが、28, 29の天地については検討の余地がある。30も壺の口縁部と考えられる破片で



第16图 中部地区 遺構配置図



第17图 SR03出土遺物実測図①



第18图 SR03出土遺物実測図②

ある。口縁を強く外反させ、内面に二条の沈線を巡らせている。

31は器種不明。無理に径を復元すると12cm程度の直径になる。内外面にヘラミガキが施されている。

以上の土器は、すべて縄文時代晩期後半に属するものと考えられる。なお、A地区においては当該時期の遺構は検出されていない。

② SR02 (第13, 14, 16, 19~25図・図版7①, 8①②)

東南東から西北西方向に流れる幅15~20m、深さ0.7mの旧河道である。断面は緩やかな傾斜である。埋積土は、上から茶褐色砂質土・黒色粘土(草本質泥炭)・暗灰色砂質土・黒色粘質土(木本質泥炭)であり、静穏な環境下で徐々に堆積したことが窺える。最下層の黒色粘質土(木本質泥炭)層中から後述する遺物が検出され、それ以外からの遺物の出土は希薄であった。

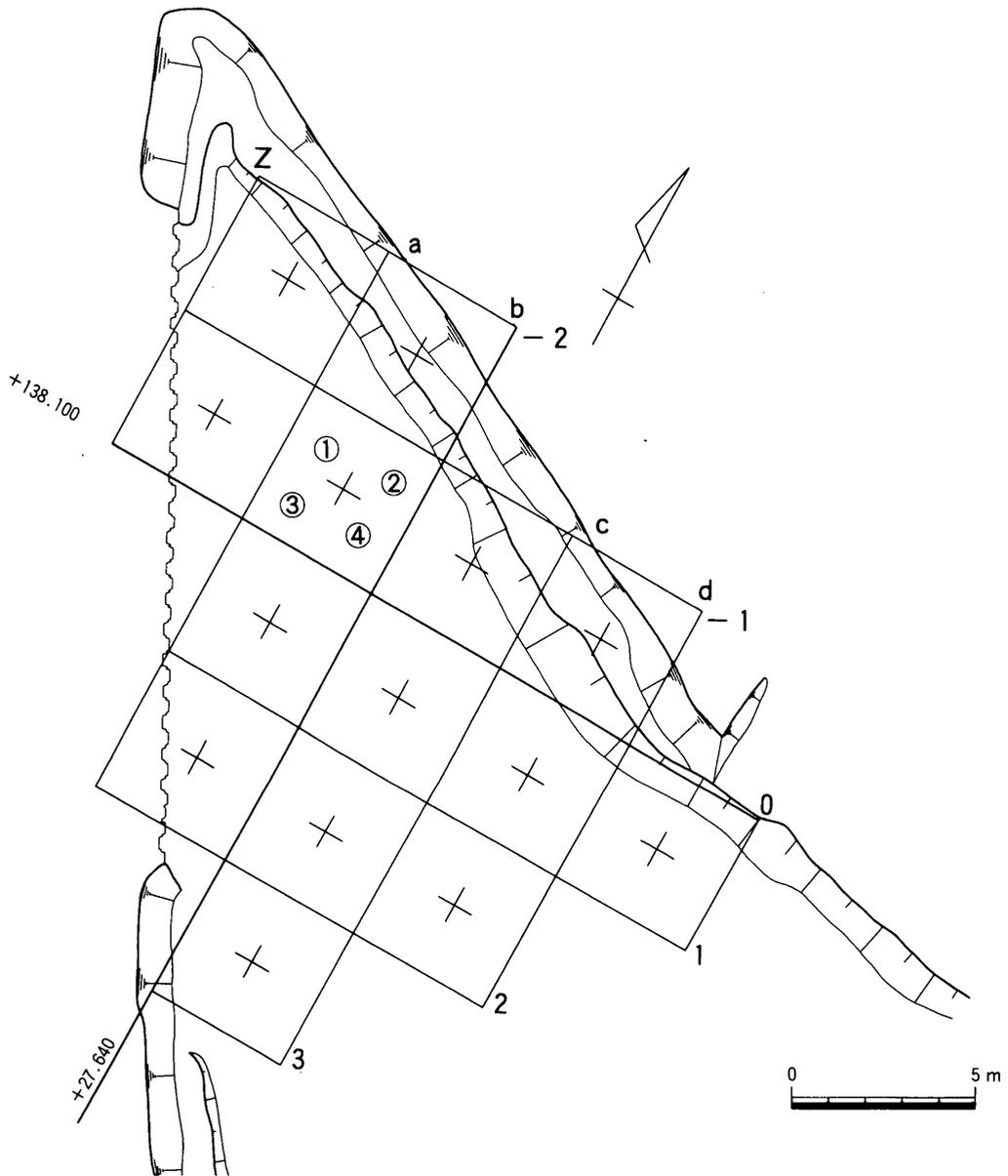
出土遺物は、第19図に示すように国土座標に合わせた4mのグリッドを設定し、適宜それを2mのグリッドに分割して取り上げた。出土遺物は28畝コンテナ満載で7箱あり、大多数が土器の破片である。遺物はz・-1(西北隅の交点でグリッドを呼称)に集中し、折り重なる状況で出土し、一部に河床の礫に見られるような瓦重ね構造が見られた。土器は細片が多く、個体数を把握できないため、試みに土器のグリッド毎の重量を計測すると、

z・-1①	4520g (205片)	z・-1②	2930g (139片)
z・-1③	820g (53片)	z・-1④	1490g (126片)
z・-2②	95g (3片)	z・-2③	1000g (75片)
z・-2④	430g (23片)		

という結果となった。これ以外のグリッドからは数点の遺物が検出されたのみである。グリッド毎の破片一個あたりの重量の平均は11~22gとばらつきがあるため、単純な比較はできないが、z・-1付近に遺物が集中していることがわかる。

接合できた破片の出土グリッドをみると、大半が同一のグリッド内か隣り合うグリッドのもので、離れたグリッドと接合されたものは僅かである。また、出土土器の割れ口は摩耗の進んでいるものが少ない。このことから、接合できた破片は埋没後に土の圧密などによって割れたものが大半であると考えられる。また、完形になるものは破片数のわりには少ないと考えられる。

z・-1付近は、SR02の川幅が狭く水深も深くなる傾向が認められ、いわゆる淵(深み)



第19図 SR02遺物取り上げ用グリッド図

にあたると思われる。出土状況からみて、かなり近いところに投棄されたものが、流水の力によって再堆積し、土器溜りが形成された可能性が考えられる。

第20～25図は、SR02出土遺物の実測図である。

第20図38～40は、広口壺の口縁部である。38は口縁端部を摘みあげ、端面に一条の凹線を巡らしている。38、40は胎土に金雲母、角閃石を含み、下川津B類土器の範疇と考えられる。41～45は短頸壺である。短い頸部から強く外反して短い口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめるもの(42)、面をつくるもの(41、43)、摘みあげて面をつくるもの(44、

45)がある。42の内面はハケ状工具を削るように用いている。43は体部上半までヘラ削りで器壁を薄く仕上げている。外面には叩き目の痕跡が明瞭である。46～53は甕である。46は明瞭な稜をもたないが、外反する頸部を有する壺と考えることもできる。外面に叩き目の痕跡が明瞭にのこる。47～50は口縁部が「く」の字状に強く外反する。端面に面を形づくるもの(47～49),口縁部が直線にのび端面を尖り気味に仕上げるもの(50)がある。48の内面には鋭利なもので引っ搔いたような刻みがある。51～53は器高の割りには径の大きい甕である。「く」の字状に外反する口縁部をもつが屈曲はゆるい。53は黒色粘質土層(Na 8 d)と黒色粘土層(Na 8 b)との層界付近で検出されたもので、他の遺物より上位のものである可能性がある。

54～70は、壺、甕の底部である。小型化した底部平坦面を有するものが多い。70は、遺物の集中する地点からやや離れた a・-1④で検出されたものである。弥生時代前期の壺の体部から底部にかけての破片である。混入と考えられる。

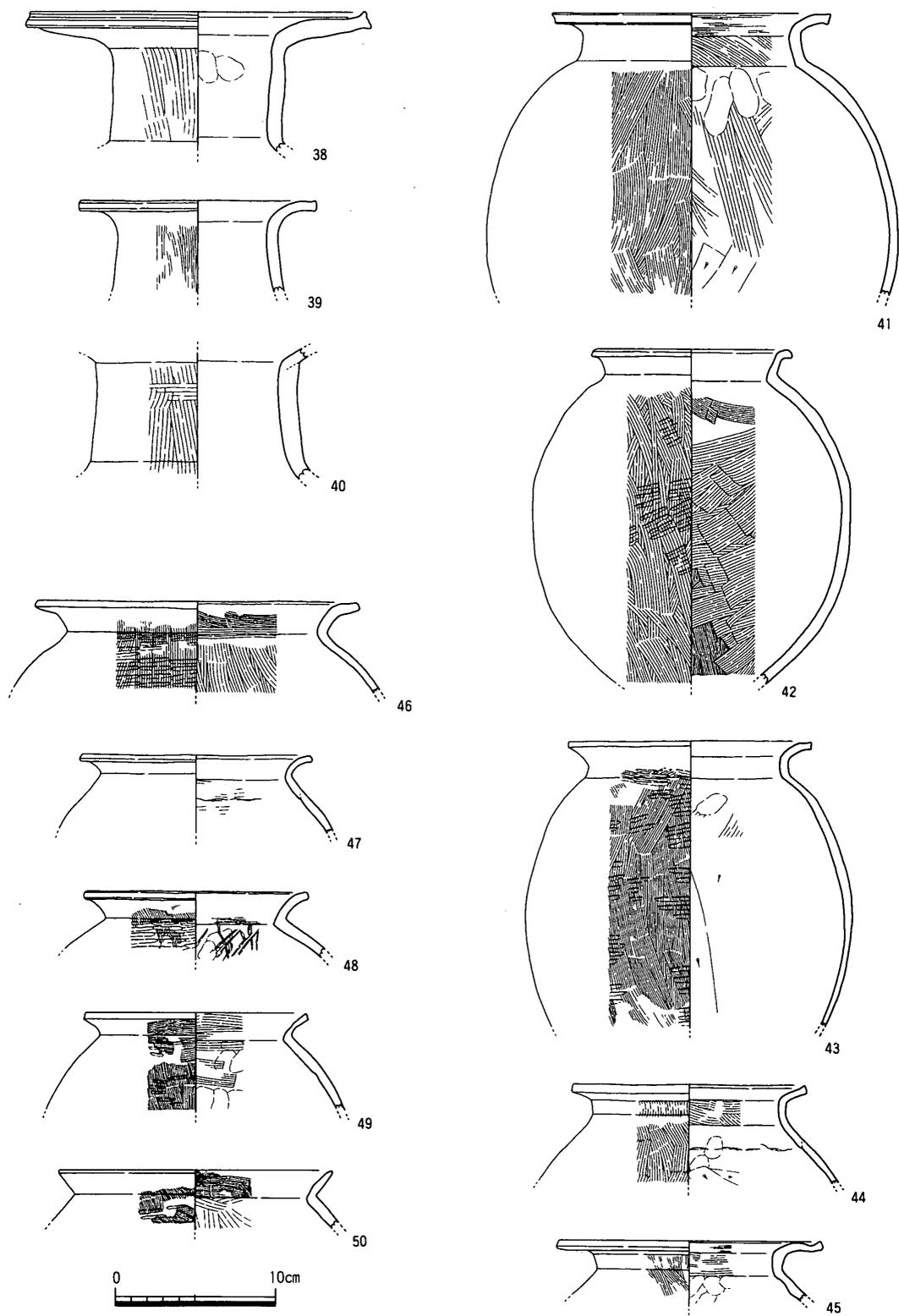
71～85は鉢である。71は片口の大型のものである。72～80はボウル状の鉢である。75は円柱状の短い底部を貼りつけており、74は底部を削り丸底化を図っている。口縁部は79のように端部に面のあるものもあるが、丸くおさめるものが多い。内外面の調整は、ヘラ削り・ハケなど多様である。81～83は口縁部が「く」の字状に屈曲する鉢である。81の内面はヨコハケを施した後に暗文状のヘラミガキを施した丁寧なつくりのものである。85は小型の鉢である。丸底を呈し、外面に縦方向の亀裂が認められる。

86は高杯の破片である。S R02からの出土遺物には明かに高杯とわかる脚部などの破片はこの他に全く採集されなかった。

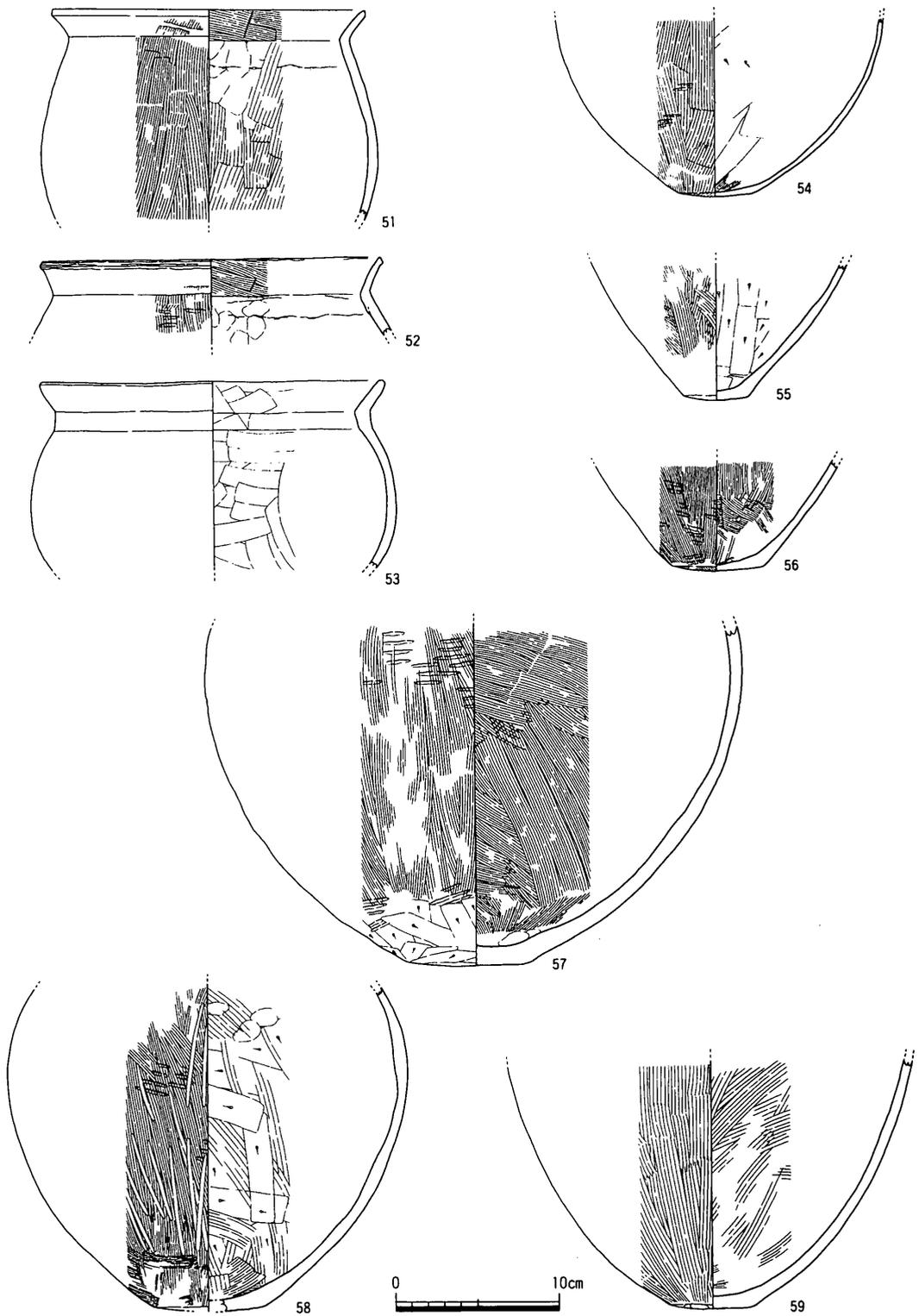
第24、25図はS R02出土の石器、木器である。

第24図の87～91の石器はすべてサヌカイト製のものである。87～89はスクレイパーである。88、89は打製石斧を再利用した可能性のあるもので、88は刃部に若干の摩滅が、89は頭部に敲打痕および若干の摩滅が認められる。90は体部に抉りのある打製の石庖丁である。全体に摩滅している。91は小型の打製石斧である。基部を欠損する。刃部に擦痕、摩滅が認められる。

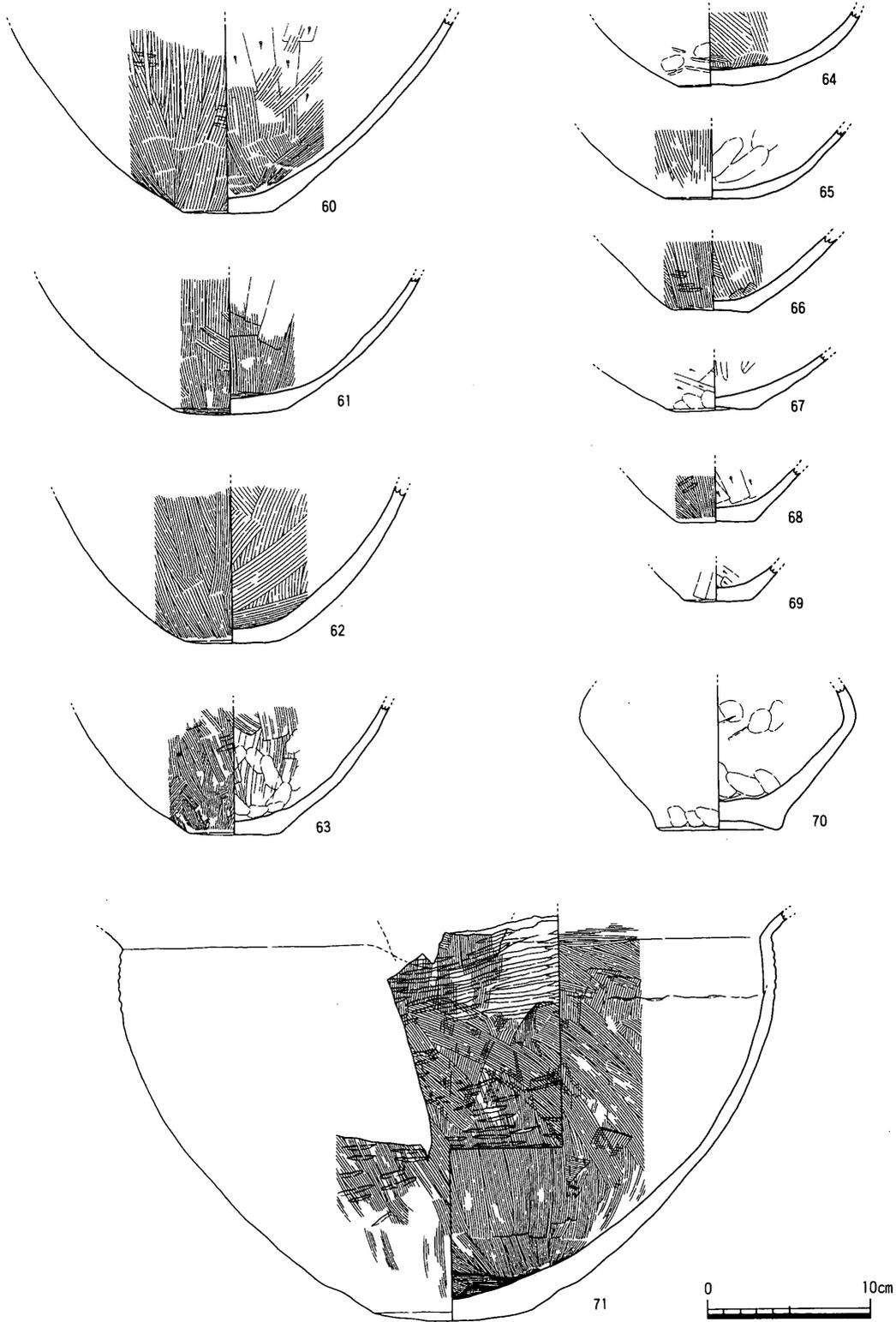
第25図の92は磨石である。やや扁平な円礫で平坦部に磨痕が認められ平滑化している。石材はひん岩である。93は杭状の木製品である。S R02の河床から横倒しの状態で出土した。先端を尖らせている。一端は欠損している。先端部には幅1cm程の面をなす加工痕が認められる。材はミズキ科のアオキに同定されている。



第20図 SR02出土遺物実測図①



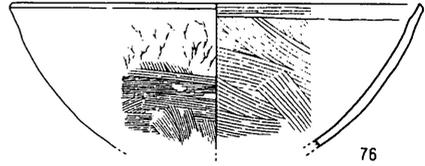
第21図 SR02出土遺物実測図②



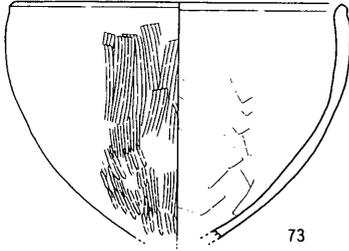
第22図 SR02出土遺物実測図③



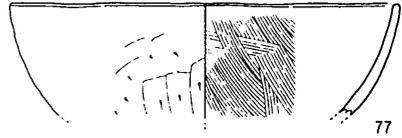
72



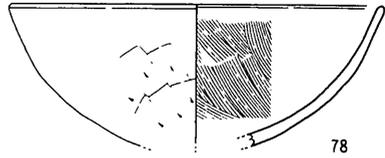
76



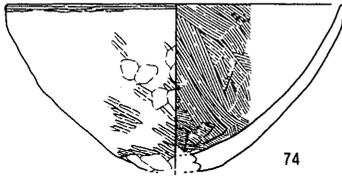
73



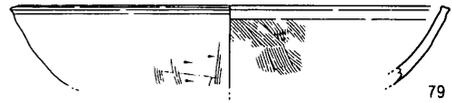
77



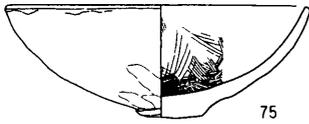
78



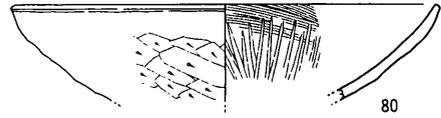
74



79



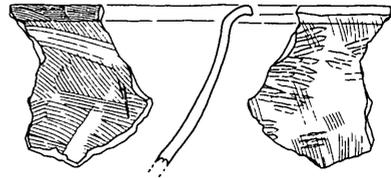
75



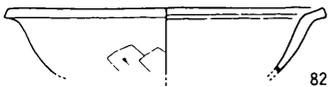
80



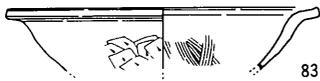
81



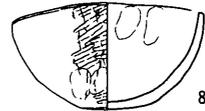
84



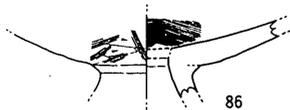
82



83



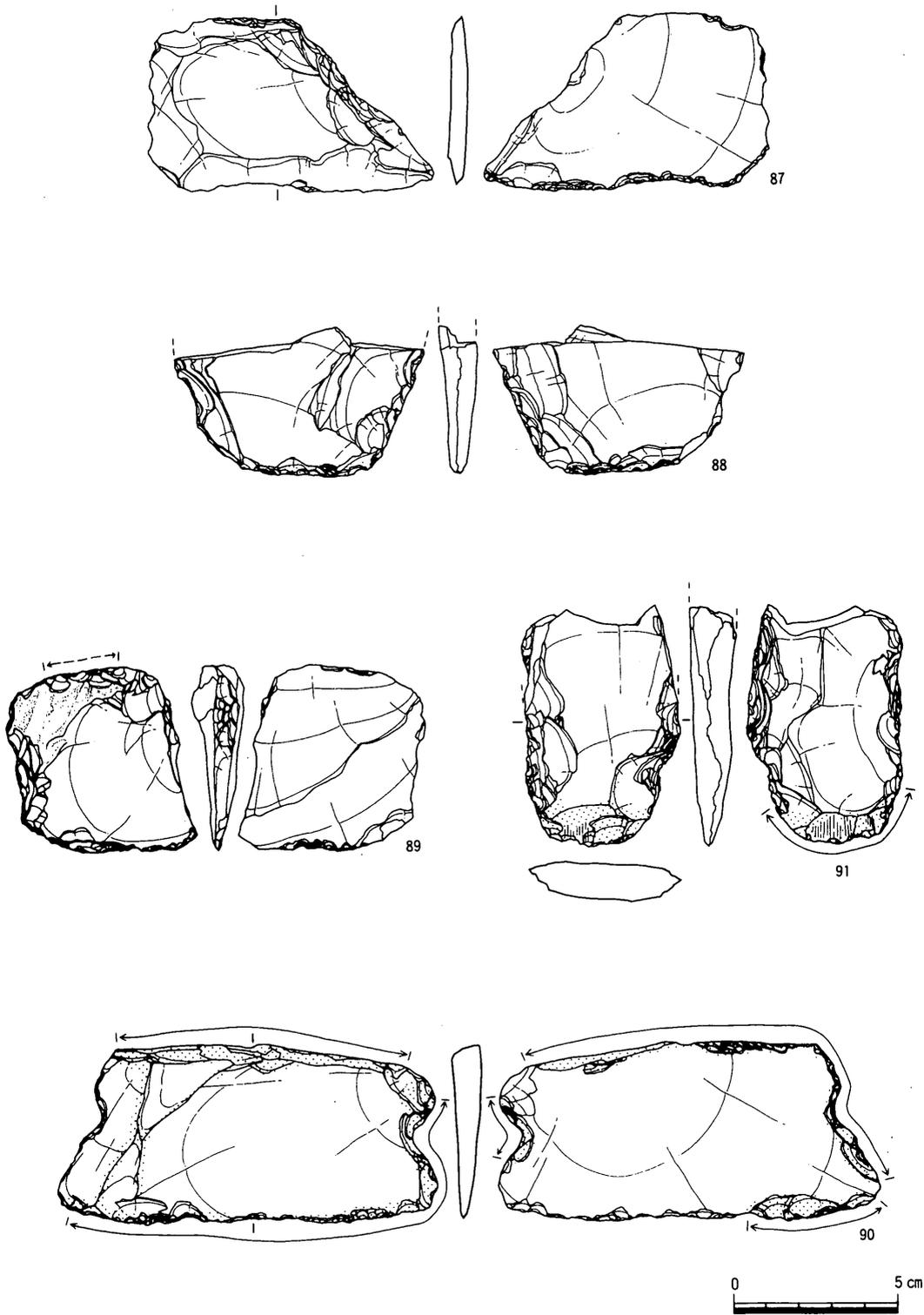
85



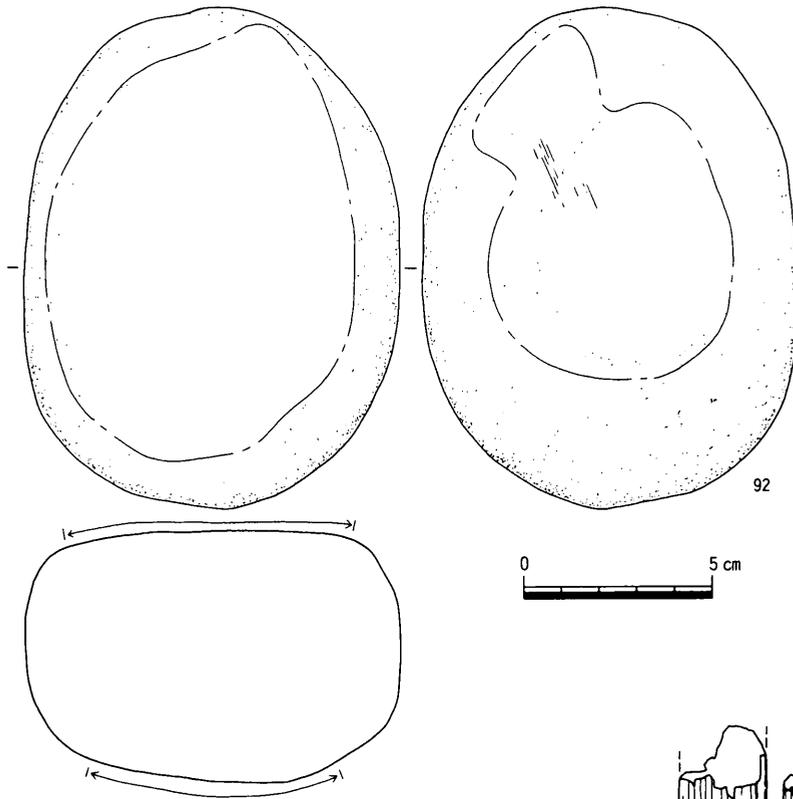
86



第23図 SR02出土遺物実測図④



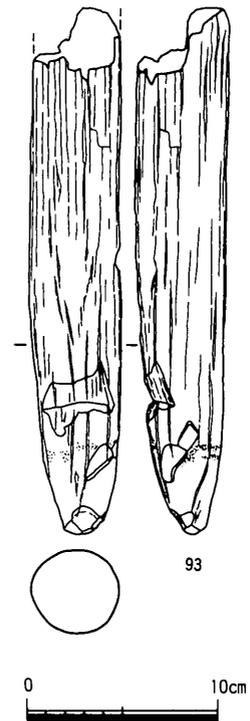
第24図 SR02出土遺物実測図⑤



第25図 SR02出土遺物実測図⑥

第20～25図においてSR02出土遺物を報告した。出土遺物は弥生時代前期に属するものも含まれているが、大半は弥生時代後期に属するもので、広口壺においては、口縁端部の拡張や肥厚が認められないこと、壺・甕の器壁外面の叩き目が消されていないことなどから、後期でも中葉頃に属すると考えられる。

これは、SR02下層の黒色粘質土（木本質泥炭）層の堆積年代を示すものと考えられる。その上層には黒色粘土（草本質泥炭）層が堆積し、SR02は洪水流の流下しない安定した湿地となっていたと考えられるが、その年代は不明である。その後、SR01が再び埋積土を開折して流れる。なお、龍川四条遺跡A地区の調査区内からは、弥生時代後期の遺構は検出されていない。



③ S R01 (第26～32図・図版9①～10②)

S R02の埋積土を開折して流れた旧河道である。調査区内では、南部においては川幅が広く水深の浅い流れから、北部に向かって川幅が狭く、水深の深い流れに変わっている。北部においては川幅7m、深さ1m程の規模で、断面形は椀状を呈する。埋積土は、川底付近に10cm程の垂円礫を最大に1cm程の礫を多く含む茶灰色砂質土(第13図7d層)が堆積し、その上層に細砂のラミナが顕著に見られる茶灰色粘質土(第13図7c層)が堆積している。この2層がS R01の主要な埋積土であるが、2層は下方から上方に次第に粒径が小さくなっており、級化構造をなしているものと考えられる。S R03やS R02の埋積土が細粒で、長期に静穏な堆積環境にあったと推定したのに対し、S R01の埋積土は相対的に粗粒で、礫やラミナが認められることから、洪水など不安定な状況下で埋積したものと推定される。

調査区北部において局地的に礫の集中する箇所があった。礫の集中は平面的にまとまりがなく、垂直的にも乱雑な堆積状況である。石垣など何らかの構築物が流水によって破壊された可能性を考えたが、把握できなかった。なお、100個の礫を任意に取り上げて径を調べたところ、大半が砂岩の垂円礫で平均長径10cm、同短径7cmであった。

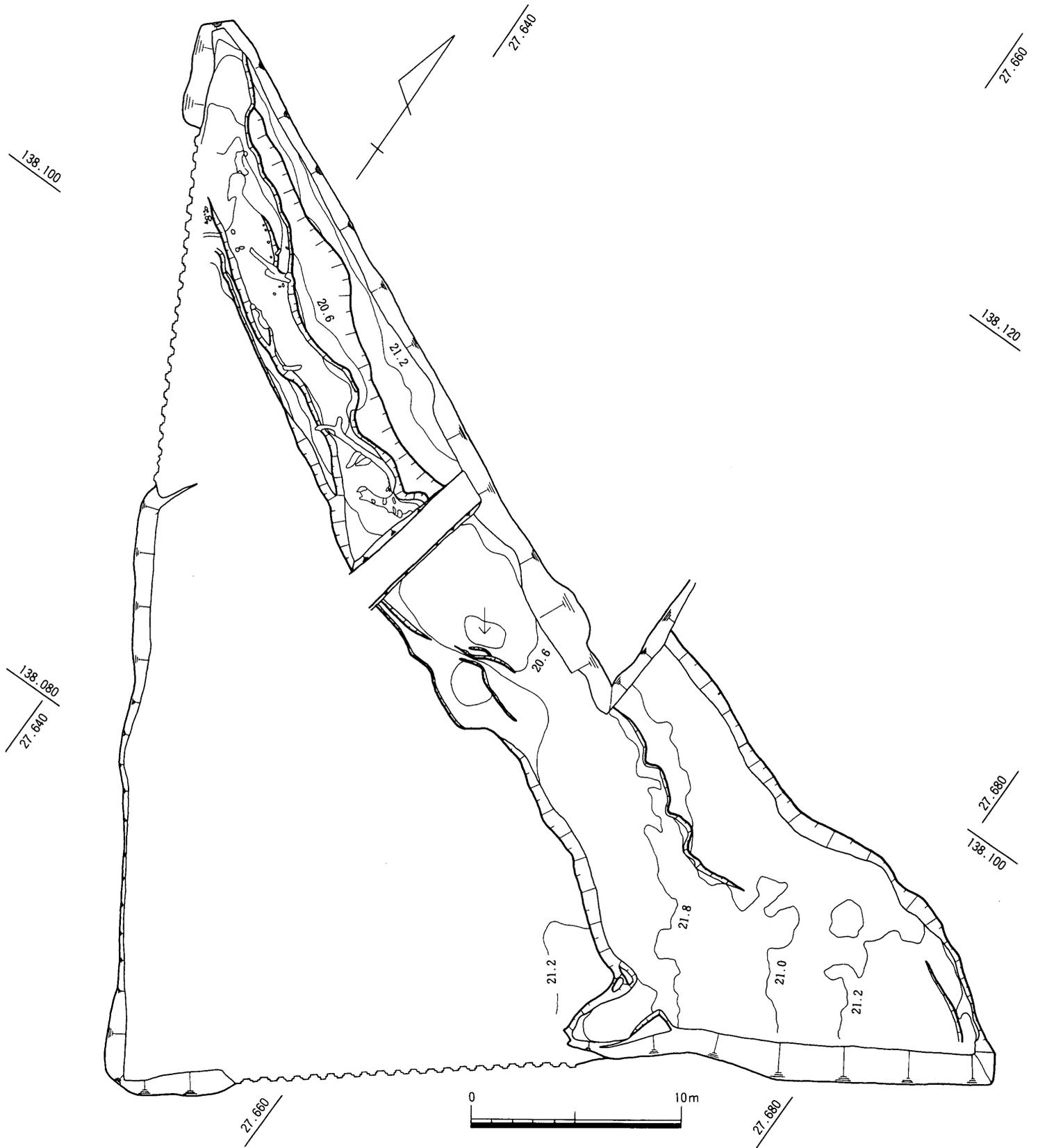
遺物は調査区北部の川底付近を中心に出土したが、7c・7d層中からも出土している。遺物の大半は土器で、12世紀代を中心とする時期のものである。なお、先述したようにS R01はS R02の埋積土を開折しているため、川底付近では両者の遺物が混在する状況であった。また、出土遺物のうち椀、小皿は底部を上にして検出されるものがほとんどであった。これは流水による現象と考えられる(補注)。

第27～32図はS R01の出土遺物実測図である。

第27図94～103は、土師器の小皿である。底部はすべてへら切りされている。104は円盤状の高台を有する小皿である。内面は高台部分も窪ませており、見込みに削り残しの臍状の突起がある。105も104と同種のものと考えられる。107～116は土師器の杯である。円盤状の高台を有するもの、器高の高いものなどのバリエーションがある。115はロクロを用いない手づくねの土器である。116は有脚の杯である。杯部と底部のつなぎ目が明瞭で、脚部には指頭圧痕が認められる。

117～124は須恵器の杯である。須恵器の杯は小破片のものが多い。高台を有するもの、円盤状の高台状のものが付されるもの、高台のないものなどがある。119、122は瓦質のものである。

第28図125～132は土師器の椀である。125は内外面にへら磨きが認められ、その他も内面



第26図 SR01 平面図

は摩滅のため不明であるが、外面には横方向のヘラ磨きがなされている。口縁部の形態は玉縁状になるもの(127, 130), 外反気味のもの(126)などがある。高台は貼り付けで高く、外方向に踏ん張るものが多い。

133~140は内面黒色の黒色土器A類碗である。外面には幅3~4mmのヘラ磨きが間隔をあけて横方向に施されている。内面は、見込み部には2方向程度のやや粗雑なヘラ磨き、口縁部は外面と同じ横方向のヘラ磨きが認められる。香川県綾歌郡綾南町に所在する西村遺跡出土のものと同種と考えられる。

141は黒色土器B類碗である。摩滅のため調整は不明である。142は瓦器碗である。口縁部外面はナデ、以下には指頭圧痕が顕著に認められる。畿内産(和泉型Ⅱ期)のものである。143, 144は白磁碗である。143は口縁部と底部が接合できないが出土状況から同一個体と考えられる。143は森田・横田編年によるⅧ類, 144はⅣ類にあたる。

第29図145は須恵器の高杯の脚部かと思われる破片である。146~148は須恵器の壺の口縁部, 頸部の破片である。150は須恵器甕の口縁部の破片, 151~159は須恵器の壺および甕の底部である。156は、底部に孔があるようで類例に乏しい。160はいわゆる鉄鉢状の鉢。161はこね鉢である。

第30図162~164は土鍋の口縁部である。いずれも「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。165~171は土釜の口縁部である。鏝より上部が「く」の字状に屈曲する口縁部をもつものとそのまま口縁部にいたるものがある。量的には後者が多い。

第31図は平瓦, 丸瓦である。172~175の平瓦は凹面に布目圧痕, 凸面に縄タタキ目痕が認められる。174は布目圧痕, 縄タタキ目痕をナデ消そうとしている。176, 177の丸瓦は、凹面に布目圧痕, 凸面には板ナデが認められる。

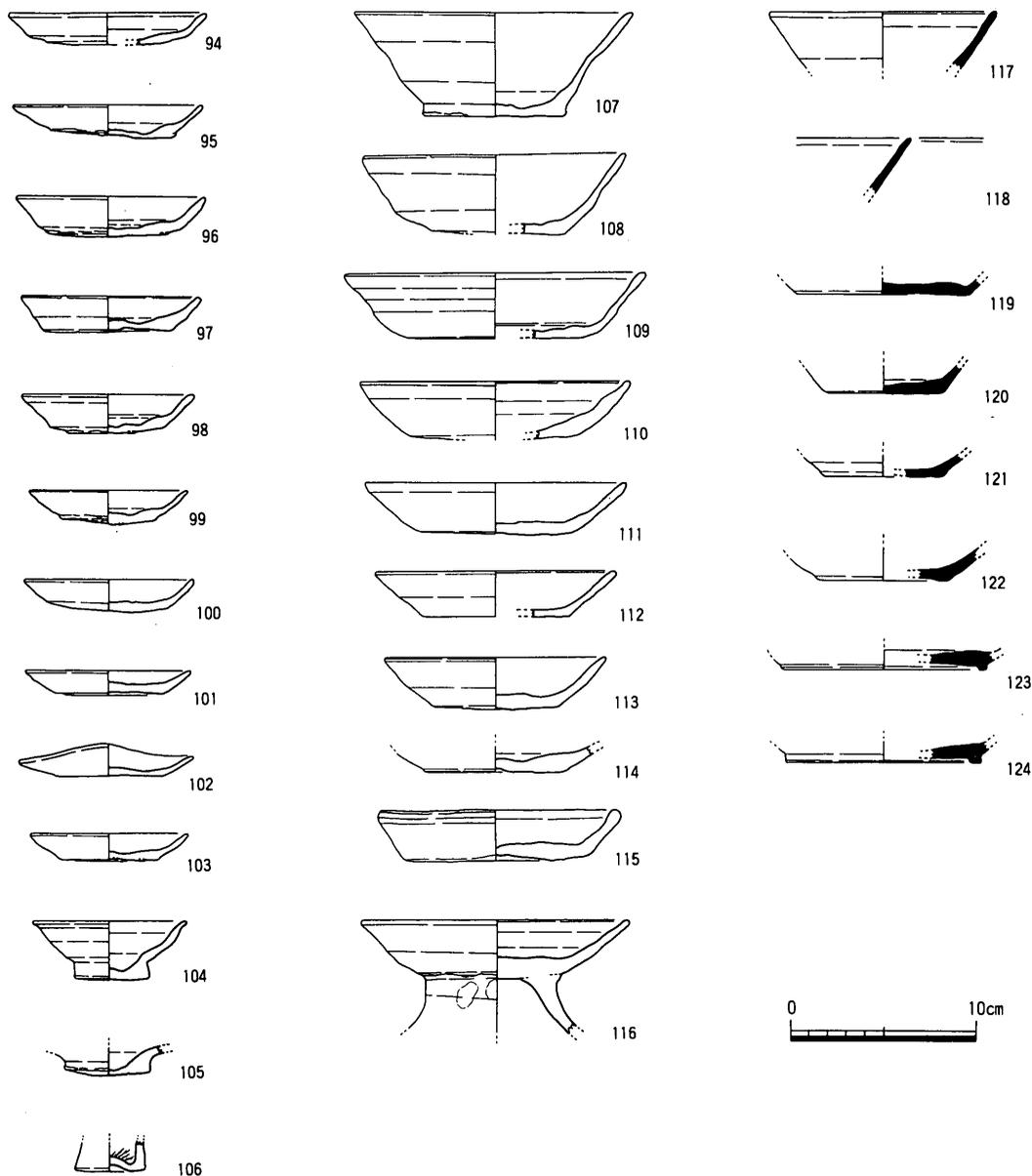
第32図は、金属製品と木製品である。

178は、断面矩形の鉄棒である。一方に向かって細くなるが、先端を欠損する。用途不明であるが、香川県坂出市に所在する下川津遺跡に類例が認められる。179は鉄釘である。

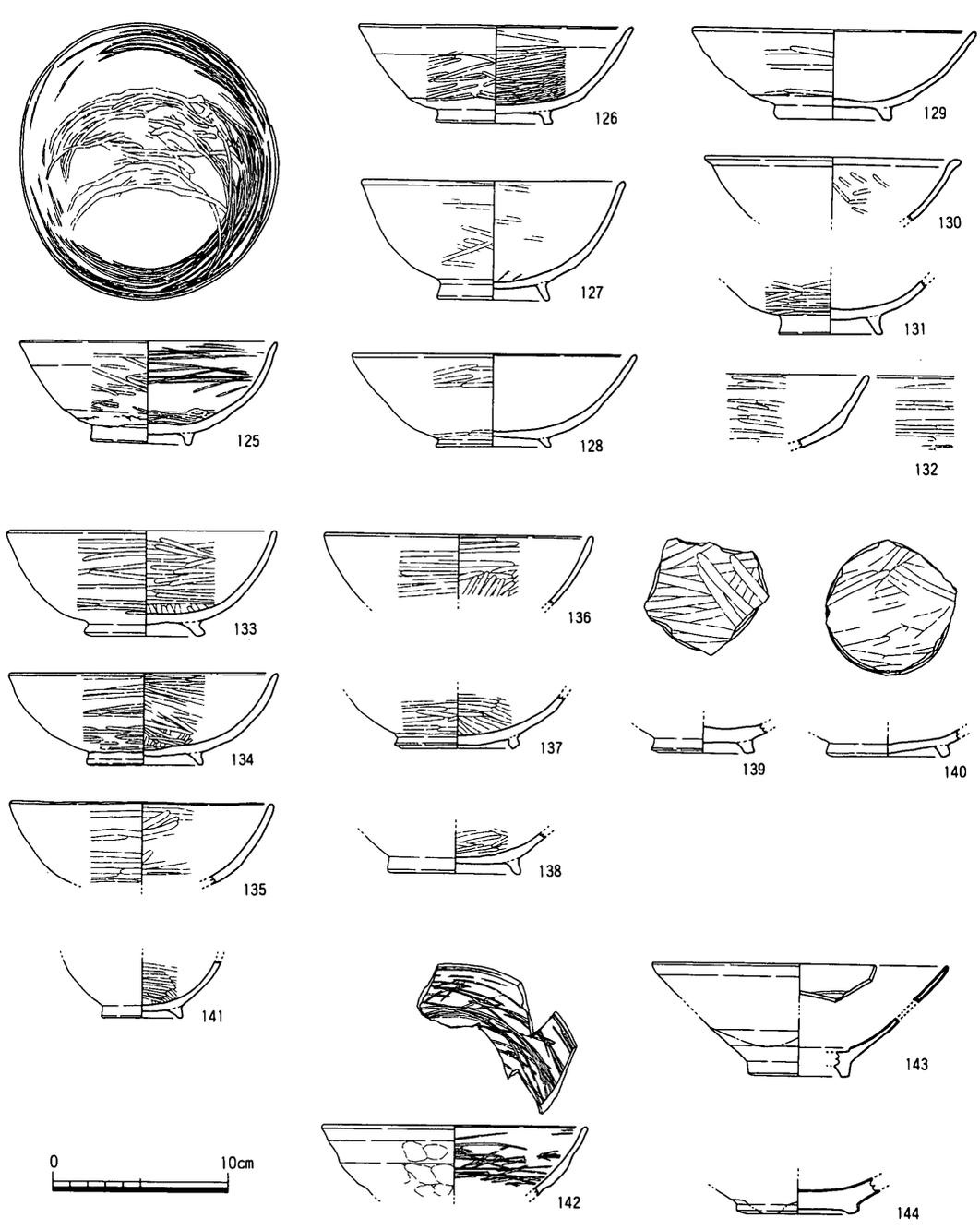
180は、先述したS R01北部の礫の集中部において礫中から検出されたものである。横木取りした板材の一端に把手状の突起を作り出している。木材質はスギに同定されている。形態から見て何らかの作業台ではないかと想定されるが、使用痕は認められず、用途不明品である。

以上がS R01から出土した遺物である。出土遺物を大観すると9世紀代から12世紀代に属する遺物が混在する状況を呈している。このうち12世紀代に属すると思われるものは完

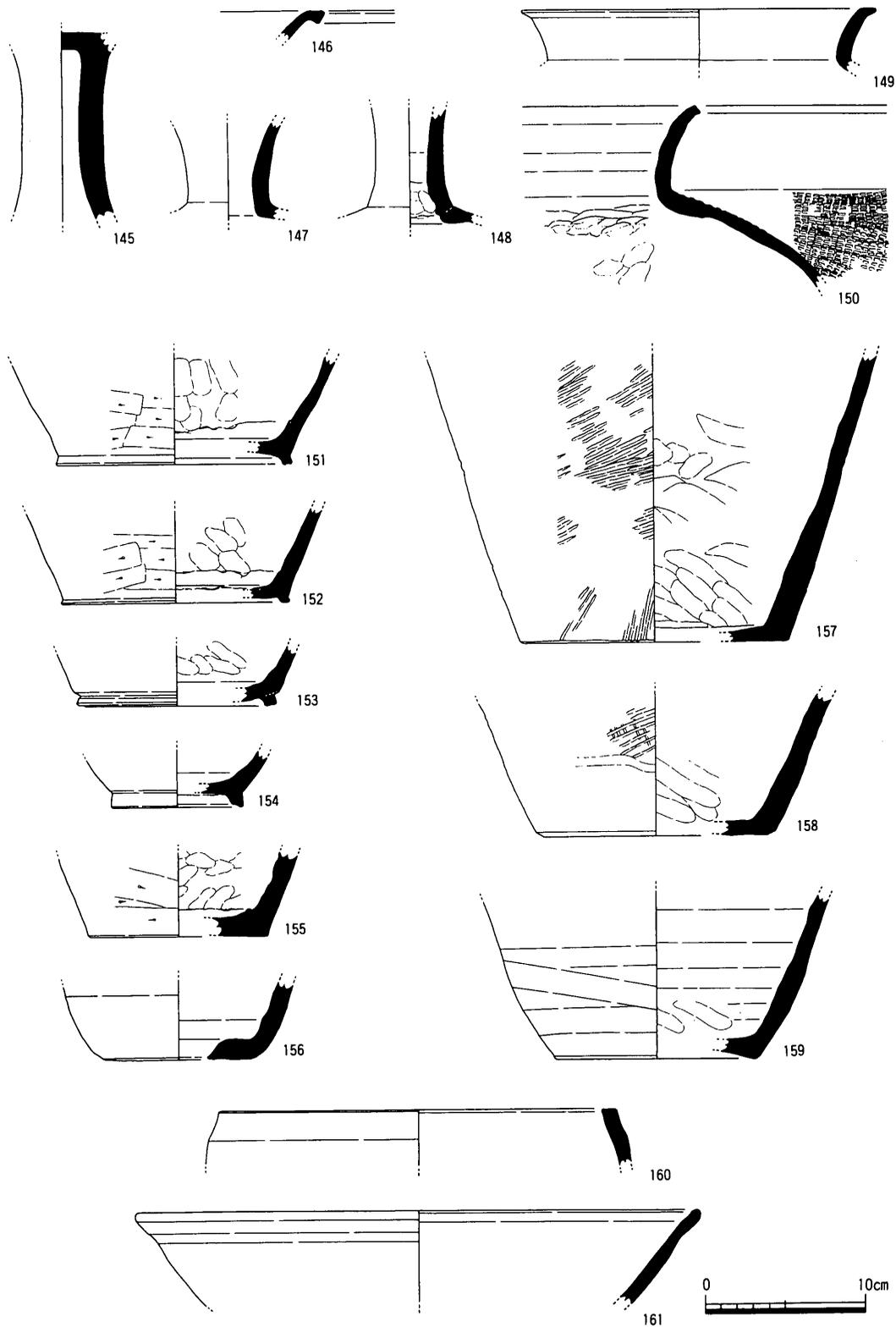
形もしくはそれに近いものも多く、時代を遡る遺物は小破片であるものが多い。先にSR01は、洪水などの不安定な状況下で埋積された可能性が高いことを報告したが、埋積の年代は12世紀代であると考えられる。一方SR01が開折された年代であるが、出土遺物の中で古い様相をもつ遺物の時期で考えるのか、これらは埋積の段階で混入した遺物と考えるのか不明である。出土状況は同一層中に全く混在する状況であったことから、後者の可能性が考えられるが、積極的な根拠はない。



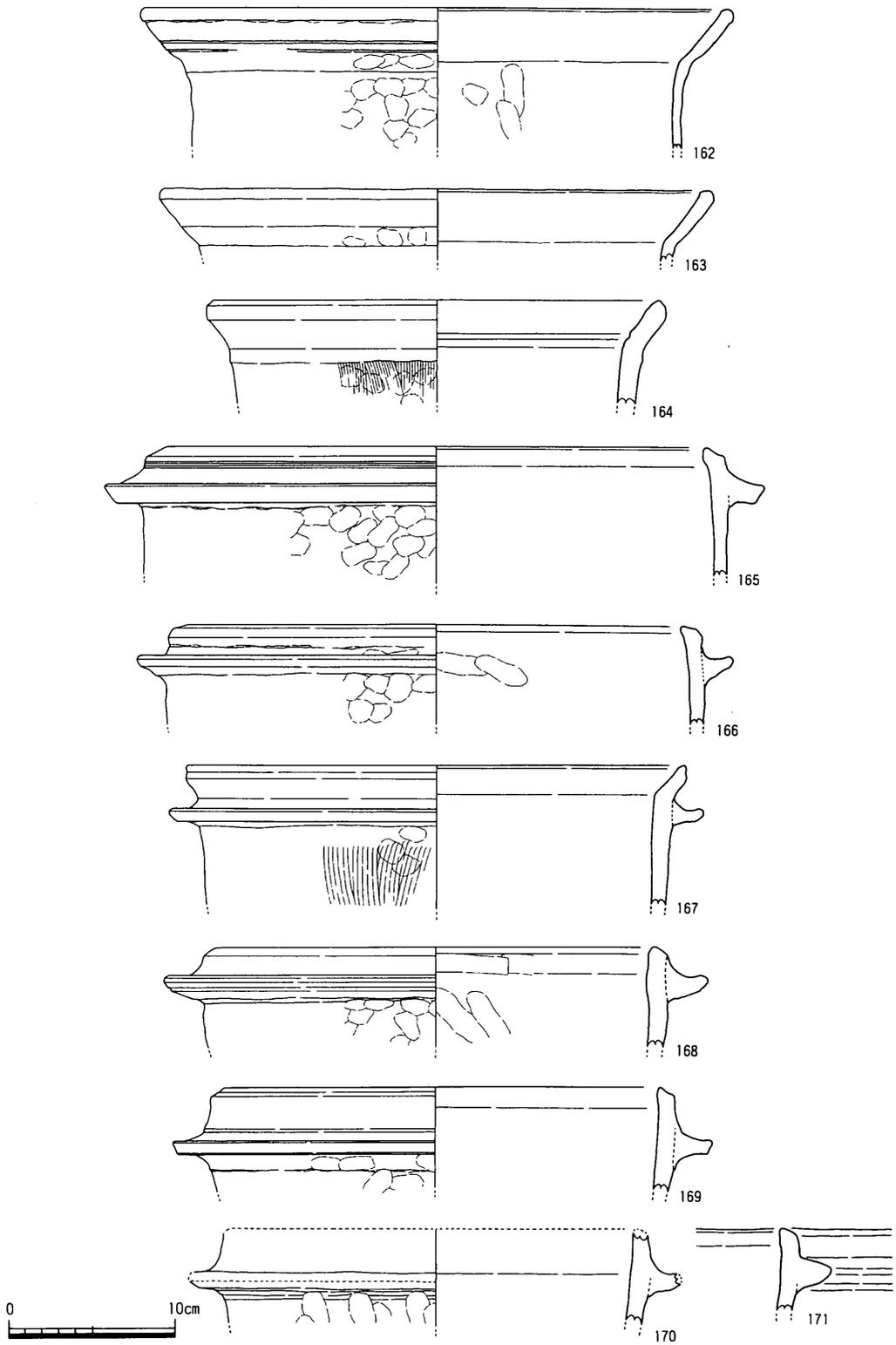
第27図 SR01出土遺物実測図①



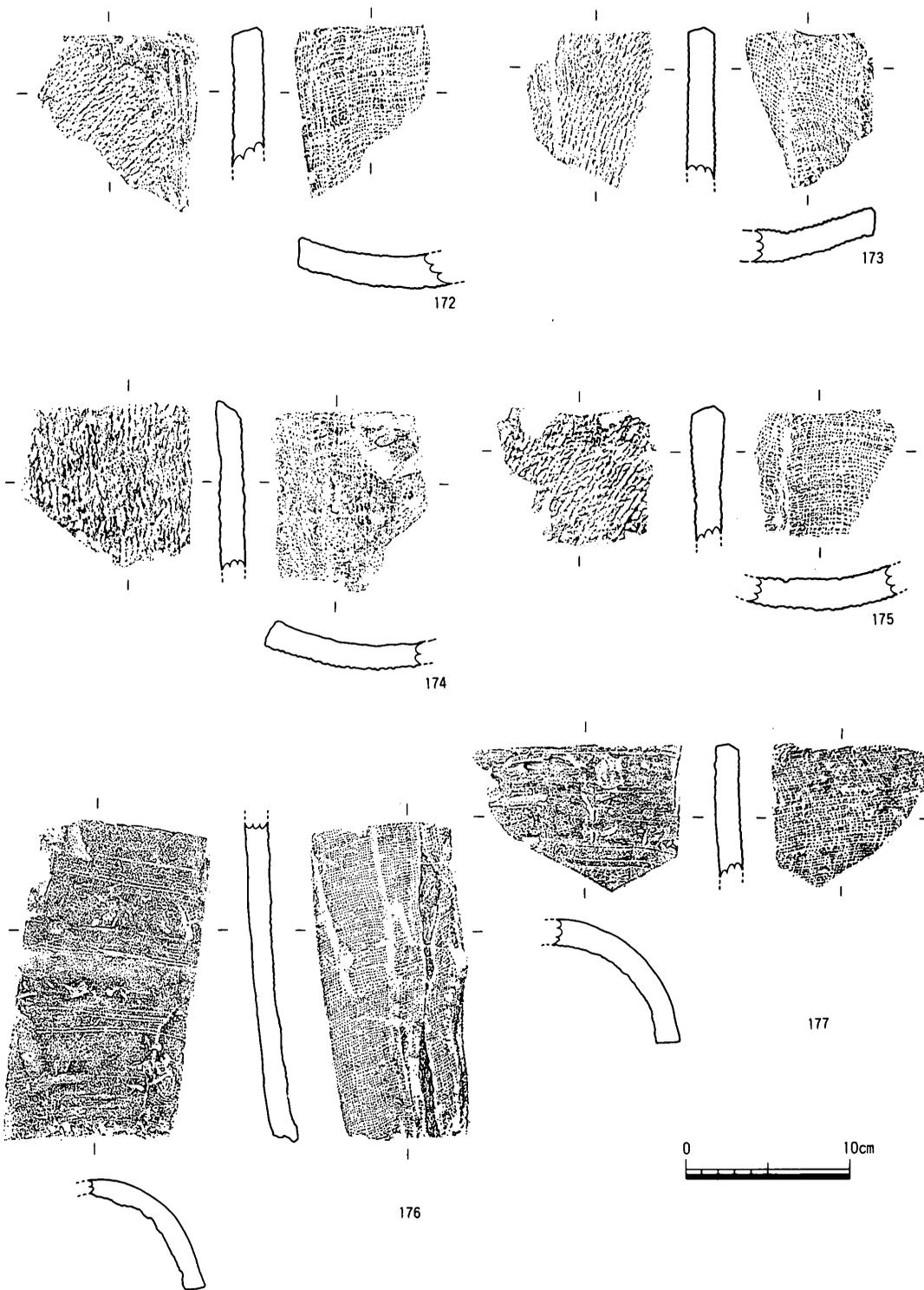
第28図 SR01出土遺物実測図②



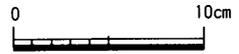
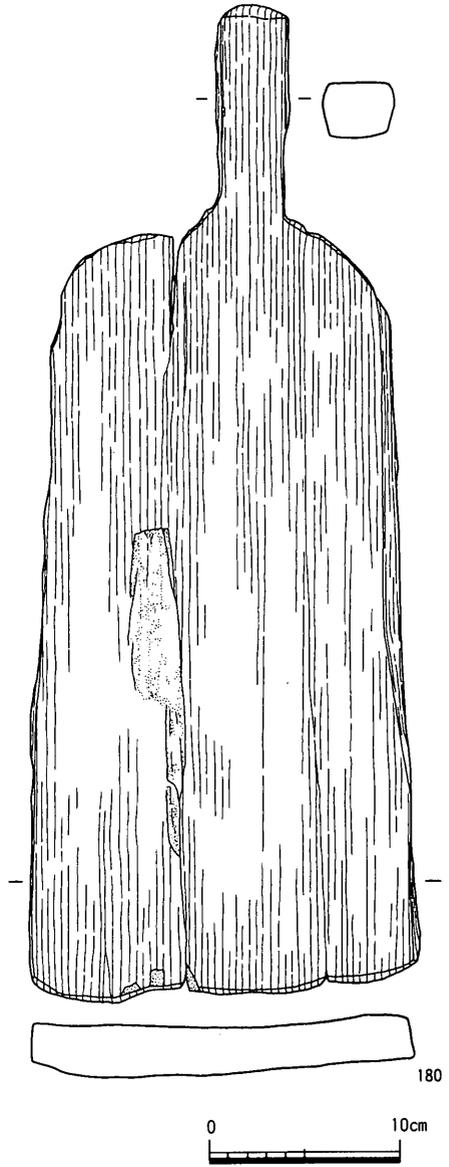
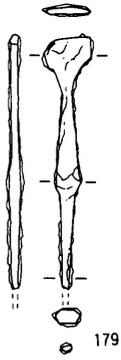
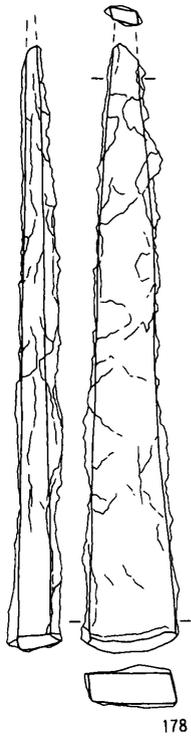
第29図 S R01出土遺物実測図③



第30図 SR01出土遺物実測図④



第31图 SR01出土遺物実測图⑤



第32図 SR01出土遺物実測図⑥

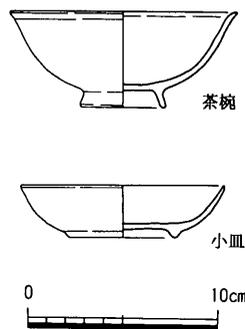
(補注)

S R01から出土した土器のうち、碗・皿形態の土器は底部が上になって出土する傾向が目についた。これは水流によって土器が流されたために起こる現象と考えられる。このことを証明するために、簡単な実験を行ったので結果を報告する。

実験は、現在通有に用いられている茶碗、小皿（第33図）を、深さを変えた静水中と流速の異なる流水中に複数回投げ込み、茶碗・小皿の安定する状態の違いを観察するというものである。静水中では水深20cm、30cm、40cmの3段階、流水中では表面流速0.13m/s、水深20cm・表面流速0.25m/s、水深15cm・表面流速0.30m/s、水深15cmの条件下で行なった。また、陶器を3枚重ねた状態で投棄するという実験も行なったが、流水中では陶器の破損が増えるため中止した。

実験結果を簡単にまとめると、静水中においては水深が深くなるほど陶器は底部を下にして安定するようになる。水深40cmの場合は、茶碗も小皿も底部を下にして安定するが、水深が30cm、20cmとなると、小皿より茶碗のほうが底部を下にして安定する率が高くなる。

陶器が底部を下にして安定するには、水深と陶器の口径及び器高が関係しているようである。陶器を静水中に



第33図 実験に使用した陶器

第6表 実験結果集計表

		茶 碗			小 皿		
		底が上	横倒し	底が下	底が上	横倒し	底が下
○ 30枚投棄							
静	水深20cm	5	3	22	16	0	14
	水深30cm	0	5	25	11	0	19
	水深40cm	0	3	27	2	0	28
流	0.13m/s 20cm	4	6	20	14	0	16
	0.25m/s 15cm	8	6	16	12	0	18
	0.30m/s 15cm	19	5	8	22	0	8

○ 3枚重ね（6回投棄）

静	水深20cm	3	6	9	3	0	12
	水深30cm	0	9	9	0	0	18
	水深40cm	0	9	9	0	0	18

投げ込むと、どのような投げ込み方をしても陶器は見込みを上にするように動き、振り子のような一方向の回転運動をする。水深が深くなるにつれ振幅を減じ、底部を下にして安定する。振幅は茶碗より小皿が大で、十分な水深がないと振幅の途中で水底に達し、底部が上になったり下になったりするのである。

流水中の投棄の場合は、陶器を押し流すほどの流水になると陶器が動く過程で必ず底部が上になり、大半は上になると動きが止まる。流速が速くなるにつれ、まず茶碗が動きだし、ついで小皿が動く。陶器を押し流さない流速では、静水中とほぼ同様な安定のしかたをする。つまり、陶器を押し流すほどの流速になると静水中とは逆に底部を上にして安定するようになる。

このことから、陶器の底部が下である場合は上である場合よりも流水に対する抵抗が弱く、茶碗のほうが小皿よりも抵抗が弱いことがわかる。単純に流線形に近いほうが流水に対する抵抗があり、陶器を動かす流水になると最も流水に対して抵抗のある形に陶器が安定するのである。

最も流水中では陶器が流される過程で、水底の突起物などに引っ掛かったり、所々で流速が異なっているため陶器の安定のしかたにバラツキが生じている。流速が異なり、深さも異なる条件で実験を行う必要があるが、今回は出来なかった。

以上、簡単な実験からSR01で碗や皿が底部を上にして検出されるのは流水による自然現象であることがわかった。参考までに県内で過去に行われた調査から類例をあげておく。

① 下川津遺跡 第4低地帯流路6⁽¹⁾ (図版11①)

香川県坂出市の下川津遺跡の南西隅で検出された第4低地帯流路6は、幅38m、深さ1.2mの河道で平安時代後期の遺物を多量に出土した。埋積土は砂礫層と細砂層が互層状に堆積するものであるが、出土土器は図版に見られるように底部を上にして検出されているものが多い。

② 延命遺跡 八反地地区 SK18⁽²⁾ (図版11②)

香川県三豊郡豊中町に所在する延命遺跡八反地地区のSK18は、天幅3.0m、深さ0.6mでいびつな円形を呈している。北に同時期に機能していた井戸が接しており、南側には小溝が派生しているので水溜めの機能をもつものと考えられる。埋積土は粘質土、砂質土であるが、多量の遺物が出土している。図版に見られるように土器は底部を下にしているものが多い。

上記の2例は、①が底部を上、②が底部を下にして土器が出土した例であるが、埋積土からも推定できるように①が流水、②が静水中で土器が安定したものと理解される。

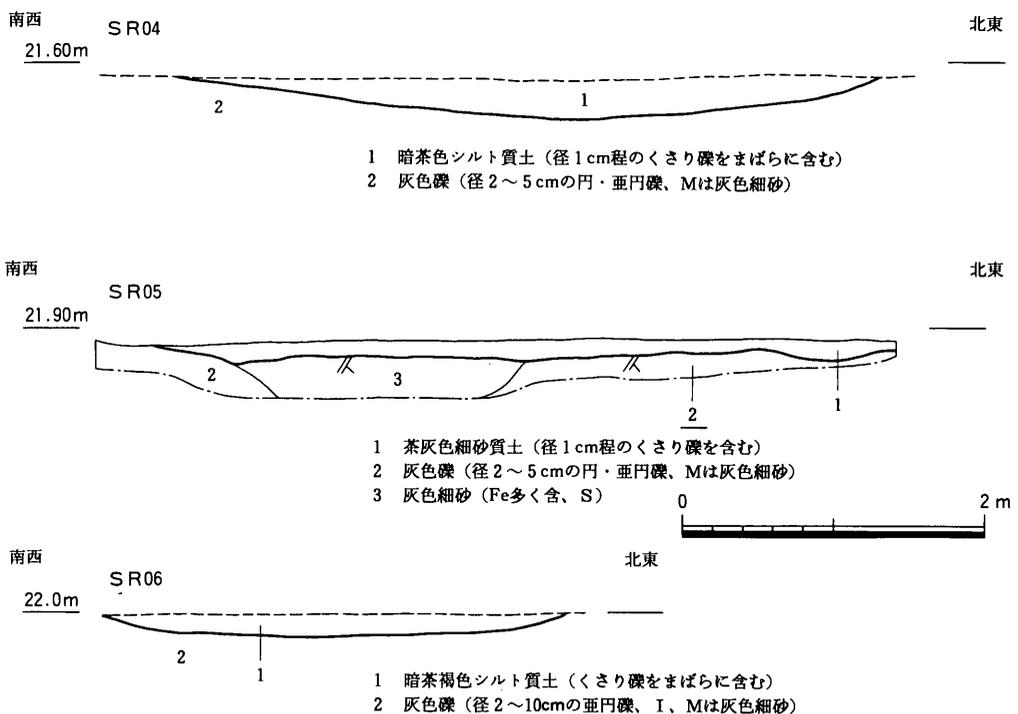
註(1) 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」 1990
香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
(2) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第八冊 延命遺跡」 1990
香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

③ SR04・05・06・07 (第34図, 図版11③)

SR04・05・06は、埋積された開折谷の上面にのこった凹地である。SR07は、開折谷の西肩に沿って流れる旧河道である。これらはほぼ同一の堆積物によって埋積されている。SR04～07からは遺物が検出されなかったが、SR07を水源としてSD05が掘削されていることから、概要を報告する。

SR04は、最大幅6m、最大深さ25cm程の凹地である。北部では徐々に浅くなって消滅している。南部は調査区外に延びる。暗茶色シルト質土で埋積されている。SR05は、最大幅7mの凹地である。茶灰色細砂質土で埋積されている。SR04とSR05の間には下層の礫層が盛り上がり、SR04・05は礫層の両側の埋積の遅れた部分と考えられる。なお、礫層は開折谷の埋積土の一部で薄層である。

SR07は幅6.5m、深さ70cmで、最も規模が大きい。埋積土はくさり小礫を多く含む暗茶褐色シルト質土の下層と暗茶褐色シルト質土の上層の2層である。調査区北部では土取りによって消滅している。SR07からはSD05が派生しているが、同一時期に機能していたと判断される。SR04～07からは遺物は検出されなかった。



第34図 SR04・05・06断面図

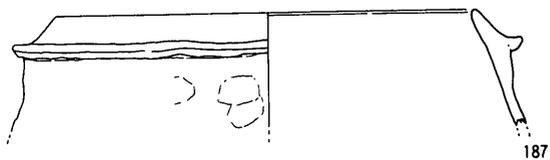
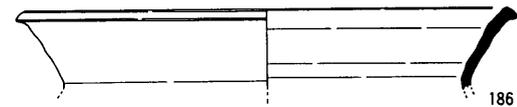
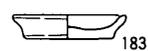
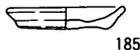
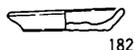
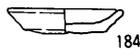
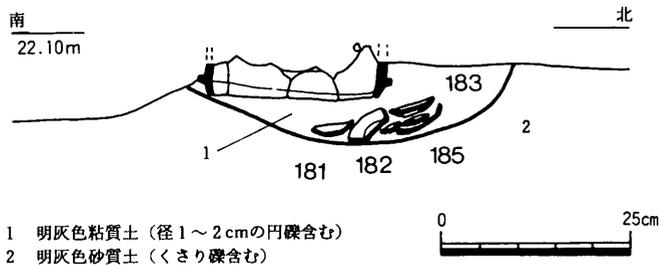
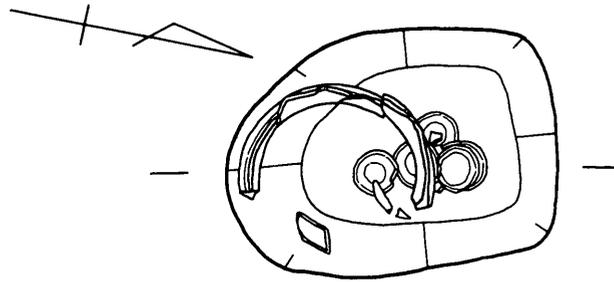
④ SK01 (第35図, 図版12②)

D-4グリッドで検出された土坑である。平面形は北側で隅丸方形, 南側で不整形円形を呈し, 長軸45cm, 短軸32cm, 深さ13cm以上を測る。埋積土は径1~2cmの円礫を含む明灰色粘質土である。SK01からは底部に7枚の土師器小皿が積み重ねられ, その上に土釜が口縁部を下に, 伏せるように置かれていた。土釜の底部は欠損している。

第35図はSK01出土の遺物である。7枚の小皿のうち2枚は, 焼きがあまり粘土化しており, 図化不能である。小皿の口径は5.8~6.0cm, 器高は1.0~1.3cmで小振りのものである。底部はすべてヘラ切りである。186は須恵器の甕の口縁部である。細片でSK01の埋積土中から浮いた状態で検出された。混入の可能性はある。187は土釜である。口縁部から体部にかけて内傾気味で, 小さな鏝を貼り付けている。三足のつく形態の土釜と考えられる。

出土遺物から, SK01は中世後半のものと考えられる。

SK01は, 土師器小皿を積み重ね, 土釜を伏せたものであるが, 香川県坂出市川津町の川津一ノ又遺跡では, 土鍋を伏せ置いて, 中



第35図 SK01 平面・断面図・出土遺物実測図

に2枚の土師器杯を置いている土坑が検出されているなど若干の類例がある⁽¹⁾。

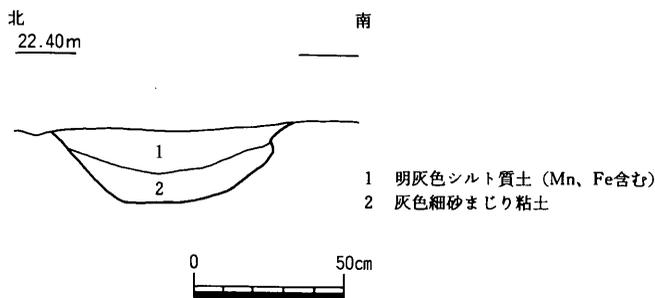
⑤ SD01 (第13図・図版11④⑤)

開折谷の東肩に沿って掘られた溝状遺構である。SR02埋積土の上層である黒色粘土(草本質泥炭)層(8b層)の状面から掘り込まれている。幅70cm, 深さ6cmを測り, 灰色細砂で埋積されている。断続的に延長約30mにわたり検出されたが, 遺物は認められなかった。

黒色粘土層の上面は水田などの土地利用の可能性を考えて調査したが, その可能性は認められなかった。しかし, 谷状の凹地の水田では, 現在でも平坦面と崖(斜面)との傾斜変換線に沿って水路を設けているのが普通であり, 黒色粘土層状面でも水田耕作などの土地利用がなされていた可能性がある。

⑥ SD02 (第36図・図版12①)

G-4グリッドで検出された溝状遺構である。やや湾曲しながら東南東から西北西方向に流れる。幅70cm, 深さ50cmを測り, 断面はU字状を呈する。検出長は10mで, 北側は削平のため消滅する。明灰色シルトの上層, 灰色細砂混じり粘土の下層の2層で埋積されている。出土遺物は微小な細片が数点採集されたのみで時期不明である。



第36図 SD02断面図

註(1) 「川津一ノ又遺跡Ⅲ区」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局

第3節 東部地区の遺構・遺物

(1) 概要

開折谷（中部地区）より東側調査区を東部地区と呼称する。

東部地区は、堆積状況の項（第3章第1節）で報告したように微高地部分にあたり、掘立柱建物跡などの集落に伴う遺構が検出された。遺構は、年代不明であるが古代に遡る可能性のある掘立柱建物跡1棟、溝状遺構・中世に属する掘立柱建物跡1棟、多数のピット、溝状遺構・近世以降に属するピット、土坑、井戸などの3時期の遺構に大別される。

(2) 掘立柱建物跡

① SB01（第38図・図版13③）

G-7グリッドで検出された二×三間の掘立柱建物跡である。平成元年度調査区と平成2年度調査区にまたがっている。平成元年度の調査時には、表土除去の際に後述する調査区南部の地山を削平した後の客土層と遺構面であるやや濁った黄褐色極細砂質土層とを同一視し、ピットの存在に気がつきながら上面を除去してしまった。

SB01は、桁行三間（4.15m）・梁行二間（3.3m）で、主軸方位はN-23.75°-Eである。柱穴の掘り方は径約70cmの円形に近い楕円形で一部に柱痕が認められた。柱穴中から遺物は出土しなかった。

SB01は年代不明であるが、柱穴の規模や平面形態は奈良時代頃に多く認められるもので、西側の中部地区の凹地の堆積層のうち、微高地からの流れ込みと考えられる包含層の出土遺物に奈良時代のものが比較的多く認められることから（第4節）、奈良時代に属する可能性がある。

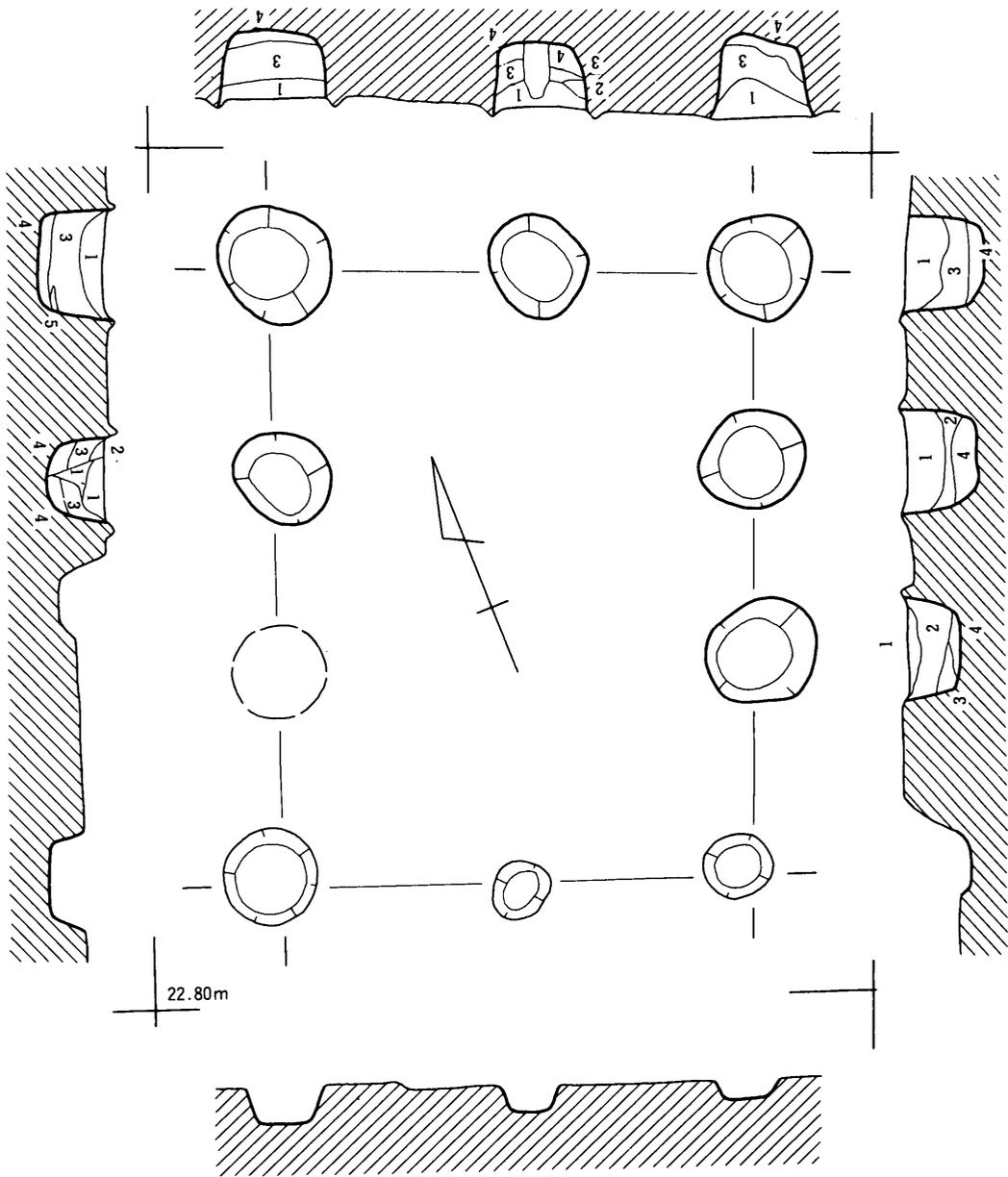
② SB02（第39, 40図・図版14①②）

H-7グリッド杭付近で検出された一間×二間の掘立柱建物跡である。中央やや西寄りの束柱と考えられるSP1から9枚の土師器小皿・杯が重なって検出された。

桁行二間（約3.95m）×梁行（約3.95m）の正方形をなす。柱穴掘り方は径30cm程度の円形のものが多く、深さは10～39cm、埋積土は炭化物を含む灰色細砂である。SP1は、埋積土が遺構面の土と酷似しているため遺物の周囲を徐々に下げた結果、遺物が柱状にとり残された状態になった。この他、SP2から遺物が検出されている。



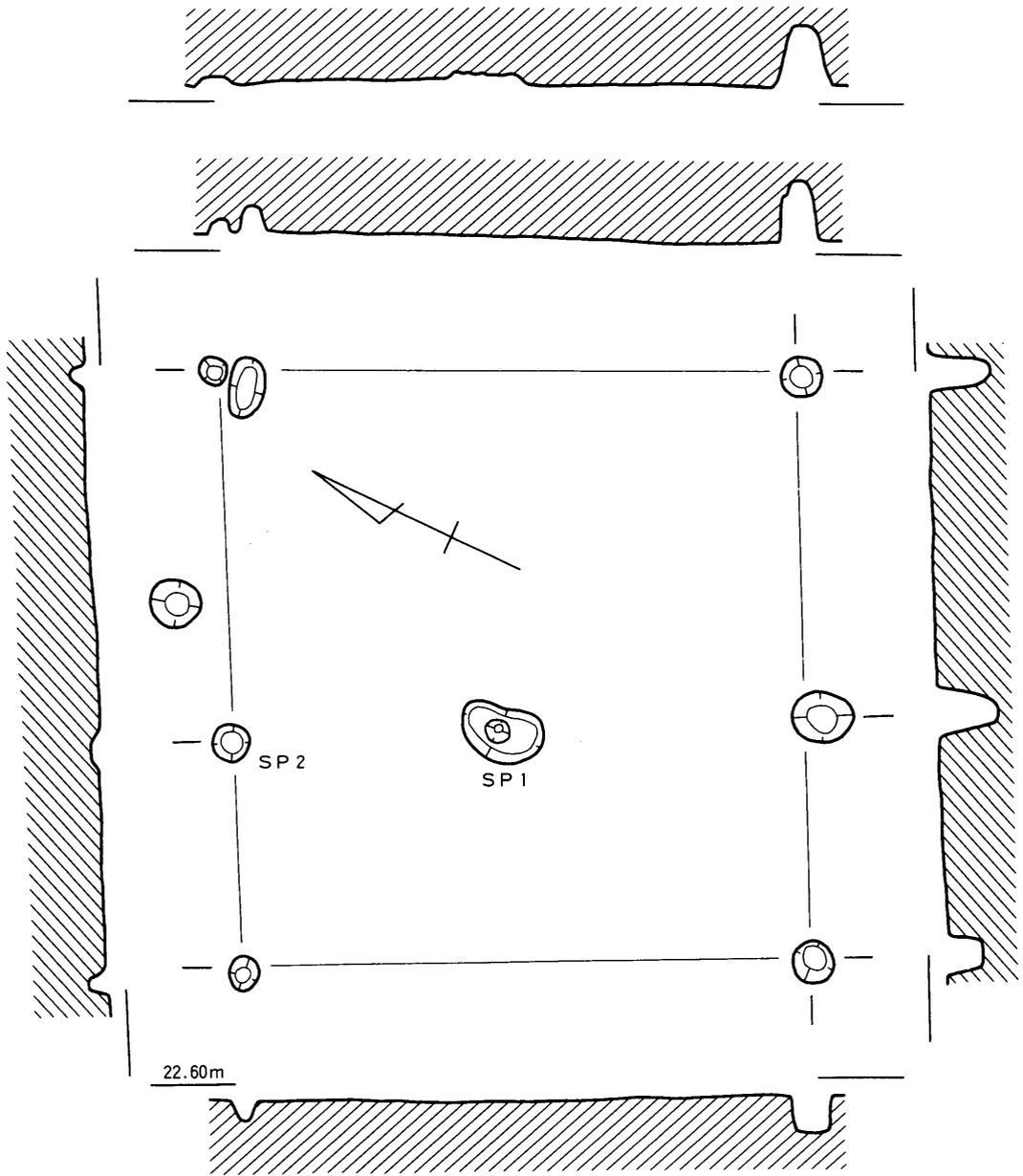
第37図 東部地区遺構配置図



- | | |
|--------------|--------------------|
| 1 淡黄灰色細砂質シルト | 4 暗灰褐色
小礫まじり粘質土 |
| 2 灰黄色細砂質土 | 5 暗灰黄色粘質土 |
| 3 暗灰黒色粘質土 | |



第38図 SB01平面・断面図



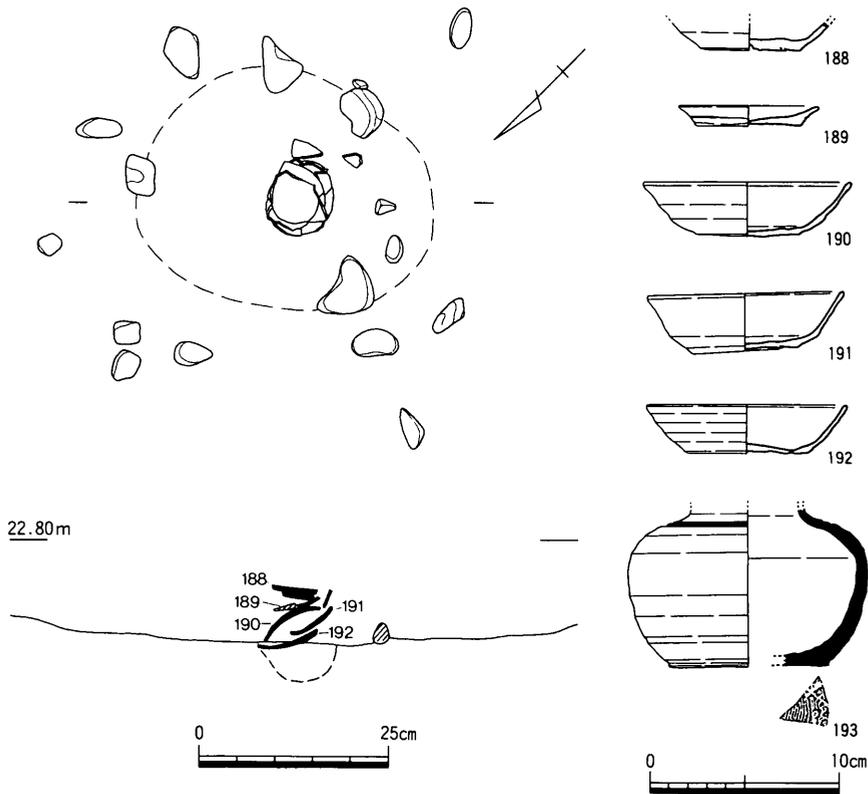
柱穴 埋積土は炭化物を含む灰色細砂



第39図 SB02平面・断面図

第40図はS B02出土の遺物実測図である。188～192はS P 1出土の土師器小皿・杯である。193はS P 2出土の備前焼の小壺である。肩部に二条の櫛がき条線を巡らし、底部は回転糸切り痕が認められる。備前焼M期のもと考えられる⁽¹⁾。

S B02は、S P 2出土の備前焼の小壺から15世紀代のものと考えられる。



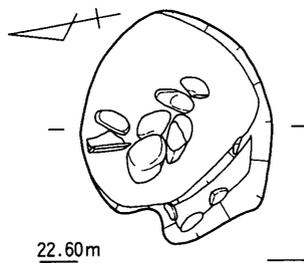
第40図 S B02・S P01 平面・断面図、S B02 出土遺物実測図

(3) その他のSP (第37, 41図・図版15)

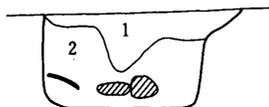
東部地区では、S B01・02周辺に多数のピットが検出されている。これらはS B01の埋積土と近似する暗灰色・黒灰色系の埋積土のものと、S B02の埋積土と近似する明灰色系の埋積土のものに大別される。建物を復元できるような平面的な企画性は認められない。多数のピットの内、S P 33・50から遺物が検出されている。

第41図194, 195はS P 33出土の遺物である。194は須恵器のこね鉢で、東播系のものである。195は土釜。焼き締められているのか硬質のものである。196はS P 50から出土した須恵器こね鉢と思われる底部の破片である。回転糸切り痕が認められる。

註(1) 間壁忠彦「備前焼」1991 ニューサイエンス社

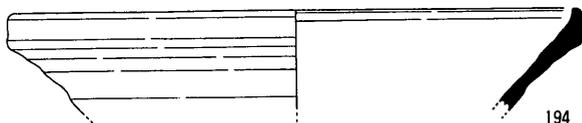


22.60m

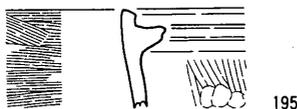


- 1 暗灰色シルト質土（炭化物を含む）
- 2 黄灰色砂質土

SP33



194



195

SP33

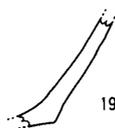


196

SP50



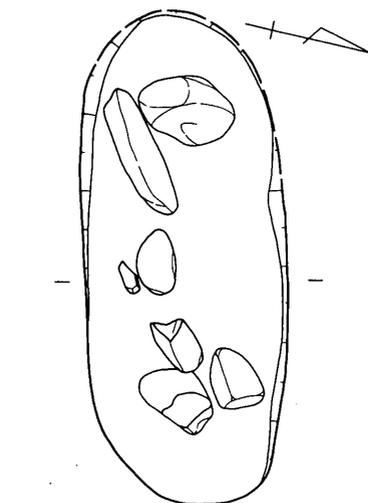
SK02



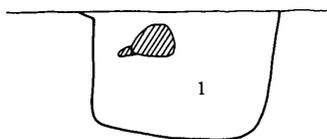
197



第41図 SP33・SK02 平面・断面図
SP33・SP50・SK02 出土遺物実測図



22.60m



1 灰黄シルト質土

SK02

(4) 土坑（第37，41，42図・図版16①）

東部地区では多数の土坑が検出されたが、大半は近世ないし近代以降のものである。このうち中世に遡ると考えられるのが、SK02～04である。

SK02は、長径1.3m・短径0.54mの隅丸の長方形の土坑である。深さは0.33mで垂直に近い掘り方である。上部には10～20cm程の礫が数個散在し礫に接して遺物が採集されている。形態からみて墓である可能性があるが詳細は不明である。

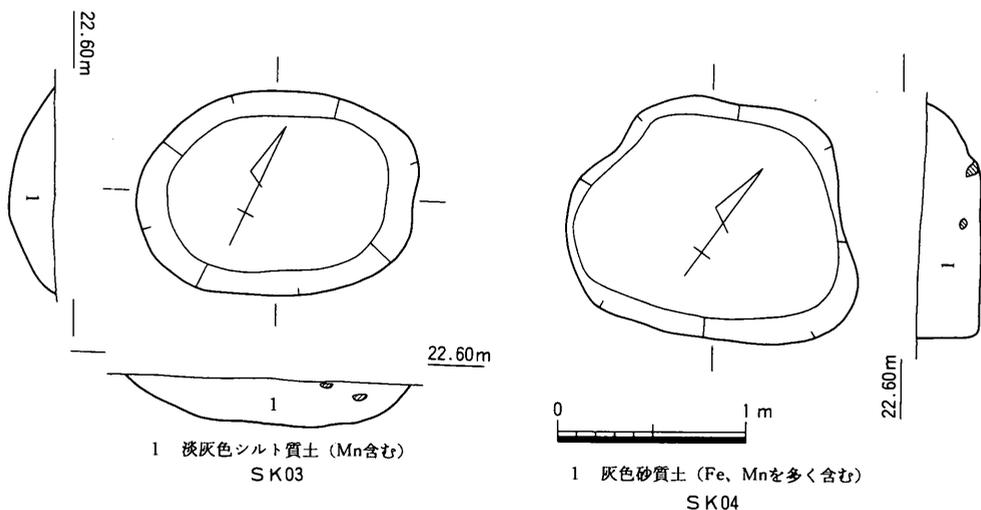
197はSK02の出土遺物である。剝落しているが

土師質のすり鉢と考えられる。なお、197はSK02埋積土上面で検出されたもので、SK02の年代を示すかどうか不明である。

SK03は、長径1.5m・短径1.1mの楕円形を呈する土坑である。深さは0.25mを測り、淡灰色シルト質土で埋積されている。遺物は検出されなかった。

SK04は、長径1.6m・短径1.25mを測る不整円形の土坑である。深さは0.35mを測り、灰色砂質土で埋積されている。遺物は検出されなかった。

SK03・04は、埋積土が周囲の中世の遺物を検出した遺構と近似するため中世のものと考えられる。



第42図 SK03・04 平面・断面図

(5) 溝状遺構

① SD07 (第43, 44図・図版16②, 17)

H-7, 8で検出した溝状遺構である。幅2.0~2.4, 深さ0.8~0.9mを測り、断面はU字形を呈し、一部に流水による抉り込みが認められる。約45mにわたり検出したが、流路はほぼ直線で、座標北よりN-25°-Wの方向である。

埋積土は上層から灰色シルト質土、径5~15cm程の砂岩亜円礫を多く含む灰色砂質土、暗灰色砂質土の3層に分けられ、遺物は上層から多く検出された。

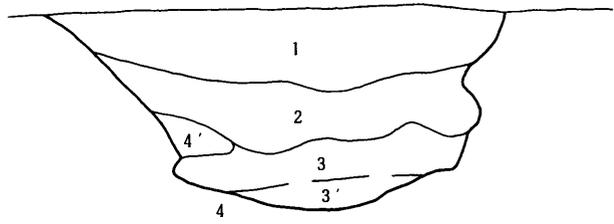
第43図はSD07上層出土の土器、第44図は中層・下層出土の土器実測図である。

198~206は土師器の杯・碗である。204は円盤状高台の土師器杯、205, 206は低平な高台のつく碗である。207は須恵器の杯。上層出土遺物のうちでは古い様相をもつ。208は、須

恵器壺の口縁部の破片 西
 209は器種不明の須恵器破片である。210は土釜である。頸部を「く」の字に外反させている。

東

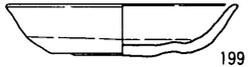
22.40m



- 1 灰色シルト質土（2～5cm程の垂円・垂角礫を多く含む）
- 2 灰色砂質土（0.5～1cm程のくさり礫を含む）
- 3 暗灰色砂質土（粗砂、中砂質、1～3cm程の礫を含む）
- 3' 灰色砂質土（細砂質、くさり礫をまばらに含む）
- 4 明灰白～黄褐色粘質土（地山）
- 4' 明灰～黄褐色粘質土



198



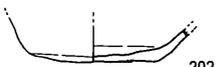
199



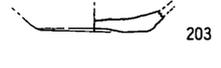
200



201



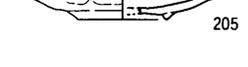
202



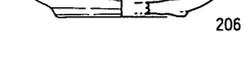
203



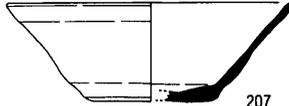
204



205



206



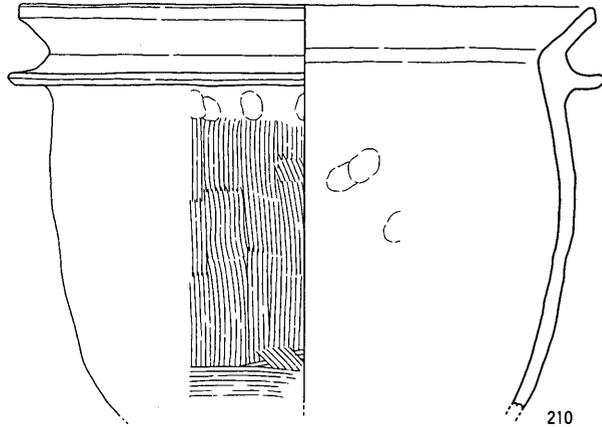
207



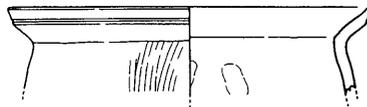
208



209



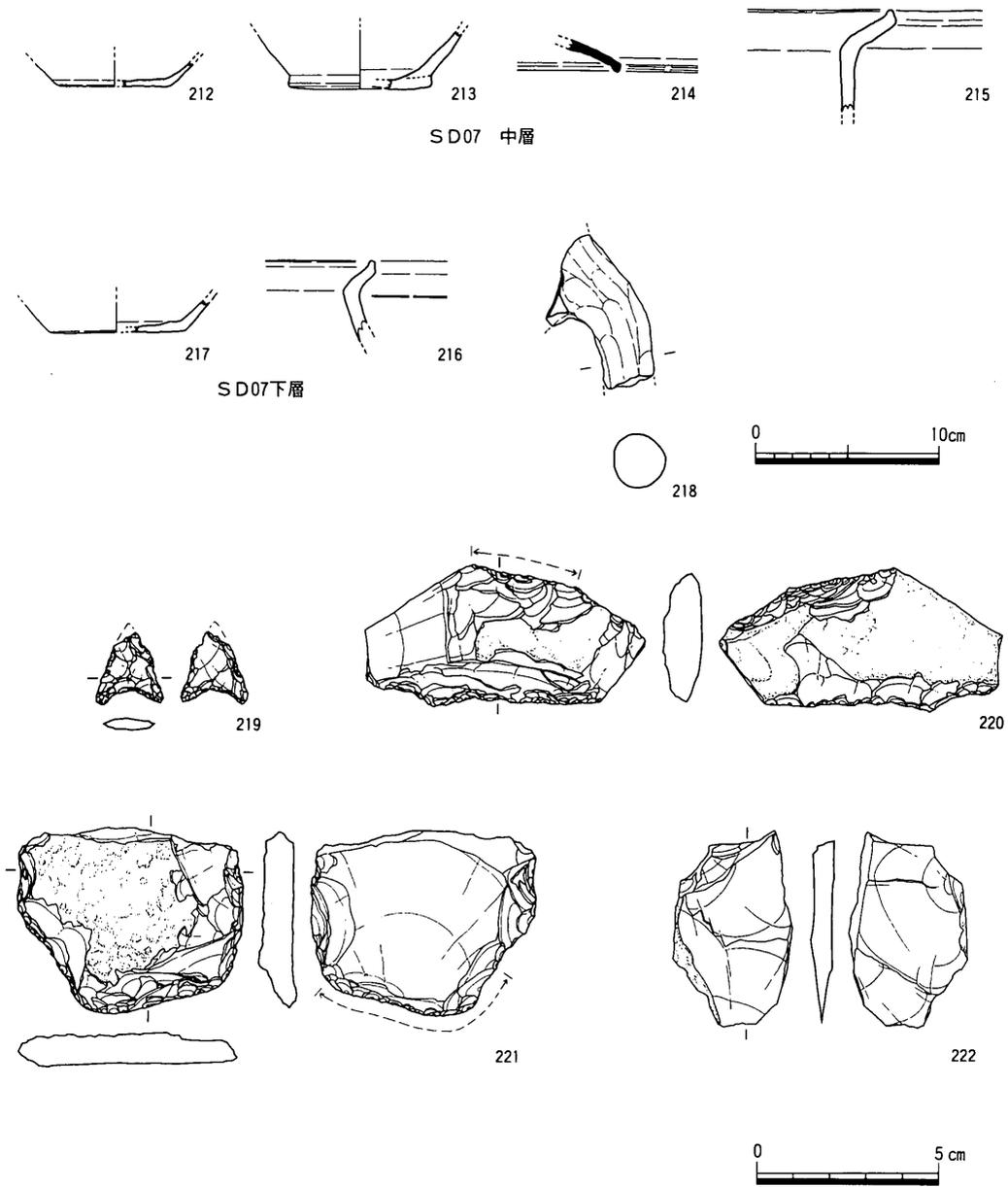
210



211



第43図 SD07 断面・出土遺物実測図①



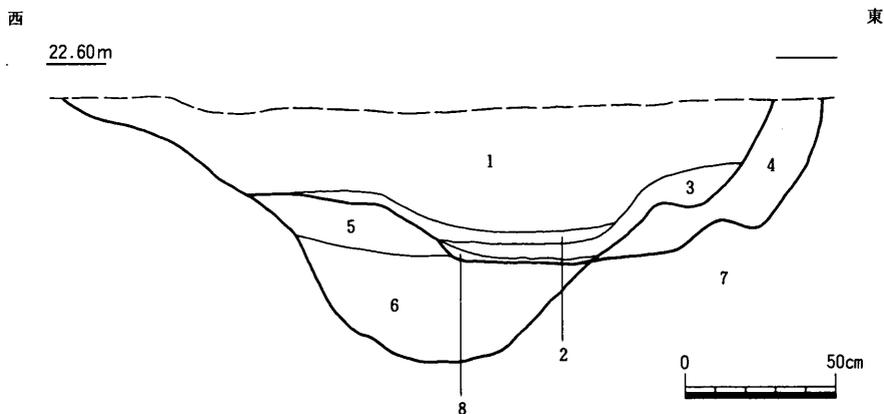
第44図 SD07 出土遺物実測図②

② SD08 (第45, 46図・図版16②, 18)

A地区の調査区東端に沿って検出された溝状遺構である。市道原田・四条1号線に沿って緩く湾曲する流路で、約44m検出された。東肩は調査区外になるため規模は明確ではないが、幅2.5~3.0m・深さ約1mを測り、なだらかなV字の断面形である。

第45図の断面図に示されるように、SD08にはやや暗い色調の粘質土が2層、レンズ状に堆積している。これは、ある時期の溝底の堆積物と考えられ、溝開削後に少なくとも2回以上の埋没、再掘（溝さらい）が行われていると考えられる。各時期の遺物を明瞭に分離することは出来ず、3層までを上層、以下を下層として遺物を採集した。コンテナ1/2程度の遺物が採集されたが、細片が多く、図化できるものは少ない。

第46図はSD08出土の遺物実測図である。223~225は上層、226~230は下層から出土した。224は須恵器杯蓋である。蓋と判断したが、身である可能性もある。小破片のため特定できない。225は緑釉陶器碗の底部の破片である。京都産と考えられる。226~228は須恵器



- 1 灰色砂質土 (Fe, Mn粒を含む、1~3cm程の円礫をまばらに含む)
- 2 暗茶灰色粘質土
- 3 灰色砂質土 (Fe, Mnを含む)
- 4 暗茶灰色シルト質土 (Fe, Mnを含む)
- 5 茶灰色シルト質土 (Fe, Mn粒を含む)
- 6 灰色砂 (細~中砂、3~10cm程の円礫を多く含む、Fe多く含む)
- 7 暗灰色粘質土 (地山)
- 8 暗茶灰色粘質土

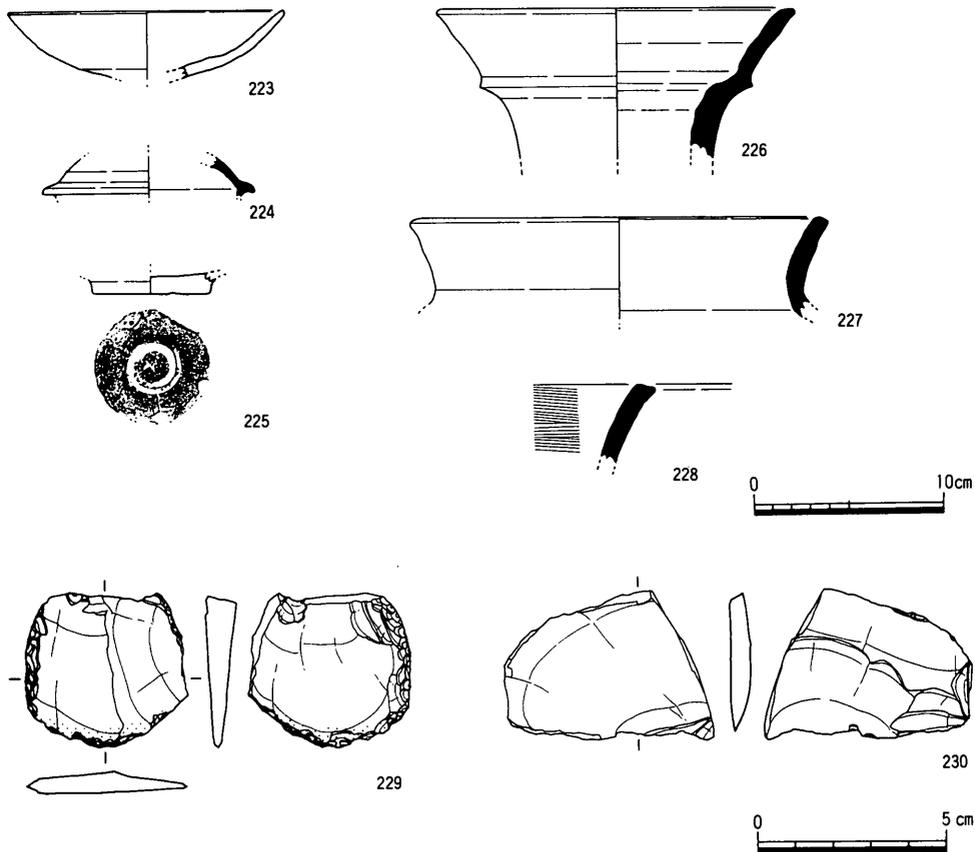
第45図 SD08 断面図

甕の口縁部の破片である。226は中村浩編年のI型式4段階に併行するものと考えられ、古い様相をもつものである。229はスクレイパー、230は剥片である。

SD08は出土遺物が僅少で、時期幅をもった遺物が検出されている。このうち最も年代の新しいと考えられるものは227の甕の口縁部破片である。227は、「く」の字状に外反するもので、端部をわずかに外方に摘み出している。端面の稜はややシャープさに欠けることから、赤瀬山2号窯跡の須恵器と併行かやや後出のものと思われる。12世紀後半頃のものと考えられる⁽¹⁾。

SD08・07は見かけの上で並走するように流れている。また、B地区のSD19・38も同様である。A地区とB地区の境界である市道原田・四条1号線は、条里地割の坪界線と考えられ、これらの溝は条里地割関連のものである可能性がある。

註(1) 渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』1980



第46図 SD08 出土遺物実測図

③ SD09 (第47図)

G-8グリッドで検出された溝状遺構である。幅30~45cm、深さ4~10cmを測り、N-33°-Eの方向ではほぼ直線に流れる。断面は皿状を呈する。検出長は約6mで、西南側は消滅している。埋積土は暗灰色シルト質土一層で、遺物は検出されなかった。西南に所在するSB01と埋積土が近似するため、同一時期の可能性がある。

④ SD10 (第47図)

G-8グリッドで検出された溝状遺構である。幅30~125(概ね60)cm、深さ10~18cmで、断面は皿状と呈する。明灰色シルト質土一層で埋積されている。

SD10は特徴的な平面形態をもつ。南部で東西方向(N-62°-E)に流れ、ついで直角に曲り、途中西側にやや湾曲した後、北流(N-27.5°-W)している。SD10西側には大規模な攪乱があって、明確なことは不明であるが、湾曲部で西側に溝が派生していた可能性があり、本来は「コ」の字状あるいは囲繞する溝であった可能性がある。SD10はSD09より新しく、流向はSD08と平行ないし直交するものである。

SD10の埋積土中からはビニール袋(中)一袋の遺物が採集された。第47図231~237はSD10出土の遺物である。231は土師器杯、232は土師質の鉢である。破片のため卸目は認められないが、すり鉢と考えられる。233~237は土釜である。233~236は体部から口縁にかけて内傾するもので、三本の脚のつく土釜であろう。出土遺物からSD10の埋没年代は14ないし15世紀代と考えられる。

SD10は、先に報告したSK02が墓であった場合、墓を囲繞する溝の可能性もある。また、平面配置からは規則性がなく建物を復元できないが、内部の柱穴の存在からいわゆる雨落溝の可能性も考えられる。

⑤ SD11 (第47図)

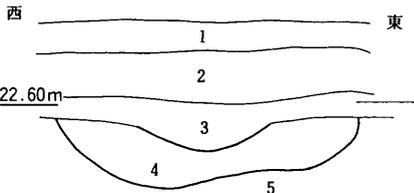
G-8グリッド、調査区北端で検出された溝状遺構である。幅50cm、深さ10cm程の規模である。検出長約1mで南側は消滅している。SD09をこわしておりSD09より新しい。埋積土は明灰色砂質土で、上層の包含層と同一である。ビニール袋(中)一袋の遺物細片が採集された。第47図238はSD11出土の遺物である。土鍋の口縁部と思われる。また、図化不能であるが、土釜の脚部破片などが出土している。

北西 南東



1 暗灰色粘質土

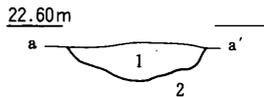
SD09



- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 明灰色砂質土 (Fe多く含む)
- 3 明灰色砂質土 (Mn含む) — (SD11)
- 4 暗灰色粘質土 — (SD09)
- 5 やや濁った黄褐色砂質土

SD11

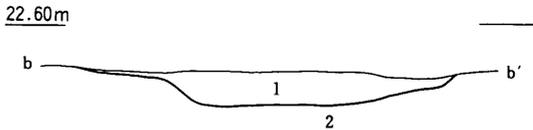
西 東



- 1 明灰色シルト質土
- 2 やや濁った黄褐色砂質土 (小礫含む)

SD10

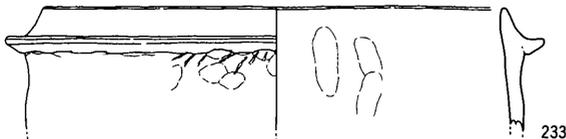
西 東



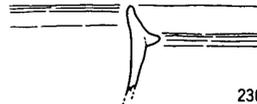
231



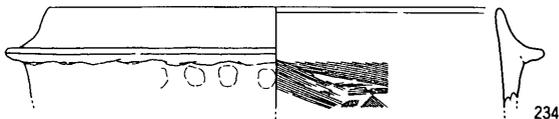
232



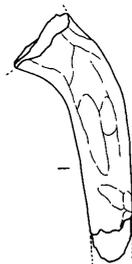
233



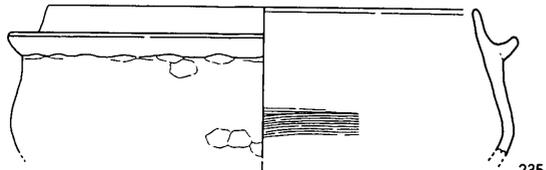
236



234



237



235



238

第47図 SD09~11 断面・出土遺物実測図

(6) 近代以降の遺構 (第7, 8表・第48図)

東部調査区の南西側は、調査着手前に廃屋が存在していた。これは西側に築地、内部に物置と考えられる建物が遺存していたが、母屋と考えられる部分は全壊状態で、鬱蒼と竹が茂る状況であった。聞き取りでは明治時代に建てられたとのことで、「土地台帳」では明治31年に宅地として記載されているのが初見である。ただし、明治31年以前の土地利用の状況は不明である。

この宅地は、東部の微高地と旧河道の凹地にまたがって建てられているため、東側を削平し、おそらく削平した土を西側に盛って平坦化している。そのため、本来存在したはずの遺構面は大きく削平されている。

宅地の東側にも別の宅地が存在していたようであるが(「土地台帳」)、調査着手前は水田になっていた。

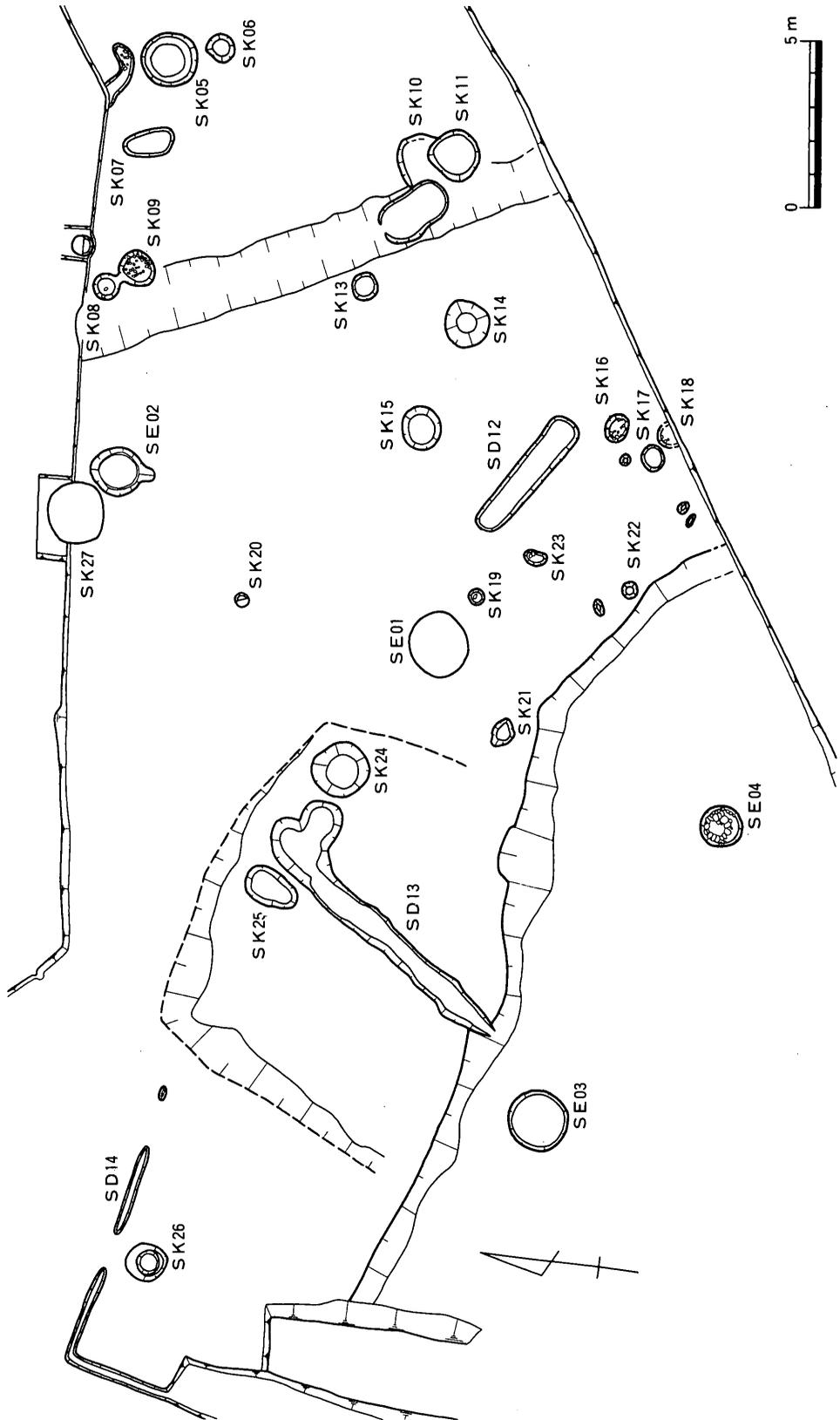
これらについて十分な調査は行っていないが、遺構面にまで掘り込まれたものについては記録を作成している。以下、一覧表にまとめる。

第7表 近代以降の遺構 観察表(1)

グリッド	遺構番号	形態	規模 (cm)	埋積土	観察
H-7	SK05	円形	径170、深47	暗灰色シルト質土・青灰色粘質土・黄灰色砂質土のブロック	瓦片など
H-7	SK06	不整形円形	径85、深15	暗灰色シルト質土・青灰色粘質土・黄灰色砂質土のブロック	遺物は含まれない
H-7	SK07	楕円形	長径162、短径83、深20	灰色シルト質土・黄灰色シルト質土のブロック (炭化物含)	
H-7	SK08	円形	径80、深47	灰色粘質土 (径15cm程の礫をまばらに含む)	素焼きの甕を据える (野壺か) 磁器片を出土
H-7	SK09	円形	径110、深46	灰色粘質土 (径15cm程の礫をまばらに含む)	染付碗片、瓦片を出土
H-7	SK10	(円形)	径(160)、深(28)	暗灰色シルト質土・青灰色粘質土・黄灰色砂質土のブロック	SK11にこわされる
H-7	SK11	円形	径150、深26	暗灰色シルト質土・青灰色粘質土・黄灰色砂質土のブロック	SK10・12をこわす瓦片 (多)
H-7	SK12	不明	不明	暗灰色シルト質土・青灰色粘質土・黄灰色砂質土のブロック	SK11にこわされる
H-7	SK13	円形	径80、深19	暗灰色砂質土 (暗灰色シルト質土・黄褐色粘質土のブロック)	瓦片など
H-6	SK14	不整形円形	径125~148、深46	灰色粘質土 (径15cm程の礫を多く含む)	遺物は含まれない

第8表 近代以降の遺構 観察表(2)

ク*リット*	遺構番号	形態	規模 (cm)	埋積土	観 察
H-7	SK15	円形	径125、深28	暗灰色シルト質土・青灰色粘質土・黄灰色砂質土のブロック	遺物は含まれない
H-6	SK16	楕円形	長径88、短径70、深18以上	灰色粘質土(径5~10cmの円礫多く含む)	
H-6	SK17	円形	径75、深12	灰色粘質土(黄褐色粘質土のブロック含む)	遺物は含まれない
H-6	SK18	不明	不明	灰色粘質土(径10cm程の礫まばらに含む)	染付碗
H-6	SK19	円形	径50、深不明	灰色シルト質土(黄褐色粘質土のブロックわずかに含む)	素焼きの甕を据える
H-7	SK20	円形	径50、深不明	灰色シルト質土	遺物は含まれない
H-6	SK21	不定円形	長径93、短径70、深20	灰色シルト質土(くさり小礫を含む)	
H-7	SK22	円形	径50、深14	灰色シルト質土・黄灰色シルト質土のブロック(炭化物含む)	遺物は含まれない
H-7	SK23	不定楕円形	長径70、短径43、深28	灰色シルト質土	遺物は含まれない
G-7	SK24	円形	径165~173、深77	暗灰色シルト質土(径2cm程の礫を多く含む)	染付碗片、瓦片
G-7	SK25	楕円形	長径173、短径105、深35	暗灰色シルト質土	
G-7	SK26	円形	長径130、短径120、深47	暗灰色シルト質土・灰色シルト質土・黄褐色粘質土のブロック	素焼きの甕を据える(野壺か)
H-6	SE01	円形	掘り方径200 井筒径(70)、深不明	暗灰色砂質土	石組みの井戸、埋積土中から車のホイール出土、調査中に崩壊
H-7	SE02	円形	掘り方径150 井筒径125、深340	上層:灰色砂質土 下層:暗灰色砂質土(下方で粘質に変わる)	素焼きの井筒を2個連結する、以下は石組み
G-6	SE03	円形	掘り方径190 井筒径120、深206	黒色粘質土と灰色細砂のブロック	石組みの井戸
G-6	SE04	円形	掘り方径130 井筒径50、深186	灰色砂礫	石組みの井戸
H-7	SK27	隅丸方形	長軸190、短軸175、深不明	上層:灰色粘質土 下層:暗灰色粘質土	井戸の可能性あり、一部調査区外、崩壊の危険があり、途中で調査中止
H-6	SD12	楕円形	長径420、短径100、深20	暗灰色シルト質土(径5cm程の礫含む)	
G-6 G-7	SD13	——	幅80、深35、検出長950	灰色シルト質土(灰色シルトのブロック含む)	
F-7 G-7	SD14	——	幅25、深5、検出長980	灰色シルト質土	



第48図 近代以降の遺構平面図

第4節 西部地区の遺構・遺物

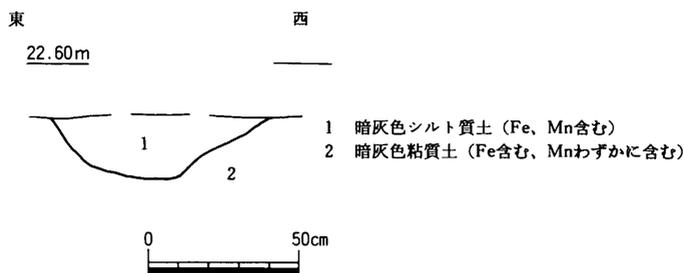
(1) 概要

開折谷の西側の調査区を西部地区と呼称する。堆積状況の項（第1章第1節）で述べたとおり、西部地区は大半が削平をうけ、水田一筆分のみに遺構面が遺存していた。検出された遺構は溝状遺構3条である。出土遺物が僅少なため時期は不明であるが、弥生時代前期のものである可能性がある。削平は粘土取りを目的にしたものと考えられるが、削平後に拳大の礫を集積した性格不明遺構、調査区西端では、現在の原田川の前身と考えられる溝状遺構などが検出された。

(2) 溝状遺構

① S D03（第49図・図版19①）

C-3グリッドで検出された溝状遺構である。幅60～90cm、深さ20cm程度の規模で、皿状の断面形を呈する。検出長約15mで、北側は地下げによって消滅している。埋積土は暗灰色シルト質土一層である。遺物は検出されなかった。



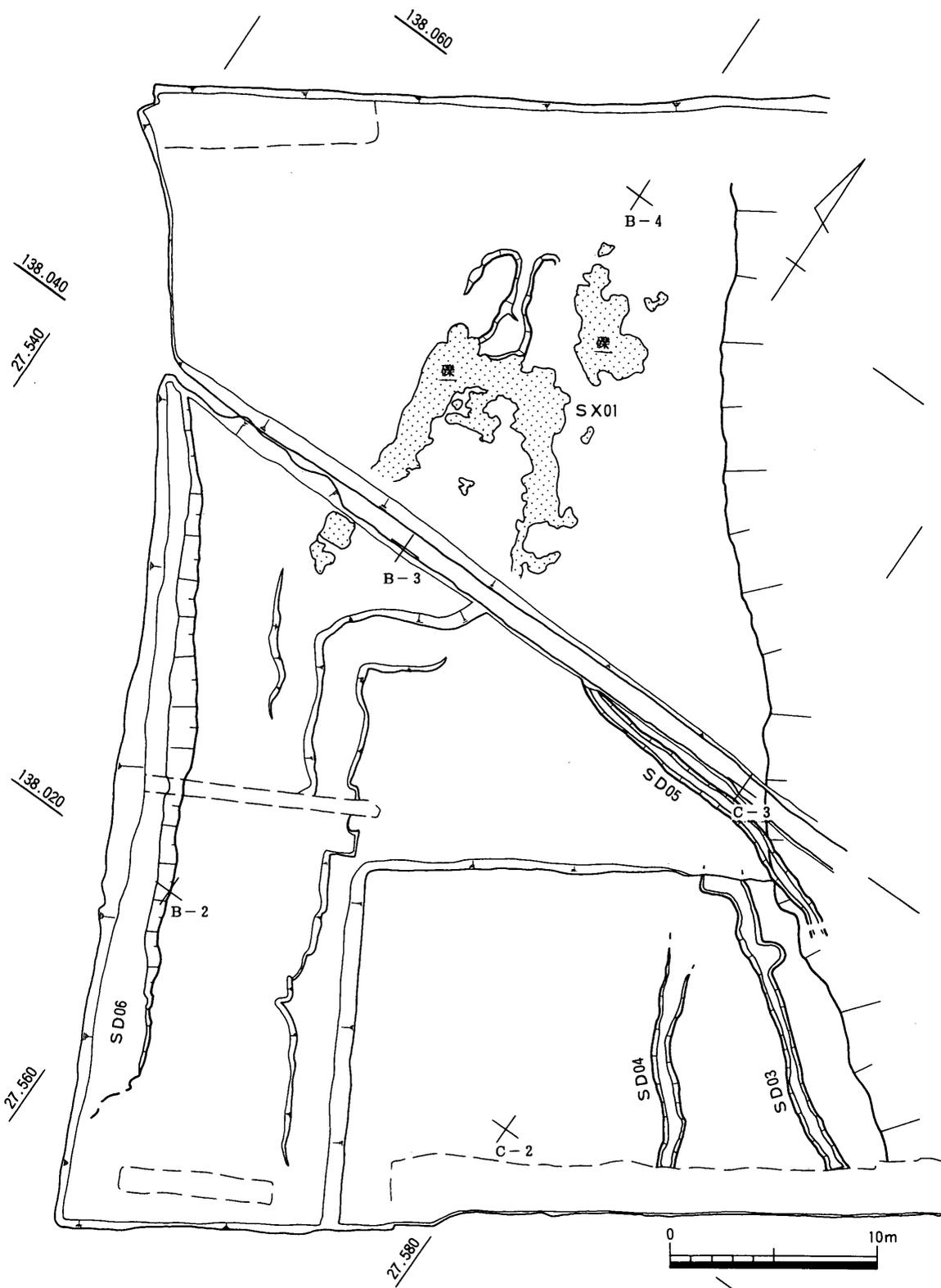
第49図 S D03 断面図

② S D04（第51図・図版19②）

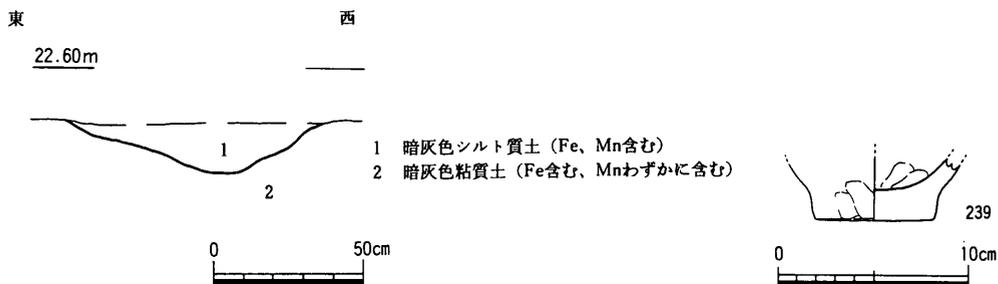
C-3グリッドで検出された溝状遺構である。幅80～100cm、深さ15cm程度の規模で、皿状の断面形を呈する。検出長約10mで、北側は地下げによって消滅している。埋積土は暗灰色シルト質土一層である。数点の土器細片が検出された。

第51図239は、S D04出土のものである。壺か甕の底部の破片で、しっかりした平底で0.2～5mmの砂粒を多く含んでいる。弥生時代前期のものであると考えられる。

S D03・04は埋積土がほぼ同一であることから同一時期のものであると考えられる。至近では地山に突きささる状態で弥生時代前期と考えられる壺の底部が出土していることなどと併



第50図 西部地区 遺構配置図

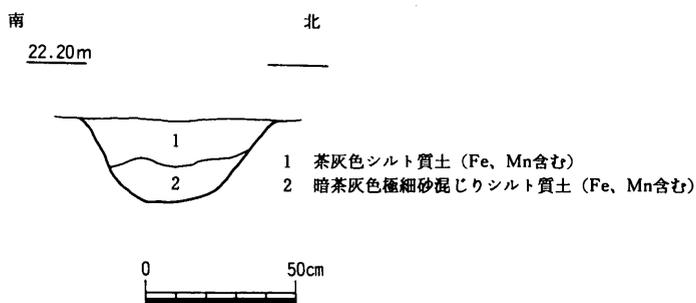


第51図 SD04 断面・出土遺物実測図

せて弥生時代前期の遺構であると考えられる。

③ SD05 (第52図・図版19①③)

B-3, C-3グリッドで検出された溝状遺構である。幅75~85cm, 深さ22~27cmの規模で, 断面はU字形を呈する。検出長約16mで, 北側は地下げによって消滅, 南側はSR07に合流している。SR07との合流部には切り合い関係は認められず, 同時期のものと判断される。埋積土は上部で茶灰色シルト質土, 下部で暗茶灰色極細砂混じりシルト質土よりなるが, 級化構造をなすものと理解される。遺物は全く検出されず年代不明である。SD03・04との前後関係も不明である。



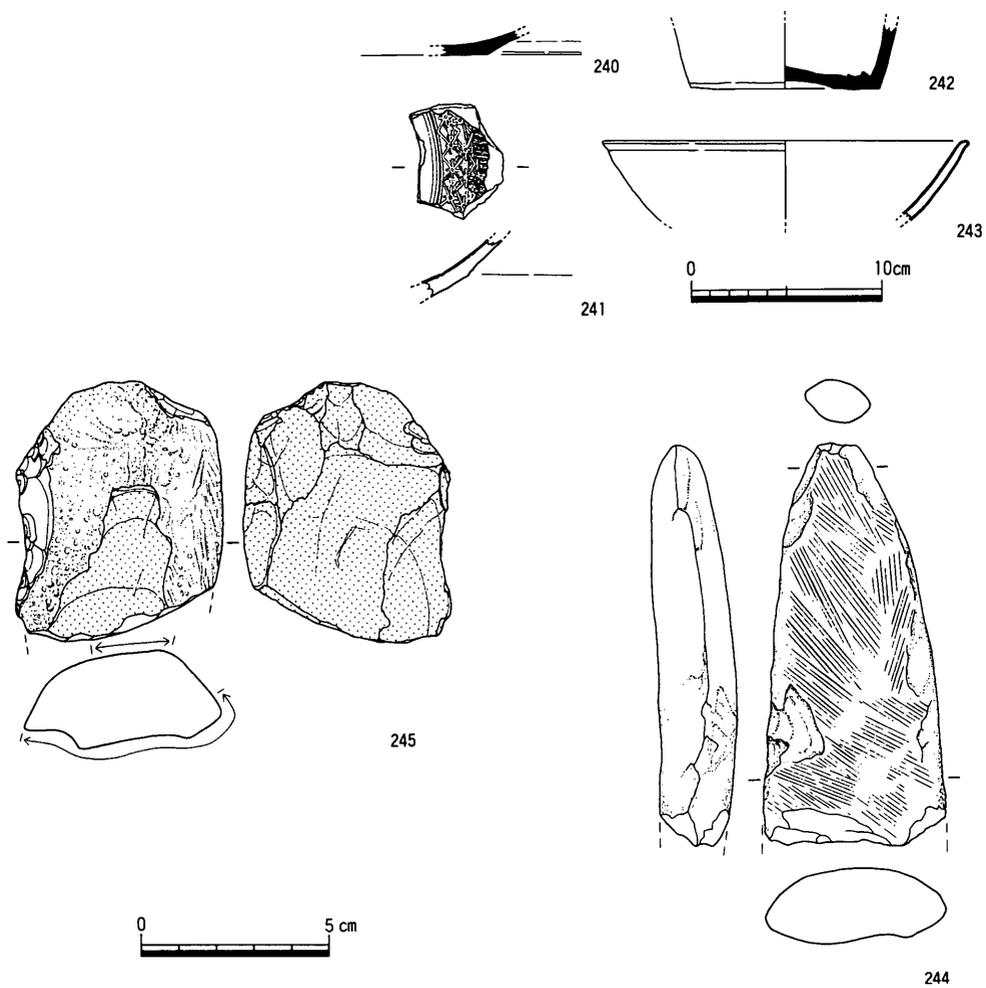
第52図 SD05 断面図

④ SD06 (第53, 54図・図版20①③)

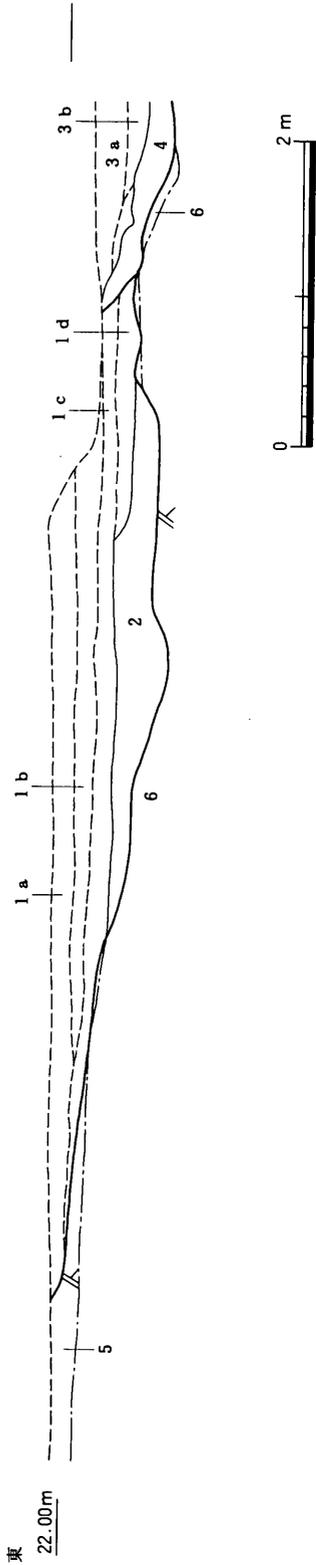
調査区西端で検出された溝状遺構である。溝の西肩は調査区外になるため規模は, 幅3m以上, 深さは80cm以上である。調査区西側には「原田川」と呼ばれる用水路が流れており, この前身の溝と考えられる。土取り後に置かれた土の上面から掘り込まれている。出土遺物は20点あまりの土器細片, 2点の石器が検出された。

第53図はSD06出土の遺物実測図である。240は須恵器の杯の小破片である。241は三島磨手と呼ばれる印花技法が施された肥前の陶器の破片である。244は磨製石斧である。刃

部は欠損している。S D06は、241が18世紀代の遺物と考えられ、18世紀ないしそれ以降の埋没と考えられる。



第53図 S D06 出土遺物実測図



- 1 a 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む)
- 1 b 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む, 1 aより粒度細かい)
- 1 c 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む, 1 bより粒度粗い)
- 1 d 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む, 灰色細砂がラミナ状に入る)
- 2 茶褐色細砂, 灰色細砂, 灰色シルトがラミナ状に混在する層 (遺物多く含む)
- 3 a 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む)
- 3 b 灰色シルト質土 (Fe, Mn含む, 3 aより粒度粗い)
- 3 c 明灰色シルト質土 (Fe含む, 含水比大)
- 3 d 灰色粘質土 (砂粒を多く含む, 含水比大)
- 4 明灰色シルト質土 (細砂のラミナあり)
- 5 明灰色と黄褐色からなる粘質土
- 6 紫灰色粘質土 (テフラ)
- 7 茶褐色粘質土 (Fe, Mn多く含む)
- 8 黒色シルト質土 (網礫, 火山ガラス含む)

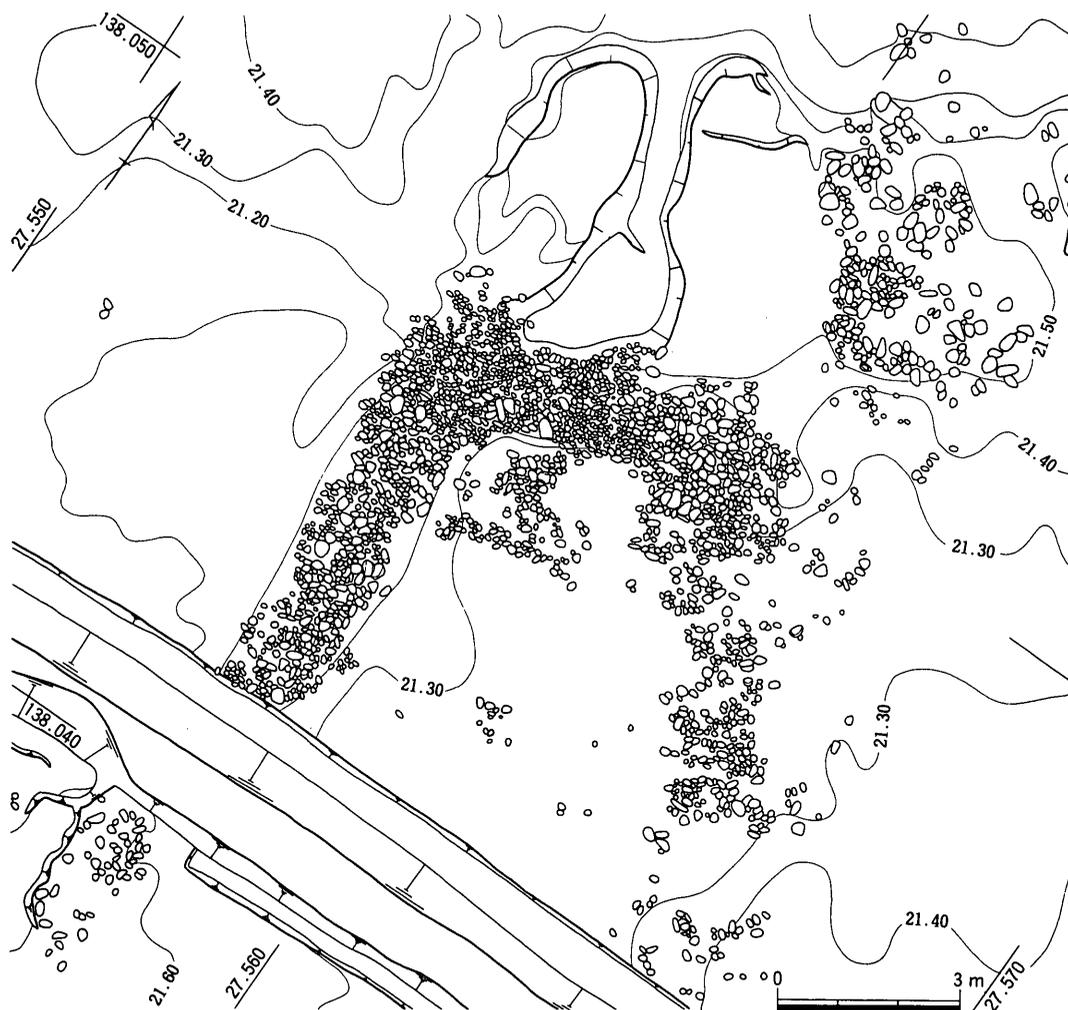
第54図 SD06 断面図及び包含層堆積状況

(3) その他の遺構

① SX01 (第55図・図版20②)

西部地区は南東側の一筆の水田を除いて、土取りされていた。土取りは主として地山と考えられる黄褐色粘質土を取っており、一部この土が台状に残されている部分があるため土地を低平にする目的よりも粘土取りを目的にしていた可能性が高いと考えられる。

SX01は、土取りをした部分に拳大から犬頭大の円礫・亜円礫を集積しているものである。礫は「几」字状の平面形を呈し、乱雑に集積されている。礫は垂直には1個ないし2個程度の礫が重なるだけで、平坦な地表面に敷き並べたような様相である。礫の上部には包含層が堆積している。



第55図 SX01平面図

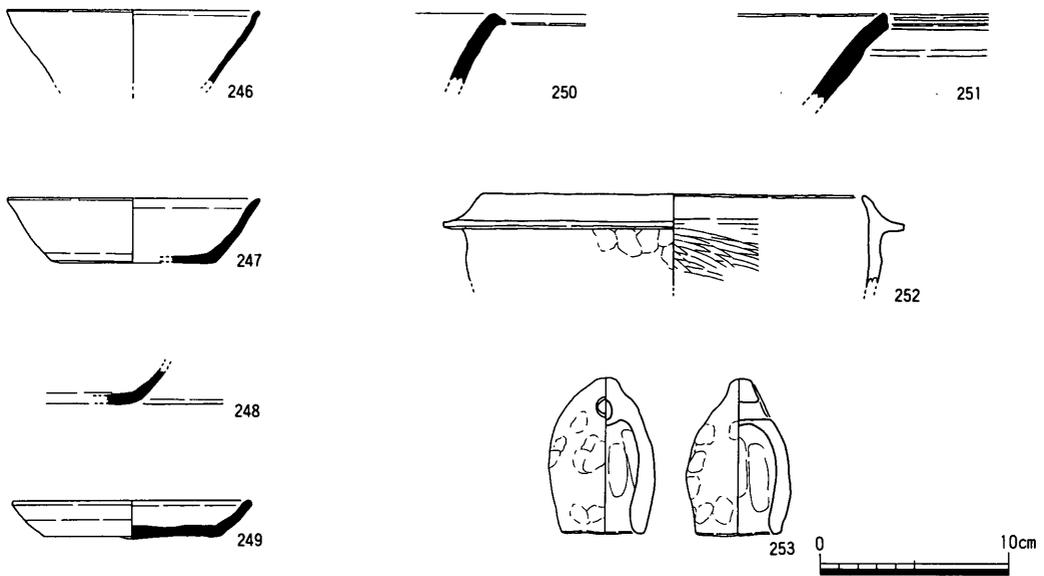
第5節 包含層の遺物

包含層出土の遺物を、中部・東部・西部地区に分けて報告する。このうち、中部地区については、県道原田・琴平線以西 (①)，以東 (②)，と東部地区の微高地の縁辺部に堆積した層から出土したもの (③) に分けている。

中部地区包含層出土土器① (第56図)

Cライン土層断面図における4～9層から出土したものである。4～9層は、先述したように置き土と考えられるもので、遺物も細片が散在する状態で出土している。4～9層の層位と遺物の時期差は認められないため、一括して報告する。

246～248は、須恵器の杯である。249は須恵器の皿，250は須恵器の甕である。口縁端部を外下方に摘み出している。251は瓦質土器，こね鉢かと思われる。口縁部端面に擬凹線状の窪みが認められる。252は土釜，鏝・体部ともに薄手につくられている。253は釣鐘形を呈する飯蛸壺である。

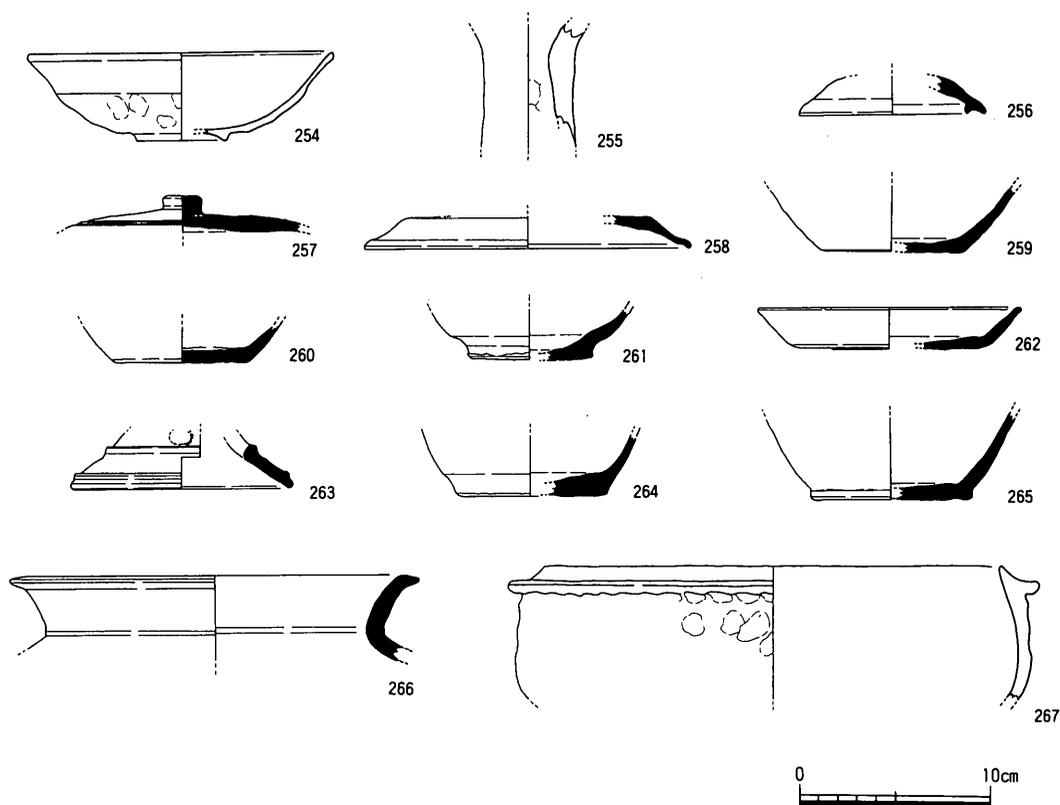


第56図 中部地区包含層出土土器実測図①

中部地区包含層出土土器②（第57図）

県道原田・琴平線の東側，SR01～03の埋積土の上位より出土したものである。Gライン土層断面図の4層，5層にあたる。遺物の包含量は僅少で，細片が散在する状況であった。4，5層の遺物に年代の相違は認められない。

254は和泉型の瓦器碗である。255はふいごの羽口ではないかと考えられる小破片である。256～266は須恵器である。256～258は蓋である。257は，平らな天井部に扁平なつまみがつく。259，260は杯の底部の破片である。261は円盤状の高台をもつ杯と考えられる。262はやや焼成の不良な皿，263は高杯脚部の破片である。円形の透孔をもつ。264，265は壺の底部である。265は円盤状の高台を貼りつけている。266は甕である。口縁部を外水平方向に摘みだし，先端は尖り気味におさめている。267は土師質の土釜である。鏝下部には棒状工具による圧痕が認められる。鏝の貼り付けに装飾を加味しているのであろう。



第57図 中部地区包含層出土土器実測図②

中部地区包含層出土土器③（第58図）

開折谷の東岸部の堆積層からの出土遺物である。東部地区の微高地から落ち込んだ遺物が中心をなす。なお、Gライン土層断面図における4、5層との層位関係は調査期間が異なる関係で十分に把握できていない。

268は弥生土器の甕である。摩滅している。269、270は厚手なつくりの土師器杯である。271は土師器碗の底部、272は黒色土器B類碗の小片である。内面には丁寧なヘラミガキが、外面底部付近には3条の沈線が認められる。273、274は須恵器高杯である。274の焼成は不良である。275は白磁碗の口縁部の破片である。玉縁状の口縁をもつ。森田・横田編年のⅣ類と考えられる。276は青磁碗の底部である。277は須恵器甕の口縁部の破片、278は土師器土釜、279は竈の破片である。280は摺鉢、281は土師質の壺、282は焙烙である。280～282は本来遺構に伴っていたものを誤って取り上げている可能性がある。

東部地区包含層出土土器（第59図）

東部地区 調査区南壁土層断面図（第15図）の3層から出土した遺物である。

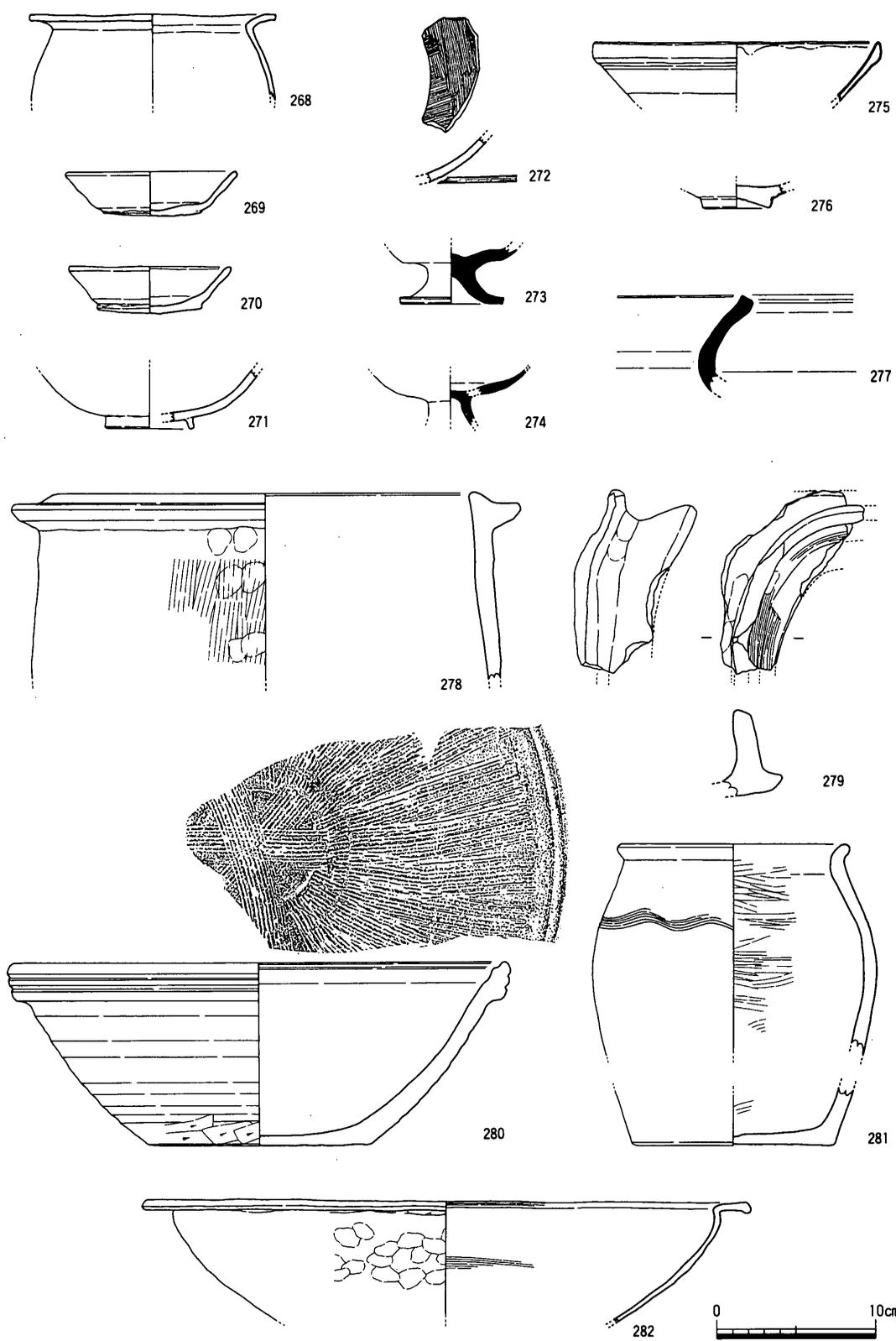
283は土師器杯、284は土師器碗である。285は白磁碗、286、287は青磁碗の小片である。288は須恵器甕の口縁部、289は口縁部が内湾して立ち上がる土師器土鍋である。290～292は土師器土釜、293、294は須恵器のこね鉢の破片である。

これらの遺物は、概ね東部地区で検出された中世の遺構の年代の中で捉えられる。

西部地区包含層出土土器（第60、61図）

西部地区の包含層から出土した遺物である。西部地区で包含層としているのは、3ライン土層断面図の2a～g層であるが、遺物は主として2e～g層から出土している。遺物は細片が多く、遺物の年代と層位に関連は認められない。

295は弥生時代前期に属すると考えられる壺の底部である。SD04至近で地山に突きささる状態で検出されたものである。摩滅しているが、内面に指頭圧痕が認められる。297～299は土師器碗である。297は吉備系のものと考えられる。300は黒色土器A類碗、301は黒色土器B類碗である。302は須恵器蓋、303は須恵器碗、304は瓦器碗である。305は青磁碗の口縁部の破片、鎬蓮弁が認められる。306、307は口縁端部を上方に摘み出した須恵器壺である。308は須恵器甕、309は瓦質土器甕、310、311は須恵器壺の底部である。312は須恵器瓶子の底部、底部は糸切りされている。313は常滑焼甕の口縁部破片である。13世紀中頃の年



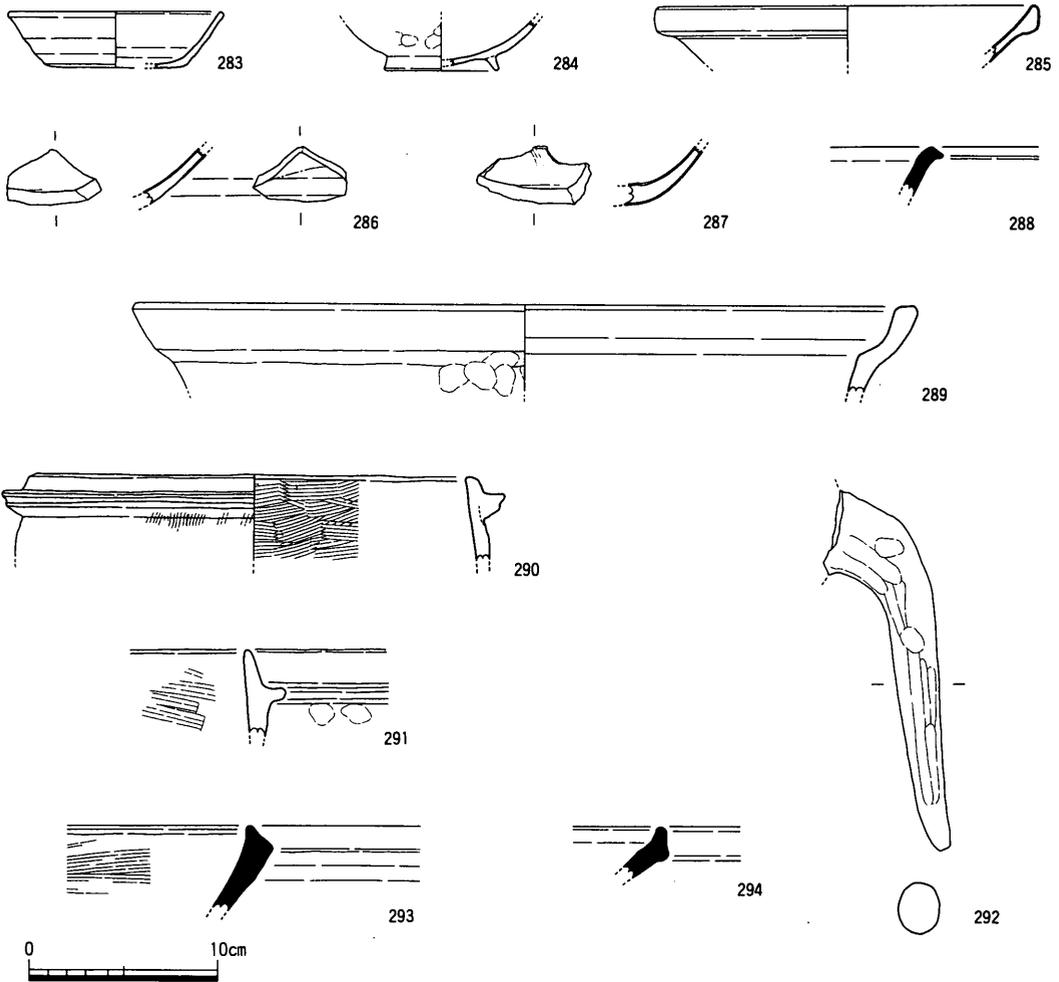
第58图 中部地区包含层出土土器实测图③

代である⁽¹⁾。314は土師器土鍋, 315~317は土師器土釜である。315の鏝と体部の接合部の下部には棒状工具による圧痕が認められる。318は瓦質のこね鉢と考えられる破片, 319~321は摺鉢の破片である。319, 320は須恵器, 321は土師器である。322は土錘である。

包含層出土の石器 (第62, 63図)

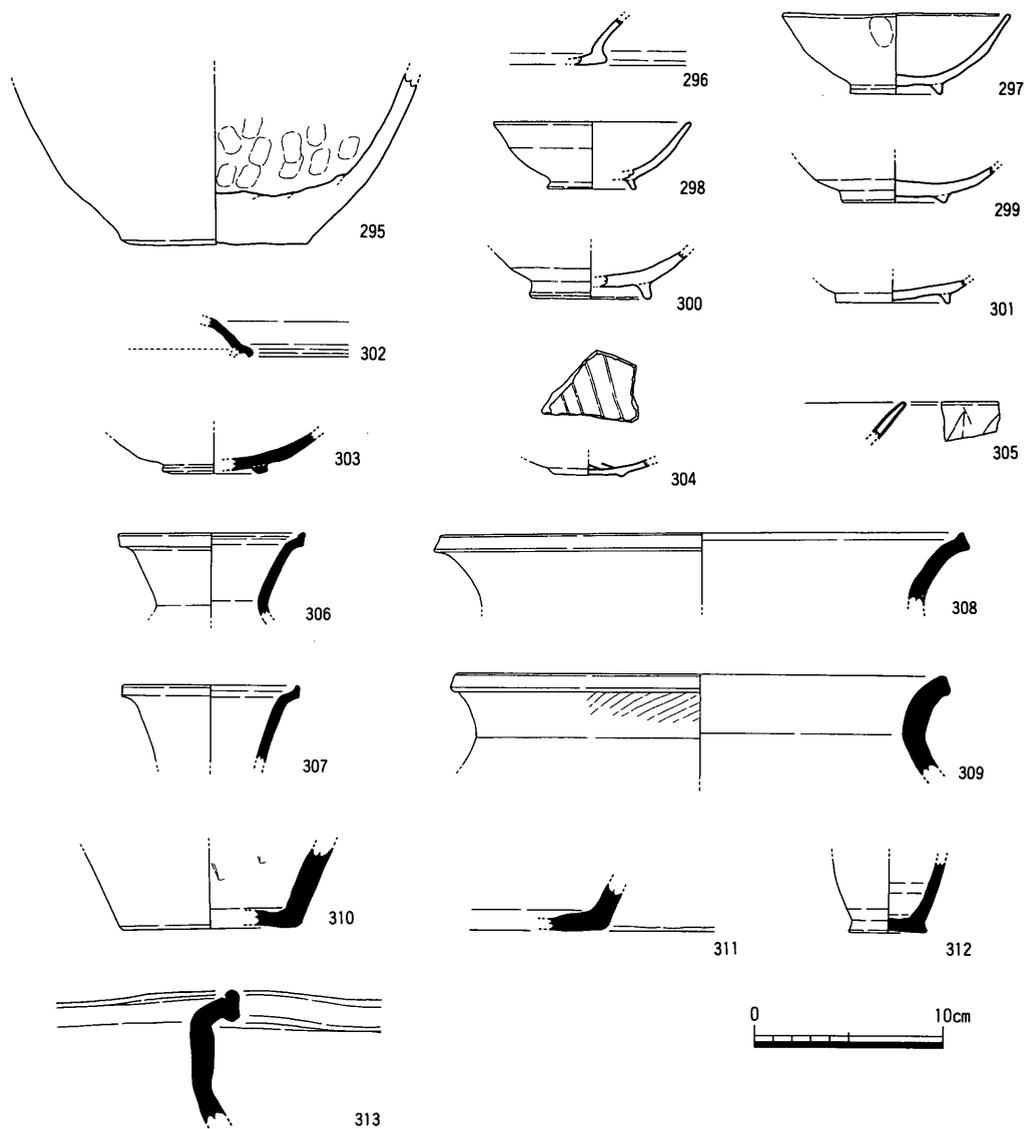
323~331は包含層から出土した石器である。323~331はすべてサヌカイト製である。323, 324は凹基式の石鏃である。323は中部地区, 324は西部地区で出土した。325は打製石斧である。基部を欠損している。両側面に敲打痕が認められる。326は二次加工のある剝片である。剝離によって整形しているが刃部などの細部調整は認められない。327は打製石斧である。

註(1) 中野晴久「常滑焼」『大戸窯検討のための会津シンポジウム』1992

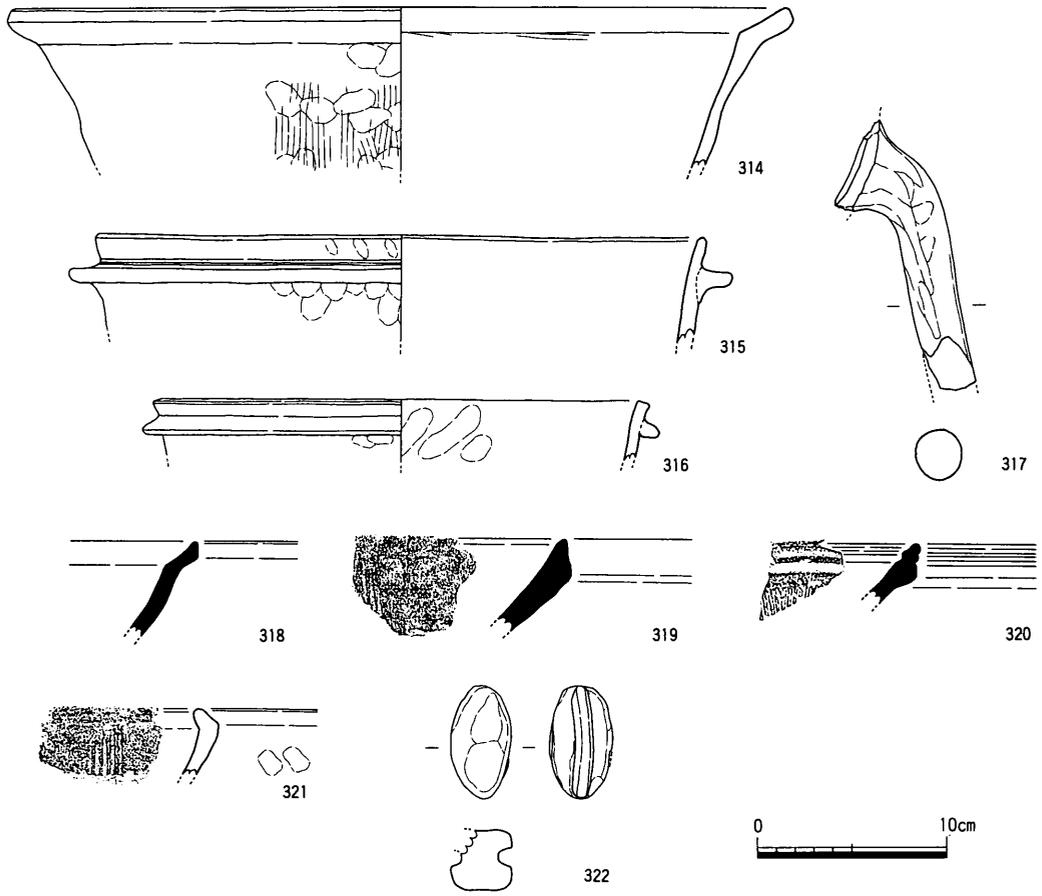


第59図 東部地区包含層出土石器実測図

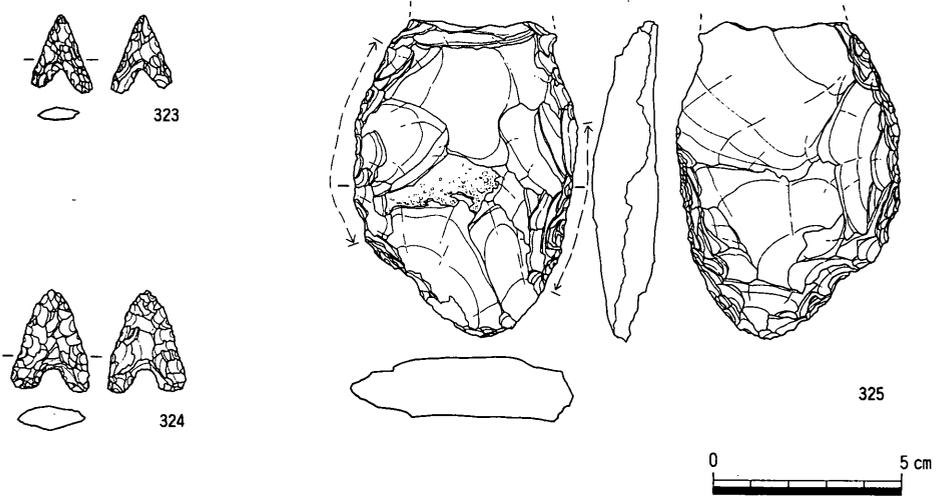
る。刃部を欠損している。328は一側面に細部調整を加えたもので、左側面には敲打痕が認められる。器厚が厚いなどの問題があるが、スクレイパーに分類する。中部地区で出土した。329はスクレイパーである。一側面に細部調整を行い刃部を作っている。反対の側面には敲打痕が認められる。中部地区で出土した。330, 331は中部地区で出土した打製石斧である。331は基部を欠損している。両者とも使用痕と思われる摩滅が認められる。



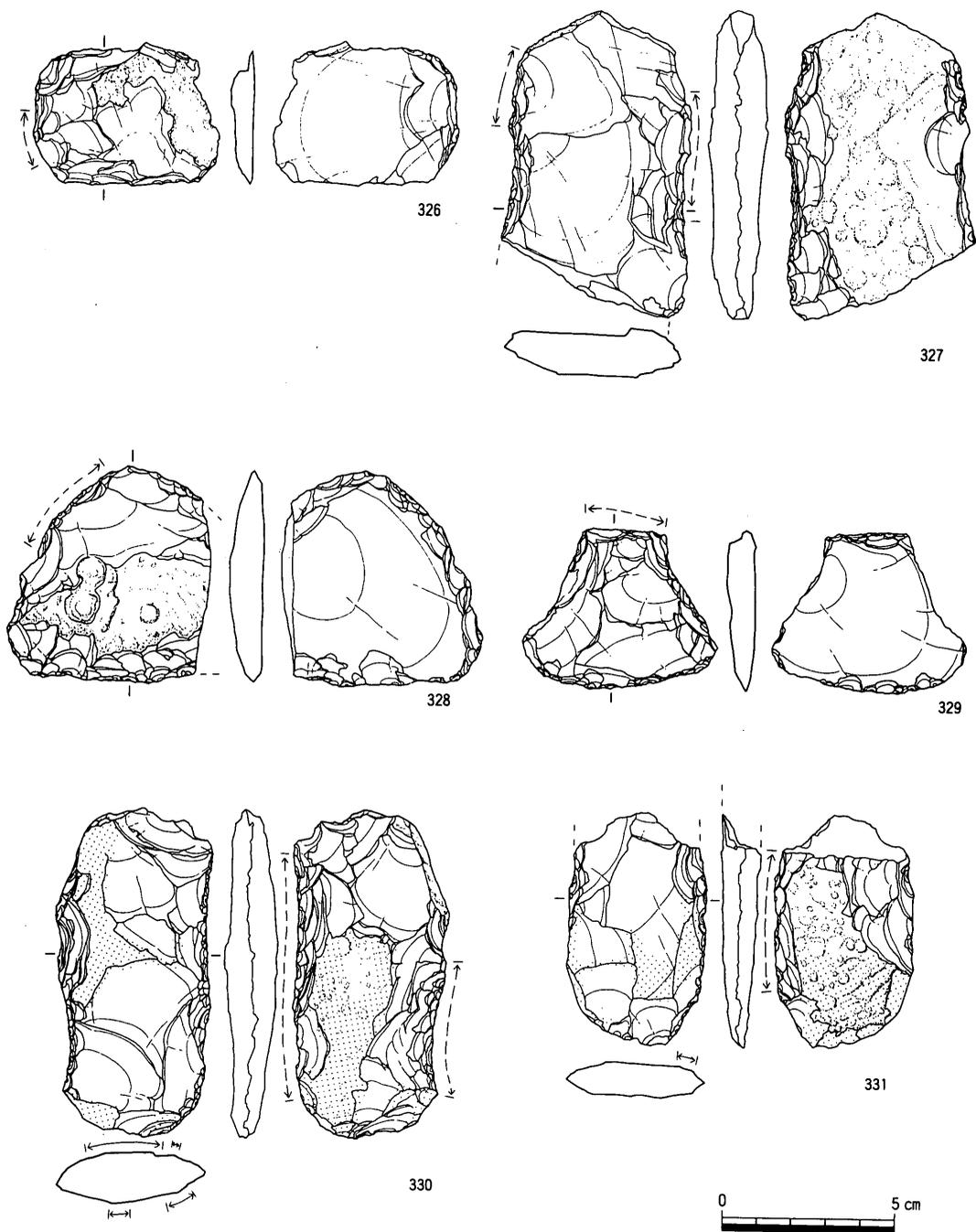
第60図 西部地区包含層出土土器実測図①



第61图 西部地区包含层出土石器实测图②



第62图 包含层出土石器实测图①



第63图 包含層出土石器实测图②

包含層出土の牛骨（図版20④・36②）

西部地区の包含層下部（第8図の2f層）において獣の下顎骨が単独で出土している。周囲に他の部位の骨は認められず、また、埋納などの痕跡も認められなかった。したがって人為による意図的なものかどうかは判断できない。国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏の鑑定によると、ウシの下顎骨で雌雄は不明、第3後臼歯がかなり摩耗しているので成獣でも老獣に近いものと判断される。歯の摩耗が乱れているため、柵飼いされていたものと思われる、とのことである。

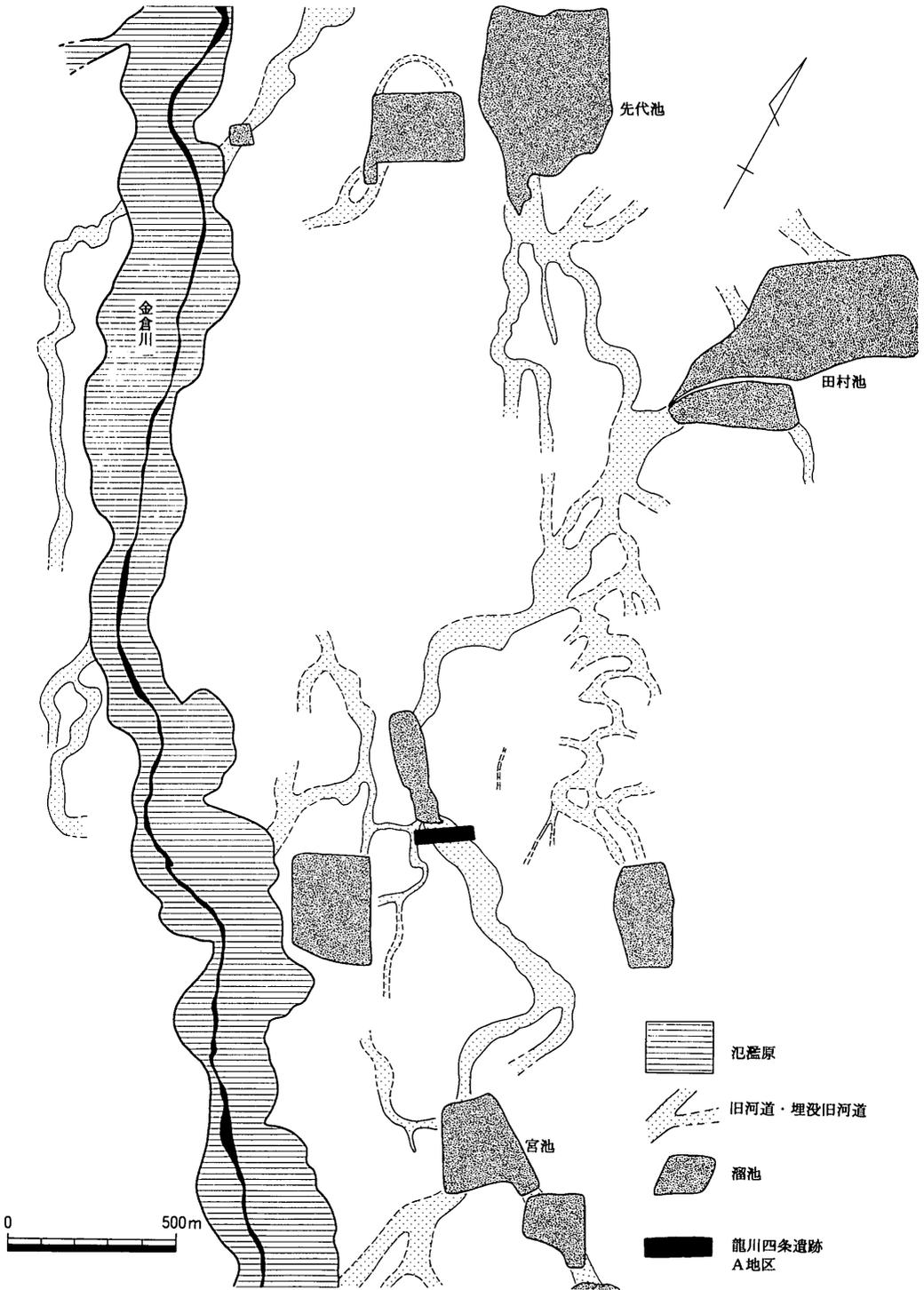
第6節 A地区のまとめにかえて

A地区で検出された遺構・遺物について、中央部に存在する開折谷部分を中部地区、その両側を東部地区・西部地区に分けて報告した。この中でA地区のトピックは、中部地区の開折谷（旧河道）の調査であると思われる。この河道がどのようなルートであるのか、やや広い地域について空中写真判読によって調査した。その成果を第64図に示す。この図で抽出した旧河道は、凹地の連続として明瞭に把握できるもの、水田の相対的な高低差から暗示的に旧河道の存在が推定されるもの、白黒空中写真において周囲に比して暗色の帯（ソイルマーク）として写り、きわめて暗示的に旧河道の存在が推定されるものが含まれている⁽¹⁾。また、A地区の旧河道の延長の抽出を目的としているため、旧河道の抽出は、この流路周囲においては綿密に、周辺に向かうにつれ概略的なものとなっている。

A地区中部地区の河道の下流は、途中分岐したり、他の流路を合わしたりしながら、「先代池」に至る流路と、「大井池」「田村池」を経て、同じく「先代池」に至る流路が推定される。図外になるが、「先代池」以北は、分岐・合流しながら瀬戸内海に至っている。

上流側は、「宮池」までは明瞭な凹地が連続している。「宮池」より上流は、やや不明瞭であるが、西南方向の現在の金倉川に至るルートと、図外になるが「宮池」「中池」を経て、鉢伏山・如意山（第3図参照）の東側を通り、現在の土器川の河道につながっていくルートが推定される。このように旧河道は網の目のように複雑に流れており、A地区において点として把握された流路が、検出された時期別にどのように流れていたのか正確にはわからない。

註(1) 第5図で推定した旧河道は、10cm等高線の凹地のみを根拠にしているが、第64図では空中写真の濃度なども加えている。この結果、流路の増減は無いが、流路の復元に若干の相違ができています。



第64図 龍川四条遺跡付近の旧河道

一方、第64図を見ていると、従前から指摘されている通り⁽¹⁾、この地域に多く築造されている溜池は旧河道を利用していることがわかる。溜池には微高地を利用して造られる「平池」と開折谷などの凹地を利用する「谷池」とがあるが、この地域の溜池は「道池」のように典型的な谷池も存在するが、多くは両者を折衷した形態である。いずれにしても旧河道の歴史の変遷を明らかにすることは、例えば旧河道から検討される水利的なまとまりの推定にもつながっていくことであり、地域史を研究する際の重要な視点になると思われる。今後、旧河道の調査を継続していく必要があるだろう。

註(1) 香川清美、長町博「讃岐の水利」『讃岐のため池』1975 美巧社 など

第9表 A地区出土遺物観察表

棟号	図版	出土遺構 器種	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色調	胎土	備考
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部1/8 口径29.6	外面：刻み目突帯 ナデ ヘラケズリ 内面：指押え後ナデ	内外面：10YR 5/3(にぶい黄褐)	0.5~2.0mmの 砂粒を多く含む	
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：ナデ 刻み目突帯 ナデ 内面：板ナデ	内外面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	№3と同一個体か?
17		S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：ナデ 刻み目突帯 内面：板ナデ	内外面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	№2と同一個体か?
17		S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：ナデ 刻み目突帯 ナデ 内面：不明	外面：N 3(暗灰) 内面：7.5YR 6/4(にぶい橙)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：ナデ 刻み目突帯 ナデ 内面：ナデ(or板ナデ)	内外面：2.5Y 5/1(黄灰)	0.2~3.0mmの砂粒 を含む	
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部1/8 口径30.7	外面：ナデ 刻み目突帯 ナデ 刻み目突帯 内面：板ナデ後ミガキ	内外面：N 3(暗灰)	1.0~2.0mmの砂粒 を多く含む	
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：ナデ 刻み目突帯 ナデ 内面：板ナデ	外面：10YR 7/2(にぶい黄橙) 内面：2.5Y 5/2(暗黄灰)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	
17		S R03 縄文土器 深鉢	体部破片	外面：板ナデ 刻み目突帯 ヘ ラ削り 内面：板ナデ	外面：2.5Y 5/2(暗黄灰) 内面：N 3(暗灰)	0.2~2.0mmの砂粒 を多く含む	
17		S R03 縄文土器 深鉢	体部破片	外面：板ナデ 刻み目突帯 板 ナデ 内面：板ナデ	外面：10YR 6/3(にぶい黄橙) 内面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
17		S R03 縄文土器 深鉢	体部破片	外面：ヘラ削り ナデ 刻み目 突帯 ナデ ヘラ削り 内面：ナデ	外面：2.5Y 6/2(灰黄) 内面：N 3(暗灰)	0.2~1.5mmの砂粒 を含む	
17		S R03 縄文土器 深鉢	体部破片	外面：刻み目突帯 不明(ヘラ削 り?) 内面：不明(ナデ?)	外面：2.5Y 7/3(浅黄) 内面：N 4(灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：刻み目 刻み目突帯 ナ デ 内面：ナデ	外面：10YR 7/2(にぶい黄橙) 内面：5Y 3/1(オリーブ黒)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	№13と同一個体か?
17		S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：10YR 7/2(にぶい黄橙) 内面：2.5Y 7/2(にぶい黄橙)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	№12と同一個体か?
17		S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：刻み目 刻み目突帯 ナ デ 内面：ナデ	外面：N 3(暗灰) 内面：10YR 5/2(暗黄褐)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：刻み目 刻み目突帯 不 明 内面：ナデ	外面：2.5Y 8/2(灰白) 内面：2.5Y 7/2(灰黄)	0.2~2.0mmの砂粒 を多く含む	№16と同一個体か?
17	21	S R03 縄文土器 深鉢	口縁部破片	外面：刻み目 刻み目突帯 不 明 内面：ナデ	外面：(スス付着) 内面：2.5Y 4/1(黄灰)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	№15と同一個体か?
18	21	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	波状口縁 外面：ナデ(横方向) 沈線一条 板ナデ 内面：沈線二条 ヘラミガキ	内外面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	№18,19と同一個体か?
18	21	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	波状口縁 外面：ナデ 沈線一条 板ナデ 内面：沈線二条 ヘラミガキ	内外面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	№17,19と同一個体か?
18		S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	波状口縁 外面：ナデ 沈線一条	内外面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	№17,18と同一個体か?
18		S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	波状口縁 外面：ナデ ヘラミ ガキ ヘラ削り 内面：沈線一条 ヘラミガキ	内外面：5Y 3/1(オリーブ黒)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	№21と同一個体か?
18	22	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	波状口縁 外面：ナデ ヘラミ ガキ ヘラ削り 内面：ヘラミガキ	内外面：5Y 2/1(黒)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	№20と同一個体か?
18	21						

挿図	図版	出土遺構 器 種	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
18	22	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	波状口縁 外面：ナデ ヘラ削り 内面：沈線二条 ヘラミガキ	内外面：5Y 2/1(黒)	0.2～1.0mmの砂粒を含む	No24・23・25と同一個体か?
	22						
18	23	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	外面：ナデ ヘラ削り 内面：ナデ 沈線二条 ヘラミガキ	内外面：2.5Y 2/1(黒)	2.0mmの砂粒を含む	No22・24・25と同一個体か?
18	24	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	外面：ナデ ヘラ削り 内面：沈線二条 ナデ ヘラミガキ	内外面：5Y 2/1(黒)	1.0mmの砂粒を含む	No22・23・25と同一個体か?
18	25	S R03 縄文土器 浅鉢	口縁部破片	外面：ナデ 不明 内面：沈線二条 ナデ	内外面：5Y 2/1(黒)	0.2～1.0mmの砂粒を含む	No22・23・24と同一個体か?
18	26	S R03 縄文土器 壺	肩部2/8	外面：ヘラミガキ(横方向) 沈線一条 内面：ナデ ヘラミガキ	内外面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	0.2～1.0mmの砂粒を含む	
18	27	S R03 縄文土器 壺	体部破片	外面：ヘラミガキ 内面：板ナデ	外面：2.5Y 6/1(黄灰) 内面：2.5Y 5/1(黄灰)	0.2～2.0mmの砂粒を多く含む	No28・29と同一個体か?
18	28	S R03 縄文土器 壺	体部破片	外面：ヘラミガキ 内面：板ナデ	外面：2.5Y 6/1(黄灰) 内面：2.5Y 5/1(黄灰)	0.2～2.0mmの砂粒を含む	No29・27と同一個体か?
18	29	S R03 縄文土器 壺	体部破片	外面：ヘラミガキ 内面：板ナデ	外面：2.5Y 6/1(黄灰) 内面：2.5Y 5/1(黄灰)	0.2～1.0mmの砂粒を多く含む	No28・27と同一個体か?
18	30	S R03 縄文土器 壺	口縁部破片	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ 沈線二条	外面：2.5Y 3/1(黒褐) 内面：5Y 2/1(黒)	0.2～2.0mmの砂粒を含む	
18	31	S R03 縄文土器 器種不明	口縁部破片	内外面：ヘラミガキ	内外面：2.5Y 3/1(黒褐)	0.2～1.0mmの砂粒を含む	
18	32	S R03 縄文土器 深鉢	底部8/8 底径8.0	内外面：ヘラミガキ	外面：5Y 4/1(灰) 内面：5Y 2/1(黄)	0.2～2.0mmの砂粒を含む	
18	33	S R03 縄文土器 浅鉢	底部2/8 底径8.4	外面：ヘラミガキ ヘラ削り 内面：ヘラミガキ	外面：10YR 7/2(にぶい黄橙) 内面：10YR 4/1(褐灰)	0.2～2.0mmの砂粒を含む	
18	34	S R03 縄文土器 深鉢	底部8/8 底径7.0	外面：板ナデ(?) 内面：不明	外面：10YR 5/2(灰黄褐) 内面：N 2(黒)	0.2～1.0mmの砂粒を含む	
18	35	S R03 縄文土器 浅鉢	底部6/8 底径8.6	外面：不明 内面：ヘラミガキ(?)	外面：10YR 6/3(にぶい黄橙) 内面：10YR 5/1(褐灰)	0.2～2.0mmの砂粒を多く含む	
18	36	S R03 縄文土器 浅鉢	底部8/8 底径7.6	外面：ケズリ 内面：ナデ	内外面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.2～2.0mmの砂粒を多く含む	
18	37	S R03 縄文土器 浅鉢	底部8/8 底径1.5	内外面：不明	外面：10YR 6/2(灰黄褐) 内面：10YR 3/1(黒褐)	0.2～2.0mmの砂粒を多く含む	
20	38	S R02 弥生土器 壺	口縁部6/8 口径20.8	外面：不明 ハケ目 内面：不明 ナデ	内外面：10YR 5/2(灰黄褐)	0.1～3.0mmの砂粒を多く含む	
20	39	S R02 弥生土器 壺	口縁部1/8 口径14.7	外面：横ナデ ハケ目 内面：横ナデ 不明	内外面：10YR 7/4(にぶい黄橙) 一部5YR 6/4(にぶい橙)	0.5～4.0mmの砂粒を含む	
20	40	S R02 弥生土器 壺	頸部2/8	外面：ハケ目 内面：板ナデ	内外面：2.5Y 5/3 (黄褐)	0.5～3.0mmの砂粒まばら含む	
20	41	S R02 弥生土器 甕	口縁部～体部 3/8 口径17.0	外面：横ナデ ハケ目 内面： ハケ目後横ナデ ハケ目 ハケ目 後指ナデ ハケ目 ケズリ風擦過	外面：2.5Y 6/2(灰黄) 内面：2.5Y 4/1(黄灰)	1.0～2.0mmの砂粒まばら含む	
20	42	S R02 弥生土器 甕	口縁部～体部 3/8 口径11.8	外面：タタキ後ハケ目 内面：ハケ目	外面：(上半)10YR 6/3(にぶい黄橙) (下半)N 2(黒) 内面：10YR 6/3(にぶい黄橙)	0.1～2.0mmの砂粒まばら含む	

挿図 番号	図版 番号	出土遺構 器 種	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
20	24	S R02 弥生土器 甕	口縁部～体部 4/8 口径15.0	外面：横ナデ タタキ後ハケ目 内面：横ナデ 指押さえ後ナデ ハケ目	外面：N2(黒) 内面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	0.1～1.5mm程の砂 粒を含む	
20	43	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径14.5	外面：横ナデ ハケ後横ナデ ハケ目 内面：横ナデ ハケ目 横ナデ ケズリ	内外面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	0.1～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
20	44	S R02 弥生土器 甕	口縁部2/8 口径16.2	外面：横ナデ ハケ目 内面：ハケ後横ナデ ハケ目 指ナデ	内外面：2.5Y 6/2(灰黄)	0.1～2.5mmの砂 粒を含む	
20	45	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径20.0	外面：横ナデ ハケ後ナデ タ タキ後ハケ目 内面：横ナデ ハケ目 ハケ後ナデ	外面：10YR 2/1(黒) 内面：2.5Y 6/2(灰黄)	1.0～2.0mmの砂粒 を含む	
20	46	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径14.2	外面：横ナデ 不明 内面：横ナデ ハケ目	内外面：10YR 6/3(にぶい黄橙)	0.1～3.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
20	47	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径13.6	外面：横ナデ ハケ目 タタキ後 ハケ目 内面：横ナデ ハケ目 ヘラ削り(後ナデ)	内外面：2.5Y 5/4(黄褐)	1.0～4.0mmの砂粒 を含む	
20	48	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径14.7	外面：ナデ ハケ目(横方向) タタキ後ハケ目 内面：ハケ目 (横方向) 指押さえ後ハケ目	外面：2.5Y 6/3(にぶい黄) 内面：2.5Y 6/2(灰黄)	2.0mm程の砂粒を まばらに含む	
20	49	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径17.1	外面：ナデ ハケ目 タタキ後 ハケ目 内面：ハケ目 内面：ハケ目	外面：2.5Y 2/1(黒) 内面：2.5Y 6/2(灰黄)	0.1～2.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
21	50	S R02 弥生土器 甕	口縁部～体部 1/8 口径19.0	外面：ナデ ハケ目 内面：ハケ目 指押さえ ハケ目	外面：5Y 5/1(灰) 内面：5Y 4/1(灰)	1.0mmの砂粒をわ ずかに含む	
21	51	S R02 弥生土器 甕	口縁部1/8 口径20.7	外面：横ナデ タタキ後ハケ目 内面：ハケ目 指ナデ	内外面：2.5Y 6/2(灰黄)	0.1～1.5mmの砂粒 をまばらに含む	
21	52	S R02 弥生土器 甕	口縁部～体部 2/8 口径21.0	外面：ナデ 内面：板ナデ	外面：2.5Y 6/3 (にぶい黄) 内面：2.5Y 3/2(黒褐)	0.1～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
21	53	S R02 弥生土器	体部～底部2/8 底径4.5	外面：タタキ後ハケ目 内面：ケズリ 底部：ハケ目	外面：2.5Y 5/2(暗灰黄) 黒色を帯びる 内面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	1.0～3.0mm程の砂 粒を含む	
21	54	S R02 弥生土器	底部8/8 底径4.0	外面：ハケ目 ハケ後横ナデ 内面：ヘラ削り	内外面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.1～3.0mm程の砂 粒を含む	内面に黒斑あり
21	55	S R02 弥生土器	底部7/8 底径5.6	外面：タタキ後ハケ目 内面：ハケ目 底部：ハケ目	外面：N3/1(暗灰) 内面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.1～1.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
21	56	S R02 弥生土器	体部～底部6/8 底径7.1	外面：タタキ後ハケ目 ハケ目 タタキ後ヘラ削り 内面：ハケ目	内外面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	0.1～3.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
21	57	S R02 弥生土器	体部～底部2/8 底径6.8	外面：タタキ後ハケ目後ヘラミ ガキ ハケ目後ヘラミガキ 内面：ヘラ削り	外面：2.5Y 5/2(暗灰黄) 内面：7.5Y 3/1(オリープ黒)	0.1～3.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
21	58	S R02 弥生土器	底部8/8 底径5.4	外面：ハケ目 内面：ハケ目 ハケ後ナデ 底部：指押さえ	外面：10YR 3/2(黒褐) 内面：10YR 6/4(にぶい黄橙)	1.0～2.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
22	59	S R02 弥生土器	底部8/8 底径5.5	外面：タタキ後ハケ目後ヘラミ ガキ 内面：ケズリ後ハケ目	外面：5Y 6/3(オリープ黄) 内面：2.5Y 5/3(黄橙)	0.1～2.5mm程の砂 粒をまばらに含む	
22	60	S R02 弥生土器	底部7/8 底径7.2	外面：ハケ目 内面：板ナデ ハケ目 ハケ目 (横方向) 底部：ハケ目(横方向)	外面：2.5Y 5/3(黄褐) 内面：2.5Y 4/2(暗灰黄)	1.0～5.0mmの砂粒 をまばらに含む	
22	61	S R02 弥生土器	底部3/8 底径5.8	外面：ハケ目 内面：ハケ目	内外面：2.5Y 7/2(黄灰)	1.0～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
22	62	S R02 弥生土器	底部8/8 底径5.7	外面：タタキ後ハケ目 内面：指ナデ後板ナデ 底部：ナデ	外面：2.5Y 5/3(黄褐) 内面：5Y 5/1(灰)	0.1～3.0mmの砂粒 を含む	外面に黒斑あり
22	63	S R02 弥生土器	底部8/8 底径5.7	外面：タタキ後ハケ目 内面：指ナデ後板ナデ 底部：ナデ	外面：2.5Y 5/3(黄褐) 内面：5Y 5/1(灰)	0.1～3.0mmの砂粒 を含む	外面に黒斑あり

挿図	図版	出土遺構 器 種	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
22	64	S R02 弥生土器	底部：8/8 底径：4.1	外面：タタキ後ナデ 内面：ハケ目	外面：7.5YR 6/3(にぶい褐) 内面：10YR 6/3 (に部位器橙)	0.2～3.0mmの砂粒 を含む	
22	65	S R02 弥生土器	底部：8/8 底径：5.8	外面：ハケ目後ナデ 内面：ナデ	内外面：2.5Y 5/3(暗灰黄)	1.0～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
22	66	S R02 弥生土器	底部：7/8 底径：4.6	外面：タタキ後ハケ目 内面：ハケ目	内外面：5Y 6/2(灰オリーブ)	1.0～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	外面に黒斑あり
22	67	S R02 弥生土器	底部：8/8 底径：5.0	外面：ケズリ ケズリ後指押さえ 内面：ヘラミガキ	外面：2.5Y 6/3(にぶい黄) 内面：10YR 6/3(にぶい黄橙)	0.5～2.0mmの砂粒 を含む	
22	68	S R02 弥生土器	底部：5/8 底径：4.8	外面：タタキ後ハケ目 内面：ケズリ	外面：5Y 3/1(オリーブ黒) 内面：2.5Y 5/3(黄褐)	1.0～3.0mmの砂粒 をまばらに含む	
22	69	S R02 弥生土器	底部：8/8 底径：4.1	外面：板ナデ 内面：ケズリ 底部：ナデ	外面：2.5Y 3/1 (黒褐) 内面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	1.0～5.0mmの砂粒 をまばらに含む	
22	70	S R02 弥生土器 壺	底部：8/8 底径：7.8	外面：不明 内面：板ナデ後ナデ	外面：7.5YR 6/6(橙) 2.5Y 7/2(灰黄) 内面：7.5Y 5/1(灰)	0.5～4.0mmの砂粒 を含む	
22	71	S R02 弥生土器 片口鉢	口縁部～底部 3/8 底径9.9	外面：タタキ後ハケ目 タタキ後ハケ目後ナデ 内面：ハケ目	内外面：2.5Y 6/2(灰黄)	0.1～3.0mmの砂粒 をまばらに含む	外面に黒斑あり
23	72	S R02 弥生土器 鉢	口縁部～底部3/8 口径22.5 器高 12.2 底径4.5	外面：ナデ 指押さえ ヘラ削り 後ナデ 内面：ナデ ハケ目	外面：2.5Y 6/3(にぶい黄) 内面：2.5Y 5/3(黄褐)	1.0mm以下の砂粒 を含む	
23	73	S R02 弥生土器 鉢	口縁部～体部 3/8 口径17.3	外面：ナデ ハケ目 タタキ後 ハケ目 内面：ナデ 板ナデ	内外面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	1.0mm程度の砂粒 をまばらに含む	
23	74	S R02 弥生土器 鉢	完形 口径17.6 底径 4.4	外面：横ナデ タタキ後指ナデ 内面：ハケ目	外面：2.5Y 5/2(暗灰黄) 内面：2.5Y 2/1(黒)	0.5～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
23	75	S R02 弥生土器 鉢	完形 口径15.7 器高 6.0 底径 3.3	外面：ナデ 内面：ナデ後ハケ目 ハケ目	内外面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.1～3.0mmの砂粒 を含む	
23	76	S R02 弥生土器 鉢	口縁部～体部 3/8 口径21.4	外面：横ナデ ハケ目 内面：横ナデ ハケ目	内外面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	1.0～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
23	77	S R02 弥生土器 鉢	口縁部3/8 口径20.4	外面：ナデ ケズリ後ナデ ケズリ 内面：ナデ ハケ目後 ナデ ハケ目	内外面：10YR 6/4(にぶい黄橙)	1.0～3.0mmの砂粒 をまばらに含む	
23	78	S R02 弥生土器 鉢	口縁部～体部 3/8 口径19.6	外面：ナデ ヘラ削り 内面：ナデ ハケ目	外面：10YR 6/3(にぶい黄橙) 一部5YR 6/4(にぶい橙) 内面：10YR 6/3(にぶい黄橙)	1.0～3.0mmの砂粒 を含む	
23	79	S R02 弥生土器 鉢	口縁部1/8 口径22.4	外面：横ナデ ケズリ後ハケ目 内面：横ナデ ハケ目	内外面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.1～1.5mmの砂粒 をまばらに含む	
23	80	S R02 弥生土器 鉢	口縁部2/8 口径22.3	外面：横ナデ ヘラ削り 内面：ハケ目後ヘラミガキ	内外面：7.5YR 6/4(にぶい褐)	0.1～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
23	81	S R02 弥生土器 鉢	口縁部～体部 1/8 口径17.9	外面：タタキ後ナデ タタキ後ヘラ削り 内面：ハケ目 ハケ目後ヘラミガキ	外面：10YR 6/3(にぶい黄橙) 一部5YR 6/6(橙) 内面：2.5Y 6/3(にぶい黄)	1.0～3.0mmの砂粒 をまばらに含む	
23	82	S R02 弥生土器 鉢	口縁部1/8 口径16.6	外面：ナデ ヘラ削り 内面：ナデ	内外面：7.5YR 6/3(にぶい褐)	1.0mm程度の砂粒 をまばらに含む	
23	83	S R02 弥生土器 鉢	口縁部1/8 口径16.3	外面：横ナデ ヘラ削り 内面：横ナデ ハケ目後ナデ	内外面：2.5Y 4/2(暗灰黄)	0.1～1.5mmの砂粒 をまばらに含む	
23	84	S R02 弥生土器 鉢	口縁部破片	外面：ナデ タタキ後ハケ目 内面：ハケ目	内外面：2.5Y 6/3(にぶい黄) (下方黒色)	0.5～2.0mmの砂粒 を含む	

挿図	図版	出土遺構	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
番号		器 種					
23	25	S R02 弥生土器 鉢	8/8 口径10.2 器高 5.6 底形 3.5	外面：タタキ 内面：指押さえ	内外面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.5~1.0mmの砂粒 を含む	内外に黒斑あり
85							
23	25	S R02 弥生土器 高杯	破片	外面：ケズリ後ヘラミガキ ナデ 内面：ヘラミガキ	外面：2.5Y 6/3(にぶい黄) 内面：2.5Y 4/2(暗灰黄)	0.5~5.0mmの砂粒 を含む	
86							
27		S R01 土師器 小皿	口縁部2/8 口径10.6器高 1.7底径6.6	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	外面：2.5Y 1/8(灰白) 内面：2.5Y 2/8(灰白)	0.2~1.0mm程の砂粒 をまばらに含む	
94							
27		S R01 土師器 小皿	6/8 口径10.1 器高 1.7 底形 6.6	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mm程の砂粒を 含む	
95							
27		S R01 土師器 小皿	7/8 口径10.1 器高 2.2 底形 6.3	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2~0.5mmの砂粒 をわずかに含む	
96							
27	27	S R01 土師器 小皿	7/8 口径 9.55 器高 1.85 底形 9.1	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y 7/2(灰黄)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
97							
27		S R01 土師器 小皿	7/8 口径 9.0 器高 2.05 底形 6.2	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.1~1.0mmの砂粒 を多く含む	
98							
27	27	S R01 土師器 小皿	8/8 口径 8.5 器高 1.85 底形 5.2	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mm程の砂粒を わずかに含む	
99							
27	27	S R01 土師器 小皿	5/8 口径 9.1 器高 1.8 底形 5.5	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
100							
27		S R01 土師器 小皿	7/8 口径 8.9 器高 1.35 底形 5.8	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
101							
27		S R01 土師器 小皿	4/8 口径 9.4 器高 1.7 底形 5.4	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 を多く含む	
102							
27		S R01 土師器 小皿	3/8 口径 8.5 器高 1.45 底形 5.3	外面：回転ナデ ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
103							
27	27	S R02 土師器 杯	8/8 口径 8.2 器高 3.2 底形 3.9	外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 をわずかに含む	
104							
27		S R02 土師器 杯	底部8/8 底径4.5	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.1~0.3mmの砂粒 をわずかに含む	
105							
27		S R02 土師器 不明	底部8/8 底径3.8	内外面：ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
106							
27	27	S R01 土師器 杯	6/8 底径15.0	外面：回転ナデ ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	内外面：5Y 8/2(灰白)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
107							
27	27	S R01 土師器 杯	7/8 口径14.0 器高 4.2 底形 7.3	底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
108							
27		S R01 土師器 杯	2/8 口径16.0 器高 3.45 底形 9.6	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：5Y 8/2(灰白)	0.1~0.2mmの砂粒 をわずかに含む	
109							
27	27	S R01 土師器 杯	7/8 口径14.5 底径9.2	内外面：回転ナデ 底部：不明	外面：2.5Y 7/2(灰黄) 内面：2.5Y 6/1(黄灰)	0.1~1.0mmの砂粒 を含む	
110							
27		S R01 土師器 杯	3/8 口径14.1 器高 2.8 底形 8.3	内外面：回転ナデ 底部：不明	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
111							
27		S R01 土師器 杯	4/3 口径12.95 器高 2.45 底径 8.0	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：10YR 8/4(浅黄)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
112							

挿図 番号	図版	出土遺構		残存率・分量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
		器 種						
27 113		S R01 土師器	杯	1/8 口径11.9 器高 2.8 底径 6.8	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
27 114		S R01 土師器	杯	底部4/8 底径7.4	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/1(灰白) 底部：N 2(黒)	0.2~0.5mmの砂粒 をわずかに含む	
27 115	27	S R01 土師器	杯	底部8/8 口径12.7 器高2.7底径9.9	外面：ナデ 内面：ナデ 指ナデ 底部：静止状態でのヘラ切り	外面：2.5Y 7/2(灰黄) 内面：7.5YR 6/4(こぶい・橙) 2.5Y 7/2(灰黄)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
27 116	27	S R01 土師器	有脚杯	6/8 口径14.3	内外面：回転ナデ 外面脚部に指頭痕	内外面：10YR 8/3(浅黄橙) 体部内面：7.5YR 3/1(黒褐)	0.1~0.5mmの砂粒 を含む	
27 117		S R01 須恵器	杯	口縁部小破片 口径12.1	内外面：回転ナデ	内外面：N 5(灰)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	内外面に火ダスキ
27 118		S R01 須恵器	杯	口縁部破片	内外面：回転ナデ	内外面：N 7(灰白) 口縁部外面のみ：N 4(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
27 119		S R01 須恵器	杯	底部2/8 底径9.1	外面：ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	内面に火ダスキ
27 120		S R01 須恵器	杯	底部2/8 底径5.9	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	外面：5Y 6(灰) 内面：5Y 7(灰)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
27 121		S R01 須恵器	杯	底部小破片 底径6.35	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ ヘラ切り	内外面：N 6(灰)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
27 122		S R01 須恵器	杯	底部破片 底径7.0	外面：回転ナデ ナデ 内面：回転ナデ	内外面：N 7(灰白)	0.5~2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
27 123		S R01 須恵器	高台付杯	底部1/8 底径11.0	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：5PB 6/1(青灰)	0.2~0.4mmの砂粒 をまばらに含む	
27 124		S R01 須恵器	高台付杯	底部小破片 底径10.4	内外面：ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2~1.0mm程の砂 粒をまばらに含む	
28 125	28	S R01 土師器	碗	8/8 口径14.6 器高 5.95 底径 5.8	外面：回転ナデ後ヘラミガキ 回転ナデ 内面：暗文	外面：2.5Y 8/1(灰白) 内面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
28 126	27	S R01 土師器	碗	4/8 口径15.7 器高 5.5 底径 6.7	外面：ナデ ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
28 127		S R01 土師器	碗	6/8 口径15.0 器高 6.7 底径 6.3	外面：横ナデ ヘラミガキ ナデ 内面：ヘラミガキ 底部：ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
28 128		S R01 土師器	碗	5/8 口径16.2 器高 5.3 底径 6.6	外面：回転ナデ後ヘラミガキ 内面：不明	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	0.2~2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
28 129		S R01 土師器	碗	5/8 口径16.0 器高 5.0 底径 6.5	外面：ヘラミガキ 内面：不明	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
28 130		S R01 土師器	碗	1/8 口径14.7	外面：ナデ 内面：ナデ ヘラミガキ	内外面：5Y 8/1(灰白)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
28 131		S R01 土師器	碗	底部8/8 底径5.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ(?)	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~0.4mmの砂粒 をまばらに含む	
28 132		S R01 土師器	碗	1/8 口径19.0	外面：横ナデ 回転ナデ後ヘラミガキ 内面：回転ナデ後ヘラミガキ	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
28 133	28	S R01 黒色土器A類	碗	6/8 口径15.1 器高 5.4 底径 6.3	内外面：ヘラミガキ	外面：2.5Y7/3(浅黄) 内面：N 3(暗灰)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	

桶図	図版	出土遺構 器 種	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
28	28	S R01 黒色土器A類 碗	6/8 口径15.3 器高 5.3 底径 6.6	内外面：ヘラミガキ	外面：口縁部N 3(暗灰) 他 2.5Y 8/2(灰白) 内面：N 3(暗灰)	0.2mm程の砂粒を 含む	
	134						
28		S R01 黒色土器A類 碗	2/8 口径14.95	内外面：ヘラミガキ	外面：2.5Y 6/2(灰黄) (一部 2.5Y 3/1(黒褐)) 内面：N 2(黒)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
	135						
28		S R01 黒色土器A類 碗	口縁部2/8 口径15.2	内外面：ヘラミガキ	外面：2.5Y 8/2(灰白) 内面：N 2(黒)	0.2~0.4mmの砂粒 をまばらに含む	
	136						
28		S R01 黒色土器A類 碗	底部4/8 底径6.6	内外面：ヘラミガキ 底部：ナデ	外面：N 3(暗灰) 内面：10YR 8/1(灰白)	0.2mm程の砂粒を 含む	
	137						
28		S R01 黒色土器A類 碗	4/8 底径7.4	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ 底部：ヘラ切り	外面：2.5Y 8/2(灰白) 内面：N 3(暗灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
	138						
28		S R01 黒色土器A類 碗	底部8/8 底径5.9	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	外面：2.5Y 8/2(灰白) 内面：N 2(黒)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	139						
28		S R01 黒色土器A類 碗	底部8/8 底径7.1	外面：回転ナデ 横ナデ 内面：ヘラミガキ 底部：ナデ	外面：5Y 7/1(灰白) 一部 2.5Y 2(黒) 内面：N 2(黒)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	140						
28	28	S R01 黒色土器B類 碗	底部8/8 底径4.6	外面：不明 内面：ヘラミガキ	内外面：N 2(黒)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
	141						
28	28	S R01 瓦器 碗	口縁部2/8 口径15.05	外面：横ナデ 指押さえ 内面：暗文	内外面：N 4(灰)	砂粒を殆ど含まな い	和泉型Ⅱ期
	142						
28		S R02 磁器 高台付碗	小破片(4片) 口径16.8 底径 5.8	口縁部~体部内外面に施軸	軸：2.5GY 8/1(灰白) 胎土：7.5Y 8/1(灰白)	緻密	白磁Ⅲ類
	143						
28	28	S R02 磁器 碗	底部4/8 底径7.0	内外面：施軸	外面：N 8(灰白) 内面(軸)：2.5GY 8/2(灰白)	緻密(0.1mm程の 黒色粒をまばらに 含む)	白磁Ⅳ類
	144						
29	29	S R01 須恵器 高杯	脚部破片	外面：ナデ 回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：N 7(灰白) 内面：N 8(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	145						
29		S R01 須恵器 壺	口縁部小破片	内外面：回転ナデ	内外面：N 5(灰)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	146						
29	29	S R01 須恵器 高台付壺	頸部2/8	内外面：回転ナデ	外面：N 5(灰) 内面：N 6(灰)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	147						
29		S R01 須恵器 高台付壺	頸部3/8	内外面：回転ナデ	外面：5Y 6/2(灰オリーブ) 内面：N 7(灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
	148						
29		S R01 須恵器 甕	口縁部1/8 口径22.1	内外面：横ナデ 回転ナデ	外面：N 4(灰) 内面：N 6(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 を含む	
	149						
29		S R01 須恵器 甕	口縁部小破片	口縁：回転ナデ 外面：格子目タタキ 内面：あて具ナデ消し	外面：SP 5/1(紫灰) 内面：N 5(灰)	0.1~4.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	150						
29	29	S R01 須恵器 高台付壺	底部1/8 底径14.5	外面：ヘラ削り 内面：指押さえ	外面：N 5(灰) 内面：N 6(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 を含む	
	151						
29		S R01 須恵器 高台付壺	底部1/8 底径14.2	外面：ナデ ヘラ削り 内面：ナデ	外面：N 5(灰) 内面：N 7(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒 を含む	
	152						
29	29	S R01 須恵器 高台付壺	底部2/8 底径12.4	外面：回転ナデ 内面：ナデ	内外面：SPB 7/1(明青灰) 底部：7.5Y 8/1(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒 を含む	
	153						
29		S R01 須恵器 高台付壺	底部1/8 底径8.1	内外面：回転ナデ	内外面：SP 6/1(紫灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
	154						

挿図	図版	出土遺構	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
番号		器 種					
29		S R01 須恵器 壺	底部2/8 底径11.1	外面：ヘラ削り 内面：指ナデ	外面：N 7(灰) 内面：SPB 6/1(青灰)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
155							
29	29	S R01 須恵器 壺	底部2/8 底径9.4	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ削り	内外面：SPB 7/1(明青灰)	0.2～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
156							
29	29	S R01 須恵器 甕	底部3/8 底径16.8	外面：タタキ後ナデ 内面：ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2～4.0mmの砂粒 を含む	
157							
29		S R01 須恵器 甕	底部2/8 底径14.0	外面：タタキ後回転ナデ 回転ナデ 内面：指ナデ後回転ナデ	外面：5Y 3/1(オリーブ黒) 内面：5Y 5/1(灰)	0.2～2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
158							
29		S R01 須恵器 甕	底部3/8 底径12.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 指ナデ	内外面：N 8(灰)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
159							
29		S R01 須恵器 鉢	口縁部1/8 口径24.9	内外面：回転ナデ	外面：N 6(灰) 内面：5Y 7/1(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
160							
29		S R01 須恵器 こね鉢	口縁部小破片 口径35.0	内外面：回転ナデ	外面：7.5Y 7/1(灰白) 内面：5Y 6/1(灰)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
161							
30	29	S R01 土鍋	口縁部1/8 口径35.5	外面：横ナデ 沈線二条 指押さえ 指ナデ 内面：横ナデ ナデ	外面：7.5YR 7/4(にぶい橙) 内面：7.5YR 7/3(にぶい橙)	0.2～1.0mmの砂粒 を多く含む	
162							
30		S R01 土鍋	口縁部1/8 口径33.2	内外面：横ナデ	外面：10YR 7/3(にぶい黄橙) 内面：2.5Y 7/3(浅黄)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
163							
30	29	S R01 土鍋	口縁部小破片 口径27.0	外面：横ナデ 指押さえ後ハケ目 内面：横ナデ 沈線二条 横ナデ	外面：2.5Y 6/2(灰黄) 一部 2.5Y 3/1(黒褐) 内面：2.5Y 4/1(黄灰)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
164							
30		S R01 土釜	口縁部小破片 口径32.5	外面：ナデ 指押さえ 内面：ナデ	外面：2.5Y 7/3(浅黄) 鈔より下 2.5Y 3/1(黒褐) 内面：2.5Y 7/3(浅黄)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
165							
30		S R01 土釜	口縁部小破片 口径30.0	外面：横ナデ 指ナデ押さえ 内面：ナデ	内外面：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
166							
30	30	S R01 土釜	口縁部1/8 口径30.0	外面：ナデ ハケ目 内面：ナデ	内外面：10YR 4/1(褐灰)	0.2～3.0mmの砂粒 を含む	
167							
30		S R01 土釜	口縁部1/8 口径26.7	外面：横ナデ 指押さえ 内面：ナデ	内外面：2.5Y 7/2(灰黄)	0.2～1.5mmの砂粒 を多く含む	
168							
30	30	S R01 土釜	口縁部1/8 口径26.4	外面：ナデ 指押さえ 内面：ナデ	内外面：2.5Y 7/2(灰黄) (外面一部 2.5Y 2/黒)	0.2～1.0mmの砂粒 を多く含む	
169							
30		S R01 土釜	口縁部1/8	外面：横ナデ 指押さえ 内面：ナデ	外面：5Y 8/2(灰白) 内面：2.5Y 7/2(灰黄)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	
170							
30		S R01 土釜	口縁部破片	外面：不明 内面：ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
171							
31	30	S R01 平瓦	破片	外面：布目圧痕 内面：縄タタキ目	内外面：N 6(灰)	砂粒をほとんど含 まない	
172							
31	30	S R01 平瓦	破片	外面：布目圧痕 内面：縄タタキ目	内外面：5Y 7/1(灰白)～N 4(灰)	砂粒をほとんど含 まない	
173							
31	30	S R01 平瓦	破片	外面：布目後ナデ 内面：縄タタキ目後ナデ	内外面：N 5(灰)	砂粒を含まない	
174							
31		S R01 平瓦	破片	外面：布目圧痕 内面：縄タタキ目	外面：N 8(灰白) 内面：N 4(灰)	砂粒を含まない	
175							

挿図 番号	図版 番号	出土遺構 器種	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色調	胎土	備考
31	30	S R01 丸瓦	破片	外面：板ナデ 内面：布目圧痕	外面：N 4(灰) 内面：N 3(暗灰)	0.2mmの砂粒をまばらに含む	
176							
31	30	S R01 丸瓦	破片	内外面：布目圧痕	内外面：7.5Y 8/1(灰白)	砂粒をほとんど含まない	
177							
35	31	S K01 土師器 小皿	5/8 口径5.8 器高1.1 底径4.7	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒を含む	
181							
35	31	S K01 土師器 小皿	8/8 口径5.9 器高1.1 底径4.7	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 7/2(灰黄)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	
182							
35	31	S K01 土師器 小皿	7/8 口径5.85 器高1.3 底径4.8	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒を含む	
183							
35	31	S K01 土師器 小皿	8/8 口径6.0 器高1.3 底径4.3	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後板押さえ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒を含む	
184							
35	31	S K01 土師器 小皿	8/8 口径6.0 器高1.1 底径4.7	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後板押さえ	外面：7.5Y R 8/3(浅黄橙) 内面：2.5Y 8/3(浅黄)	0.2~1.5mmの砂粒を含む	
185							
35		S K01 須恵器 甕	口縁部1/8 口径25.4	内外面：回転ナデ	外面：N 5(灰) 内面：N 6(灰)	0.2~1.0mmの砂粒を含む	
186							
35	31	S K01 土釜	口縁部4/8 口径22.0	外面：横ナデ 指ナデ 指押さえ 内面：指ナデ	外面：7.5YR 6/3(ぶい褐) 内面：10YR 6/4(ぶい黄橙)	0.2~3.0mmの砂粒を多く含む	
187							
40		S B02 土師器 杯	底部8/8 底径5.3	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	外面：10YR 8/2(灰白) 内面：2.5Y 8/2(灰色)	0.2~0.5mmの砂粒を含む	
188							
40		S B02 土師器 小皿	3/8 口径7.2 器高1.1 底径5.5	内外面：回転ナデ 底部：ナデ	内外面：7.5YR 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒を含む	
189							
40	32	S B02 土師器 杯	3/8 口径10.8 器高2.8 底径5.4	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
190							
40	32	S B02 土師器 杯	7/8 口径10.3 器高3.0 底径5.5	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/3(淡黄)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	
191							
40	32	S B02 土師器 杯	4/8 口径10.4 器高2.7 底径6.4	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：7.5YR 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	
192							
40	32	S B02 備前焼 小壺	体部1/8以下 底径8.4	内外面：回転ナデ 沈線二条 底部：糸切り	外面：2.5Y 5/1(黄灰) ~7.5YR 4/4(褐) 内面：5Y 5/1(灰)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	
193							
41	32	S P33 須恵器 こね鉢	口縁部1/8 口径29.5	内外面：回転ナデ	内外面：N 6(灰) 口縁部外面：N 4(灰)	0.2~3.0mmの砂粒を含む	東播系
194							
41	32	S P33 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ ハケ後指ナデ 内面：ハケ目	内外面：2.5Y 6/1(黄灰)	0.2~0.5mmの砂粒を含む	
195							
41	32	S P50 須恵器 こね鉢	底部5/8 底径9.4	内外面：回転ナデ 底部：糸切り	内外面：N 8(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒を含む	
196							
41		S K02 土師器 鉢	底部2/8	内外面：不明	外面：5Y 4/1(灰) 内面：10YR 8/2(灰白)	0.2~1.5mmの砂粒を多く含む	
197							
43		S D07 土師器 上層杯	底部2/8 口径12.8 器高3.1底径7.5	内外面：回転ナデ 底部：粘土紐を巻く円盤状高台状	内外面：10YR 6/2(灰黄褐)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
198							
43		S D07 土師器 上層杯	6/8 口径12.1 器高2.75 底径7.4	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	
199							

挿図 番号	図版	出土遺構		残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
		器 種						
43		S D07 土師器	上層 杯	口縁部2/8 口径12.0	内外面：回転ナデ	内外面：7.5YR 7/4(ぶい橙)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
200								
43		S D07 土師器	上層 杯	底部4/8 底径6.8	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 6/1(黄灰)	0.2～0.5mmの砂粒 を含む	
201								
43		S D07 土師器	上層 杯	底部4/8 底径6.9	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
202								
43		S D07 土師器	上層 杯	底部8/8 底径6.0	内外面：不明	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
203								
43	33	S D07 土師器	上層 杯	底部8/8 底径7.3	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
204								
43	33	S D07 土師器	上層 碗	2/8 底径4.1	外面：指押さえ ナデ 内面：回転ナデ	内外面：5Y 8/1(灰白)	0.1～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
205								
43	33	S D07 土師器	上層 碗	底部8/8 底径6.7	内外面：不明	外面：10YR 8/2(灰白) 内面：5Y 4/1(灰)	0.2～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
206								
43	33	S D07 須恵器	上層 杯	5/8 口径15.0 器高 5.2 底径 7.0	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	内外面ともに火ダスキあり
207								
43		S D07 須恵器	上層 壺	口縁部2/8 口径10.6	内外面：回転ナデ	外面：N 5/(灰) 内面：N7/(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
208								
43		S D07 須恵器	上層 器種不明	1/8 底径16.0	内外面：回転ナデ	外面：5RP 5/1(紫灰)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
209								
43	33	S D07 土釜	上層 土釜	4/8 口径30.2	外面：横ナデ 指押さえ ハケ目 内面：横ナデ ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白) ～2.5Y 6/1	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
210								
43		S D07 土師質	上層 甕	口縁部1/8 口径19.0	外面：横ナデ 浅い沈線一条 ハケ目 内面：横ナデ 指ナデ	外面：7.5YR 4/3(褐) 内面：7.5YR 6/3(ぶい褐)	0.2～3.0mmの砂粒 を含む	
211								
44		S D07 土師器	中層 杯	1/8 底径6.0	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	外面：10YR 8/3(浅黄橙) 内面：7.5YR 8/4(浅黄橙)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
212								
44	33	S D07 土師器	中層 杯	底部8/8 底径7.6	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	外面：10YR 8/3(浅黄橙) 内面：2.5YR 8/2(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
213								
44		S D07 須恵器	中層 蓋	小破片	内外面：回転ナデ 横ナデ	内外面：N 5/(灰)	0.2～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
214								
44		S D07 土師器	中層 土鍋	口縁部破片	外面：不明 内面：横ナデ ナデ	外面：7.5YR 7/4(ぶい橙) 内面：7.5YR 4/1(灰)	0.2～3.0mmの砂粒 を含む	
215								
44		S D07 土師器	下層 甕	口縁部破片	外面：不明 沈線一条 内面：横ナデ 指ナデ	外面：2.5YR 3/1(暗赤灰) 内面：5YR 4/1(褐灰)	0.2～3.0mmの砂粒 を多く含む	
216								
44		S D07 土師器	下層 杯	底部4/8 底径7.5	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
217								
44	33	S D07 土釜	下層 土釜	脚部3/8	外面：指ナデ 内面：ナデ	内外面：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
218								
46		S D08 土師器	上層 杯	口縁部1/8 口径14.5	内外面：回転ナデ	外面：5YR 8/4(淡橙)～7.5YR 8/3 (淡黄橙) 内面：5YR 6/4(ぶい 橙)～5YR 8/4(淡橙)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
223								
46		S D08 須恵器	上層 杯蓋	口縁部小破片	内外面：回転ナデ	内外面：N 5/(灰)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
224								

挿図 番号	図版 番号	出土遺構		残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
		器 種						
46	33	S D08 緑釉陶器	上層 碗	底部8/8 底径6.2	不明	内外面：N 6(灰) 胎土：10YR 7/3(にぶい黄橙)	0.2～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	京都産 露胎
46	33	S D08 須恵器	下層 甕	口縁部2/8 口径18.8	内外面：回転ナデ	内外面：N 7(灰白) 軸：10Y 4/2(オリーブ灰)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	自然軸がかかる
46	227	S D08 須恵器	下層 甕	口縁部1/8 口径29.5	内外面：回転ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	
46	228	S D08 須恵器	下層 甕	口縁部小破片	外面：ナデ 内面：ハケ目	外面：5PB 6/1(青灰) 内面：2.5GY 6/1(オリーブ灰)	0.2～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
47	231	S D10 土師器	杯	1/8	内外面：ナデ	内外面：10YR 8/3(淡黄橙)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
47	232	S D10 土師器	鉢	口縁部小破片	外面：横ナデ 指押さえ 内面：横ナデ	外面：10YR 6/2(灰黄褐) 内面～口縁部外面 ：2.5Y 7/1(灰白)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	
47	34	S D10 土釜		口縁部1/8 口径24.2	外面：横ナデ 指ナデ 内面：ナデ	外面：10YR 6/2(灰黄褐) 内面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	
47	34	S D10 土釜		口縁部小破片 口径23.6	外面：横ナデ 指押さえ 内面：ハケ後ナデ	外面：2.5Y 8/2(灰白) 内面：10YR 8/2(灰白)	0.2～3.0mmの砂粒 を含む	
47	235	S D10 土釜		口縁部1/8 口径22.4	外面：回転ナデ 指押さえ ナデ 内面：ナデ ハケ目	外面(鑄より下)：10YR 6/1(褐灰) 内面と鑄より上の外面 ：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2～2.0mmの砂粒 を多く含む	
47	34	S D10 土釜		口縁部小破片	外面：ナデ 指押さえ 内面：ハケ目	内外面：5YR 6/6(橙)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
47	237	S D10 土釜		脚部6/8	外面：指ナデ	10YR 8/1(灰白)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	
47	238	S D11 土鍋		口縁部小破片	外面：指ナデ 内面：ハケ目	外面：7.5YR 5/4(にぶい褐) 内面：2.5Y 7/3(浅黄)	0.2～0.5mmの砂粒 を含む	
51	34	S D04 弥生土器		底部6/8 底径6.3	不明	内外面：7.5YR 5/6(明褐)	0.2～5.0mmの砂粒 を多く含む	
53	240	S D06 須恵器	杯	底部破片	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：N 5(灰)	0.2～0.5mmの砂粒 を含む	
53	34	S D06 陶器	三島唐津鉢	体部小破片	外面：回転ナデ 内面：文様(三島唐津手・施軸)	外面：10R 4/3(赤褐) 内面：浅黄色の釉 胎土：2.5YR 6/4(にぶい橙)	0.2mmの砂粒を含 む	
53	242	S D06 須恵器	壺	底部3/8 底径10.1	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：5PB 6/1(青灰)	0.2～1.5mmの砂粒 を含む	
53	34	S D06 磁器	碗	口縁部破片 口径19.3	内外面：回転ナデ 施軸	内外面：2.5GY 8/1(灰白)	砂粒を含まない	
56	246	中部地区 須恵器	包含層 杯	口縁部1/8 口径13.2	内外面：回転ナデ	内外面：N 7(灰白)	砂粒をほとんど含 まない	
56	247	中部地区 須恵器	包含層 杯	口縁部1/8 口径13.3 器高3.4底径7.7	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：N 8(灰白)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
56	248	中部地区 須恵器	包含層 杯	破片	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：N 8(灰白)	0.2～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
56	34	中部地区 須恵器	包含層 皿	3/8 口径12.5 器高 2.1 底径 9.1	外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り 内面：回転ナデ 底部：板ナデ	内外面：N 8(灰白)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	

挿図 番号	図版	出土遺構		残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
		器 種						
56		中部地区 須恵器 甕	包含層 口縁部破片		内外面：回転ナデ	外面：N 6(灰) 内面：N 4(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
250								
56		中部地区 瓦質土器	包含層 こね鉢	口縁部破片	内外面：回転ナデ	内外面：N 5(灰)	0.2mmの砂粒をまばらに含む	
251								
56		中部地区 土釜	包含層 口縁部小破片	口径20.2	外面：横ナデ 指押さえ 内面：横ナデ ハケ目	外面(鈔より上)：10YR 7/2(ぶい黄橙) 外面(鈔より下)：10YR 7/2(褐灰) 内面：10YR 7/2(ぶい黄橙)	0.2~2.0mmの砂粒を含む	
252								
56	34	中部地区 蛸壺	包含層	8/8 器高 8.3 底径 4.0	内外面：指ナデ	外面：10YR 8/2(灰白) 内面：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2~1.5mmの砂粒を含む	
253								
57	35	中部地区 瓦器 椀	包含層	4/8 口径16.0 器高 4.55 底径 4.8	外面：ナデ 指押さえ 内面：不明	内外面：N 4(灰)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	和泉型
254								
57		中部地区 ふいこの羽口	包含層	脚部3/8	外面：不明 内面：指押さえ	外面：2.5Y 7/2(灰黄) 内面：10YR 7/3(ぶい黄橙)	1.0~4.0mmの砂粒を多く含む	0.2~0.5mmの金雲母を含む
255								
57		中部地区 須恵器 蓋	包含層	破片、口径 9.8	内外面：回転ナデ	内外面：N 8(灰白)	0.2mm程の砂粒をまばらに含む	
256								
57		中部地区 須恵器 蓋	包含層	2/8	つまみ部：ナデ 内外面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒をまばらに含む	
257								
57		中部地区 須恵器 蓋	包含層	破片、口径17.1 底径12.2	外面：ヘラ切り後ナデ 回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：N 8(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
258								
57		中部地区 須恵器 杯	包含層	底部1/8 底径7.6	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：N 6(灰)	0.2mmの砂粒をまばらに含む	
259								
57		中部地区 須恵器 杯	包含層	底部2/8 底径7.1	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：N 8(灰白)	0.2mmの砂粒をまばらに含む	
260								
57	35	中部地区 須恵器 杯	包含層	底部3/8 底径6.5	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：N 5(灰)	0.2~0.5mmの砂粒を含む	
261								
57		中部地区 須恵器 皿	包含層	底部2/8 口径13.7 器高 2.2 底径10.4	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：N 7(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
262								
57		中部地区 須恵器 高杯 脚	包含層	脚部1/8 底径11.2	内外面：回転ナデ	内外面：N 5(灰)	0.2~0.1mmの砂粒をまばらに含む	
263								
57		中部地区 須恵器 壺	包含層	底部4/8	外面：ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
264								
57		中部地区 須恵器 高台付壺	包含層	底部2/8 底径8.6	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 7/1(灰白)	0.2~1.5mmの砂粒を含む	
265								
57		中部地区 須恵器 甕	包含層	口縁部1/8 口径21.65	内外面：回転ナデ	内外面：N 5(灰)	0.2~0.5mmの砂粒をわずかに含む	
266								
57	35	中部地区 土釜	包含層	口縁部2/8 口径23.9	外面：横ナデ 指押さえ ナデ 内面：不明	外面(鈔より下)2.5Y：4/1(黄灰) 内面・外面(鈔より上)：2.5Y 7/3 (浅黄)	0.2~2.0mmの砂粒を多く含む	
267								
58		中部地区 殊生土器 甕	包含層	口縁部2/8 口径15.6	口縁部：横ナデ 内外面：不明	外面：7.5YR 4/4(褐) 内面：5Y 4/2(灰オリーブ)	0.2~2.5mmの砂粒を含む	金雲母を多く含む
268								
58	34	中部地区 土師器 杯	包含層	7/8 口径10.6 器高 2.7 底径 6.1	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
269								
58	34	中部地区 土師器 杯	包含層	底部7/8 口径10.2 器高 2.8 底径6.45	外面：回転ナデ ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	内外面：2.5Y8/2(灰白)	0.2~0.5mmの砂粒をまばらに含む	
270								

挿図	図版	出土遺構	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
番号		器 種					
58	271	中部地区 包含層 土師器 椀	底部3/8 底径5.5	外面：ナデ 内面：不明	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
58	272	中部地区 包含層 黒色土器B類 椀	体部小破片	内外面：ヘラミガキ	内外面：N 2(黒)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
58	273	中部地区 包含層 須恵器 高杯	5/8 器高 3.0 底径 6.4	内外面：回転ナデ	内外面：N 8(灰白)	0.2mm程の砂粒を 含む	
58	274	中部地区 包含層 須恵器 高杯	破片	内外面：不明	内外面：N 7(灰白)	0.2～1.0mm程の砂 粒を含む	
58	275	中部地区 包含層 白磁 椀	口縁部1/8 口径17.95	内外面：回転ナデ 施軸	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	密 砂粒をほとん ど含まない	
58	276	中部地区 包含層 青磁 椀	底部3/8 底径4.2	内外面：回転ナデ 底部以外にオリーブ色の施軸	露胎：2.5Y 8/1(灰白) 軸：10Y 6/2(オリーブ灰)	砂粒を含まない	
58	277	中部地区 包含層 須恵器 甕	破片	内外面：回転ナデ	内外面：N 7(灰白)	0.2～3.5mmの砂粒 を含む	
58	278	中部地区 包含層 土釜	口縁部1/8 口径26.0	外面：ハケ後指ナデ 内面：ナデ	外面：10YR 5/2(灰黄褐) 内面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2～4.0mmの砂粒 を含む	
58	279	中部地区 包含層 かまど	破片	外面：指ナデ 内面：ハケ後ナデ	外面：10YR 6/3(にぶい黄褐) 内面：7.5YR 4/3(褐)	0.2～6.0mmの砂粒 を多く含む	
58	280	中部地区 包含層 すり鉢	3/8 口径31.0 器高11.4 底径14.2	外面：回転ナデ 底部：ヘラ削り 内面：おろし目	内外面・口縁部：2.5YR 4/3 (にぶい赤褐) 底部付近：5YR 6/6(橙)	0.2～2.0mmの砂粒 を含む	
58	281	中部地区 包含層 土師質土器 壺	口縁部2/8 底部7/8 口径 13.9 底径12.7	外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ	内外面：7.5YR 7/6(橙)	0.2～4.0mmの砂粒 を多く含む	
58	282	中部地区 包含層 瓦質土器 ほうろく	2/8 口径37.8	外面：横ナデ 指押さえ後ナデ ナデ 内面：ハケ後ナデ	内外面：5Y 4/1(灰)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
59	283	東部地区 包含層 土師器 杯	底部1/8 口径11.1 器高3.0底径7.6	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2～0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
59	284	東部地区 包含層 土師器 椀	底部1/8 底径6.1	外面：不明 内面：ナデか?	外面：2.5Y 4/1(黄灰) 内面：5YR 8/4(淡橙)	0.2～1.0mmの砂粒 を含む	
59	285	東部地区 包含層 白磁 椀	口縁部小破片 口径19.6	内外面：回転ナデ 灰白色の施軸	外面：10YR 6/2(灰黄褐) 内面：2.5Y 5/2(暗灰黄)	砂粒を含まない	
59	286	東部地区 包含層 青磁 椀?	破片	内外面：回転ナデ 施軸	胎土：7.5Y 7/1(灰白) 軸：5GY 6/1(オリーブ灰)	精良 砂粒を含まない	
59	287	東部地区 包含層 青磁 椀	破片	内面：沈線一条 施軸	内外面：2.5GY 5/1(オリーブ灰)	0.4mm程の砂粒を まばらに含む	
59	288	東部地区 包含層 須恵器 甕	破片	内外面：回転ナデ	外面：2.5YR 4/2(灰赤) 内面：N 5(灰)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
59	289	東部地区 包含層 土鍋	口縁部1/8 口径40.5	外面：指押さえ 指ナデ 内面：横ナデ	外面：7.5YR 5/3(にぶい褐) 内面：5YR 7/4(にぶい橙)	0.2～1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
59	290	東部地区 包含層 土釜	1/8 口径22.9	外面：横ナデ ハケ後ナデ 内面：ハケ目	外面：7.5YR 6/4(にぶい橙)	0.2～1.5mmの砂粒 を含む	
59	291	東部地区 包含層 土釜	破片	外面：ナデ 指押さえ 内面：ハケ目	鈔より上：10YR 8/2(灰白) 鈔より下：10YR 4/2(灰黄褐)	0.2～2.0mmの砂粒 をわずかに含む	

挿図	図版	出土遺構		残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
		番 号	器 種					
59	34	東部地区	包含層 土釜	脚部8/8	外面：指ナデ	外面：2.5Y 8/3(淡黄)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	
	292							
59		東部地区	包含層 須恵器 こね鉢	口縁部小破片	外面：ナデ 内面：浅いハケ目	内外面：2.5Y 8/1(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
	293							
59		東部地区	包含層 須恵器 こね鉢?	破片	内外面：横ナデ	口縁部：N 4(灰) 口縁より下：N 6(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
	294							
60	35	西部地区	包含層 弥生土器 壺	底部8/8 底径9.9	外面：不明 内面：指押さえ	外面：7.5YR 5/8(明褐) 内面：5Y 5/1(灰)	0.2~7.0mmの砂粒 を多く含む	
	295							
60		西部地区	包含層 土師器 杯	底部1/8	内外面：ナデ	内外面：5YR 5/6(明赤褐)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	296							
60	35	西部地区	包含層 土師器 椀	3/8 口径11.9 器高 4.2 底径 4.9	内外面：回転ナデ 底部：ヘラ切り	内外面：2.5Y 8/2(灰白) 見込み：5PB 6/1(青灰)	0.2~0.5mmの砂粒 を含む	
	297							
60		西部地区	包含層 土師器 椀	口縁部2/8 口径10.4 器高3.4底径4.7	内外面：回転ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白) 見込み：5Y 5/1(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
	298							
60		西部地区	包含層 土師器 椀	底部7/8 底径5.4	外面：不明 底部：ヘラ切り後ナデ 内面：ナデ	内外面：2.5Y 8/2(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
	299							
60		西部地区	包含層 黒色土器A類 椀	底部2/8 底径6.1	外面：回転ナデ 横ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ 内面：ヘラミガキ	外面：2.5Y 8/2(灰白) 内面：2.5Y 3/1(黒褐)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
	300							
60		西部地区	包含層 黒色土器B類 椀	底部2/8 底径5.7	内外面：不明	内外面：5GY 2/1(オリーブ黒)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
	301							
60		西部地区	包含層 須恵器 壺	小破片	内外面：回転ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2~0.4mmの砂粒 をまばらに含む	
	302							
60		西部地区	包含層 須恵器 椀	底部3/8 底径5.5	外面：回転ナデ 内面：ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をわずかに含む	
	303							
60		西部地区	包含層 瓦器 椀	底部4/8 底径3.7	外面：ナデ 内面：略文	内外面：N 8(灰白)~N 5(灰)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
	304							
60		西部地区	包含層 青磁 椀	口縁部破片	外面：鎔連弁 内外面：施軸	軸内外面：10G 7/1(明緑灰)	砂粒は含まない	
	305							
60		西部地区	包含層 須恵器 壺	1/8 口径 9.8	内外面：横ナデ	外面：SP 5/1(紫灰) 内面：N 4(灰)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	
	306							
60		西部地区	包含層 須恵器 壺	1/8 口径 9.2	内外面：回転ナデ	内外面：N 5(灰)	0.2mm程の砂粒を まばらに含む	
	307							
60		西部地区	包含層 須恵器 甕	口縁部小破片 口径27.5	内外面：回転ナデ	内外面：N 7(灰白)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
	308							
60		西部地区	包含層 瓦質土器 甕	口縁部1/8 口径25.9	外面：板ナデ後回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：N 6(灰) 内面：N 5(灰)	0.2~2.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	309							
60		西部地区	包含層 須恵器 壺	底部2/8 底径8.3	内外面：回転ナデ	内外面：N 6(灰)	0.2mmの砂粒をま ばらに含む	
	310							
60		西部地区	包含層 須恵器 壺	底部小破片	外面：ナデ 内面：回転ナデ	外面：N 4(灰) 底部：N 7(灰白) 内面：5PB 6/1(青灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
	311							
60		西部地区	包含層 須恵器 瓶子	底部8/8 底径4.1	内外面：回転ナデ 底部：糸切り	内外面：N 6(灰)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
	312							

挿図	図版	出土遺構	残存率・法量 (cm)	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
番号		器 種					
60	35	西部地区 包含層 常滑 甕	口縁部小破片	内外面：回転ナデ	外面：5YR 6/2(灰褐) 内面：7.5YR 6/3(ぶい褐) (5Y 4/4暗オリープの自然釉)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
61	314	西部地区 包含層 土鉢	口縁部1/8 口径40.9	口縁部：横ナデ 外面：ハケ後指ナデ 内面：ナデ	内外面：10YR 8/2(灰白) 10YR 4/2(灰黄褐)	0.2~2.0mmの砂粒 を含む	
61	315	西部地区 包含層 土釜	1/8	外面：横ナデ 指押さえ 内面：横ナデ	外面：2.5Y 8/2(灰白) 5Y 3/1(オリープ黒) 内面：2.5Y 8/2(灰白)	0.5~1.0mmの砂粒 を多く含む	
61	316	西部地区 包含層 土釜	口縁部1/8 口径25.2	外面：指押さえ 内面：指ナデ	外面：10YR 6/2(灰黄褐) 内面：10YR 8/3(浅黄橙)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
61	317	西部地区 包含層 土釜	脚部6/8	外面：指ナデ	5YR 8/3(淡橙)	0.2~3.0mmの砂粒 を含む	
61	318	西部地区 包含層 瓦質土器 こね鉢	口縁部小破片	内外面：回転ナデ	口縁部：N 6(灰) 内外面体部：N 8(灰白)	0.2~1.0mmの砂粒 をまばらに含む	
61	319	西部地区 包含層 須恵器 すり鉢	口縁部1/8 口径30.8	外面：横ナデ 指押さえ 内面：おろし目	内外面：5Y 8/1(灰白) 口縁部外面：N 6(灰)	0.2~0.5mmの砂粒 をまばらに含む	
61	320	西部地区 包含層 須恵器 すり鉢	口縁部小破片	外面：回転ナデ 内面：おろし目	外面(口縁)：N 5(灰) (体部)：7.5 Y 6/1(灰) 内面：5Y 5/1(灰)	0.2~1.0mmの砂粒 を含む	
61	321	西部地区 包含層 土師器 すり鉢	口縁部小破片	外面：ナデ 指押さえ 内面：ナデ	外面：10 Y R 7/3(ぶい黄橙) 内面：10 Y R 8/2(灰白)	0.2~5.0mmの砂粒 を含む	
61	35 322	西部地区 包含層 土鉢	7/8	外面：指ナデ	5YR 4/3(ぶい赤褐)	0.2~1.5mmの砂粒 を含む	

挿図	図版	出土遺構	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材 質	重 量 (g)	備 考
24	26 87	S R02	スクレイパー	8.7	5.2	0.6	サヌカイト	29.2	
24	26 88	S R02	スクレイパー	7.7	(4.5)	1.1	サヌカイト	(35.6)	打製石斧を再利用したものか? 刃部に若干の摩滅が見られる
24	89	S R02	スクレイパー	5.7	5.6	1.2	サヌカイト	(39.5)	打製石斧を再利用したものか? 頸部に敲打痕、若干の摩滅が見られる
24	26 90	S R02	石庖丁	11.6	5.4	0.9	サヌカイト	71.7	全体に摩滅している
24	26 91	S R02	打製石斧	(7.3)	4.7	1.2	サヌカイト	(49.1)	小型品 刃部に摩滅、擦痕が顕著に見られる
25	26 92	S R02	磨石	13.1	9.9	6.8	ひん岩	1473.6	擦痕が見られる
44	219	S D07	石鏃	(2.0)	1.9	0.3	サヌカイト	(0.8)	基部を欠損している
44	220	S D07	スクレイパー	7.7	3.9	1.2	サヌカイト	33.6	表面に自然面を残す 敲打痕が見られる
44	33 221	S D07	スクレイパー	6.2	5.1	0.9	サヌカイト	39.4	打製石斧を再利用したものか? 刃部に敲打痕が見られる

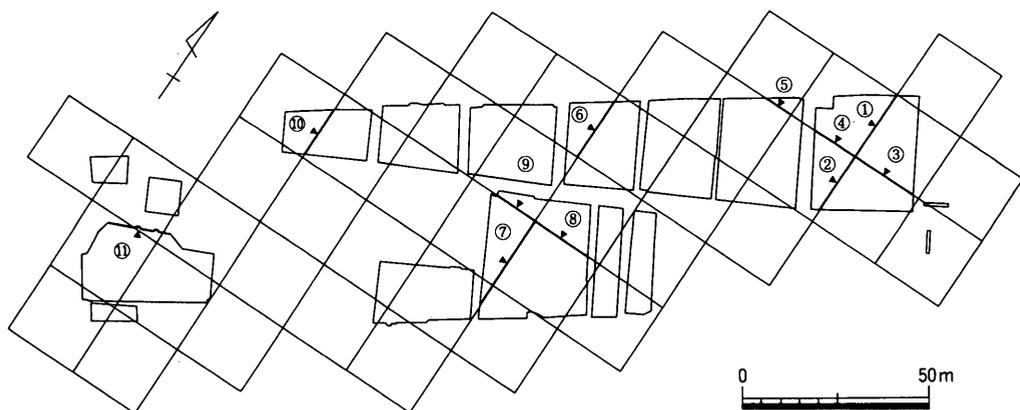
種別	図版	出土遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重さ (g)	備考																																																																																																																																																													
44		S D07	剥片	5.4	3.2	0.6	サヌカイト	12.6																																																																																																																																																														
222										46		S D08	スクレイパー	4.3	4.1	0.8	サヌカイト	15.1	刃部に若干の摩滅が見られる	229		46		S D08	剥片	5.5	3.9	0.6	サヌカイト	14.7		230		53	34	S D06	磨製石斧	(10.0)	4.9	2.1	蛇紋岩	(150.9)	擦痕が全体に顕著に見られる	244		53		S D06	二次加工のある剥片	(6.6)	5.5	2.3	サヌカイト	(118.1)	摩滅が著しい	245		62	35	中部地区 包含層	石鏃	2.1	1.6	0.3	サヌカイト	0.5	風化が著しい	323			62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している	324			62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)
46		S D08	スクレイパー	4.3	4.1	0.8	サヌカイト	15.1	刃部に若干の摩滅が見られる																																																																																																																																																													
229										46		S D08	剥片	5.5	3.9	0.6	サヌカイト	14.7		230		53	34	S D06	磨製石斧	(10.0)	4.9	2.1	蛇紋岩	(150.9)	擦痕が全体に顕著に見られる	244		53		S D06	二次加工のある剥片	(6.6)	5.5	2.3	サヌカイト	(118.1)	摩滅が著しい	245		62	35	中部地区 包含層	石鏃	2.1	1.6	0.3	サヌカイト	0.5	風化が著しい	323			62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している	324			62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331						
46		S D08	剥片	5.5	3.9	0.6	サヌカイト	14.7																																																																																																																																																														
230										53	34	S D06	磨製石斧	(10.0)	4.9	2.1	蛇紋岩	(150.9)	擦痕が全体に顕著に見られる	244		53		S D06	二次加工のある剥片	(6.6)	5.5	2.3	サヌカイト	(118.1)	摩滅が著しい	245		62	35	中部地区 包含層	石鏃	2.1	1.6	0.3	サヌカイト	0.5	風化が著しい	323			62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している	324			62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																		
53	34	S D06	磨製石斧	(10.0)	4.9	2.1	蛇紋岩	(150.9)	擦痕が全体に顕著に見られる																																																																																																																																																													
244										53		S D06	二次加工のある剥片	(6.6)	5.5	2.3	サヌカイト	(118.1)	摩滅が著しい	245		62	35	中部地区 包含層	石鏃	2.1	1.6	0.3	サヌカイト	0.5	風化が著しい	323			62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している	324			62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																														
53		S D06	二次加工のある剥片	(6.6)	5.5	2.3	サヌカイト	(118.1)	摩滅が著しい																																																																																																																																																													
245										62	35	中部地区 包含層	石鏃	2.1	1.6	0.3	サヌカイト	0.5	風化が著しい	323			62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している	324			62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																										
62	35	中部地区 包含層	石鏃	2.1	1.6	0.3	サヌカイト	0.5	風化が著しい																																																																																																																																																													
323										62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している	324			62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																							
62	35	西部地区 包含層	石鏃	(2.8)	2.1	0.6	サヌカイト	(2.2)	基部を欠損している																																																																																																																																																													
324										62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる	325			63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																				
62		不明	打製石斧	8.4	5.9	1.7	サヌカイト	94.6	両側面に敲打痕が見られる																																																																																																																																																													
325										63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる	326			63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																																	
63		不明	二次加工のある剥片	5.4	4.1	0.7	サヌカイト	17.3	自然面を残し、左側面に敲打痕が見られる																																																																																																																																																													
326										63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる	327			63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																																														
63		東部地区 包含層	打製石斧	8.6	5.4	1.7	サヌカイト	94.6	刃部を欠損している 自然面を残し両側面に敲打痕が見られる																																																																																																																																																													
327										63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる	328			63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																																																											
63		中部地区 包含層	スクレイパー	(5.9)	6.2	1.1	サヌカイト	45.3	表面に自然面を残す 左側面に敲打痕が見られる																																																																																																																																																													
328										63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる	329			63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																																																																								
63	36	中部地区 包含層	スクレイパー	5.6	4.5	0.8	サヌカイト	17.9	上面に敲打痕が見られる																																																																																																																																																													
329										63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる	330			63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																																																																																					
63		中部地区 包含層	打製石斧	(9.5)	4.4	1.5	サヌカイト	(69.3)	表面に自然面を残し、全体に摩滅している 両側面には敲打痕も見られる																																																																																																																																																													
330										63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる	331																																																																																																																																																		
63	36	中部地区 包含層	打製石斧	(6.8)	4.0	1.1	サヌカイト	(30.8)	小型品 自然面を残し敲打痕、摩滅が見られる																																																																																																																																																													
331																																																																																																																																																																						

第4章 B地区の調査

第1節 土層序

本遺跡地においては、大部分の遺構を、現地形における表土層（主として水田耕作土と「床土」と呼称される水田耕作土の下部に充填された土壌。ただし、一部分に家屋の基盤土壌が認められる。）の除去後に検出している。これは、当該地域における土砂の堆積作用が著しく抑制されたことを示唆しており、その原因として耕地が継続的に維持・管理された可能性が指摘できるのである。ただし、考古学的な情報を用いて、この点を裏付けることは容易ではなく、明治24年の地形図（日本陸軍歩兵第12連隊作製「丸亀町」1：20000）の読解作業により、近代以降における土地条件を概観することができるのみである。同地図の本遺跡周辺地域の土地利用状況は、大抵的な区画が今日と大差なく、全域が水田地であることが判る。すなわち、農耕地の改変が局所的な一部地域のみにおいて実施することが困難であることを考慮するならば、当時以降今日に至るまで当該地域の景観は大きく異ならず、しかも、新たな土壌の堆積が生じなかったことを推測することは困難ではないと考えられるのである。

ところで、調査対象地域の東半部と西端部を中心とする地域においては、表土層と遺構検出面の間隙に遺物包含層の堆積を観察することができる。この層序の成因については、遺構が形成された当時の地表面が農耕活動等による要因により削取された後に、自然の営

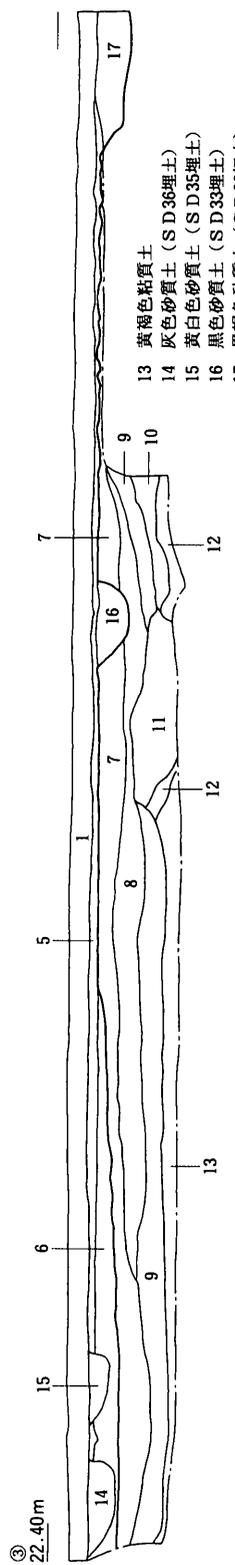
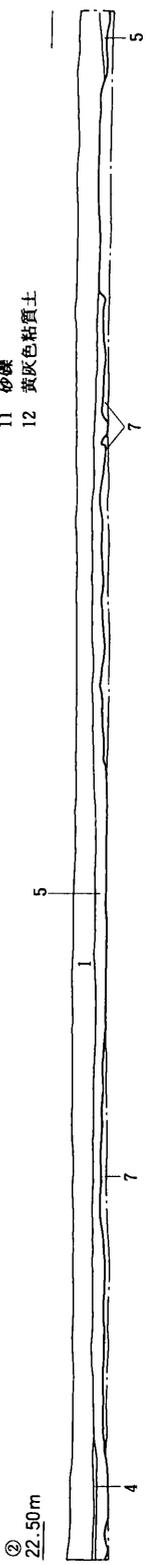
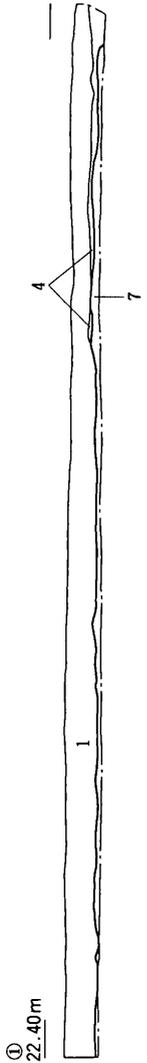


アラビア数字は第66～68図に対応する

第65図 B地区調査区割り・土層序観察位置図

1 黑色土 (現代耕作土)

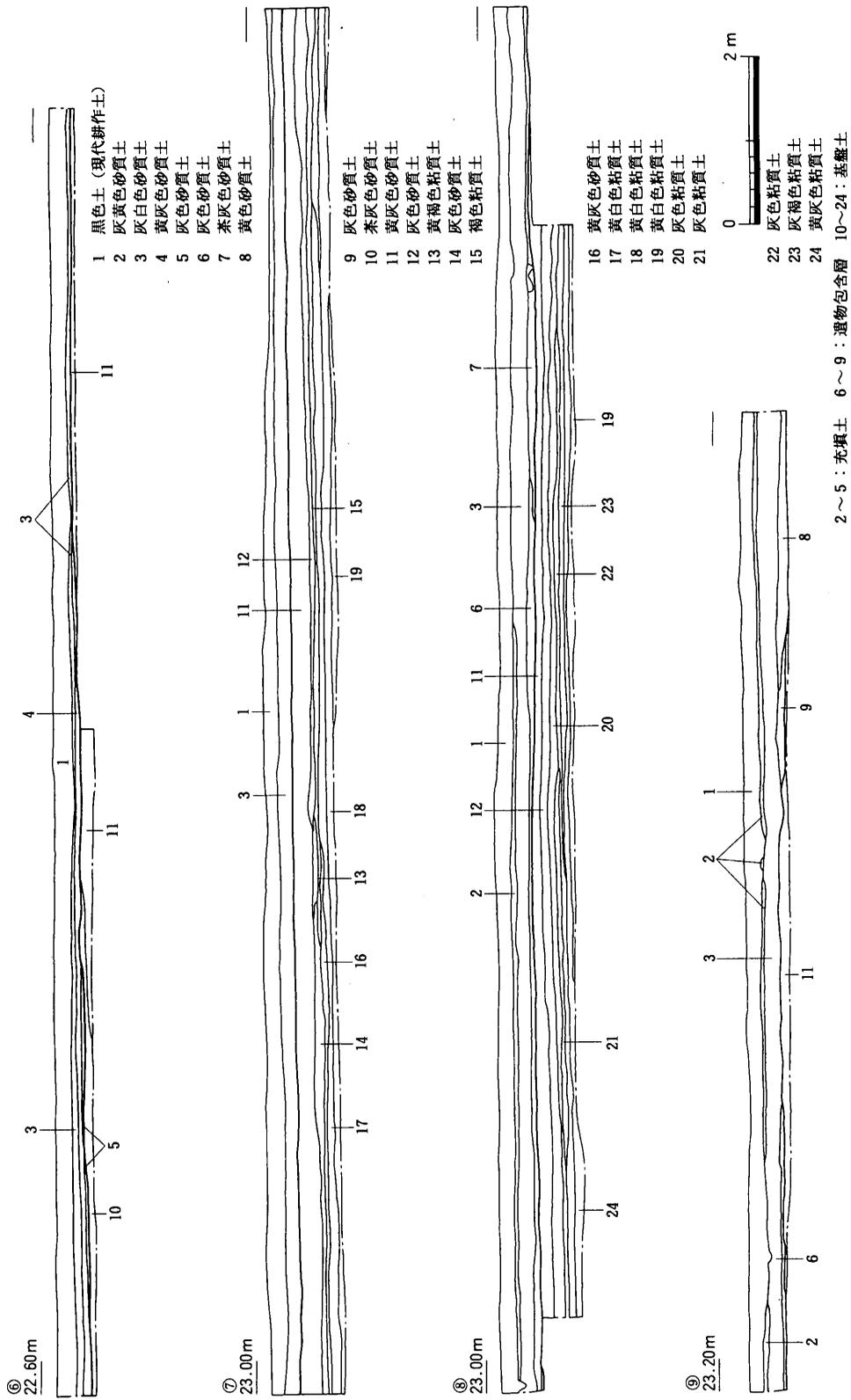
- 2 灰白色砂質土
- 3 灰色砂質土
- 4 黑灰色砂質土
- 5 灰色砂質土
- 6 黑褐色粘質土 (S X 06埋土)
- 7 黃灰色粘質土
- 8 黃褐色粘質土
- 9 褐色粘質土
- 10 灰色粘質土
- 11 砂礫
- 12 黃灰色粘質土



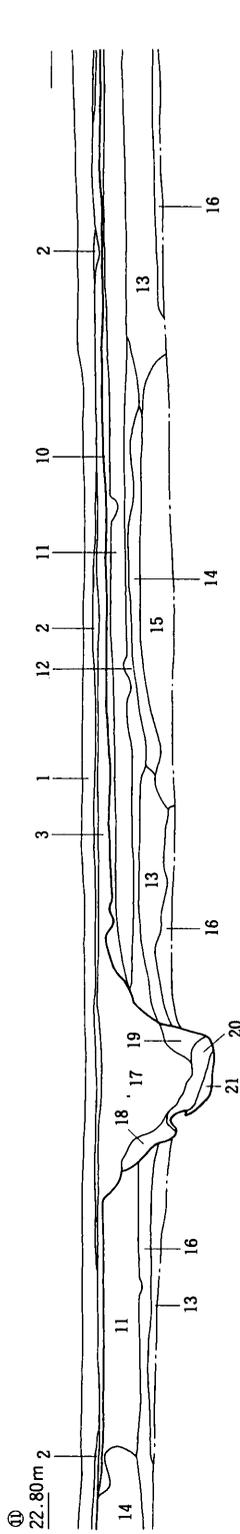
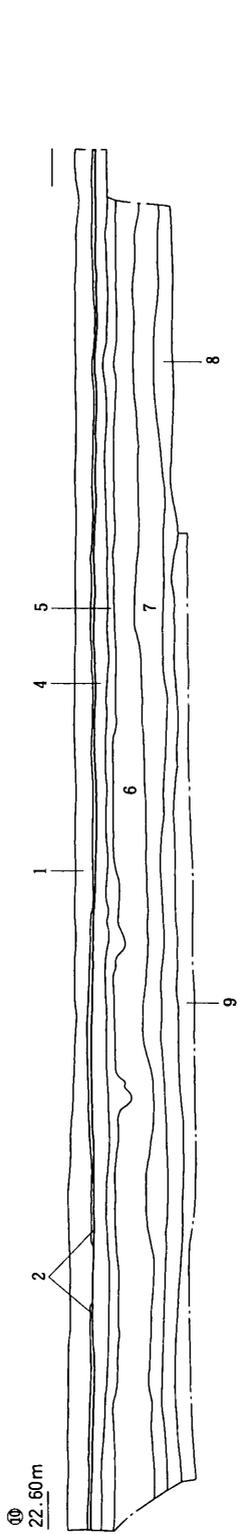
- 13 黃褐色粘質土
- 14 灰色砂質土 (SD36埋土)
- 15 灰白色砂質土 (SD35埋土)
- 16 黑色砂質土 (SD33埋土)
- 17 黑褐色砂質土 (SD32埋土)
- 18 灰黃色砂質土 (SD31埋土・汚染土)
- 2・3 : 充填土
- 4・5 : 遺物包含層
- 7~13 : 基盤土



第66图 B地区土層序実測図①



第67图 B地区土層序実測図②



- 1 黑色土 (現代耕作土)
- 2 黄白色砂質土 (壳質土)
- 3 褐色粘質土 (遺物包含層)
- 4 黄白色粘質土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 黄橙色粘質土
- 7 黄灰色粘質土
- 8 灰色粘質土
- 9 灰白色粘質土
- 10 灰黄色粘質土

- 11 黄灰色砂質土
- 12 稍灰色砂質土
- 13 灰色砂質土
- 14 砂礫
- 15 灰色砂礫
- 16 黄灰色粘質土
- 17 茶褐色土
- 18 灰黄色砂質土
- 19 灰黄色砂質土
- 20 灰色粘質土
- 21 黄色砂質土
- 4~16: 基盤土
- 17~21: SD19埋土



第68图 B地区土層序実測図③

力による土砂の埋積作用が生じたことを想定している。特に、遺跡地の東端部分に該当するPライン以東の地域は、基盤層が概略的に西から東方向に緩やかに傾斜する地形を示すために、埋積土壌が厚く堆積することにより平坦地化した状態を観察することができるのである。

さて、本遺跡地の基盤層を形成している土壌については、小規模範囲において黄灰色系の弱粘性土壌と、最大径10cm程度の礫を主体とした砂礫土壌が混在することが判明したことから、基盤層序の形成過程における景観は起伏に富む地形的環境を呈していたことが推測できるのである。特に現善通寺市域においては、原田町五条遺跡、下吉田町永井遺跡の上記の基盤土壌に酷似した土壌中から、縄文時代後・晩期頃の遺物が収集されている⁽¹⁾ことから、本遺跡地の基盤層序の形成時期を同時期頃に比定することは、あながち困難なことではないと考えられるのである。さらに、A地区及びB地区において検出した自然河川の最下部に、上記時期頃の資料が堆積していた事実については、地形の起伏の最深部分が流路化した結果であると推察することができることから、上記の時期決定を傍証する根拠とすることも可能であると考えている。

註(1) 笹川龍一『五条遺跡調査資料』、1983年。

渡部明夫・安藤清和・他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第九冊 永井遺跡』、1990年。

第2節 遺構・遺物

(1) 自然河川

SR08 (第69～71図, 図版41・42・79①)

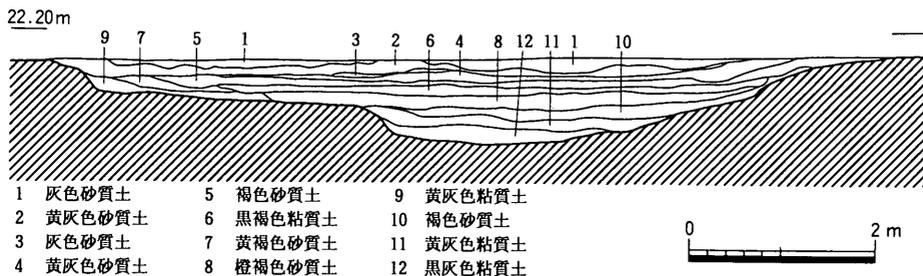
M・N12区に所在する河川跡である。ただし、12ライン以南の地域においては、遺構の大部分が現存する農業用水路の下部に埋没していたために、調査を行うことが困難であった。

検出した流路の方向性については、N12区において北西方向へ直線的に通水した後に、西方へ湾曲することにより、流路を転じていることが判る。しかも、M12区の西半部分における調査により、同地域に本遺構の延長部分が認められなかった事実から、上記の流路変更後、さらに急角度で北西あるいは北方向に流路が変化したことが推察できるのである。なお、遺構の規模は、全長約34.2m、最大幅905cm、最深部88cmを測ることができる。

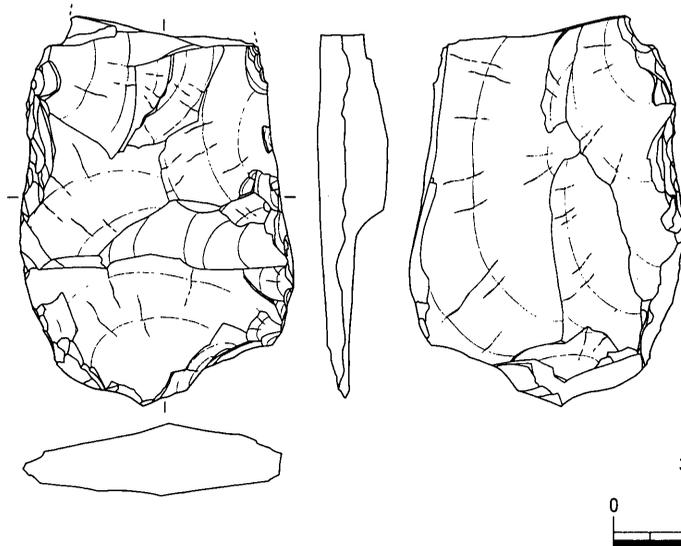
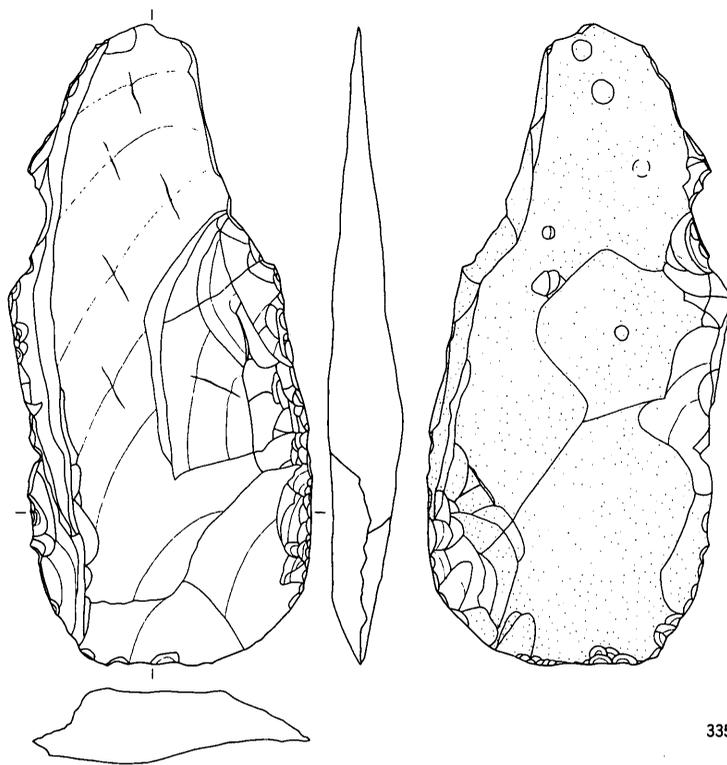
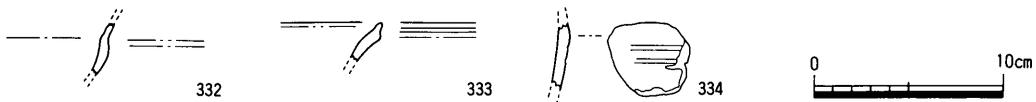
ところで、N12区南壁面に近接した西岸部分の傾斜面に南北約169cm、東西約90cmの範囲に及ぶ矩形の抉り込み部分が存在し、さらに東西方向の傾斜面の中位に小規模な平坦地が成形されていることから、その横断面が階段状の形態を呈することが判明している。したがって、河底部分への出入りを目的とした昇降施設としての用途が想定できると考えている。

さて、埋土については上位の灰・褐色系の砂質土壌と、下位の黒・褐色系の粘質土壌の2種類に大別することができる。両者は整合的な堆積状態を示すとともに、各層序を形成するミクロな土層序についても整合性が維持されていることから、堆積作用の進行は漸次的であったことが推察できる。

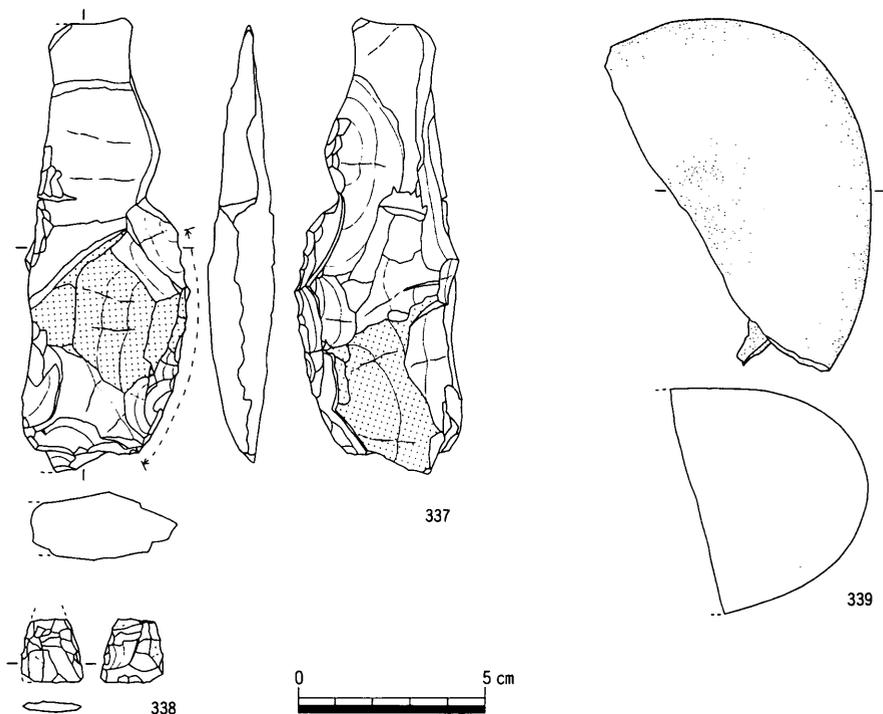
特に、最上位の層序中からは、平安時代以降の時期に比定し得る資料が採取されたことから、完全に平坦地化するには長時間を要したことが判る。



第69図 SR08断面図



第70図 S R08伴出遺物実測図①



第71図 SR08伴出遺物実測図②

採取した遺物は、縄文土器が圧倒的多数を占めているが、既に小片と化している資料が大部分であるために、3点の資料についてのみ原形を復元するに至った。第70図332は浅鉢形土器の口縁部と胴部の変化点部分である。333は深鉢形土器の器形であり、口縁端部を肥厚した後に、ヘラ状の原体を用いて沈線文を施している。334についても深鉢形土器の器形を復元することができる。また、胴部外面に2条の平行する沈線文を観察することができる。

石製品は、打製石斧3点（第70図335・336、第71図337）、打製石鏃1点（338）、磨石1点（339）が伴出している。335～337はいわゆる撥形⁽¹⁾の形態であり、335がほぼ原形を留めている。しかしながら、側縁部には柄に装着するための加工の痕跡を認めることは困難であり、また、刃部に使用痕を観察することはできない。338は無茎平基式⁽²⁾の形態である。

註(1) 本書における打製石斧の形態分類については、大山 柏氏の研究成果を参考とした。大山 柏『神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告』、1927年。

(2) 本書における打製石鏃の形態分類については、鈴木道之助氏の研究成果を参考とした。鈴木道之助「石鏃」『縄文文化の研究 7 道具と技術』、1983年。

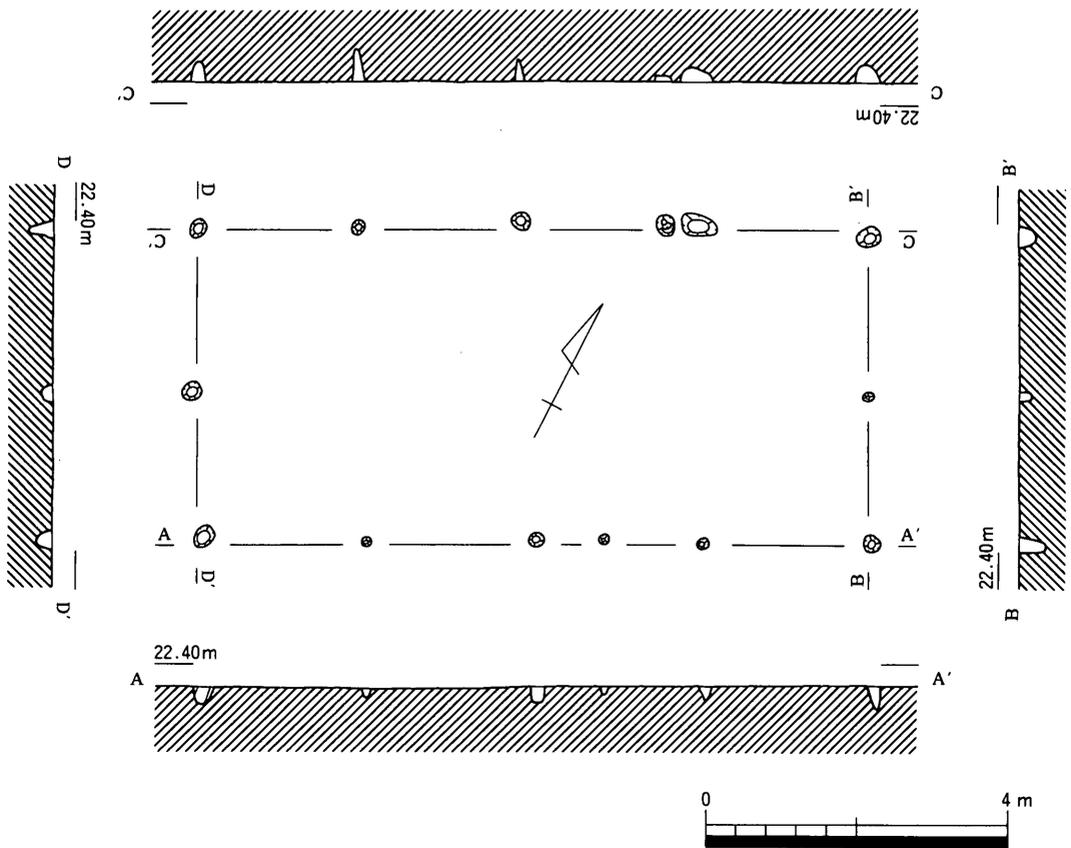
(2) 掘立柱建物跡

① SB03 (第72・81図, 図版43・65)

K・L11区に所在し, SB14と重複する位置関係にある。構造と規模は桁行4間(888cm), 梁行2間(415cm)である。

なお, 内部空間の中心部分において検出した3基のピットが構成する列状遺構については, 各遺構の形態と規模が主構造を形成する柱穴群に類似性が認められることと, 桁行に平行した配列にあることから, 内部構造の構成要素としての意義付けが想定されたが, 南北壁面の桁行を構成する各柱穴との位置関係が不規則であるために, 内部の壁面を構成していた点を積極的に推論することは困難である。

柱材については, 南北桁行部分を構成する柱穴の埋土の縦断面の観察結果から, 最大径7~16cmの丸太材が使用されていたことが判明している。



第72図 SB03平面・断面図

採取した遺物は小片と化している資料が多く、土師器椀1点、同皿3点、同土鍋3点、黒色土器椀1点、須恵器杯1点について器形を復元することが可能である。なお、図示した資料は土師器皿2点（第81図340,341）と同土鍋2点（342,343）である。

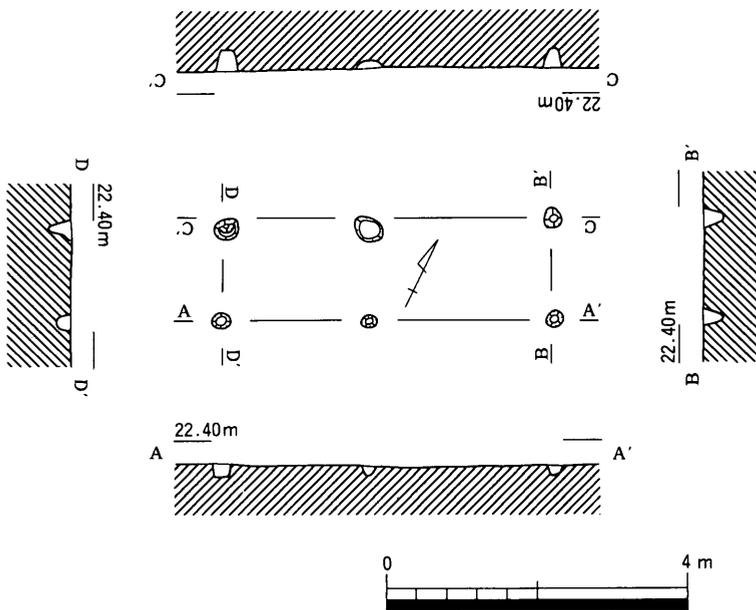
② SB04（第73図，図版44①）

K・L11区のSB03の北方約0.9mの位置において、建物の主軸の方向性を合致させることにより構築された建物遺構である。

桁行2間（431cm）、梁行1間（132cm）の構造を有するが、特に後者の規模が小さいために、推定床面積は5.69㎡を測るに留まっている。したがって、本遺構については、日常的な居住遺構とするよりも、むしろSB03あるいは、後述のSB05を主屋とした副次的な建物遺構であると考えたい。

柱材については、全く不明である。

また、遺物は全く採取することができていない。



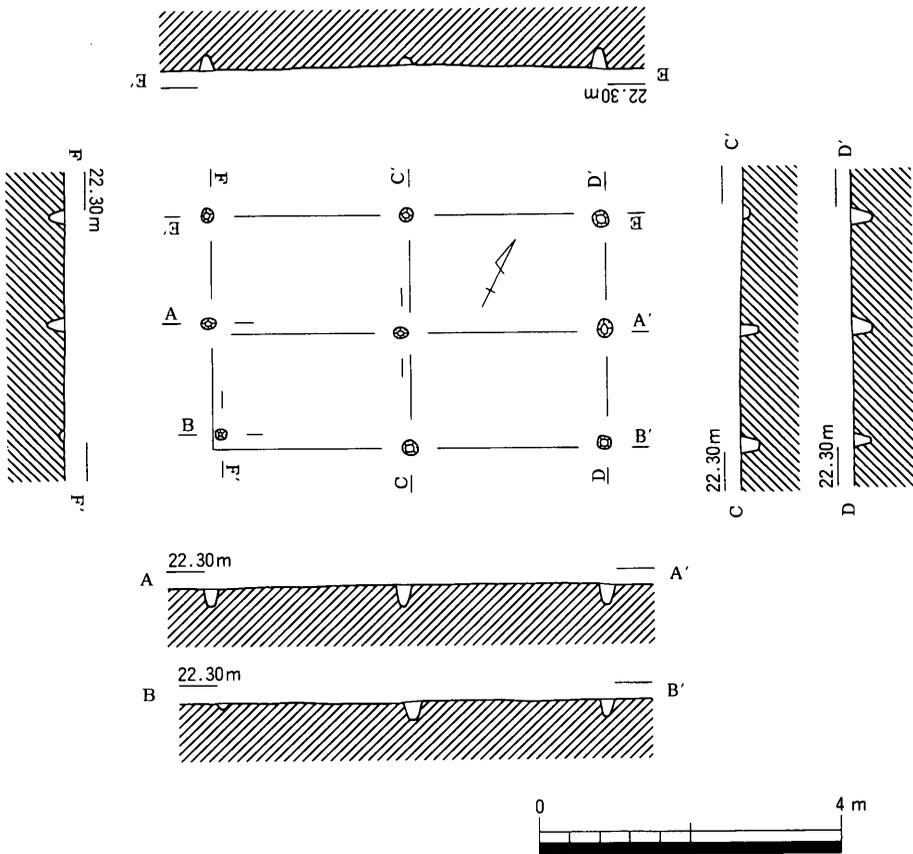
第73図 SB04平面・断面図

③ SB05 (第74図, 図版44②)

J・K10区において検出した、桁行2間(520cm), 梁行2間(302cm)の構造と規模を有する建物遺構である。しかも, 内部空間の中心部分に柱穴が遺存することから, 総柱構造を復元することが可能であると考えている。

ところが, 各柱穴の規模は, 建物の全体規模が小型である点を考慮したとしても, 総柱構造のSB12のそれに比して, 圧倒的に小規模である点を指摘し得ると考えている。すなわち, SB12の床面が重量物の積載を前提とする高床構造に設営された可能性を示唆するのに対して, 本建物遺構については, 高床の存否についての検討から着手する必要があるのである。

そこで, 本遺構が高床構造を有しない仮説を唱えるのであるならば, 小規模な床面の中央部分に柱材が存在することが想定できる。したがって, 内部空間は居住空間としての利



第74図 SB05平面・断面図

便性は失われてしまう状態が発生することが推測できることから、本遺構については日常的な居住施設としての性格を与えることは困難であると考えられるのである。

なお、柱材の詳細は不明である。

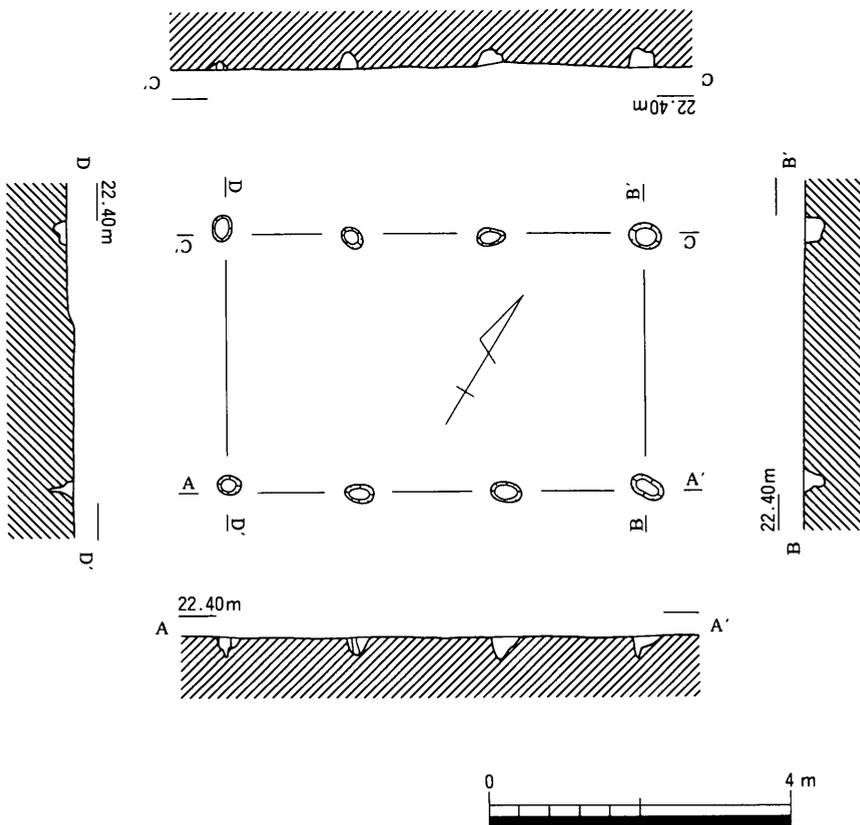
伴出した遺物には、土師器の器形不詳の小片2点と須恵器蓋1点があるが、いずれも図化することが困難である。

④ SB06 (第75・81図, 図版45①)

M12区において、SB07と重複した状態で検出したが、相互の柱穴の先後関係を示す状態が認められていないために、各々の構築順序については判然としない。

構造は桁行3間、梁行1間であり、規模は各々552cmと340cmを測ることができる。

柱材については、柱穴の埋土の観察により、最大径8～14cmの丸太材が使用されていたことが推察できる。



第75図 SB06平面・断面図

遺物は土師器供膳容器の小片6点と同土鍋13点以外に、器形が判然としない土師器7点、須恵器1点、鉄製品2点が採取されている。このうち図示した資料は、鉄製品2点（第81図344,345）と土師器土鍋の脚部と考えられる土製品1点（第81図346）である。344は横断面が隅丸方形を呈する釘形の資料であり、両端部を欠損している。345はY字形の形態を示すことから、棒状の物質を挟むことを目的として製作されたことが推測できる。

⑤ SB07（第76図，図版45②）

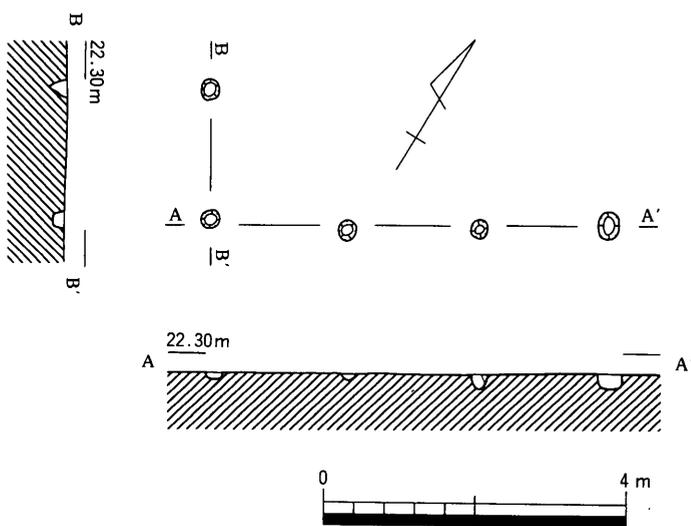
遺構の北・東部が、調査対象地域の外部あるいは現存した農業用水路の下部に埋没するために、全体像を復元することは困難であるが、西壁面を構成する梁行部分と東南隅部分の柱穴を利用した梁行部分の構造に差異が認められるために、東壁面の位置は東方の用水路の下部に相当することが推測できる。したがって、復元できる構造は桁行3間以上、梁行1間以上である。

ところで、本建物跡はSB06の主軸方位に完全に合致した方向性を示す点と、柱穴規模及び桁行の柱間距離が酷似している事実から、後出した建物の構築時においては、前出の遺構を模したことが考えられるのである。

測量し得る規模は桁行525cm、梁行170cmである。

柱材は、柱穴の埋土の縦断面の観察結果から、最大径約12cmの丸太材が使用されていたことが判る。

遺物は全く遺存していない。



第76図 SB07平面・断面図

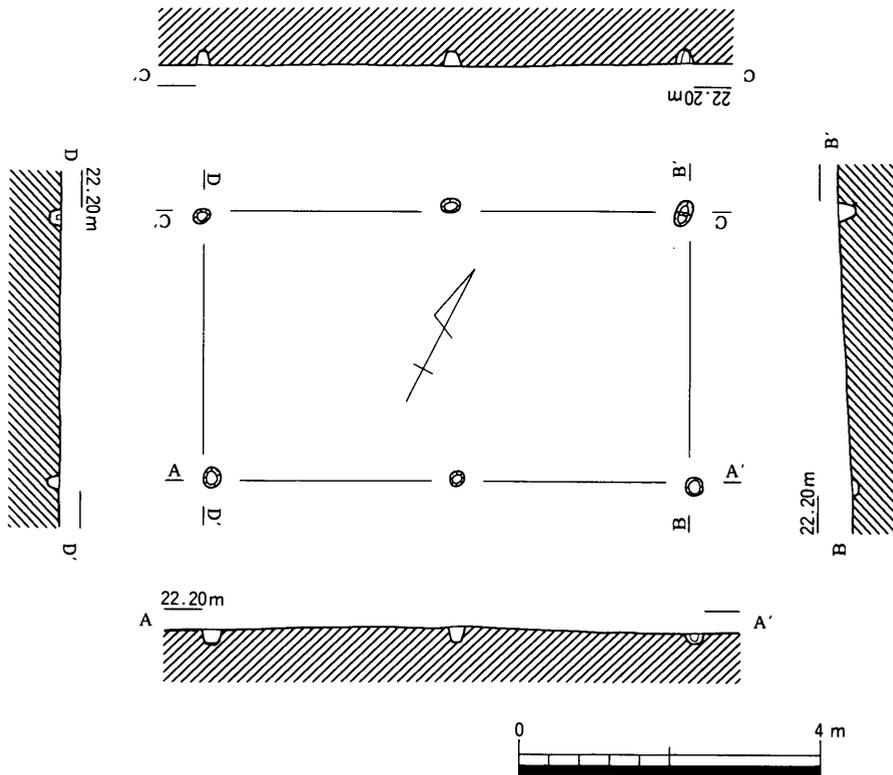
⑥ SB08 (第77図, 図版46①)

本遺構の調査により, SR08の流路が完全に埋積し, 平坦地化した後に, 当該地点における居住空間としての利用が開始されたことが判明した。

遺構はM・N12区に所在しており, 桁行2間(642cm), 梁行1間(355cm)の構造と規模を有している。また, 想定できる南壁面部分の一部分は, SB09の北壁面に重複するが, 構築順序を示す状態を認めることはできない。

柱材は, 柱穴の埋土の縦断面の観察結果から, 最大径5~11cmの丸太材が使用されていたことが判る。

採取した遺物は器形不詳の土師器の小片3点のみであり, いずれも遺存状態が優れないために図化するには至らなかった。



第77図 SB08平面・断面図

⑦ SB09 (第78図, 図版46②)

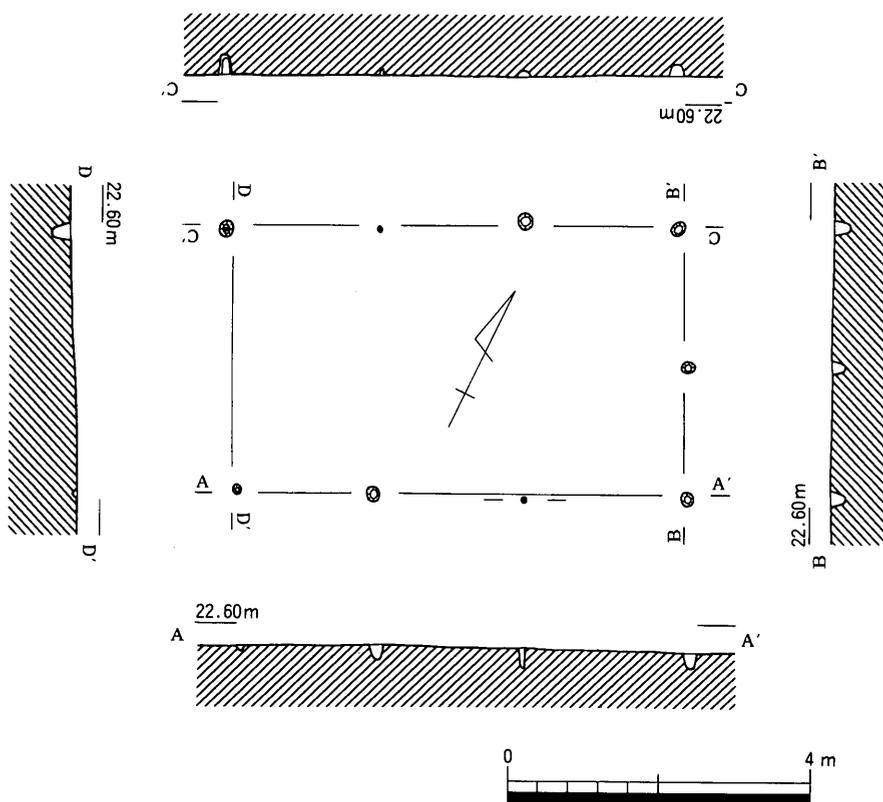
M・N12区において検出した。西壁面に相当する梁行部分が1間構造であるのに対して東壁面のそれは2間構造であることから、両壁面の使用形態が異なることは瞭然としている。桁・梁行の規模は各々597cm, 356cmである。

なお、建物の主軸方位はSB08の方向性に合致する。

また、南壁面の想定位置においてSD49を検出したが、本建物跡との関連性あるいは先後関係については全く明らかにするには至っていない。

柱材は、北西隅部分の柱穴の埋土の縦断面の観察により、最大径約11cmの丸太材が使用されていたことが判明している。

伴出した遺物は土師器土鍋3点と、器形を復元することが困難な土師器の小片2点である。



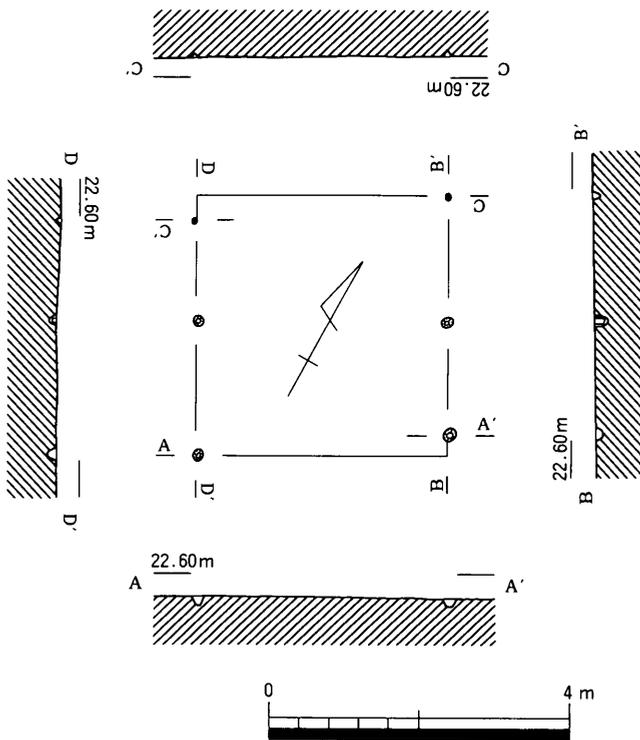
第78図 SB09平面・断面図

⑧ SB10 (第79・81図, 図版47・67)

M・N12区において検出した、桁行2間、梁行1間の構造を有する建物遺構である。規模は前者が340cm, 後者が333cmを測ることから, 柱間距離は前者1に対して, 後者2の比率であることが判る。

柱材は, 柱穴の埋土の縦断面の観察により, 最大径6~10cmの丸太材が使用されていたことが判る。

遺物は土師器土鍋3点と黒色土器碗1点(第81図347)を採取した。347については, 既に内外面の器壁が著しく磨耗しているために, ヘラ磨き調整の様態を観察することが難しい。



第79図 SB10平面・断面図

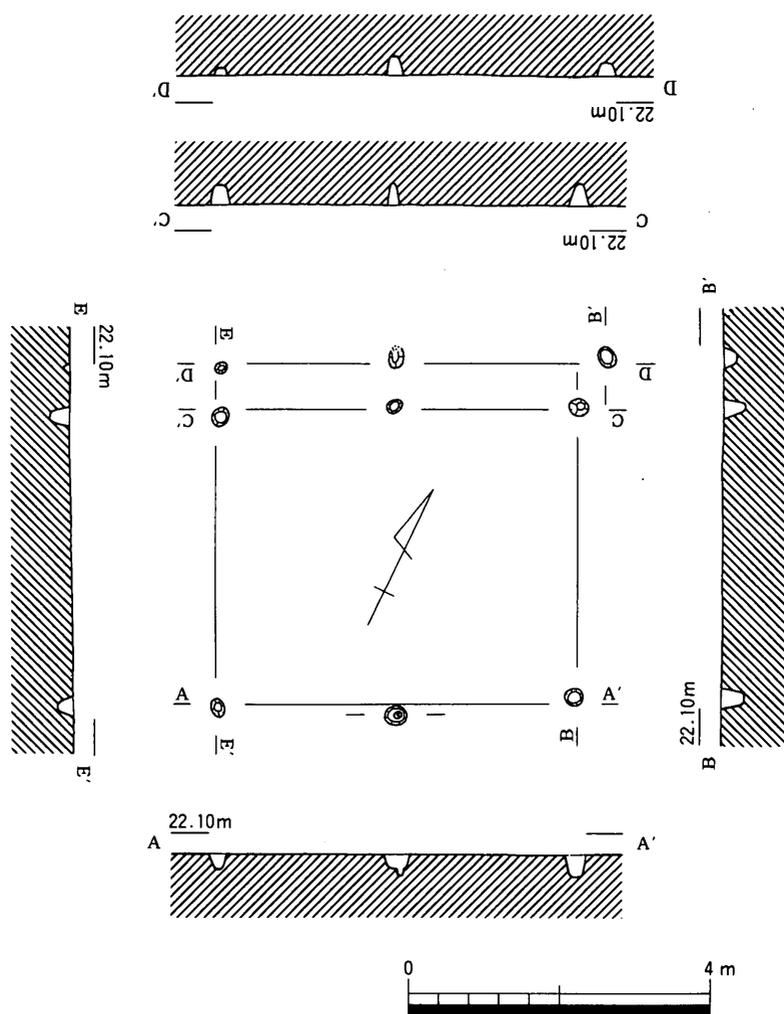
⑨ SB11 (第80・81図, 図版48①・65)

P13・14区に所在する。桁行2間, 梁行1間の基本構造を有しており, 北壁面部分に幅60cmの庇状の遺構が付設されている。

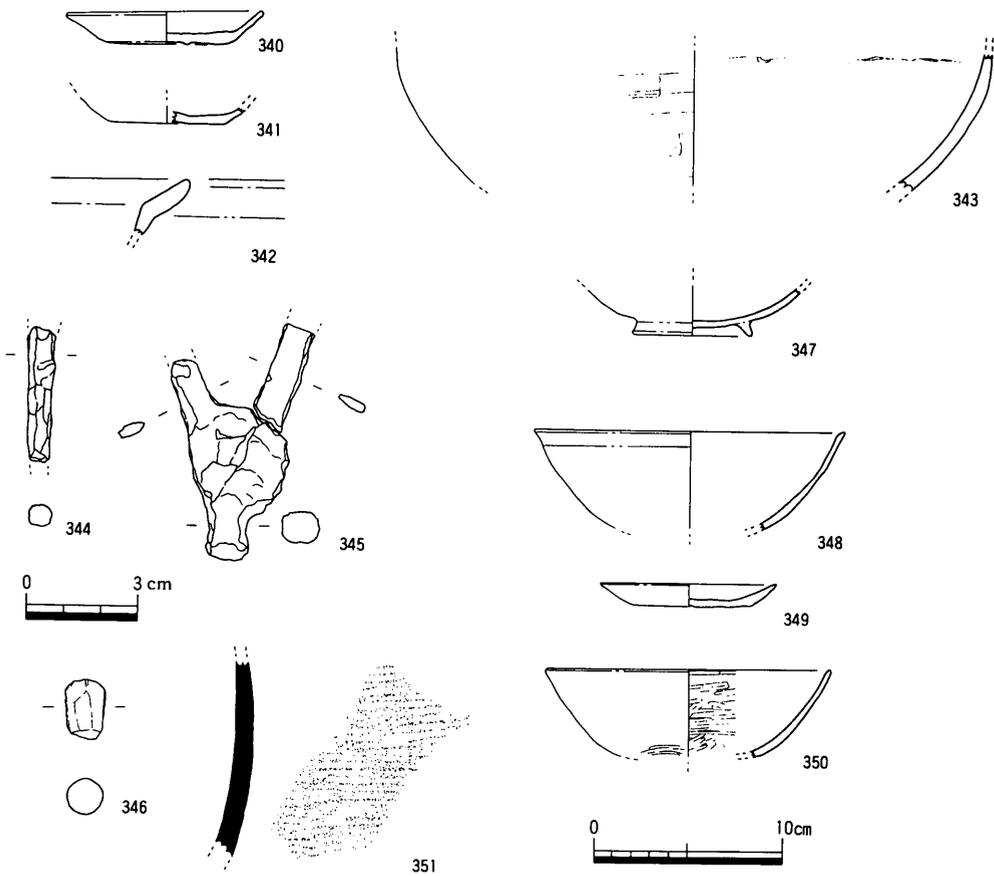
桁・梁行の各柱間距離は478cm, 379cmであることから, 両者の比率はほぼ1 : 2に近似した値を示すことが判る。

柱材については, 詳細を知り得ない。

伴出した遺物は土師器椀1点, 同皿2点, 同土鍋1点, 黒色土器椀1点, 須恵器甕1点について器形を特定することが可能であるが, これら以外に器形を特定し得ない供膳容器3点と煮沸容器1点を見ることができる。なお, 図示した資料は土師器椀(第81図348), 同皿(349), 黒色土器椀(350), 須恵器甕(351)である。349は浅い形態であるために, 容量が極めて小さいことが判る。350は内外面に口縁部に平行する密度の高いヘラ磨き調整の痕跡を観察することができる。



第80図 SB11平面・断面図



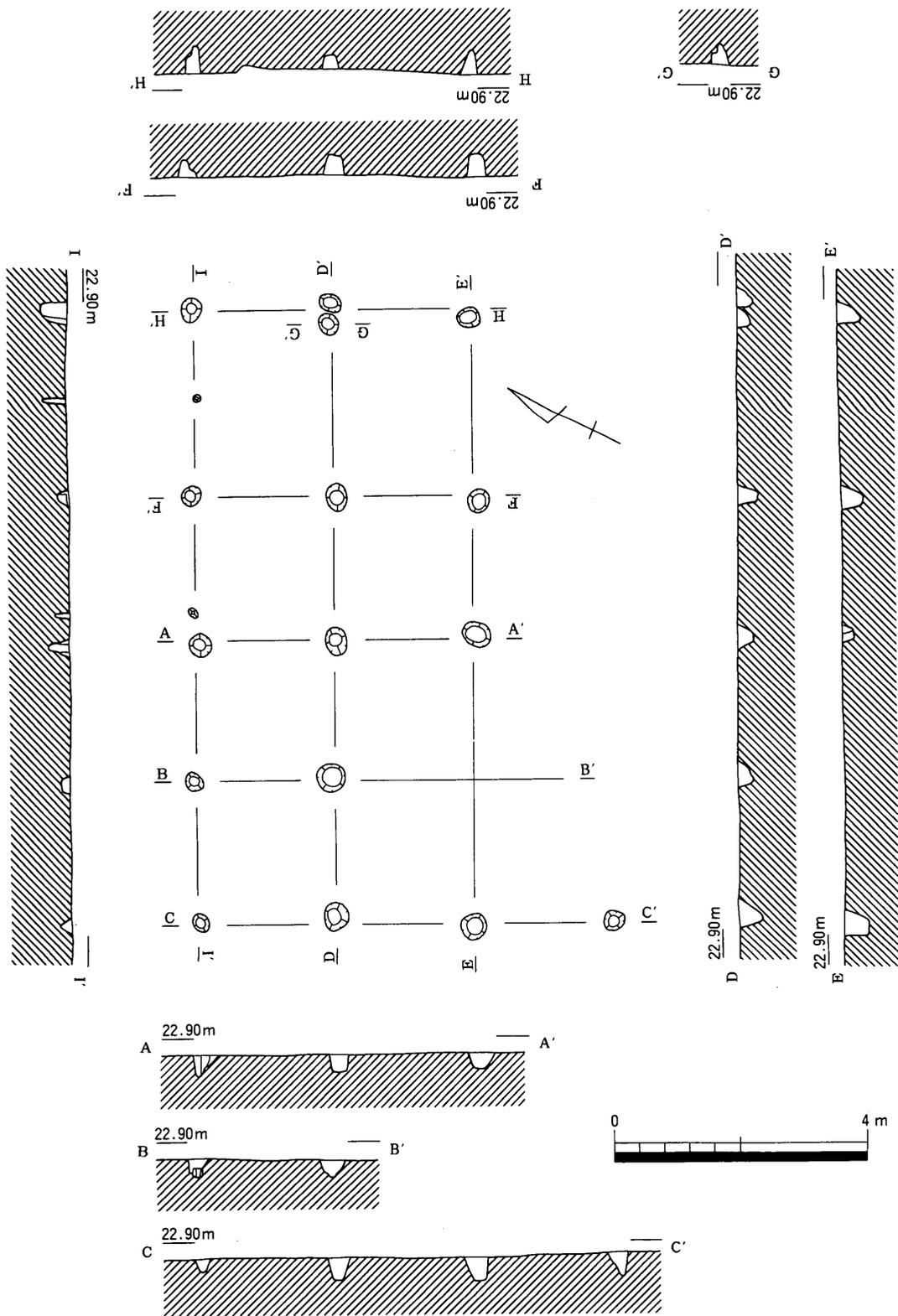
第81図 SB03・06・10・11伴出遺物実測図

⑩ SB12 (第82・85図, 図版48②)

M8・9区において検出した。桁行は4間(941cm)であるが、東壁面からの1間部分が他の部分に比して距離が長い特徴を観察することができることから、内部空間が用途に応じて分割されていたことが推測できる。また、梁行は西壁面部分において3間(657cm)構造であることを確認したことから、調査対象地域の外部に延長部分が存在することを考慮するならば、その規模が拡大することも予測できるのである。

なお、内部構造は西壁面から2列目の梁行部分に柱穴を伴わない部分が存在するが、いわゆる総柱の構造であることが判る。

柱材については、北壁面を構成する柱穴の埋土の堆積状態から、最大径約14cmの丸太材が使用されていたことが推測できる。



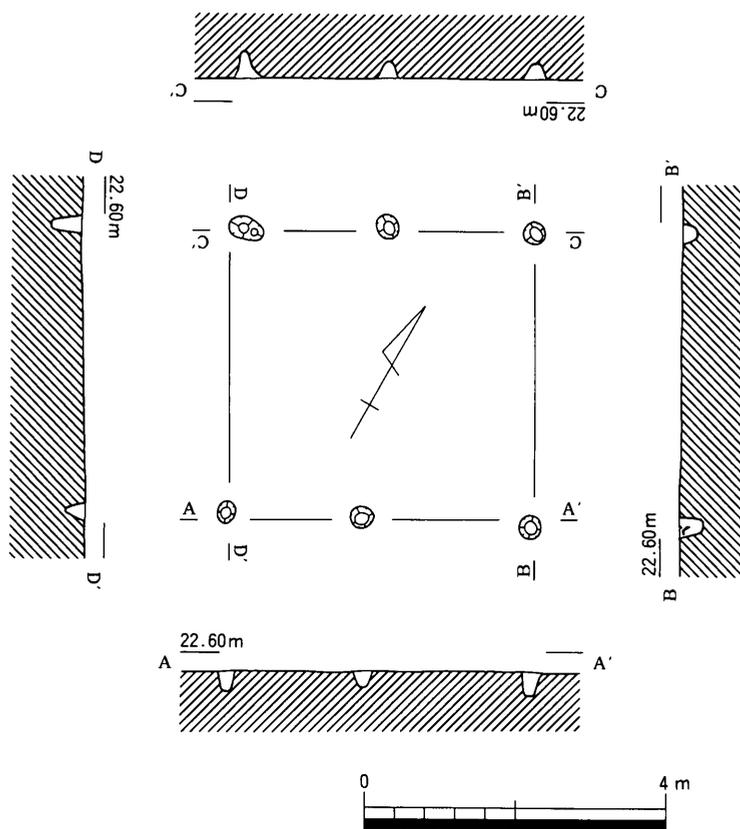
第82图 SB12平面·断面图

採取した遺物は土師器が圧倒的多数を占めており、椀7点、皿3点、土釜3点以外に、器形不詳の資料が約30点含まれている。このうち、椀1点（第85図352）と皿1点（353）、土釜1点（354）を図示した。また、土師器以外の資料としては、須恵器2点（1点は杯）と瓦質土器と考えられる椀形の供膳容器1点（355）がある。さらに、炭化した木材が混在していることから、あるいは柱材の一部分に相当することが推測できる。

⑪ SB13（第83・85図，図版49①・80①）

N11区南半部分に所在しており、SD22の一部分を破壊して構築されている。構造と規模は桁行2間（400cm）、梁行1間（376cm）であることから、柱間距離が前者の1に対して、後者が2の比率を示す点が特徴である。

柱材の形態と規模については、柱材の痕跡あるいは柱材の固定材料が遺存していないことと、埋土が単一層序により形成されていることから、詳細を知ることができない。



第83図 SB13平面・断面図

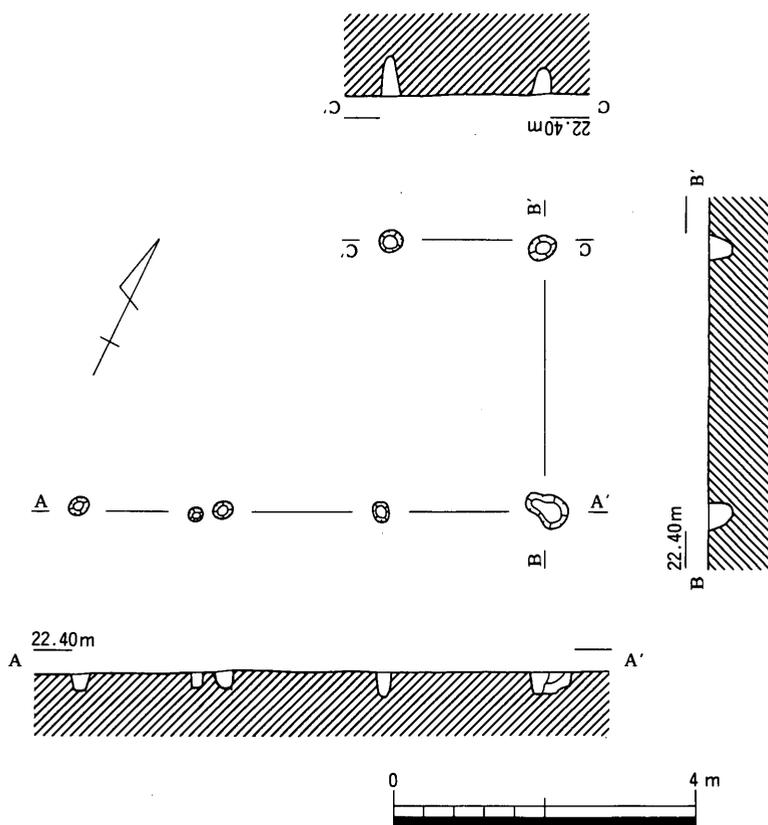
遺物は土師器碗1点(第85図356), 同土鍋1点(357)について器形を復元することが可能であるが, 上記以外に器形不詳の土師器4点と瓦器1点を採取している。また, 鉄製刀子1点(358)が混在することが判明している。

⑫ SB14 (第84・85図, 図版49②・64・74)

K11区において調査を行った。北・西壁面の一部分が調査対象地域の外部に埋没しているが, 梁行の柱間距離が桁行のそれを凌駕する規模を有することから, 全体構造は桁行3間, 梁行1間を超えないと想定することが妥当である。したがって, 遺構の規模については桁行615cm, 梁行352cmを測ることができる。

なお, 東南隅部分の柱穴において, 柱材を北西方向に転倒した結果生じた, 「抜き取り」の痕跡を確認している。

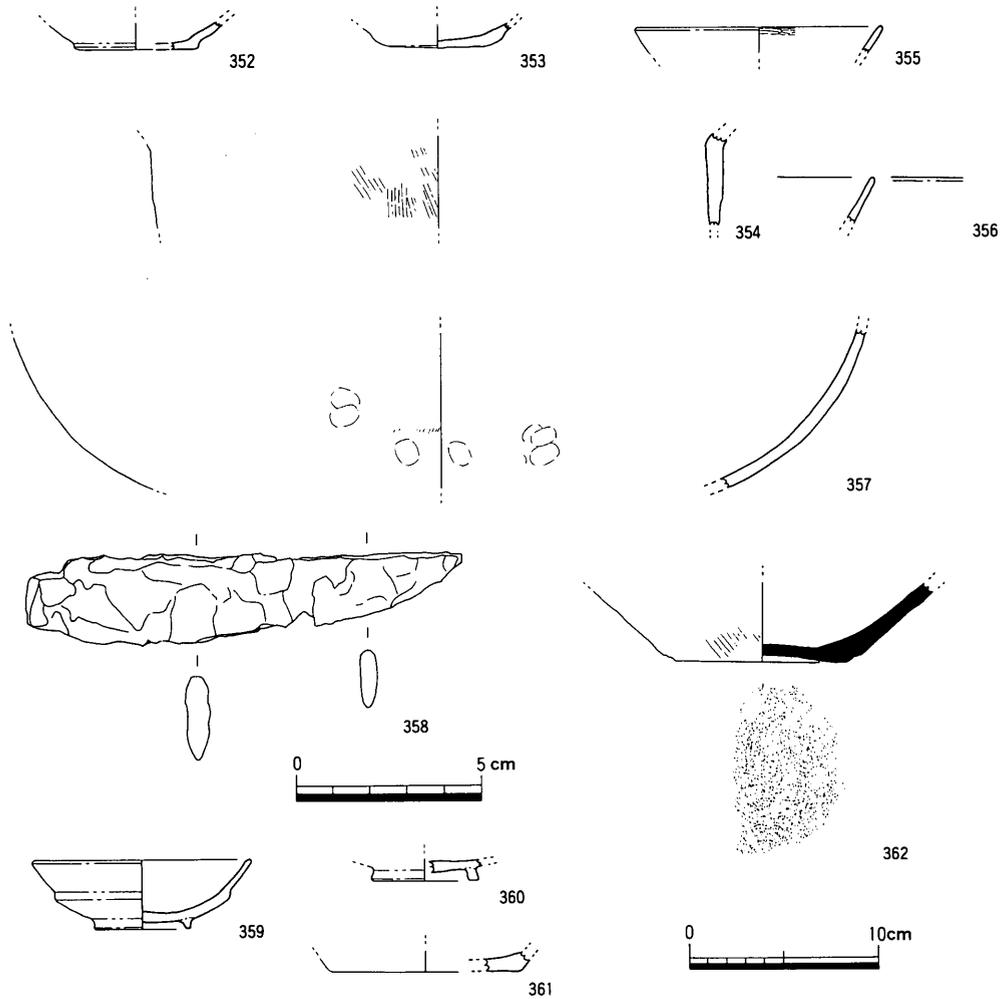
柱材は柱穴底面において確認した, 柱材の痕跡の計測結果から, 最大径約9cmの丸太材



第84図 SB14平面・断面図

が使用されていたことが判る。

伴出した遺物には、土師器椀 2 点（第85図359,360）、同皿 1 点（361）、同小片 3 点、須恵器高杯 1 点、同捏鉢 1 点（362）がある。359は胴部の外面に屈曲点を有する形態である。362は底部外面に回転糸切りの痕跡を観察することができる。同資料については、兵庫県神出窯跡あるいは魚住窯跡産出の資料であると考えている。



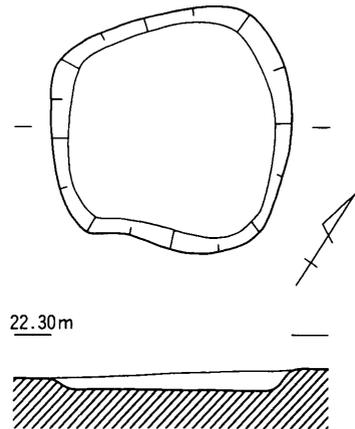
第85図 SB12~14伴出遺物実測図

(3) 土 坑

① SK28 (第86図, 図版53①)

L10区に所在する, 平面形態が不整な隅丸正方形を呈した遺構である。長径128cm, 短径126cm、最深部11cmの規模を有する。壁面はほぼ垂直, 底面は平坦な形態である。

伴出した遺物は, 土師器が圧倒的多数を占めており, 供膳容器5点, 煮沸容器7点以外に, 器形不詳の資料が多数混在することが判明している。しかしながら, いずれも遺存状態が不良であるために, 図化することは困難である。



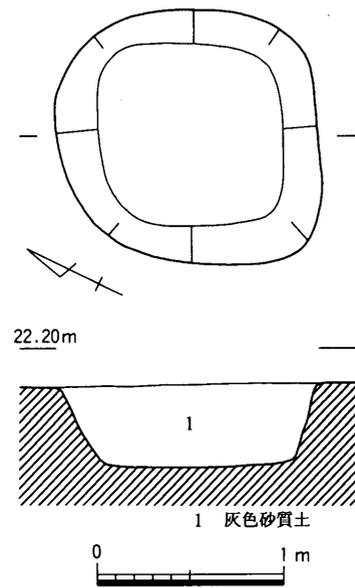
第86図 SK28平面・断面図

② SK29 (第87・89図, 図版53②)

O12区において検出した。平面形態は隅丸正方形を呈しており, 規模は長径137cm, 短径132cm, 最深部52cmを測る。また, 壁面がほぼ垂直に, 底面が平坦に掘削されている点に特徴を見ることができる。

埋土は小礫が混在する灰色系の砂質土の単一土壌により形成されているが, 下位の堆積土ほど粒子が漸次的に大きくなる事実が判明していることから, 遺構内部に土砂を含む水が充満することにより, 重量物が先行して沈澱・堆積したことが推測できる。

遺物は須恵器高杯1点(第89図363)を採取した。



第87図 SK29平面・断面図

③ SK30 (第88・89図, 図版54①・64)

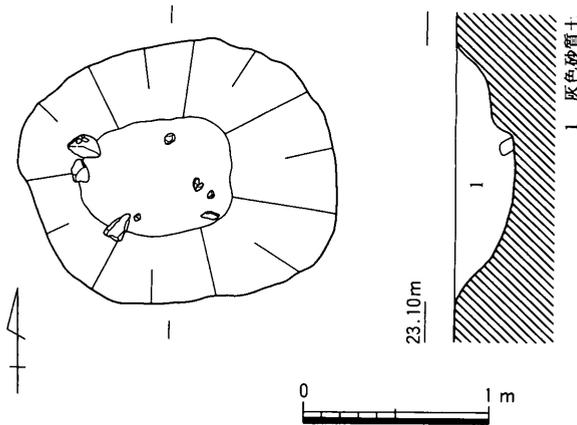
O・P12区において, P13ポイントに近接した位置に所在しており, 隅丸正方形の平面形態と長径164cm, 短径140cm, 最深部31cmの規模を有する。

遺構の縦・横断面の形態は、壁面の傾斜角度が緩いため鉢形を呈するとともに、底面の造形が緩慢である点が特徴である。

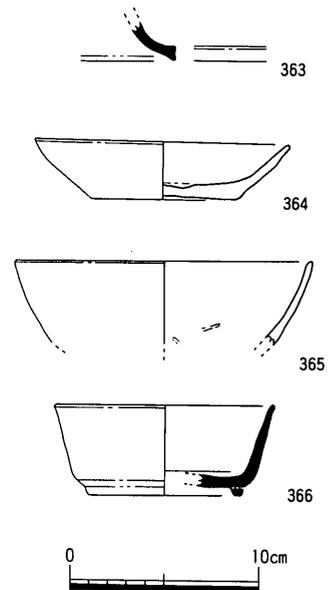
埋土は灰色砂質土の単一土壌により形成されているが、下位に最大径約10~20cmの自然石が集中して混在する状態を見ることができる。とりわけ、大型の石材が底面西部に密着して遺存することから、意図的に配置されたことについても考える必要があるが、配列に規則性を認めることはできない。

ところで、遺構の内部からはほぼ完存する状態の土師器皿を採取している。同資料は底面に密着した状態で検出できたことから、上記の石群とともに埋納されたことが推察できるのである。

採取した遺物は上記の土師器皿（第89図364）以外に、同煮沸容器2点、黒色土器碗2点（うち1点は365）、須恵器杯1点（366）がある。



第88図 SK30平面・断面図



第89図 SK29・30伴出遺物実測図

④ SK31（第90図）

L11区において検出した。平面形態は長楕円形を呈しており、規模は長径185cm，短径101cm，最深部11cmを測る。壁面は緩く傾斜し，底面は平坦面を形成する。

本遺構は，SB03あるいはSB04の東部の敷地範囲を明確にすることが考えられるSD27とこれらの建物遺構との間隙に所在することから，同一敷地内部において生活残滓の廃棄，死者の埋葬等の目的を有していたことが推測できるが，その性格を決定する資料を入手するには至っていない。

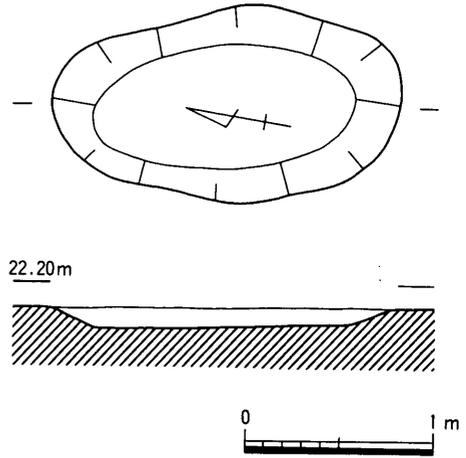
遺物は全く遺存していない。

⑤ SK32 (第91図)

O12区において検出した。平面形態は不整形な長楕円形を呈しており、規模は長径115cm, 短径61cm, 最深部35cmを測ることができる。

西方約0.6mの位置に、自然の営力により生じた凹地形が存在することから、あるいはそれに類する遺構であることも考慮しなければならない。

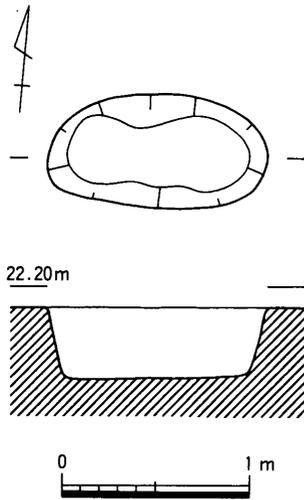
遺物は全く採取することができなかった。



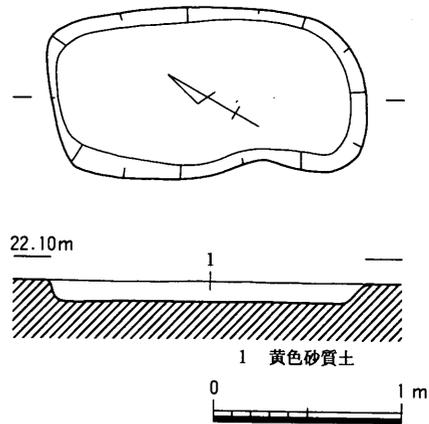
第90図 SK31平面・断面図

⑥ SK33 (第92図)

O13区に所在する長径167cm, 短径90cm, 最深部6cmの規模を有した遺構である。平面形態が整然とした長方形を呈する点が特徴であり、底面が平坦に掘削されている事実と埋土が黄色砂質土による単一層序により形成されていた調査結果から、埋葬施設として設けられたことを推察することができるが、遺構内部からは遺体、棺材、副葬品等を採取するには至っていない。



第91図 SK32平面・断面図



第92図 SK33平面・断面図

また、本遺構の主軸方位については、現存する地割の基準線の方位に準拠した方向性を示していることが判る。

遺物は全く遺存していない。

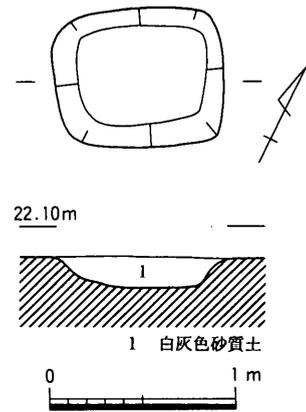
⑦ SK34 (第93図)

O14区に所在する。隅丸長方形の平面形態を呈しており、長径90cm、短径75cm、最深部19cmの規模を有する。各壁面は緩く傾斜する形態であり、底面は平坦に掘削されている。

埋土は白灰色砂質土の単一土壌により形成されており、しかも層序の上・下位における土壌の粒子が均等であることから、人力により一時に埋没したことが判る。

前述のSK30・33同様、所在位置周辺地域において関連遺構が全く存在しないために、居住地域の外部に設けられた遺構であることが判る。

採取した遺物は器形不詳の土師器小片6点と須恵器杯及び甕が各1点ある。



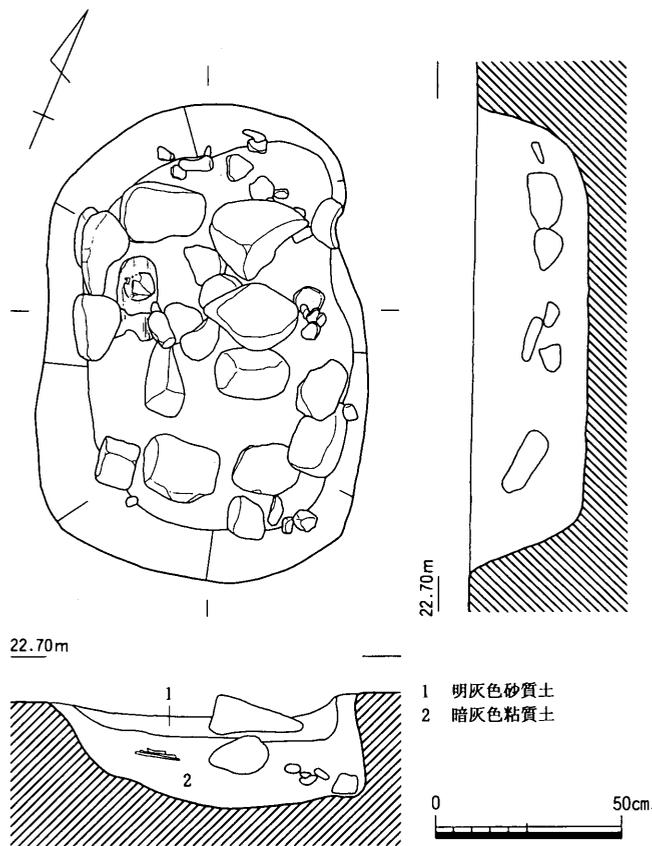
第93図 SK34平面・断面図

⑧ SK35 (第94・95・97図, 図版54②・55・76・80②・82)

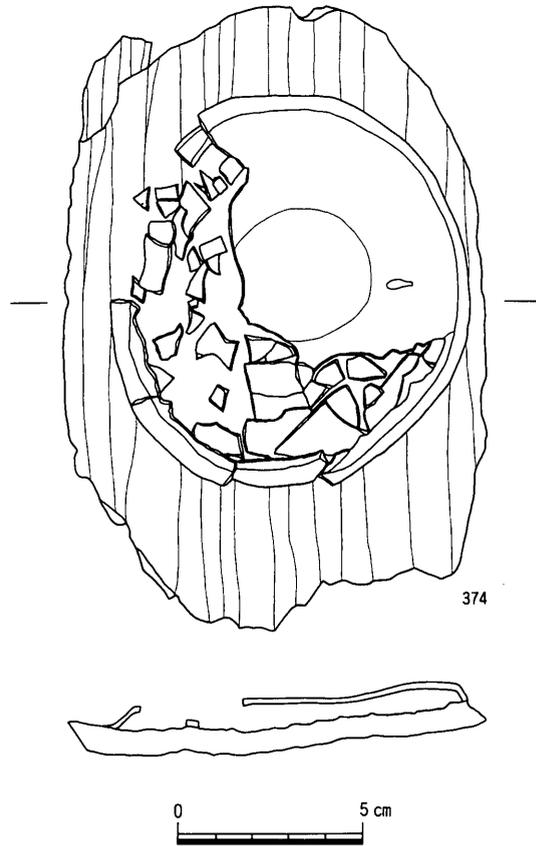
I7区において検出した。平面形態は隅丸長方形であり、規模は長径128cm、短径87cm、最深部30cmを測る。遺構の内部は各壁面の傾斜角度が急であり、底面が平坦面を呈している。

埋土は上・下の2層(灰白色砂質土, 灰色粘質土)に分別することができるが、各層序とも最大径20~30cmの未加工の自然石を多量に包蔵していたことが判明している。しかしながら、これらの石群については全て底面から遊離した位置において検出したことと、配列に規則性が認められないことから、遺構の埋没時に混入したことは明らかである。したがって、遺構の廃絶時において意図的に埋め戻す作業時に混入したか、あるいは上部構造としての覆土と石群が転落したことに起因することが推測できるのであるが、後述のSD42の内部から多数の自然石が採取できたことと、本遺構の内部に板状の木製品と鏡、青磁碗が埋納時の旧状を留めた状態で出土したことから、後者の可能性を積極的に唱えることができると考えている。

ところで、木製品と鏡、青磁碗の埋納方法については、土坑の西壁面に近接する位置の床面から約8cm遊離した空間部分において、木製品を水平に設置した後に、その中央部分に鏡の鏡面を上にするにより載せた上に、青磁碗を積み重ねていることが判明している。ところが、調査時の知見として、鏡と青磁碗の間隙部分には約1mmの厚さの木質が遺存していたことを知り得たことから、あるいは上記の板材を底板に、また、遺存状態の悪い木質を蓋板とする箱様の製品中に、鏡を収納したことについても考慮する必要が考えられるのである。ただし、前者については側板が付属していた痕跡を観察することはできず、また、後者についても調査時に滅失したために、この点を追検証することは困難である。しかしながら、箱様の容器の存在を仮定するならば、青磁碗については同容器の上部に載せられていたことを指摘することができるのである。



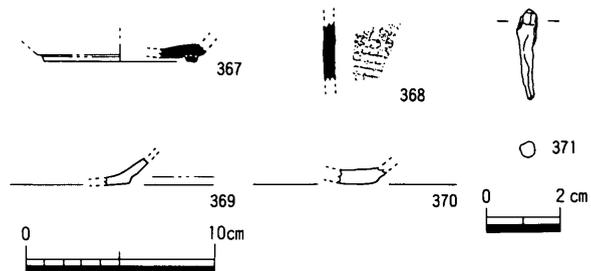
第94図 SK35平面・断面図



第95図 銅鏡・板状木製品実測図

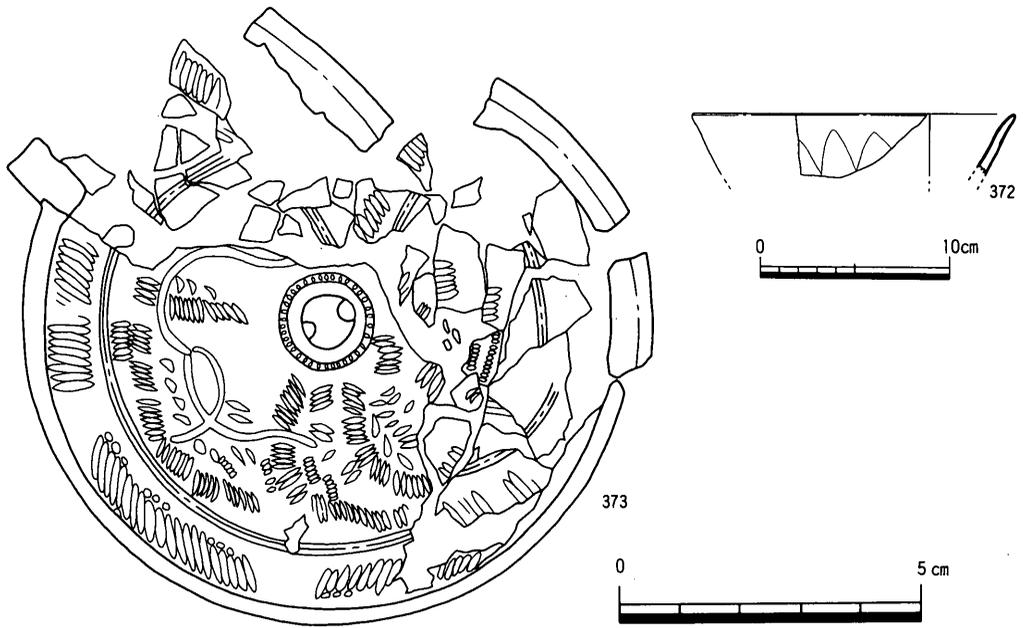
以上の事実から、本遺構は土坑を掘削後、底面に若干の客土を行い、鏡と青磁碗を埋納した後に、上部を土と石を用いて被覆したことが推測できると考えている。しかも、覆土の範囲については、S D42の内部においても夥しい数量の石群が検出できたことから、同溝状遺構に接触する位置にまで及ぶ可能性について言及することができるであろう。

なお、本遺構の主軸方位についても、地割の方位に合致する方向性を示していることが判る。



第96図 SK36・37伴出遺物実測図

さて、埋納されていた青磁碗(第97図372)は、外面に鎬蓮弁文が



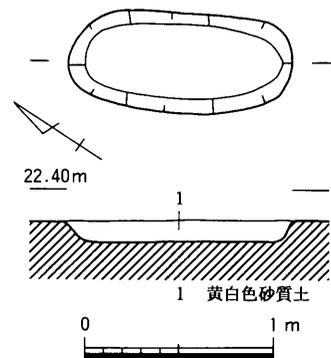
第97図 SK35青磁椀・銅鏡実測図

施されており、現中国龍泉窯跡において産出された資料であると考えている。また、銅鏡（373）については、鏡背が板状木製品に癒着していたために、鏡面方向からのX線の透過撮影により、文様の観察を行った。その結果、同面は圏線により内区と外区に区分されており、前者に樹木状の文様が鑄出されていることが判明した。樹幹が緩やかな曲線により表現されていることから、「柳」をモチーフとしたことが推測できる。

⑨ SK36（第96・98図）

O11区において検出した。長楕円形の平面形態を呈し、規模は長径118cm、短径54cm、最深部11cmを測る。壁面は若干急角度に傾斜しており、底面は平坦に掘削されている。

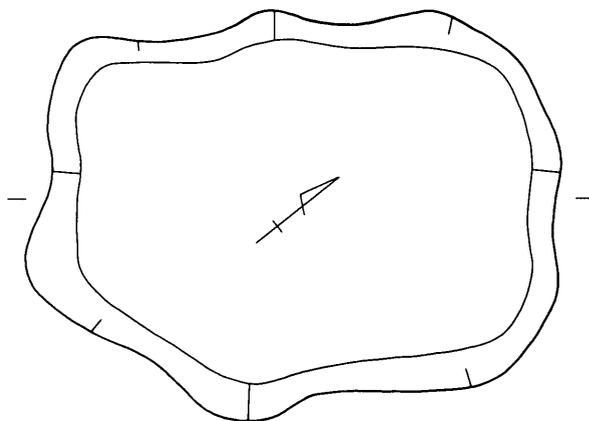
内部には黄白色砂質土の単一土壌が堆積していたことから、一時に埋没したことが推察できるが、基盤土の混入が認められない事実は、人為的な埋め戻し作業が行われなかったことを示唆していると考え



第98図 SK36平面・断面図

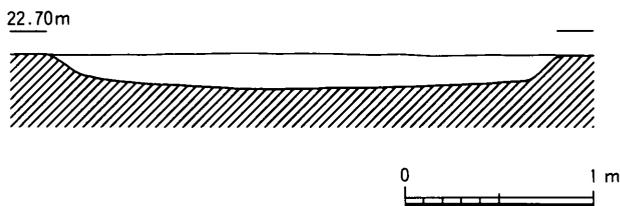
ている。

伴出した遺物には須恵器杯
2点(うち1点は第96図367),
同甕1点(368)がある。368
は軟質な器壁を有し, 胴部外
面に格子状のタタキ目が施さ
れていることから, 岡山県亀
山窯跡産出の資料であると推
測することができる。



⑩ SK37 (第96・99図)

I・J7区において検出した。
不整な隅丸長方形の平面形態を
呈し, 規模は長径90cm, 短径80
cm, 最深部11cmを測る。壁面の
傾斜角度はほぼ垂直であり, 底
面は平坦に掘削されている。



第99図 SK37平面・断面図

伴出した遺物には土師器皿2
点(第96図369,370), 同供膳容
器16点, 同煮沸容器3点, 器形
不詳黒色土器1点, 器形不詳瓦
器1点, 須恵器壺2点, 釘形鉄
製品1点(371)がある。



第100図 ST01平面・断面図

(4) 土坑墓

ST01 (第100図, 図版52)

J10区において検出した。遺構の北半部分を予備調査時に損壊したために、遺構の全貌を知ることは困難であるが、遺存する部分から原形は隅丸長方形の平面形態を呈していたことが推察できる。また、測量し得る規模は長径200cm, 短径94cm, 最深部12cmである。

埋土は灰色砂質土の単一土壌により形成されるが、特に底面に近い層序には多量の焼土と炭化物が混在することが判明している。さらに、底面は全体が被熱により赤色に変色していることを確認できることから、遺構内部において焼成行為が行われたことは自明である。

ところで、底面の東南・北西部分において、ヒトの頭蓋骨の一部と考えられる骨塊と小型の管状の骨片を少量採取している。特に、前者については被熱による変色と劣化の状況が顕著に観察できることから、上記の焼成時に被熱したことが推測できるのである。すなわち、本遺構の構築の第1次的な目的はヒトの遺体を火葬することにあつたと考えている。そして少量の小型の骨片以外は採取することができなかった点については、遺体が骨化した後にはその大部分が他所に移されたことに起因すると推察することができるであろう。したがって、本遺構は火葬施設として掘削された後に、再度埋め戻されることにより第2次的に埋葬施設としての性格を有するに至つたことが想定できるのである。

さて、SB05が特異な構造の建物遺構である点については前述のとおりであるが、その所在位置についても、複数の建物遺構による集合体を形成しない点に特徴を見ることができるといえる。とりわけ、当該遺構との位置関係において、本遺構の主軸の位置に、同建物遺構の北壁面中央部分の柱の位置を合致させた意図が看取できるであろう。すなわち、同建物跡は本遺構の構築時期と大差のない時期に建築されたか、あるいは廃絶したことが推察できるのである。

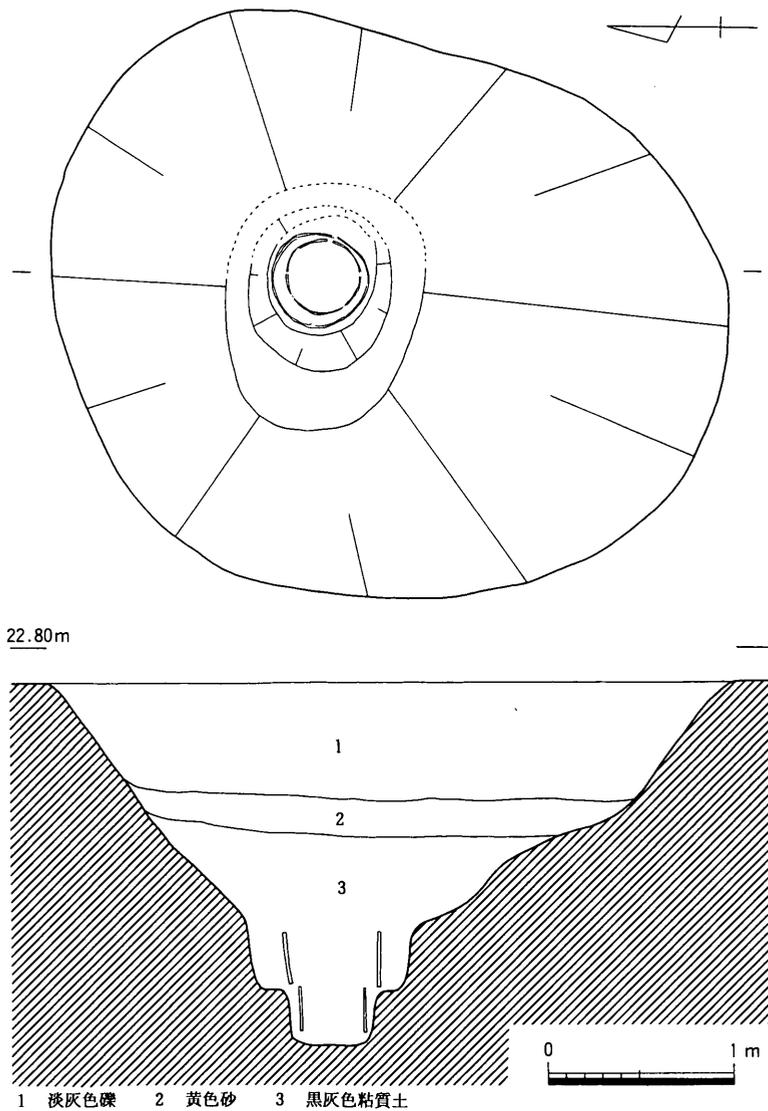
そこで、当該遺構に葬送もしくは埋葬施設としての性格を与えるのであるならば、同建物跡の建築の目的がそれを保守あるいは追善することにあつたことが推測できると考えている。しかしながら、この仮説を立証する情報については、全く欠如していると言わざるを得ない。

採取した遺物は土師器の小片3点のみであり、いずれも器形を復元することが困難であるために、遺構の埋没時に偶然混入したことが推測できる。

(5) 井戸跡

SE05 (第101~107図, 図版50・51・69~72・81)

J7区において検出した。ほりかたは平面形態を円形に成形することを意図して掘削したことが推察できるが、基盤層が円礫を主体とするために、不整な形態を呈している。また、壁面の傾斜角度が緩い点についても、掘削途上における崩壊を防止することを目的としたことが考えられるであろう。また、井筒の設置部分については、壁面を垂直に掘削しており、井筒として使用している曲物桶の側板の直径の差異を考慮した規模に成形している。



第101図 SE05平面・断面図

ることが判明している。なお、ほりかたの規模は遺構検出面における最大幅が360cmであり、検出面から水溜め部分の底面までの距離は187cmである。

井筒は底板を除去した、口径の異なる曲物桶2個を上下に積み上げることにより、水溜めとして利用している。その構造は下部に口径が小さい側板を設置した後、口縁部の高さまで土を充填することにより固定し、その充填土の上面に口径の大きい側板を設置していることが判る。ところが、これらの側板の最上位の部位以上の位置に、最大径15~30cmの

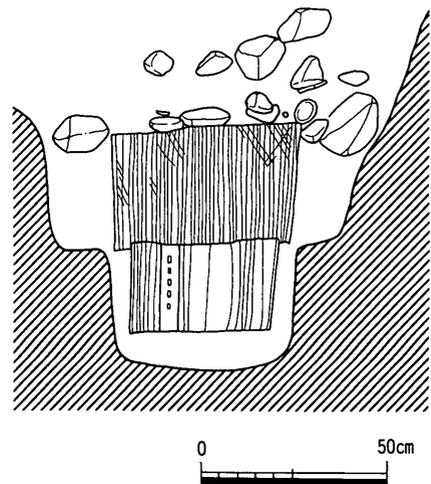
未加工の自然石が不整円形に配置されていることから、水溜め部分の上位に石組による井筒が構築されていた可能性と、これらの自然石が上部に存在した井筒を固定するために用いられていた点についても検討する必要があると考えているが、遺存状態が不良であることと、不完全な構造を呈することから、断定するには至っていない。

また、井筒内部と上位の空間部分の埋土は、単一層序により形成されていることから、一時に埋没したことは容易に想定することができるが、底面において採取した遺物からは廃絶時の儀礼的行為を復元することは不可能である。

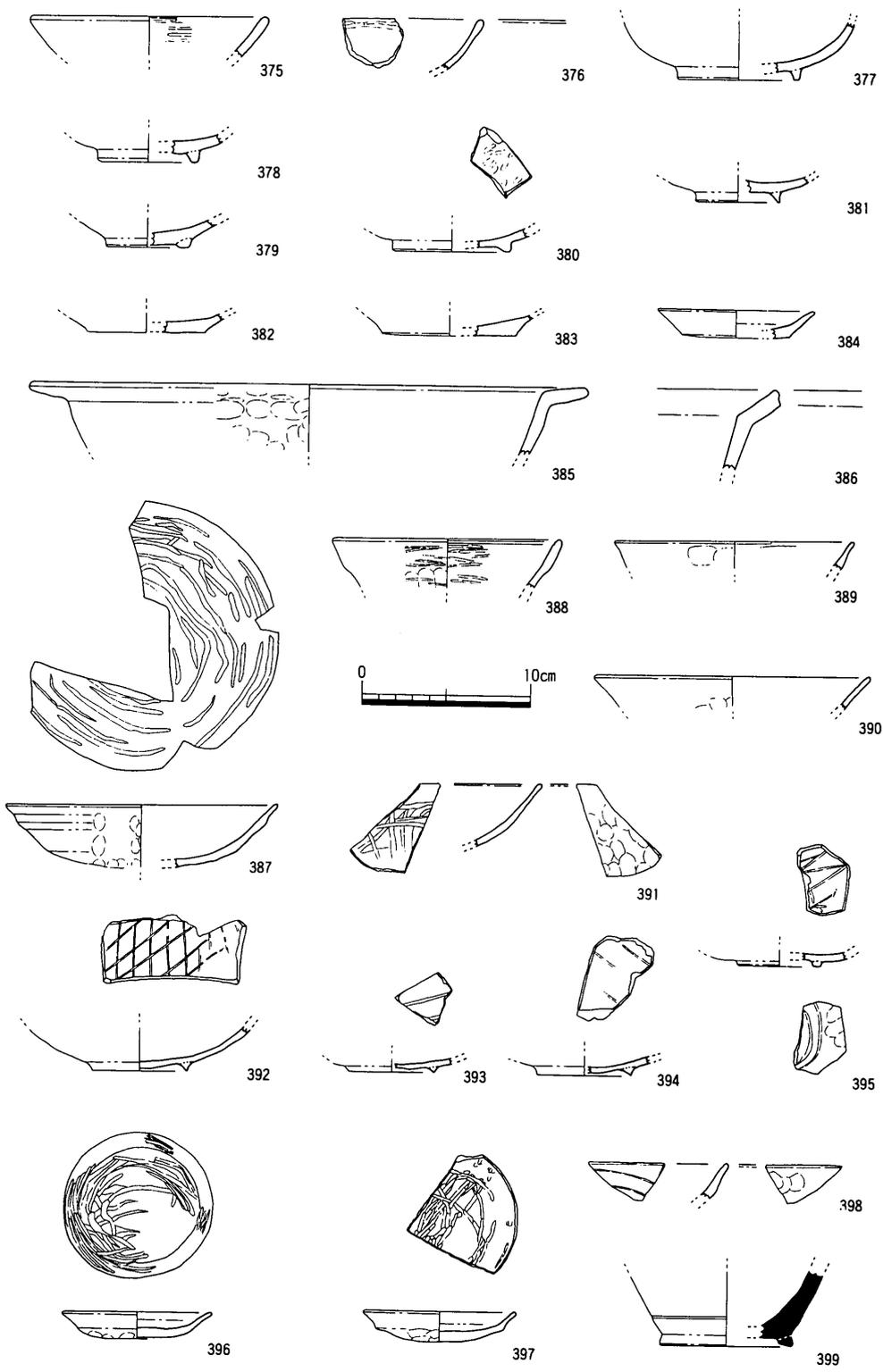
なお、検出面においては、本遺構の周辺地域に数基の柱穴を検出しているが、整然とした配列を示さないために、上部構造の存否については判然としない。

遺物は、主として井筒の内側と上位の堆積土中から採取している。その内訳は土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、磁器、サヌカイト剝片、木片であるが、とりわけ、土師器の供膳容器と煮沸容器の占める割合が圧倒的に高く、次に瓦器碗、皿の出土数量が多いことが判る。なお、図示した資料は、土師器碗（第103図375~381）、同皿（382~384）、同土鍋（385,386）、瓦器碗（387~395）、同皿（396~398）、須恵器壺（399）である。375,376,380は内面にヘラ磨き調整の痕跡を観察することができる。377~380の高台部分は縦断面が逆台形形であり、381のそれは逆三角形形を呈する点が特徴である。387は内面に同心円状のヘラ磨き調整が施されている。392は縦断面が鋭角的な逆三角形形を呈する小型の高台部を有する形態であり、内面見込み部分に斜格子状に交差するヘラ磨き調整の痕跡を見

21.70m



第102図 SE 05井筒見通し図



第103図 SE05伴出遺物実測図①

ることができる。396,397の内面見込み部分についても同心円状に分割したヘラ磨き調整が施されていることが判る。

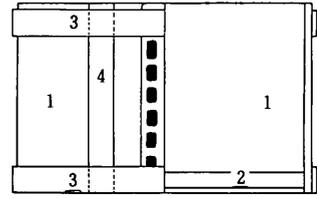
ところで、井筒として利用された2個体分の曲物桶(第105～107図400,401)については、いずれも底板を欠損している点については上記のとおりであるが、それが井戸の開削時に意図的に行われたか、あるいは井戸の開

削時以前に既に失われていたかについてを明らかにすることは難しい。さて、400は取り上げ作業時において、最上段の「まわしの側板」⁽¹⁾を破損したために、一部分が変形しているが、原形は1枚の板材を用いて製作した側板の外部に上下に3枚の「まわしの側板」を密着するように装着していたことが判る。さらに、側板と「まわしの側板」の間隙には、円周を4等分する位置に「へぎ板」と呼ばれる補強材が円周に直交する方向に挿入されている。なお、「まわしの側板」は上、中、下段について各々全長が166,158,159cmであり、幅は9.6,9.2,8.8cmである。また、「へぎ板」には全長28～31.5cm、幅8.4～9.7cmの板材が使用されている。なお、各部材の木取りは全て柂目方向であることが判る。ところで、最上段の「まわしの側板」の下端部には直径約0.5cm程度の4個単位の穿孔を観察することができる。しかも、本体の側面においても、これらに対応する位置に、同規模の穿孔を見ることができることから、両者を接合することを目的としていたことが推察できるのである。

本体の側板と脱落した「まわしの側板」の内面には、円周に直交する方向とそれに斜交する方向に、刃物状の工具により施された「ケビキ」の痕跡が認められる。

401は接合部分から円周の約1/5に相当する部位を欠損している。下端部に直径約0.5cmの1個単位の穿孔が観察できることから、底板の接合方法は、側縁部と側板材を釘を使用することにより接着する方法が用いられていたことが判るのである。

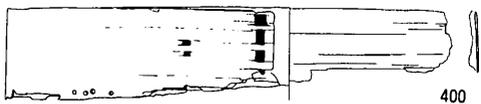
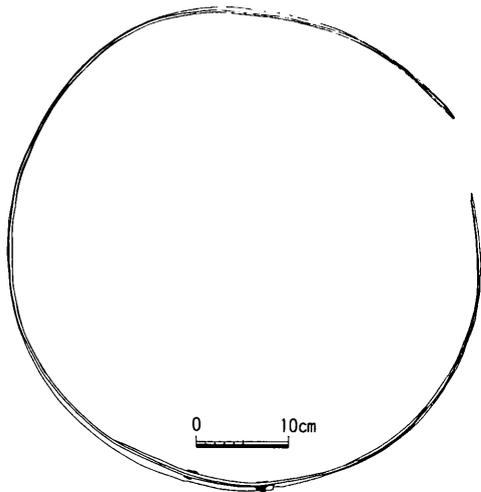
内面には円周に直交する方向と、それに斜交する方向の「ケビキ」の痕跡を観察することができる。



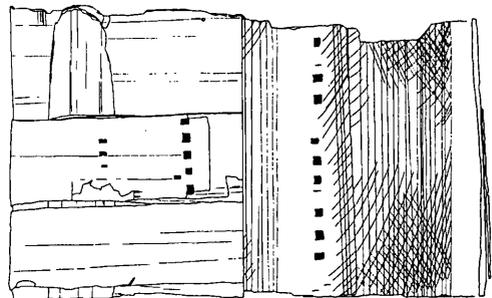
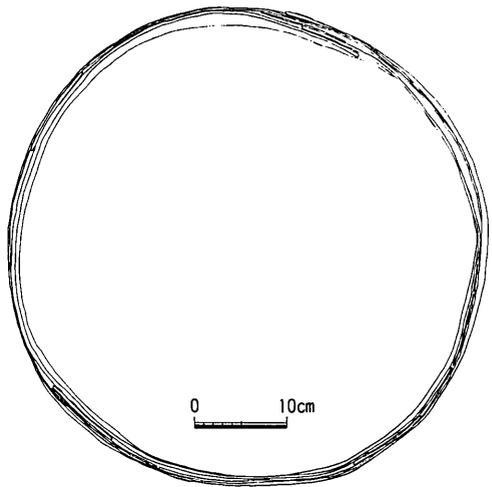
1：側板 2：底板 3：まわしの側板
4：へぎ板

第104図 曲物の構造・名称模式図
(南 博史、1982年より転載)

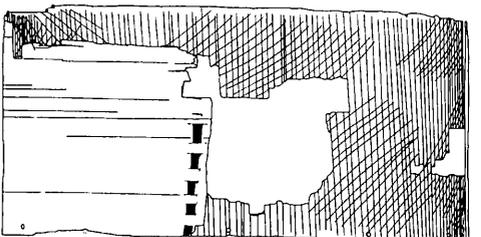
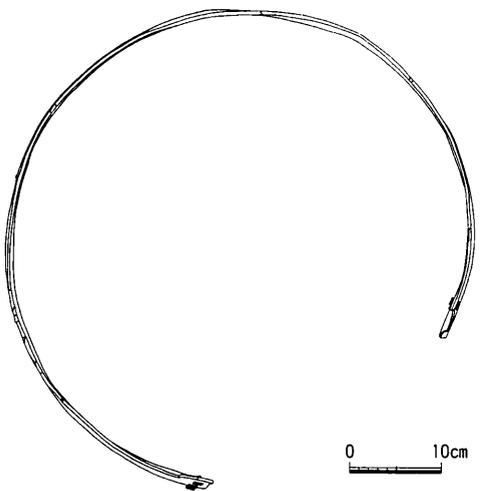
註(1) 曲物については、主に南 博史氏の研究成果を参考としている。南 博史「絵巻物による曲物の一考察」『平安博物館研究紀要 第7輯』、1982年。同「曲物研究と課題—形態と機能について—」『考古学ジャーナル 335号』、1991年。



第105図 SE 05伴出遺物実測図②



第106図 SE 05伴出遺物実測図③



第107図 SE 05伴出遺物実測図④

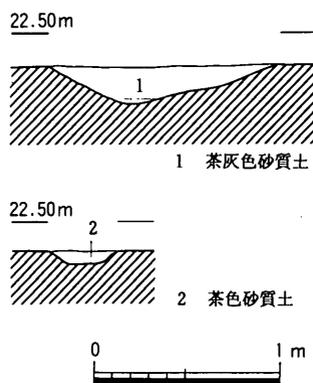
(6) 溝状遺構

① SD15 (第108・109図, 図版56①・78②)

M11・12区, N10・11区において検出した, 南北方向に通水する流路である。総延長は調査対象地域の南北範囲の全域に及ぶことが確認できており, その規模は約49mを測る。

また, 最大幅と最深部は各々142cm, 26cmである。埋土は茶灰色砂質土の単一土壌により形成されている。ところで, 後述のSD22との開削順序については, 重複部分を誤って掘削したために, 横断面図のみを記録として留めたが, 土層序観察用畦畔の観察結果から, 本流路が先行して開削されたことが判明している。

採取した遺物は弥生土器が圧倒的多数を占めており, 他にサヌカイト剝片2点が混在していることが判明したが, 前者については既に損壊した資料が多く, 甕形土器13点程度についてのみの器形復元が可能である。このうち2点を図示した(第109図402, 403)。また, 石製品としては打製石鍬1点(404)がある。404は側縁部の一部分に, 着柄のための抉り部が認められる。



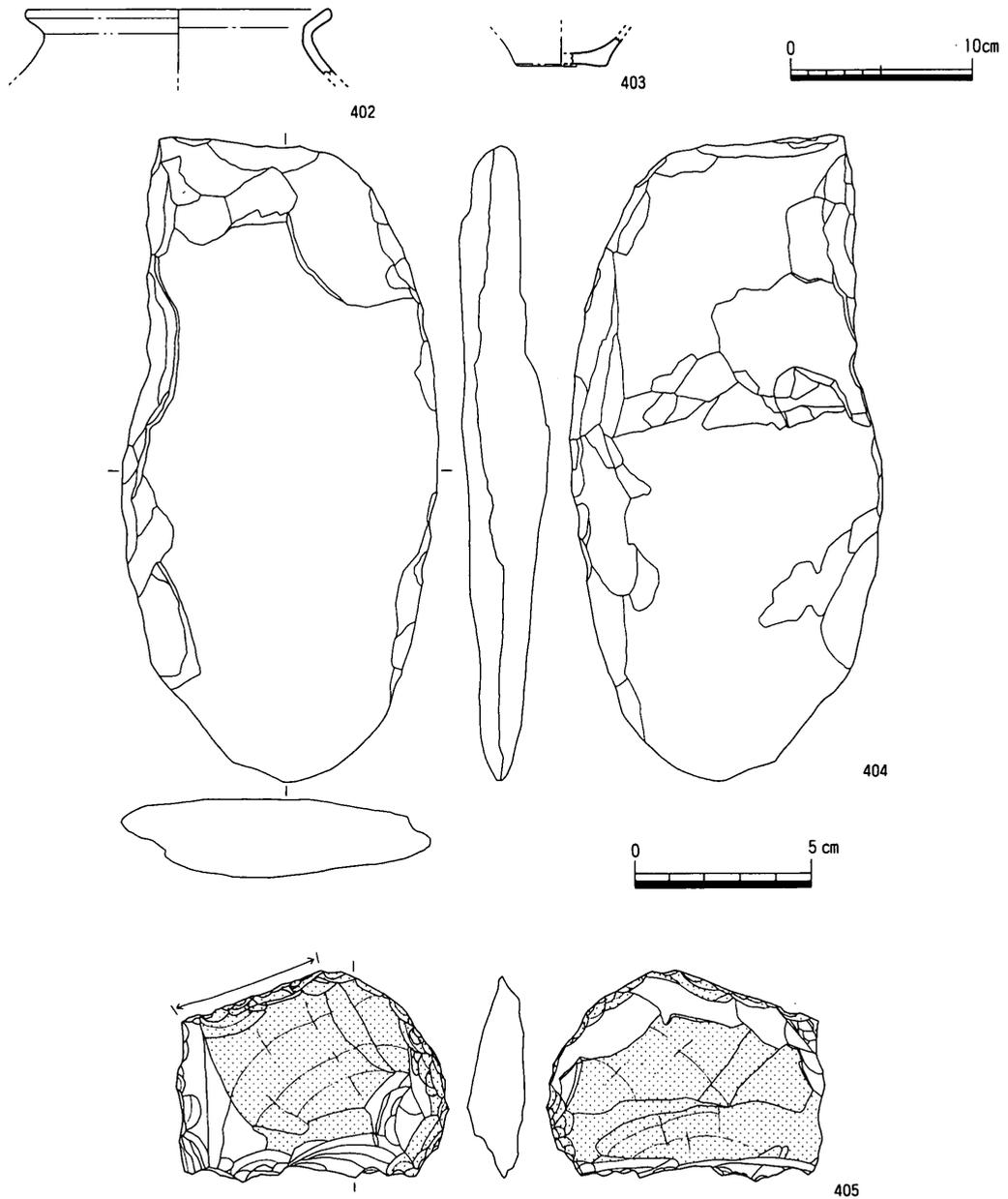
第108図 SD15・16断面図

② SD16 (第108・109図)

調査対象地域の東端部に相当する, O11区において検出した。遺構の遺存状態が不良であるために, 検出できた規模は総延長約8.6mに留まっており, 水源及び通水箇所については全く判然としていない。しかしながら, 流路の方向性は東南から北西方向に若干湾曲する形態を示すことから, 前述のとおり当該地域の旧状における地形の傾斜方向を示唆することが考えられる。

なお, 遺構の最大幅は50cm, 最深部は6cmである。埋土は茶色粘質土である。

遺物は打製石庖丁あるいは打製石斧と考えられる石製品(第109図405)1点を採取することができた。同資料については, 側縁部の一部分が使用により, 摩滅した状態を観察することができることから, 手擦れにより偶発的に生じたか, あるいは着柄のために意図的に敲打することにより, 鋭利さを失わせたことが推測できるのである。



第109図 SD15・16伴出遺物実測図

③ SD17・18 (第110図, 図版56②・57)

SD17はK10・11区, L10区において, また, SD18はM9区において検出した。調査時においては, 対象地域内部に未退去家屋が存在したために, 両遺構が連続する状態を確認することは困難であったが, 方向性, 規模, 埋没状態等の観察結果から, 同一遺構であ

るとの判断に至った。

流路は、大抵的に南東から北西方向に通水するが、特にSD 18が東方に湾曲することが顕著である知見から、当該地域の地形の変化は相当規模であったことが推測できるのである。

なお、遺構の規模はSD 17が総延長約16m、最大幅247cm、最深部23cmであり、SD 18が総延長約14m、最大幅238cm、最深部29cmを測る。

埋土は複数の土壌による水平堆積の状態を示していることから、漸次的に自然堆積することにより、埋積したことが想定できる。

両遺構ともに遺物は全く遺存していない。

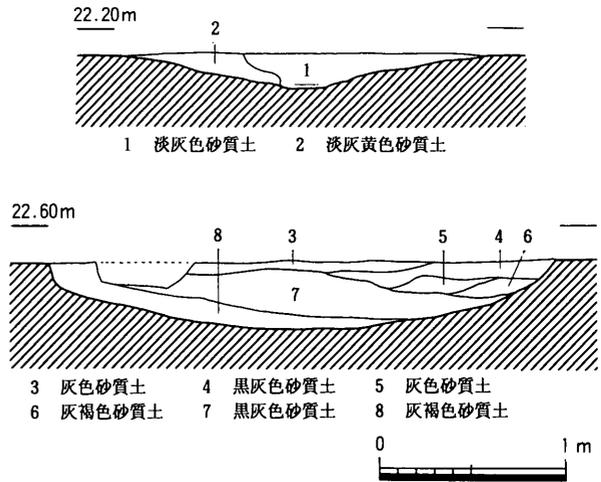
④ SD 19 (第111・112図, 図版59)

I 6・7区及びJ 6・7区に所在する。流路は南北方向に通水した後に、I 7区東壁面中央部分において湾曲することにより、北西方向に流路を転じていることが判る。しかしながら、H・I 8区における調査結果からは、本遺構の延長部分を確認することができないことから、その後は、ほぼ直線的に北北西方向に通水したことが推測できるのである。

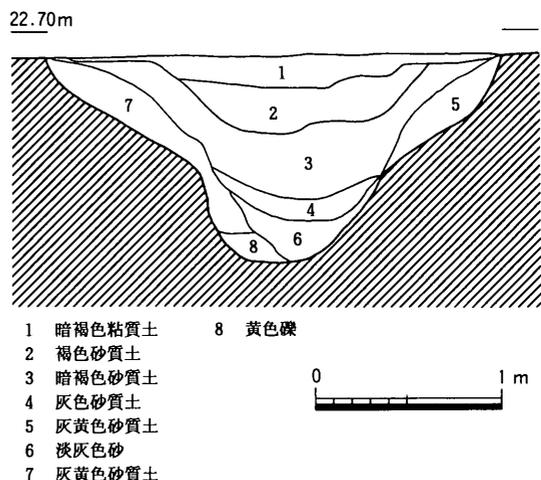
遺構は調査を行うことが困難な部分を含むと、総延長約26mを測り、最大幅350cm、最深部105cmである。

埋土は、複数の土壌が水平堆積する状態を示していることから、長期間にわたり、漸次的に埋積したことが考えられる。

伴出した遺物には弥生土器の壺形土器10点、甕形土器4点、器台形土器1点以外に、器形不詳容器の小片



第110図 SD 17・18断面図



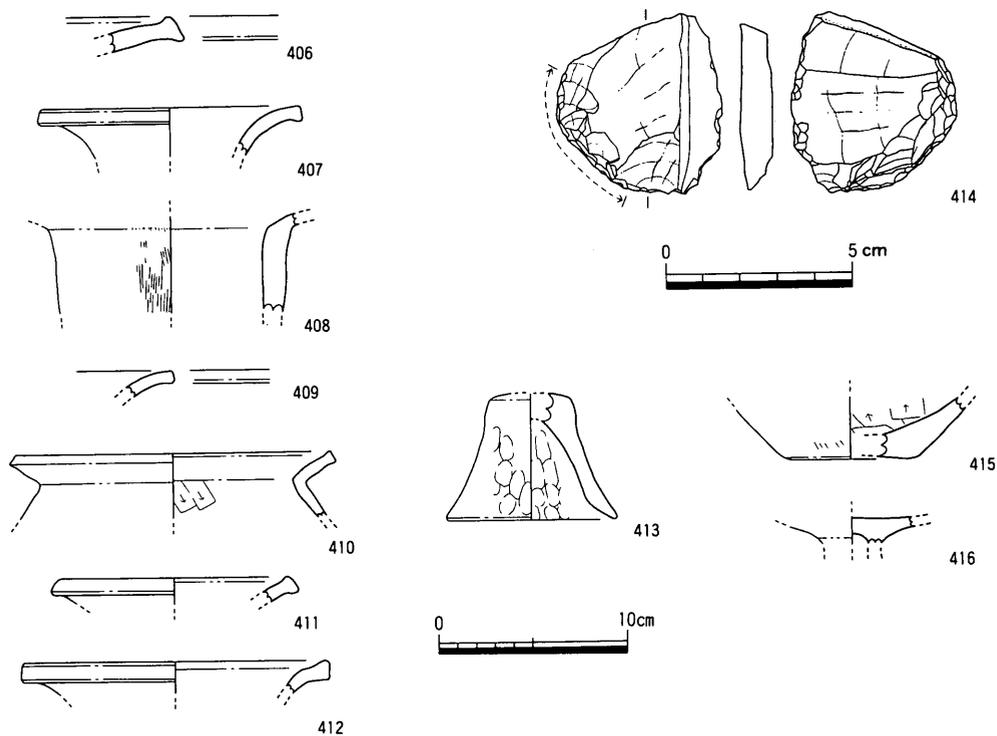
第111図 SD 19断面図

多数と、刃器としての用途が考えられる打製石器1点、サヌカイト小型剥片1点がある。これらのうち、図示したのは壺形土器3点（第112図406～408）、甕形土器4点（409～412）、器台形土器1点（413）、打製刃器1点（414）である。408は直立する頸部を有する器形である。413については、内外面に成形時における指押え作業の結果生じた、圧痕が多数観察できる粗製品であることから、支脚形土製品としての用途を考慮する必要があると考えている。414は長軸方向の側縁部に敲打の痕跡を観察することができる。

⑤ SD20（第112・113図，図版60①）

I 6・7区において検出することができたが、遺構の大部分が現存する市道と用水路の下部に埋没しているために、調査を実施し得たのはその一部分に留まっている。

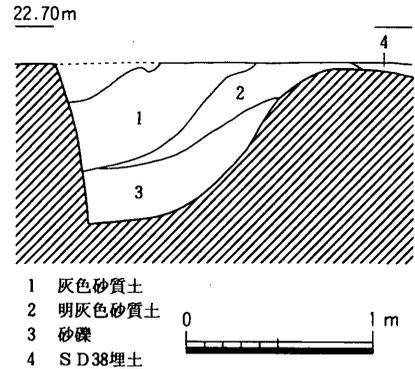
確認することができた遺構の規模は、総延長約9.7m，最大幅220cm，最深部72cmである。包蔵されていた遺物は少数であり、資料の遺存状態は著しく悪化しているために、図化し得た資料は弥生土器の甕形土器1点（第112図415）、同高杯形土器1点（416）である。



第112図 SD19・20伴出遺物実測図

⑥ SD21 (第117図)

M9・10区において、SD40の東岸部分に平行する流路の方向性を示す遺構である。遺構は総延長約22mを測り、最深部13cmの規模を有している。また、東西方向の幅については、最北端部分が広く拡大することにより、著しく形態が変化しているために、最小部分における規模が13cmであるのに比して、最大部分においては190cmであることが判る。



第113図 SD20断面図

また、北方の延長部分については、検出部分における深度が北部ほど小規模化することの知見が得られたことから、収束することが容易に想定し得るであろう。

遺物は土師器の供膳及び煮沸容器の小片を多数採取した。このうち、土鍋1点について図示している(第117図417)。同資料は口縁端部が内傾する形態であり、端部の外面直下の位置に下方に傾斜する鏝部を有している。なお、他に器形不詳の須恵器1点とサヌカイト剥片1点が混在することが判明している。

⑦ SD22 (第114図)

L～N11区、O10区において検出した。総延長は約60mであり、最大幅105cm、最深部21cmを測る。通水方向がほぼ東西方向を示す点については、当該地域の地形に見られる傾斜方向の影響を受けたことを推測しているが、この点については前代の河川跡(SR08)の一部分が湾曲した流路形態を示す事実からも立証することが可能であると考えている。埋土は茶灰色砂質土が基本層序であるが、下流ほど土壌を構成する粒子が大きくなることが判る。

遺物は器形不詳の土師器6点を採取したのみである。

⑧ SD23 (第114図)

O10区において、SD22から北方に派生する流路である。規模は総延長約20m、最大幅72cm、最深部8cmを測ることができる。

遺構の延長部分を、現存する東西方向の用水路の北方地域において検出することができていない点については、同用水路の下部において本流路が収束したか、あるいは南北方向

の用水路の下部に埋没したために、調査を実施し得なかったことが原因であると考えている。

埋土は茶色粘質土の単一土壌により形成されている。

遺物は土師器の煮沸容器 1 点を採取することができたが、図化するには至らなかった。

⑨ SD24・25・26 (第115・117図)

L10区, M・N11区, O12区において検出した, 東北東-西南西の方向性を示す直線的な形態の流路である。里道, 用水路等の施設が現存するために, 遺構が分断されているが, 旧状においては総延長約70m以上の規模を有する連続した遺構として存在したことが推察できる。なお, 最大幅と最深部は各々35cmと12cmである。

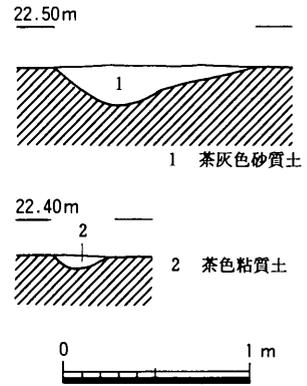
ところで, 調査対象地域における東西方向の規格的な流路としては, 本遺構が唯一であり, しかも当該地域に現存する地割りの東西方向の基軸の方向性に合致することが判る。

遺物はSD24から土師器土釜 1 点 (第117図418) と器形不詳容器の小片 3 点が, SD25からは土師器皿 5 点 (うち 1 点を図示した。第117図420), 同煮沸容器 2 点, 須恵器杯 1 点 (421), 同甕 1 点 (422) が伴出している。418は口縁部直下の外面に下方に傾斜する鋸部を有する形態である。

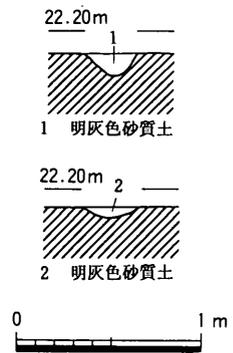
⑩ SD27 (第116・117図)

L11区において検出した。総延長約5.2m, 最大幅26cm, 最深部 8 cmの規模を有する, 直線的な形態の小規模遺構である。

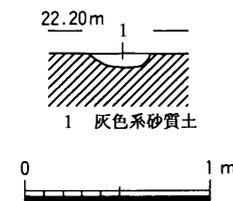
特に, SB03の東壁面部分に平行した位置関係を示すとともに, 同壁面の規模に合致する規模を測ることから, 同建物遺構に付設された遺構であると考えている。そこで, いわゆる「雨落ち溝」としての掘削目的を検討するのであるならば, 建物の壁面との距離が大きいために, その目的を果たすことは難しいことが判る。したがって, 本遺構についてはむしろ居住地域の内外を区画するための用途を与えるこ



第114図 SD22・23断面図



第115図 SD24・25断面図



第116図 SD27断面図

とが妥当であると考えられるのである。

埋土は灰色砂質土である。採取した遺物は土師器土鍋1点（第117図419）と煮沸容器の小片1点である。

⑪ S D 28・29

N12・13区において並列した位置関係を示している。特にS D 29は次代の農業耕作行為により発生した、溝状遺構群（S D 54～58）のS D 58の位置に完全に合致することから、同一の目的と方法により開削されたことが推測できる。さらに、S D 28がS D 55の延長線上に所在する事実からも、この点を傍証することが可能である。

遺構の規模はS D 28が総延長約4 m、最大幅20cm、最深部7 cm、S D 29が総延長約10m最大幅40cm、最深部12cmを測る。

両遺構ともに遺物は全く遺存していない。

⑫ S D 30・31（第117図）

O13・14区において検出した。並列した位置関係を示すことと、開削方向が現状における耕作地の開墾方向に合致することが判る。遺構の規模は、S D 30が総延長約11m、最大幅46cm、最深部7 cm、S D 31が総延長約8.8m、最大幅75cm、最深部9 cmである。

前述のS D 28・29同様、農業耕作行為の結果発生した遺構であると考えられる。

採取した遺物は土師器碗1点（第117図423）と同土釜1点（424）である。

⑬ S D 32・33（第117図，図版58②・79②）

P14区及びQ13・14区において検出した。遺構の南方向の延長部分については、対象地域の外部に存在しているために、詳細を知り得ないが、Q13区中央部分において流路が結合する状態を示すことから、同地点以南の地域においては同一の遺構であることが推測できる。すなわち、両遺構については、上記地点以南の地域における南東から北西方向に通水する流路が、同地点において異なる流路として分流することにより形成されたことが想定できるのである。ただし、流路の分割の要因について明らかにする情報は得られておらず、また、分流地点においては、構造物の痕跡を認めることができないために、それが人力によるのか否かの結論を導くことが困難である。

なお、各遺構の規模は、S D 32が総延長約32m、最大幅108cm、最深部29cmであり、S D

33は総延長約32m，最大幅99cm，最深部27cmである。

遺物はSD32からは土師器の供膳及び煮沸容器の小片を多数採取しているが，図示し得たのは土釜の口縁部1点（第117図425）と脚部3点（426～428）のみである。また，須恵器甕8点が混在するが，図化するには至っていない。石製品は砥石1点（429）と前代の資料と考えられる打製石斧1点を見ることができる。

また，SD33においては，土師器杯2点（第117図430,431），同皿1点（432）以外に，器形不詳容器の小片多数と，須恵器杯5点（このうち3点を図示した。433～435），同甕1点（436）を採取している。

⑭ SD34・35・36（第117図，図版58②）

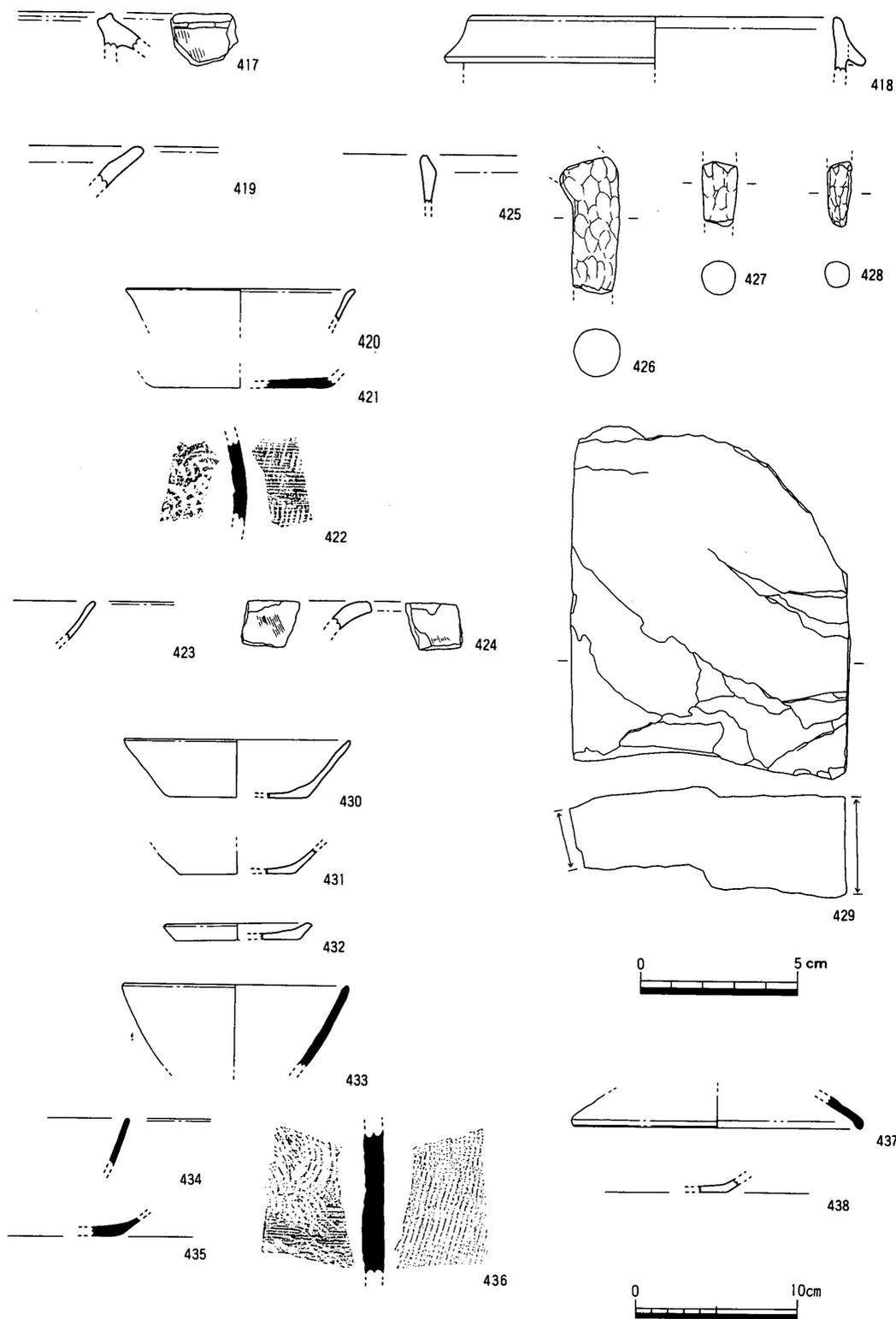
Q13・14区において検出した直線的な形態の流路群である。ただし，SD34については，14ライン以南の地域における遺構の削り出し作業時に過度の掘削を行ったために，その延長部分を検出し得ていない。また，SD36は調査対象地域の外部に，遺構の一部が埋没しているが，調査地域の南北方向の全域を貫通していないことが判る。

さて，これらの流路の方向性は，現存する土地区画の南北方向の基準軸のそれに合致することが判るが，開削あるいは埋積時期が特定できないために，その決定時期と土地区画の施工時期との先後関係は明確ではない。しかしながら，流路群の開削位置が，旧状において低地状の地形（SX06）を呈していた事実から，同地形の埋積後においても，当該位置が東西地域を分断する要衝に相当していたことは容易に理解することができるのである。

各流路の規模は以下のとおりである。

	総延長 (m)	最大幅 (cm)	最深部 (cm)
SD34	21	128	9
SD35	27	64	20
SD36	18	104	24

なお，各流路の開削順序については，伴出遺物による情報が欠如しているために判然としていない。



第117図 S D21・24・25・27・31~34・37伴出遺物実測図

遺物はSD34から土師器の供膳容器が多数件出しているが、遺存状態に優れないために、図化することは困難である。なお、図示した資料は須恵器蓋（第117図437）である。

⑮ SD37（第117図）

I 8区，J 7・8区において検出した。調査時における家屋の存在のために、調査を実施することが困難な部分が生じたが、推定できる遺構の規模は総延長約18m以上であり、最大幅と最深部は46cmと10cmを測ることができる。

流路はほぼ直線的な形態であり、南端部分の延長線上に、井戸跡（SE05）が所在することから、井戸周辺部分の汚水を排出することを目的として開削されたことが想定できる。

遺物は土師器の供膳容器6点と同煮沸容器6点を採取している。図示したのは土師器杯（第117図438）である。

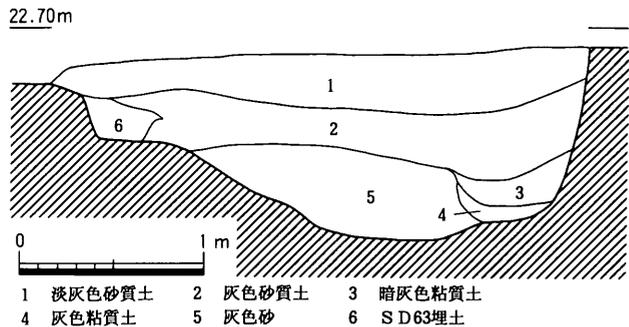
⑯ SD38（第118～120図，図版60①・63）

I 6・7区において、前述のSK35あるいはSD42等の下部に所在する。流路の方向性は現存する土地区画の南北方向の基準軸のそれに合致することが判る。

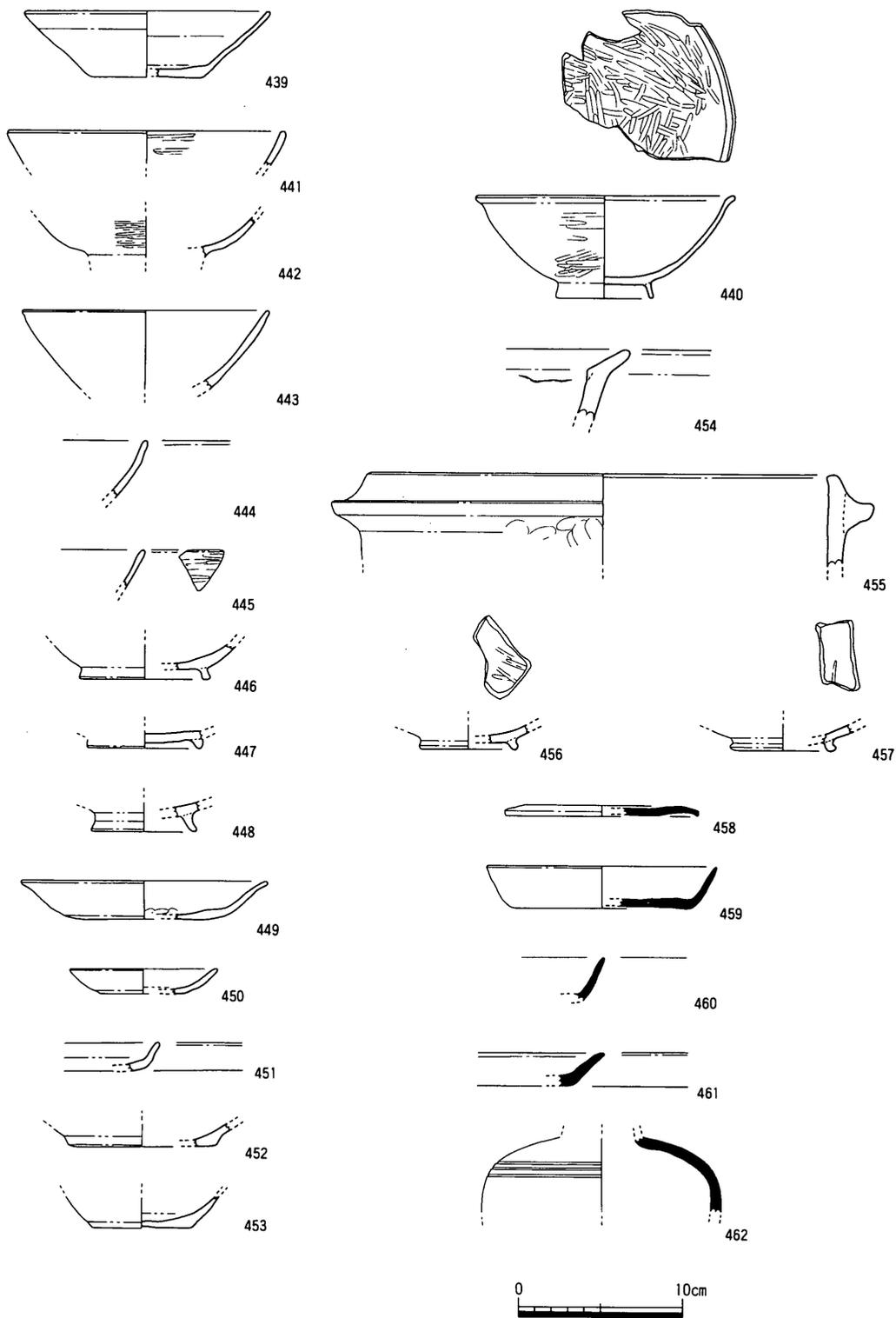
遺構は総延長（推定部分を含む）約23m，最大幅275cm，最深部83cmを測る。

遺物は土師器，黒色土器，須恵器，用途不明鉄製品等を採取しているが，とりわけ土師器の出土頻度が圧倒的に高く，供膳容器と煮沸容器の小片を多数確認している。図示した資料は，土師器杯（第119図439），同碗（440～448），同皿（449～453），同土鍋（454），同土釜（455），黒色土器碗（456,457），須恵器蓋（458），同杯（459,460），同皿（461），同壺（462），同甕（第120図463）である。440の内面には不規則なヘラ磨き調整が濃密に施されている。448の高台部は外反する形態である。土師器皿は底面が不明瞭な器形（449～451）と明瞭に創造された器形（452,453）に分別することができる。458は端部が若干垂下する形態である。

なお，少量ではあるが，焼土塊を採取することができた。



第118図 SD38断面図



第119図 SD38伴出遺物実測図①

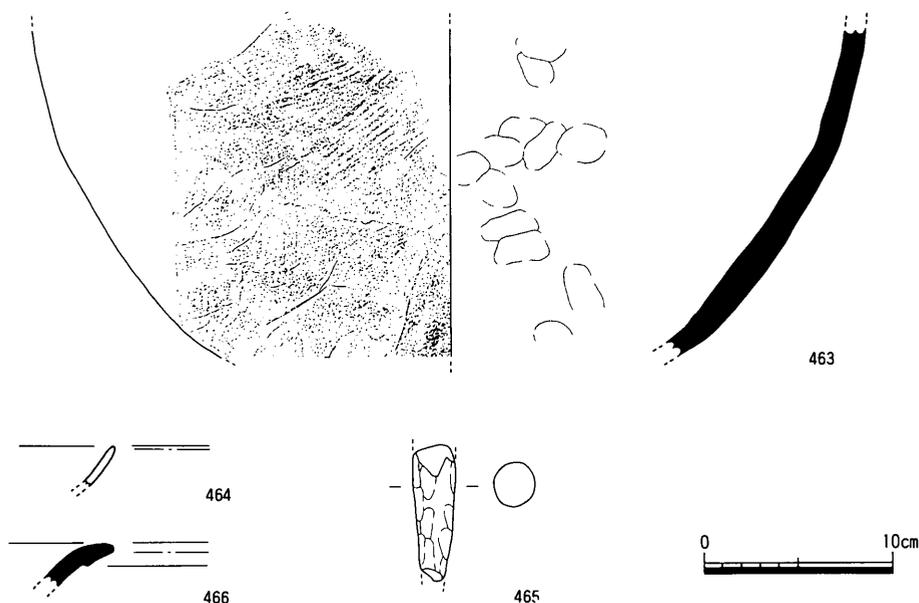
⑰ SD39 (第120図)

I 6・7区及びJ 7区において検出した。遺構の北半部分については、道路本体の工事範囲に接触した位置に埋没することが想定されたために、調査を行い得ていない。

遺構は直線的な形態であり、北東-南西の方向性を有する。また、この方向性については、当該地域における土地区画の東西方向の基準軸の方向性に合致することが判る。

なお、規模は、総延長約11m、最大幅80cm、最深部31cmを測ることができる。

採取した遺物には、多数の土師器の供膳容器と煮沸容器の小片、須恵器壺2点、同甕5点があるが、図化し得たのは土師器碗1点(第120図464)、同土鍋脚部1点(465)、須恵器壺1点(466)である。

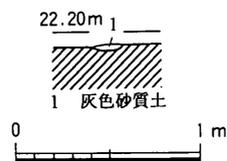


第120図 SD38伴出遺物実測図②・SD39伴出遺物実測図

⑱ SD40・41 (第121・123図, 図版58①・68)

SD40はM 9・10区及びN 9区に所在し、SD41はL・M11区において検出した。総延長は前者が約31m、後者が約18mである。

なお、両流路の形態は完全な同一直線を描くことが判るが、SD41とSD25の交点の南部分においては、これらの延長部分を検出することができなかったことから、断続的な流路として機能したことが推測できる。



第121図 SD41断面図

各々の遺構の規模については、SD40が最大幅75cm，最深部11cmであり，SD41は最大幅55cm，最深部5cmである。

埋土は灰色系の砂質土壌である。

SD40からは，土師器の供膳容器と煮沸容器の小片を多数(このうち皿：第123図467，土釜：468を図示している)，須恵器杯1点，同器形不詳資料1点，緑釉陶器碗1点(469)，備前窯跡産出壺1点(470)が，また，SD14においては，土師器皿1点(471)，須恵器甕3点，瓦器碗1点(472)等が伴出している。

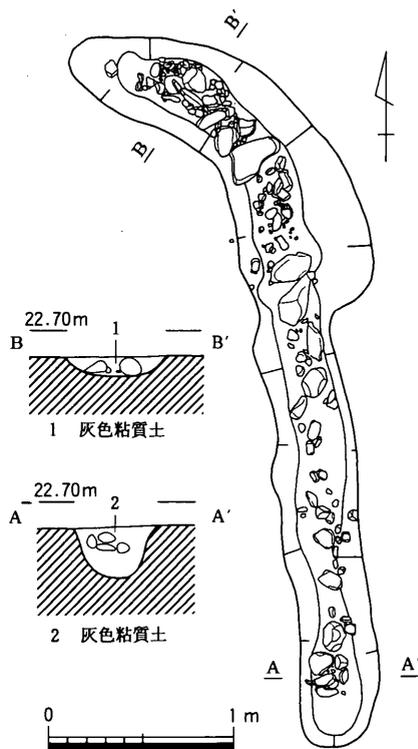
⑩ SD42 (第122・123図，図版55②)

I7区において検出した。遺構の一部分が断絶しているが，原形はL字形の平面形態を呈していたことが判る。遺構の南・西部は現存する市道，用水路及び調査不可能な箇所下部に埋没していると考えられるために詳細を知り得ないが，土坑(SK35)を中心として，その周囲に配置された状態を見ることができることから，同土坑を包囲することを目的として開削されたことが想定できる。

また，東部の遺構の底面に相当量の自然石群が遺存していた事実により，上記土坑の覆土あるいは封土に包蔵されていた石塊が転落することにより，堆積したことが推測できるのである。

なお，遺構の規模は総延長約7m，最大幅70cm，最深部20cmである。

採取した遺物は，土師器供膳容器13点，同煮沸容器1点，須恵器壺1点，同捏鉢1点であるが，いずれも遺存状態に優れないために，須恵器捏鉢(第123図473)についてのみ図示した。



第122図 SD42平面・断面図

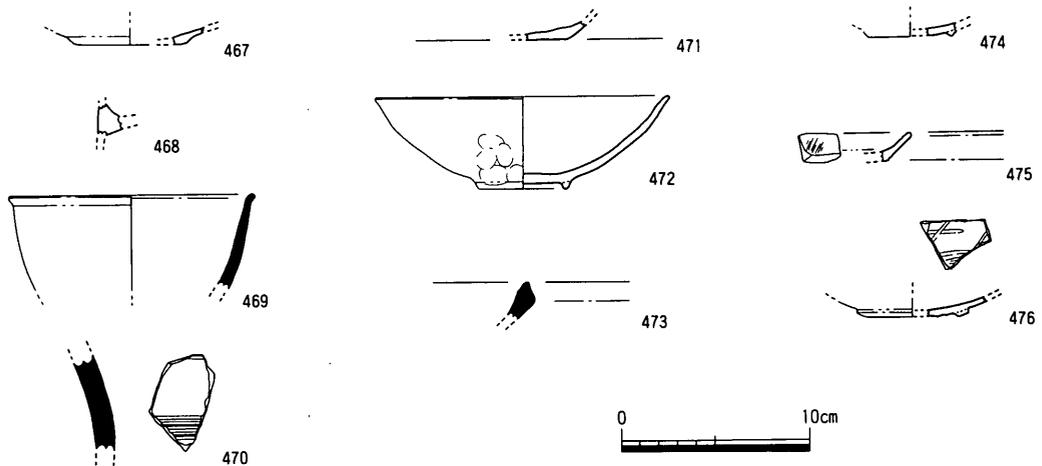
⑩ SD43・44・45 (第123図)

I 7区において検出した。SD43とSD44が東西方向に並列して配置されており、SD45はこれらに直交する形態を示している。ただし、SD45の北端部分についてはSD43の北岸部分を破壊するまでには至っておらず、また、SD43の東端部分の形態が南方向に屈曲する傾向を示していることが判る。したがって、これらの遺構群が同一時期に併存していた事実を考慮するのであるならば、全体の位置関係は不整な格子状の配置を示していたことが推測できるのである。しかしながら、これらの遺構群の開削の意図については全く判然としていない。

遺構の規模については以下のとおりである。

	総延長 (m)	最大幅 (cm)	最深部 (cm)
SD43	5.8	134	8
SD44	6.2	93	17
SD45	3.1	44	7

採取した遺物は、器形不詳の土師器の小片が多数を占めており、他に須恵器杯1点、同壺3点、同甕3点、瓦器碗2点がある。図示した資料は瓦器碗(第123図474)である。



第123図 SD40～46伴出遺物実測図

④ SD46 (第123図)

J 6・7区に所在する。遺構は北部の幅が拡大する形態であり、規模は最大幅188cm、最深部10cmを測ることができる。

ところで、本遺構の埋積後、南端部分にSX12が掘削されたために、南方向の形態は判然としていない。また、北部についてはSD39の開削による破壊を被っている。

遺物は土師器皿1点(第123図475)、瓦器椀1点(476)がある。476は内面見込み部分にヘラ磨き調整の痕跡を観察することができる。また、高台部の造作が粗雑であり、扁平な形態を呈している。

(7) 不明遺構

① SX02・03 (第124図)

I・J 7区に所在するが、調査を実施した部分が小規模な範囲に留まったために、遺構の全体像を明らかにするには至っていない。

遺構は重複する状態を示しており、SX02が先行して掘削されたことが判る。また、個々の規模はSX02が最大幅58cm、最深部7cm、SX03が全長250cm、最深部7cmである。

SX02からは弥生土器の甕形土器14点と器形不詳資料を5点採取している。このうち、甕形土器1点について図示した(第124図477)。口縁部が短く外湾する形態である。

また、SX03においては土師器土鍋1点(478)、同土釜1点(479)、同煮沸容器の脚部1点(480)を採取している。なお、本遺構の伴出遺物には、弥生土器の小片10点が混在していることが判明しているが、これらについてはSX03の内部に包蔵されていた遺物が混入したことが推測できる。

② SX04・05 (第124図)

L10・11区において検出した。遺構の削り出し作業時には、不整円形の平面形態を呈する凹地形が埋没することが予測されたが、中央部分に存在する基盤層の未掘削部分により遺構が分断されることが判明したために、複数の略称・番号を付して調査することに決定し、調査順序に従い、西側の円弧状の平面形態を示す遺構をSX04、東側の不整長楕円形の平面形態の遺構をSX05と呼称した。

前者の規模は、全長170cm、最大幅21、最深部12cmであり、後者のそれは、長径179cm、最大幅73cm、最深部33cmを測ることができる。

また、埋土は前者が灰黄色砂質土、後者が茶灰色砂質土の単一層序により形成されている。伴出した遺物は土師器土鍋 1 点（第124図481）、同器形不詳資料 8 点、器形不詳須恵器 1 点、サヌカイト剥片 1 点である。

③ SX06（図版58②）

調査対象地域の東端部の Q13・14区において検出した。西から東方向への傾斜地形を呈することから、凹地形の縁辺部あるいは微高地形の緩斜面部に相当することが考えられる。また、当該地域における現状の地形的特色は、南から北方向に緩く傾斜する状態を示しており、しかも、本遺構の埋積後における次代の流路（SD34～36）の開削方向が、その方向性に合致する状態を観察できることから、本遺構の主軸の方向性についてもそれに酷似することが推察できるのである。したがって、遺構の最大幅は東西方向の距離から、約 13.5m 以上であることが想定できる。また、最深部分については、Q14区の中央部分に相当することが判明しており、34cmを測ることができる。

なお、本遺構の調査により、当該地に次代の流路が集中的に開削された要因が、この低地状の地形を呈する、自然地形の埋没にあったことが推察できるのである。

遺物は全く採取することができなかった。

④ SX07

I 7区において、SD19の埋没後に、その上位に掘削された遺構である。平面形態は南方向の溝状を呈しており、全長130cm、最大幅17cm、最深部12cmの規模を有する。

内部から少量の骨塊を採取したが、遺構の規模と形態が埋葬施設としての条件を満たしていないために、これらが混入した原因については判然としていない。

採取した遺物は、土師器の小片 2 点と部位が判然としない少量の骨塊である。

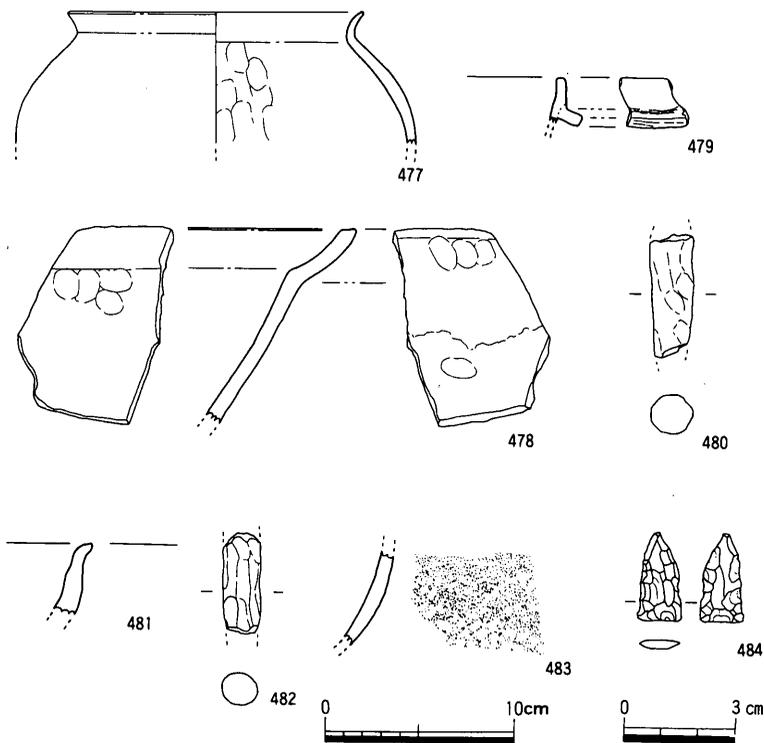
⑤ SX08（第124図）

I 7区において検出した。SD43の一部分を破壊することにより、掘削されたことが判る。平面形態は不整長楕円形を呈しており、規模は長径109cm、短径54cm、最深部15cmを測ることができる。壁面は緩く傾斜し、底面はほぼ平坦に掘削されている。掘削の目的は全く不明である。遺物は土師器土鍋の脚部 1 点（第124図482）と同器形不詳資料 4 点を採取している。

⑥ SX09 (第124図, 図版59①)

I 7区東南隅部分において, SD19の東岸部分を破壊して掘削されている。平面形態は北壁面の一部分が外方向に突出する不整長楕円形を呈し, 長径165cm, 短径65cm, 最深部18cmの規模を有する。遺構内部は, 壁面が緩く傾斜し, 底面はほぼ平坦に掘削されている。

土師器土鍋1点(第124図483)を図示した。下胴部外面に格子状のタタキ目調整が施されている。なお, 弥生土器12点が混在することが判明しているが, これは本遺構がSD19の埋土の一部分を掘削することにより, 設けられていたことに原因すると考えている。



第124図 SX02~04・08・09・12伴出遺物実測図

(8) 柱穴群 (第125~127図, 図版63・67・68)

I・J 6~8区とL~N 9~12区において集中して存在する柱穴群については, 建物遺構を構成しないが, その規模が掘立柱建物跡の柱穴の規模と大きく異なることから, 旧状においては, 建物遺構の一部分を形成していたことが推察できるのである。したがって本遺跡地における居住地域は, 上記の遺構群が形成する東西約40~60mの南北方向に主軸方向を示す, 限定された範囲内に設定されたことを想定している。

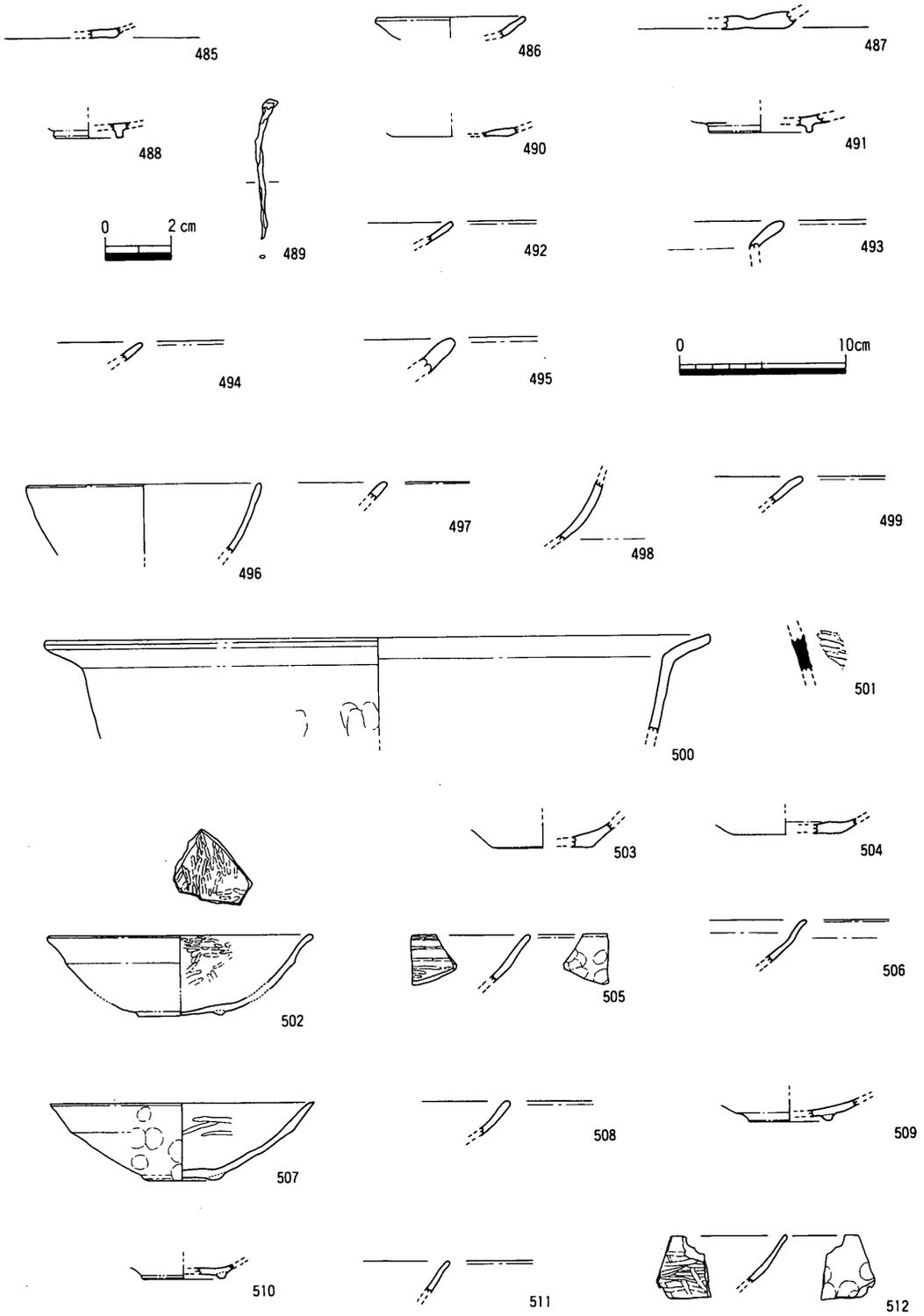
なお、I・J 6～8区において検出した柱穴群を西部柱穴群、L～N 9～12区において検出した遺構群を東部柱穴群と呼称することにより報告する。

ところで、主として10ライン以北及びOライン以西の地域において検出した小規模な（最大径10cm程度、最深部10cm程度）「ピット」群は、相当密度で分布するが、規則的な配置状態を示さないことから、人為的に掘削された遺構としての性格を有していないことが考えられる。

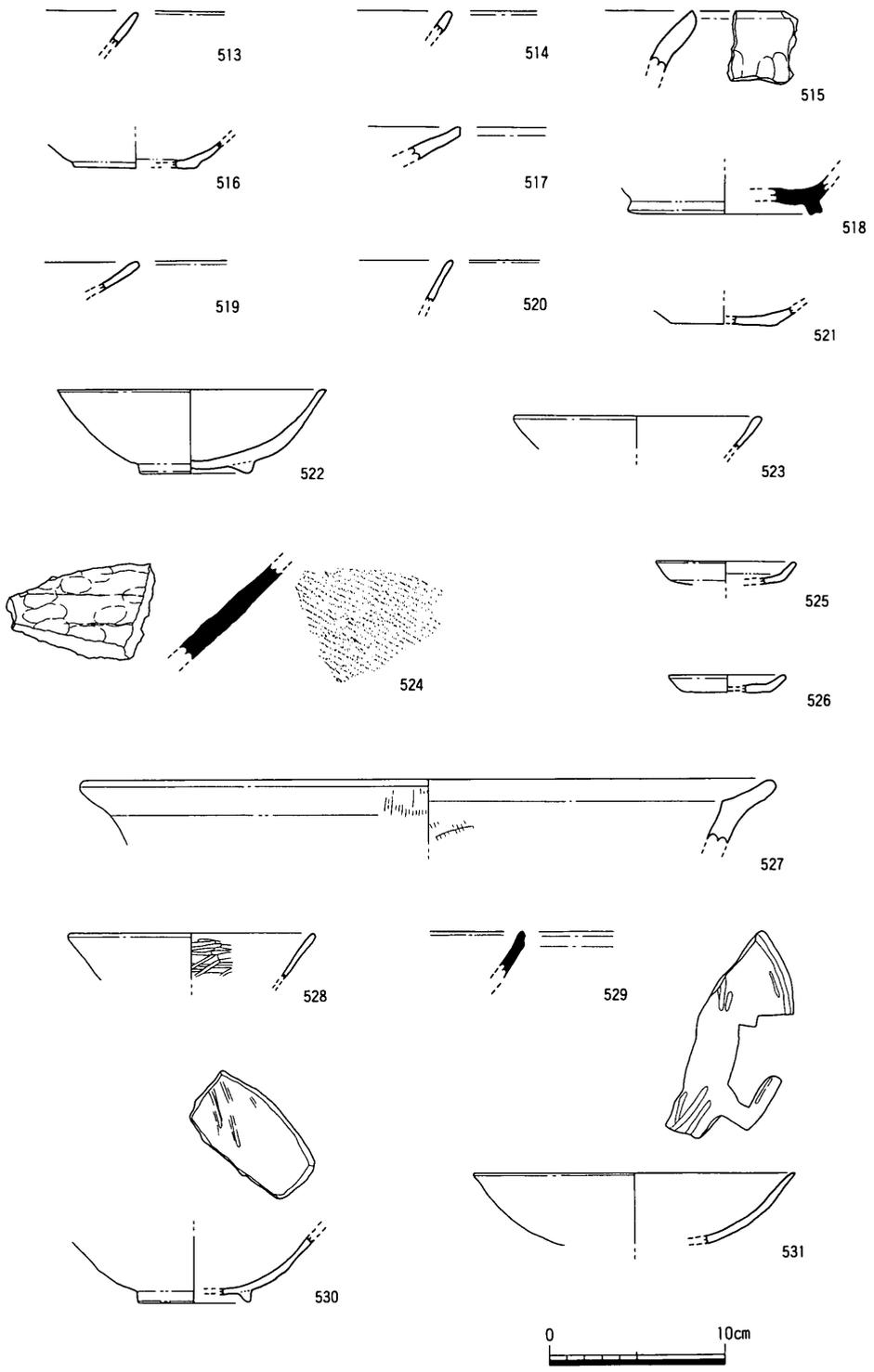
遺物は各群単位に総括して報告する。

まず、東部柱穴群から伴出した遺物は遺存状態が優れていないために、図示し得る資料が極めて限定されている。489は針状を呈する鉄製品であり、先端部に比して軸頂部が拡幅した形態を示すが、紐通しのための穿孔を認めることはできない。491の高台部は縦断面が逆台形形の形態を呈している。501は還元炎焼成により製作された須恵器甕の胴部的一部分であるが、軟質な器壁を有することと、外面に格子状のタタキ目が観察できることから、岡山県亀山窯跡において産出された製品であると考えている。502は内面に不規則なヘラ磨き調整が密に施されている。また、高台部は縦断面が逆三角形形を呈する点の特徴である。507については既に器壁が著しく磨耗しているが、内面に分割した同心円状のヘラ磨き調整の痕跡を見ることができる。高台部は形骸化しており、本来の機能を喪失していることが判る。509,510は高台部の縦断面が逆台形形を呈する形態である。

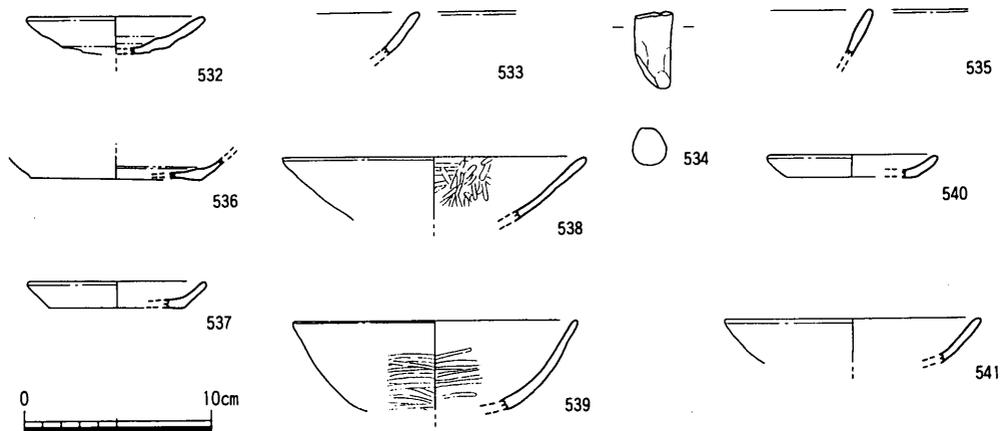
西部柱穴群から採取した遺物のうち、518は長胴の形態を復元することができる。522は高台部の縦断面が扁平な逆三角形の形態を示す資料である。525,526は器壁が厚く、浅い形態を示す点の特徴である。527の口縁部は内湾してく字形に屈曲する形態である。529については捏鉢の器形を復元することも可能である。531については器壁の磨耗が進行しているが、内面に分割した同心円状のヘラ磨き調整の痕跡を観察することができる。



第125図 東部柱穴群伴出遺物実測図



第126图 西部柱穴群伴出遺物実測図①



第127図 西部柱穴群伴出遺物実測図②

(9) 包含層出土の遺物（第128～137図，図版65・66・70・73・75～78①）

遺物包含層は，調査対象地域の東半部分を中心とした広範囲な地域と，西端部の狭小な地域においてほぼ水平に堆積する状態を確認している。これらは小規模な範囲においては複数の堆積層に分別することが可能な部分を見ることもできるが，大体的には同一層序であることが判る。

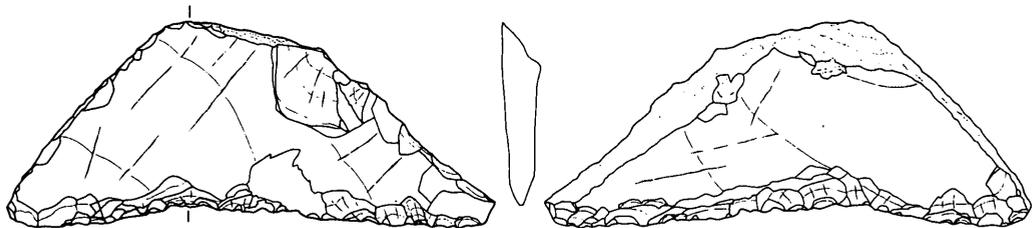
上記包含層から採取した遺物には，複数の時期の資料が混在することから，単一時期の文化層を構成しているとは考えられない。したがって，河川の氾濫等の自然の営力を成因と考えることが適当であろう。

まず，対象地域東半部の資料から記述する。

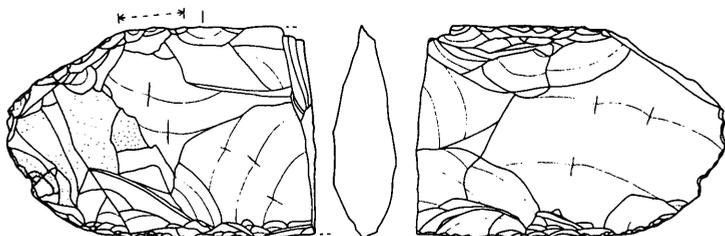
① 石製品（第128・129図）

第128図542～544は打製石庖丁である。542は素材の自然礫面を未加工の状態背部として利用した，逆台形形の形態を呈する。また，刃部についてはほぼ直線的な形態である。543は背部と刃部が平行する直線的な形態を示しており，背部の一部を敲打することにより，握り易く加工していることが判る。544は原形の大部分を失っているが，直線刃を有し，長軸方向の端部に抉りを施した形態である。

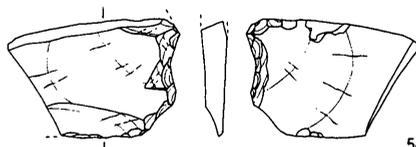
545～547は不定形な剝片の一部分に刃部を形成していることから，刃器として使用されたことが推測できる。545,546は直線刃を有する形態である。第129図548についても刃部を有することから刃器として分類することができるが，背部と刃部が直線的に平行する形態を示しており，定形化した石庖丁様の原形を復元することも可能であると考えている。



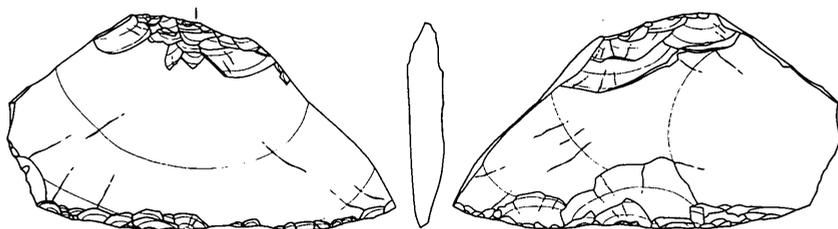
542



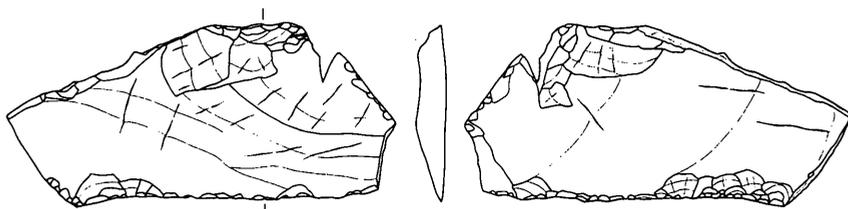
543



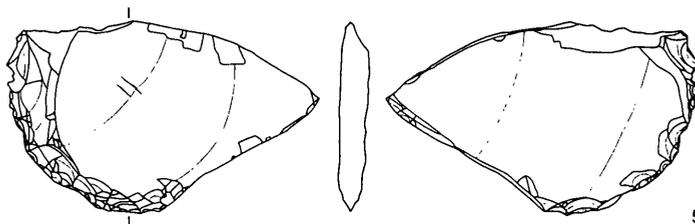
544



545

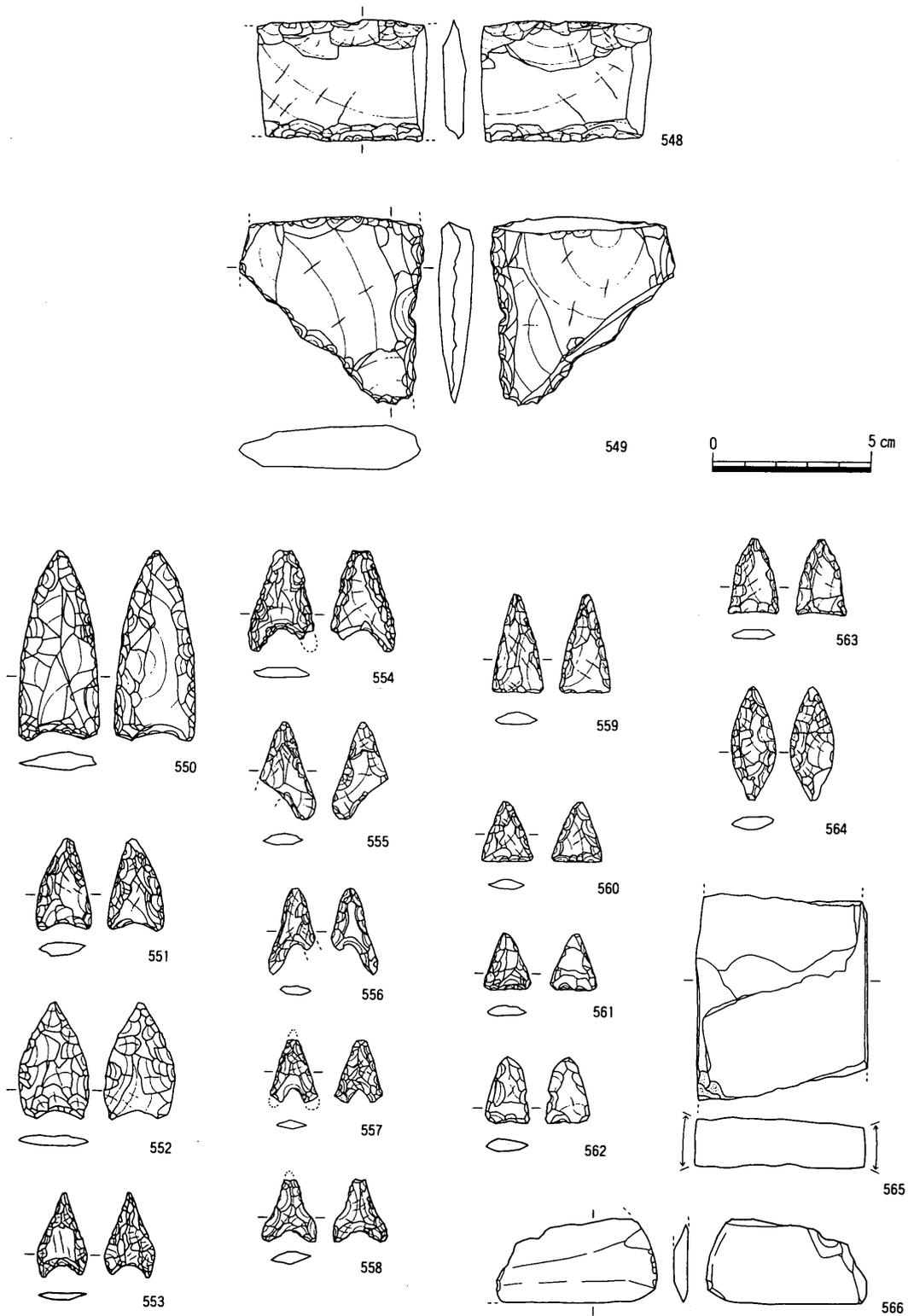


546



547

第128図 東部包含層出土石製品実測図①



第129図 東部包含層出土石製品実測図②

549は打製石斧の一部分であり、原形はいわゆる短冊形の形態を呈していたことが推察できる。

打製石鏃を15点図示した。550～558が無茎凹基式、559～563が無形平基式、564が柳葉形の形態である。特に、550の大きさが他を圧倒している点の特徴である。

砥石（565）は、遺存する両側縁部に長軸方向の擦痕を観察することができる。

566は磨製石庖丁である。刃部が直線的な形態であり、穿孔は一定方向から施されたことが判る。

② 土師器（第130～132図）

杯（第130図567～571）は遺存状態が優れないが、全て原形は口縁端部から底部の屈曲点までの距離が短い、浅い器形が推測できる。

椀は高台部の形態により、3種類に分別することができる。まず、574～580のそれは、下端部が外方向に張り出し、縦断面が逆三角形形を呈する。また、581～591については、逆台形形の縦断面を示し、低い造作である点の特徴である。592～595の高台部は円盤状の形態である。

皿（596～604）の遺存状態は不良であるが、本調査対象地域において、唯一（602）底面を粘土塊から回転糸切りした資料を確認することができた。

土鍋は口縁端部を逆く字形に内傾した資料（第131図605～609）と、同端部を肥厚した資料（610,611）を主に図示した。609は片口を有する。610と611については外耳が付属する器形である。612は把手部分に相当することが考えられる。

土釜（613～624）は口縁端部に近接した位置に短く突出した鏝部を有する形態である。第132図629の鏝部は縦断面が横転した台形形の形態を呈している。630は口縁端部に鏝部を付帯した器形である。631～634はく字形に外反する口縁部と、直立する胴部を有する器形である。

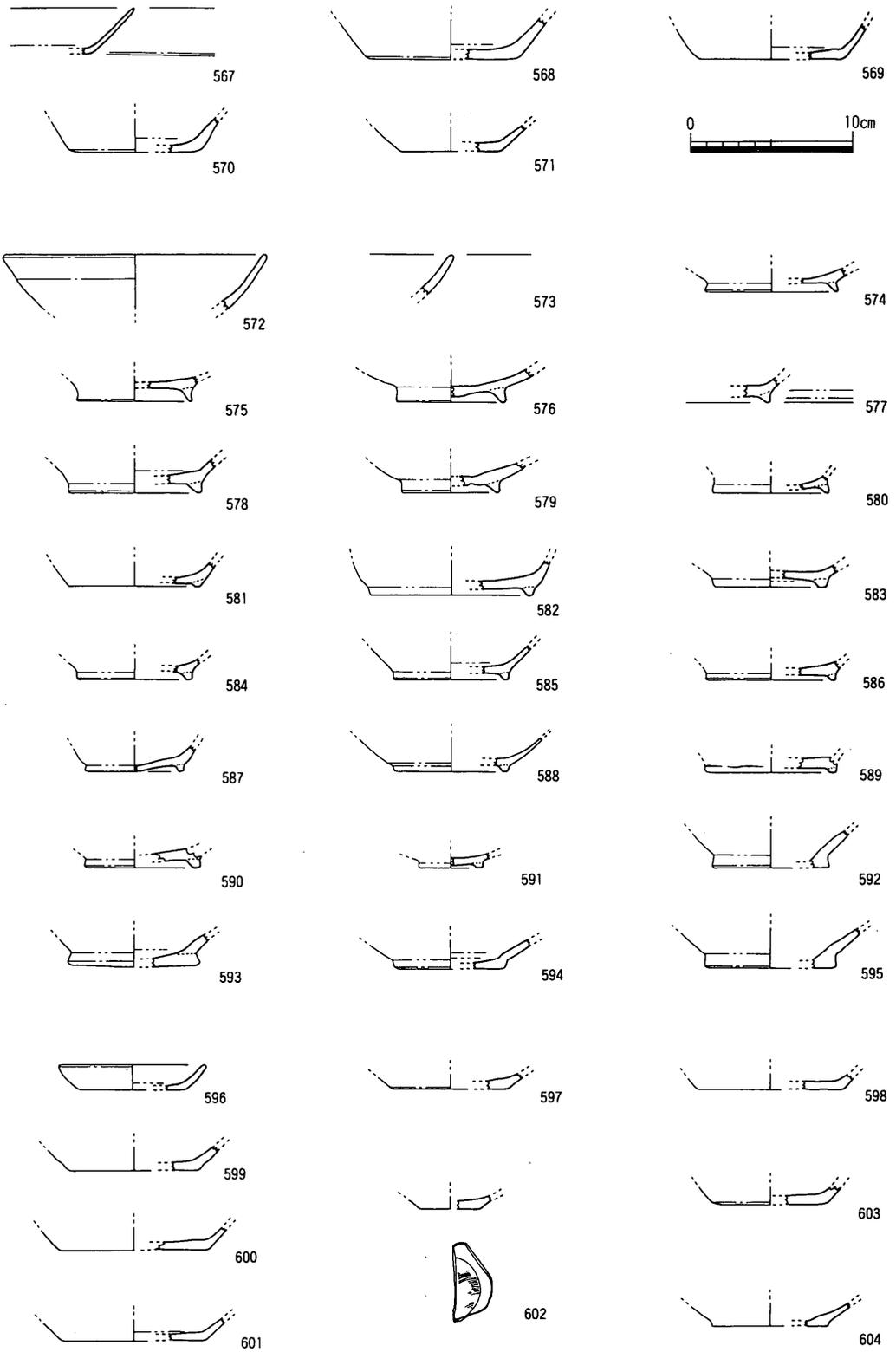
煮沸容器の脚部と考えられる資料を11点（638～648）図示した。

摺鉢（649）は肥厚した口縁部を内傾する点の特徴である。また、胴部外面には指頭部による圧痕が顕著に認められる。

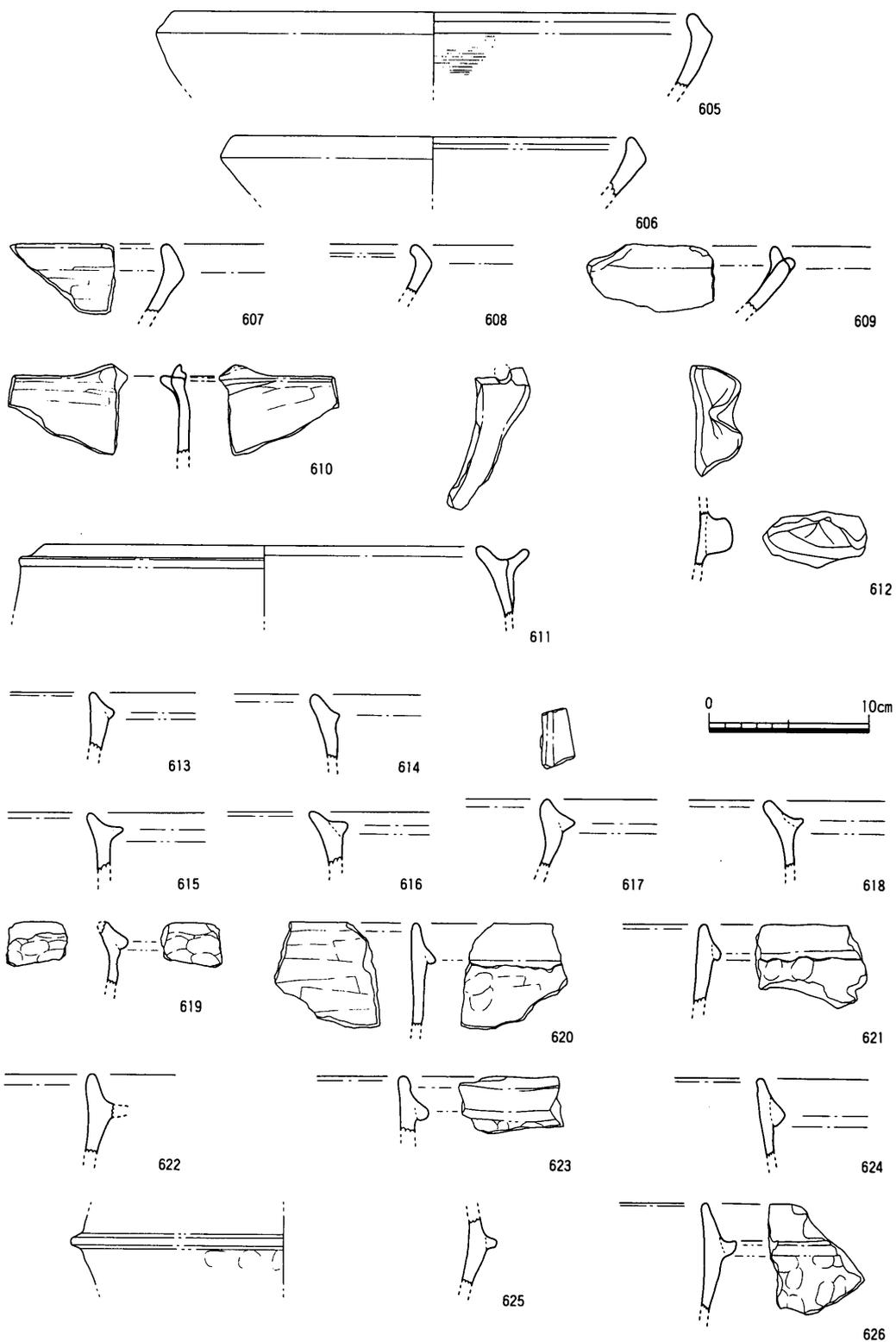
650は硬質な器壁を有する資料である。

③ 黒色土器（第133図）

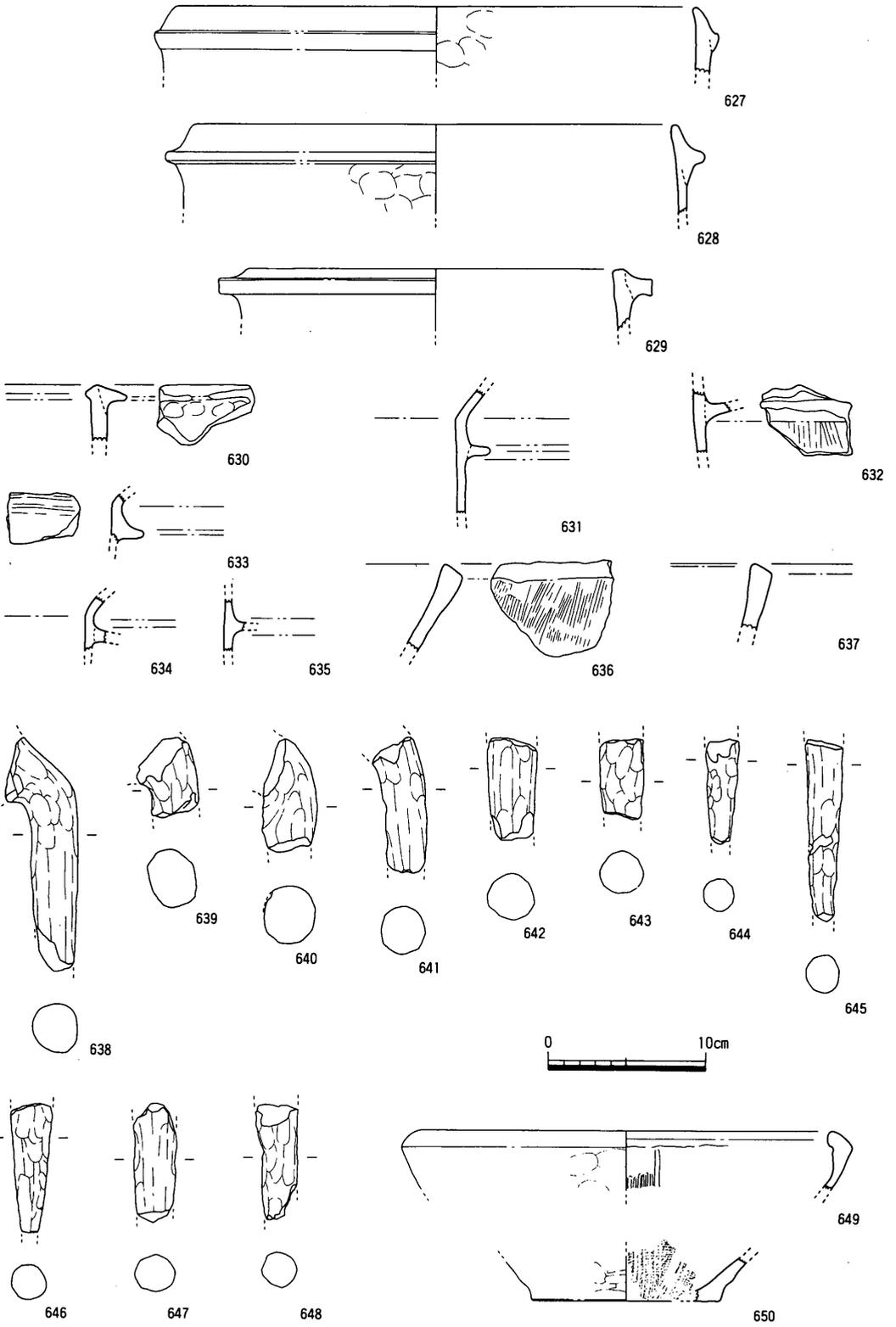
第133図651が縦断面が逆三角形形を呈した高台部を有する器形であるのに対して、652～654のそれは既に形骸化していることが判る。



第130图 东部包含层出土土器实测图①



第131図 東部包含層出土土師器実測図②



第132図 東部包含層出土土師器実測図③

④ 瓦器 (第133図)

4点を図示したが、第133図655以外は遺存状態が不良である。

⑤ 灰釉陶器 (第133図)

椀1点(第133図659)と段皿1点(660)を採取している。659は高台部の縦断面が逆台形形を呈する器形である。いずれも白色系の精緻な陶土を用いて製作されていることから、岐阜県美濃須衛窯跡あるいは東濃窯跡産出の資料であると考えられる。

⑥ 須恵器 (第133～135図)

蓋(第133図661～663)は器高が高い器形であり、664～667は扁平な形態である。665、666については、端部を下方に直角気味に屈曲させている点が特徴である。蓋の宝珠つまみ部を3点図示したが、670については簡素な造作に留まっている。

杯(第133図672～692、第134図693～721)は高台部の有無により、2種類に大別することができるが、特に高台部を有する器形については、縦断面が逆台形形を呈する低い高台部を有する器形(第133図672～692、第134図693～699)と、高台部の縦断面が長方形気味の高い形態の器形(700～702)に分類することができる。

皿(第134図722～732)の中に、底部外面に墨書が施された資料が1点(722)混在することが判明している。肉眼観察及び赤外線透過撮影の結果、「西(漢字)」字を判読することが可能であるが、同文字については、第4,5画目が今日使用されている文字と異なり、第6画目に直線的に接していたことが推測できる。

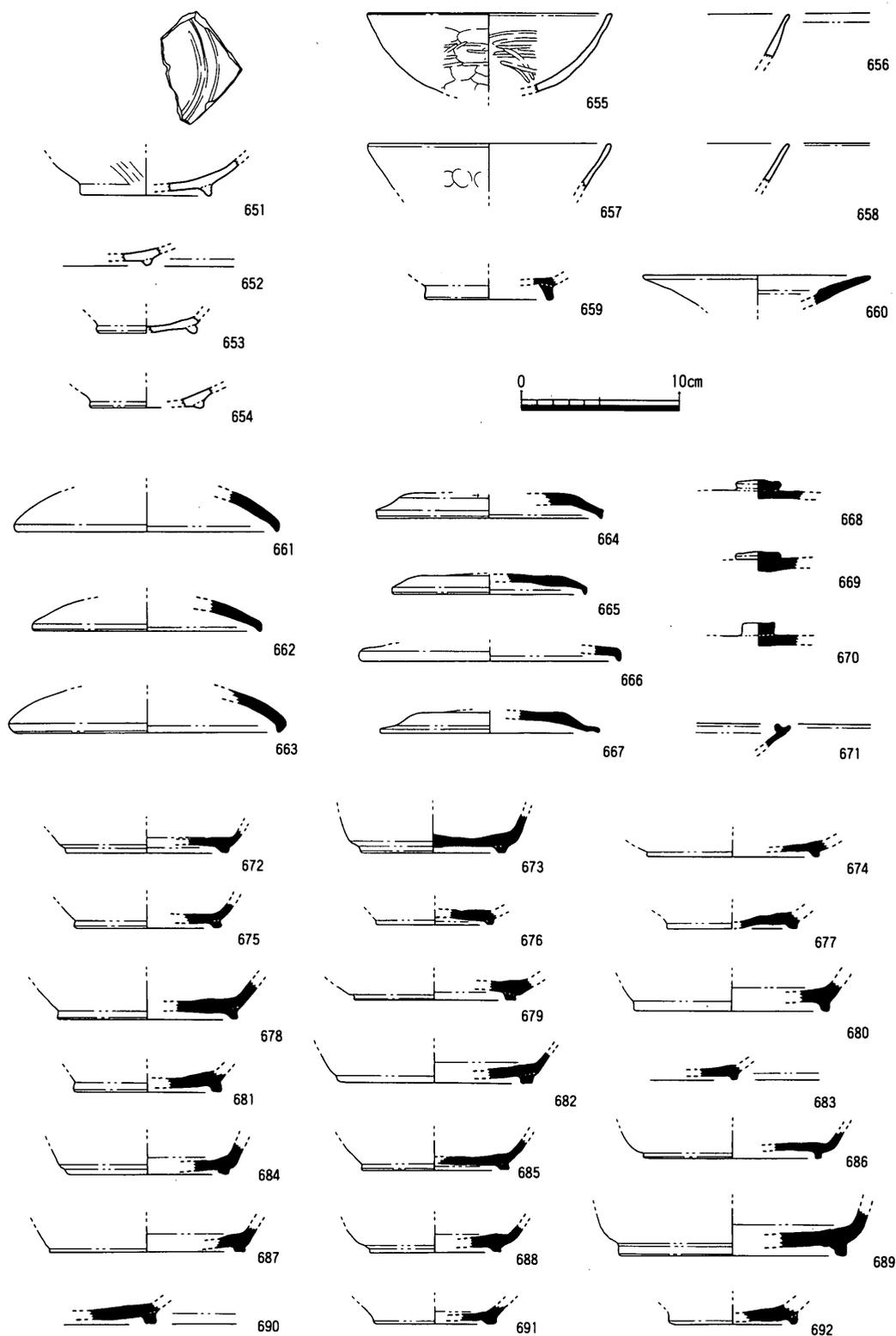
壺(第135図737,738)については胴部の最大径が上胴部に位置する長胴の器形が復元できる。

兵庫県神出窯跡あるいは魚住窯跡産出と考えられる捏鉢(第135図743)が1点出土している。

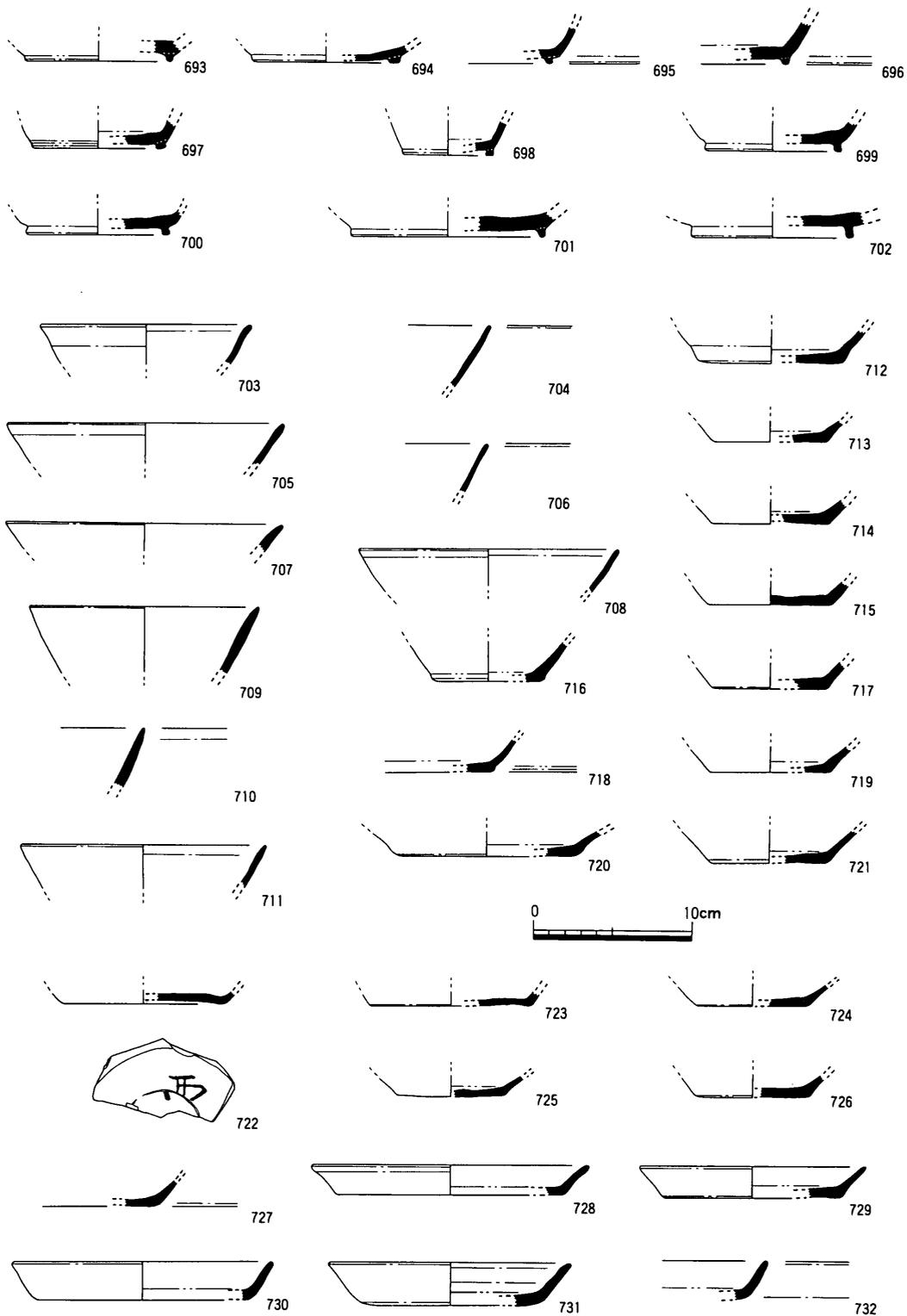
745については器台の下端部であると考えられる。

⑦ 陶器 (第136図)

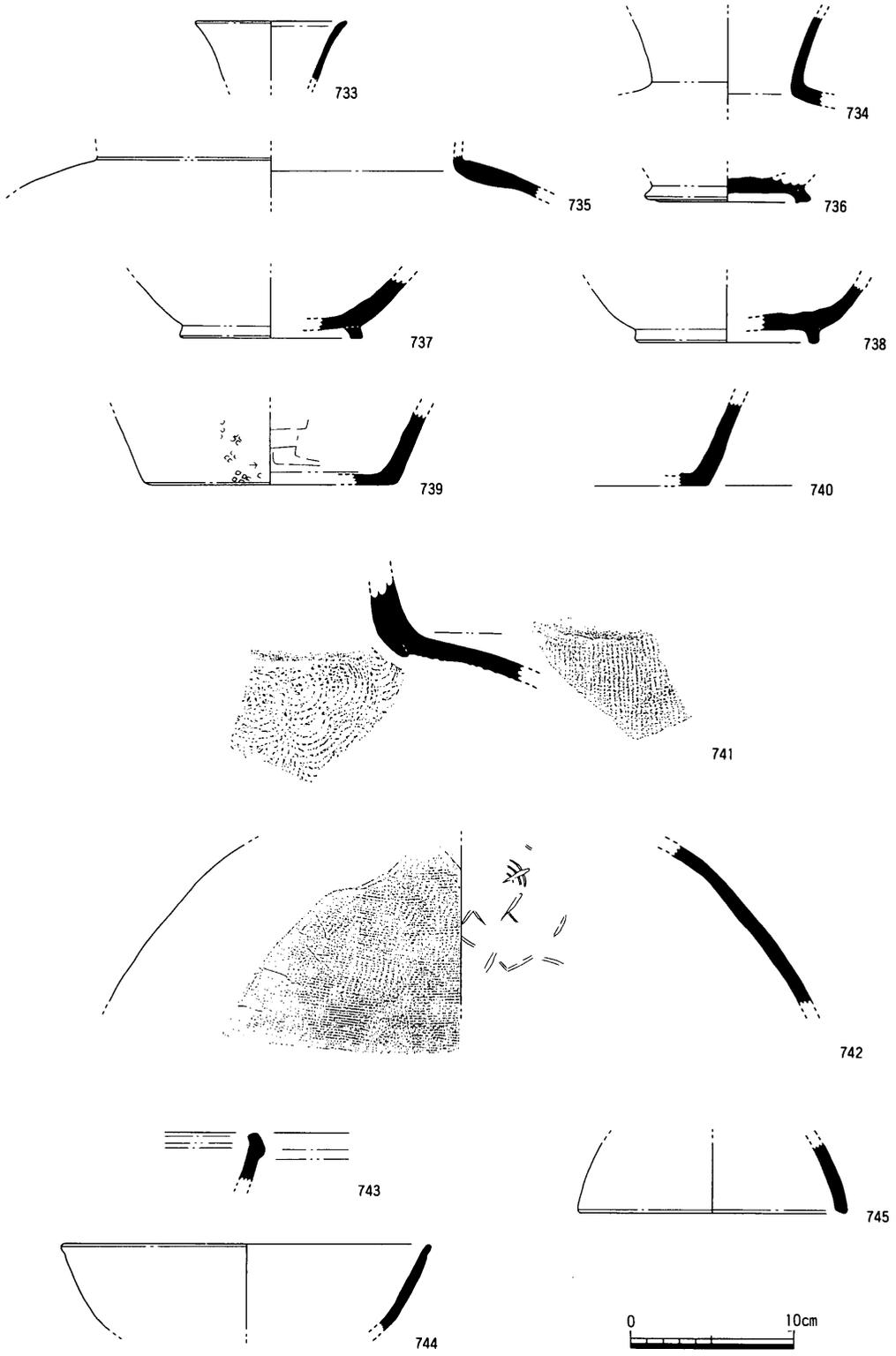
第136図746は岡山県備前窯跡において産出された壺の口縁部分であり、端部がいわゆる玉縁状の形態を呈している。747は生産地を特定するには至らなかったが、無釉の須恵器系陶器であり、把手としての「耳」を有する器形である。壺の胴部として図上復元したが、遺存状態が優れないことから、同肩部の可能性についても考慮する必要があるであろう。



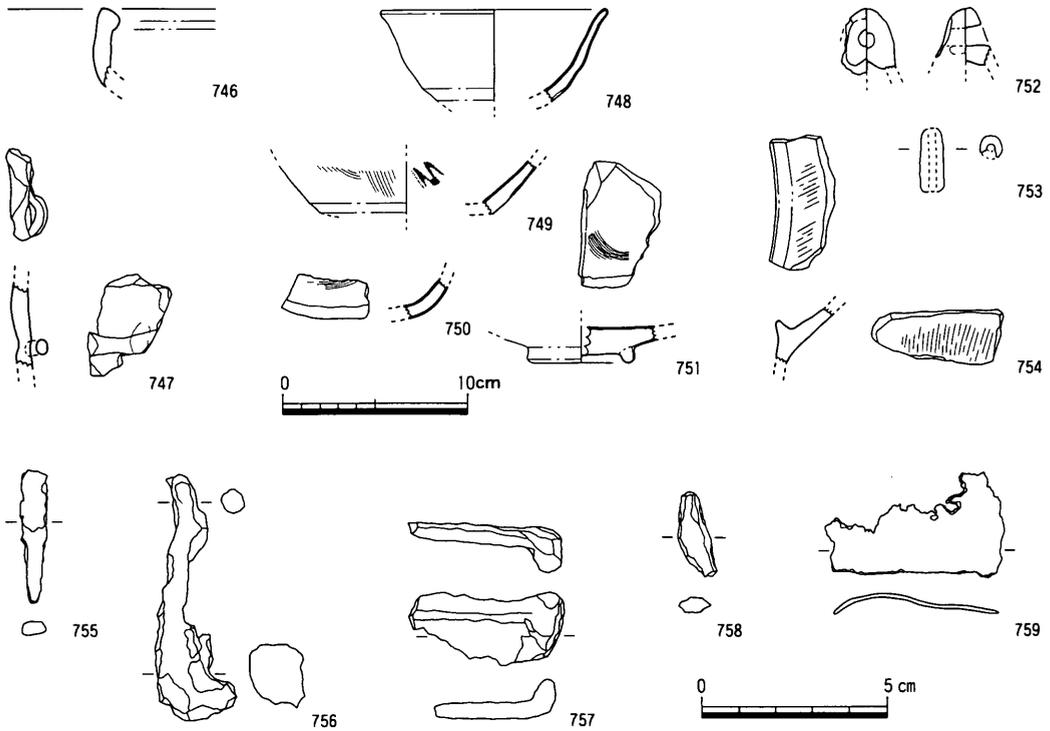
第133图 东部包含層出土黑色土器・瓦器・灰釉陶器实测图・須惠器实测图①



第134図 東部包含層出土須恵器実測図②



第135図 東部包含層出土須恵器実測図③



第136図 東部包含層出土陶器・磁器・土製品・金属製品実測図

⑧ 磁器 (第136図)

青磁碗4点を図示した。第136図749の外表面、750及び751の内面に櫛目文が施されている。

⑨ 土製品 (第136図)

第136図752は飯蛸壺形土製品であるが、吊り手部以外は完全に欠損している。

753はいわゆる管状土錘であり、円筒形の棒状の物質に粘土塊を巻き付けることにより、製作されたことが判る。

754については、移動式竈の底部の一部であると考えている。

⑩ 金属製品 (第136図)

金属製品は用途を特定できる資料が少ない。第136図755は鉄釘であると考えられるが、横断面は扁平な隅丸方形の形態を呈している。756については鉤形の形態を示しており、上部に比して、下部が極端に太い形態である。758は最大の厚さが約1.2mmの銅板の一部分を湾曲した資料である。建築部材もしくは調度類の装飾用に用いられていたことが想定できるであろう。

次に西端地域の資料を報告するが、当該地域において採取した資料は数量が少ないのみ

ならず、遺存状態が悪化している。

① 土師器 (第137図)

碗底部を4例図示しているが、第137図762～764の高台部が下端部を外方向に広く広げることにより成形されているのに対して、765のそれは縦断面が逆台形形を呈する形態に成形されていることが判る。皿(768,769)は浅い形態である。土鍋(771)は外耳を有する器形であり、鉉(つる)の装着孔の断片が確認できる。773は下胴部に格子状のタタキ目を観察することができる。

② 黒色土器 (第137図)

碗(第137図778)は口縁部内面に、同心円状に分割したヘラ磨き調整の痕跡が見られる。

③ 瓦器 (第137図)

碗2点(第137図779,780)は、高台部の縦断面が低い逆台形形を呈する形態であり、その本来的な機能は低下していることが推察できる。779は内面見込み部分に平行するヘラ磨き調整が施されている。

④ 須恵器 (第137図)

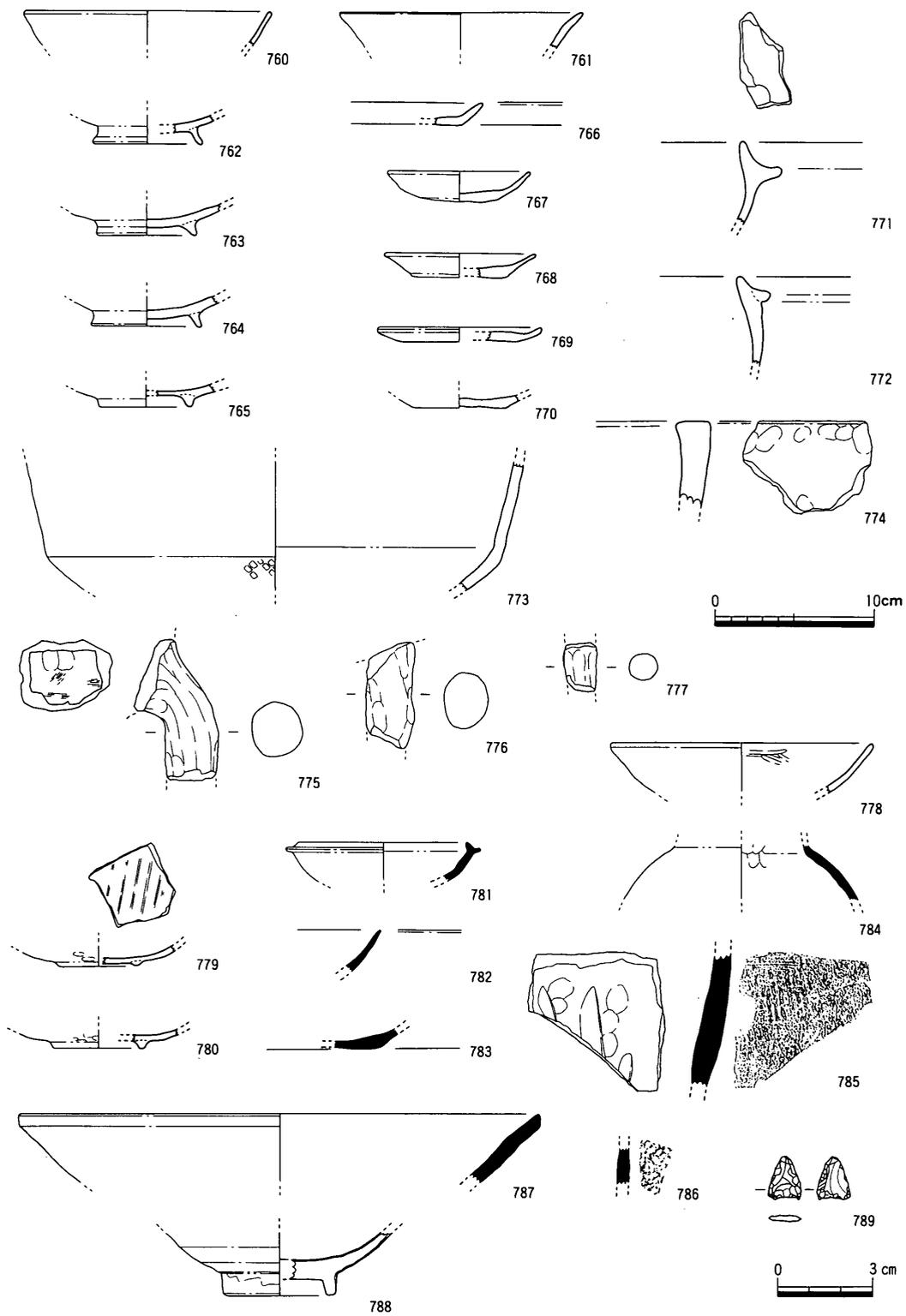
蓋杯の杯身1点(第137図781)、杯2点(782,783)、壺1点(784)、甕2点(785,786)、捏鉢1点(787)を図示した。786は岡山県亀山窯跡産出の資料である。胴部外面に格子状のタタキ目を観察することができる。

⑤ 磁器 (第137図)

白磁碗1点(第137図788)を採取することができた。

⑥ 石製品 (第137図)

打製石鏃1点(第137図789)を採取している。無茎凹基式の形態である。



第137图 西部包含層出土遺物実測図

第3節 推定旧坪界の調査

予備調査時において、調査対象地域の内部に、いわゆる条里形土地区画の推定「四条十六里」内の「十一ノ坪」が所在することが予測された⁽¹⁾ために、その比定地点について「条里制」に基づく遺構の確認調査を実施することに決定した。

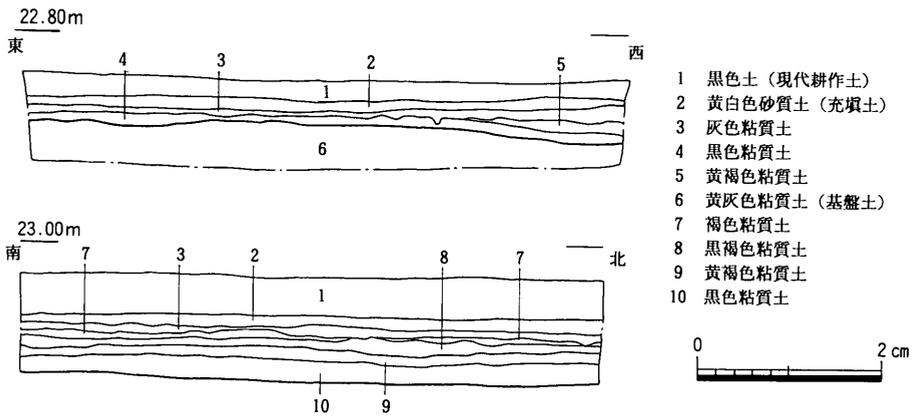
ところが、上記地域の一部分については、全面調査時において、遺構の遺存状態を明らかにすることができていたために、残部については部分的なトレンチ調査から着手し、遺構の検出状態に応じて調査範囲を拡大することとした。

なお、部分調査用のトレンチは、全長約600cm、幅約100cmの規模の短冊形の区画を全面調査の対象地域以外の地域において、推定坪界地点に直交する位置を選択することにより2箇所を設定した。ただし、現存する里道、畦畔、用水路の下部については掘削することが困難であったために、「条里制」下の遺構がこれらに完全に重複するときは、十分な調査結果を導き得ない事態が生じることを前提条件としていたのである。

さて、調査結果は、両者において表土層除去後に、まず遺物包含層（層厚2～16cm）が水平堆積する状態を確認することができた。さらに、同層序の下部に凹地形（S X 06に相当することが考えられる。）の埋積土壌と考えられる層序（最大厚60cm）が存在することから、地形的な環境はQライン以東の地域における全面調査の成果と合致することが判明したのである。しかしながら、人工的な遺構は全く検出できなかったために、「条里」遺構の特徴が水田跡、水田畦畔、溝状遺構等に主として見ることができる点を考慮して、掘削範囲の拡大の必要性を認めることなく調査を終了した。

以上の調査結果から、当該位置においては、真北から約30°西偏した方向性を有する溝状遺構が存在したことは明らかであるが、これに直交する遺構は存在しないことが判明した。すなわち、土地区画の南北方向の基準軸の存在については想定することが可能であるとともに、前記の予測を成立させる要素とすることができると考えられる。しかしながら東西方向の基準軸については、現存する道路あるいは水路等の構造物の下部に所在するか対象地域の外部、特に対象地域の南方に埋没していることを推察するのみに留まらざるを得ない。

註(1) 藤川善規氏は、現丸亀市域に見られる方画地割について、東西方向に1～6条を、南北方向に1～22里を比定する作業を試みている。藤川善規・他「三条番ノ原遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 昭和63年度』、1989年。



第138图 推定旧坪界土层序实测图

第4節 B地区のまとめ

(1) 遺跡の変遷について

① 縄文時代以前

従前から、現善通寺市域における埋蔵文化財の発掘調査において、最終掘削土層序としての認識が与えられていた黄色系の粘性土壌については、縄文時代後・晩期頃の遺物を包蔵する事実と、旧石器時代の遺物の混入の可能性が指摘されていた。しかも、丸亀市三条番ノ原遺跡と三条黒島遺跡においては、同時期の土坑状遺構と石器製作遺構⁽¹⁾が同土層序中において検出されたことから、本遺跡地の基盤層序中にもそれらに類似した遺構、もしくは遺物が遺存することが想定されたのである。そこで、対象地域の局所的な部分に下層遺構の確認調査用試掘坑を設定することにより、特に縄文時代以前の遺跡の様態の究明を試みたが、同時期の人為遺構のみならず、自然遺構及び文化層をも認めることはできなかった。すなわち、当該時期における本遺跡地の景観については、解明し得たと断言することは性急であるが、無住地の様態を呈していたことが考えられるのである。

② 縄文時代

当該時期においては、調査対象地域の中央部分に蛇行した河川（SR08）が存在し、周辺地域は無住地の景観を呈していたことが判明している。しかしながら、同遺構の川床部分からは、同時期の人工遺物を採取しており、また、A地区の河川跡の内部からも相当量の人工遺物が入手し得たことから、生活空間が接近して存在したことは容易に推測することができるであろう。とりわけ、本遺跡地の東方約100mに位置する三条番ノ原遺跡の調査においては、当該時期頃の石器製作遺構が検出されており、非定住遺跡（いわゆるキャンプ遺跡）としての性格が与えられている⁽²⁾ことは、その拠点遺跡を他所に求めなければならないことを示唆すると考えられるのである。

③ 弥生時代

後期頃に埋没した流路を検出することができたが、依然として、前代以降の無住の状態

註(1) 森下英治「三条黒島遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 昭和63年度』, 1989年。

(2) 片桐孝浩『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十一冊 三条番ノ原遺跡』, 1992年。

が継続している。しかしながら、三条番ノ原遺跡における4基の竪穴住居跡の出現を初めとして、龍川五条遺跡あるいは郡家原遺跡等にみられる新たな集落の形成を背景とすることにより、本遺跡地が生活空間の構成要素としての位置を得るに至ったことは確実である。この点については、採取した遺物に農耕具としての打製石庖丁、打製石鍬と、狩猟具の打製石鏃が少なからず含まれていることから傍証することができると考えている。

④ 平安時代から鎌倉時代

古墳時代から奈良時代の景観については判然としていないが、やはり居住遺構の存在は認められない。この要因としては、河川跡（SR08）の最上位から当該時期以降の資料が採取できたことから、遺跡地中央部分に河川の不完全な埋積による低地帯が残存したことで、対象地域の東半地域が凹地形状の景観を呈していた（SX06）ために、居住空間としての利用が活発でなかったことが推測できるのである。

さて、本遺跡地における集落の初現は、平安時代後半頃に比定することができると考えている。特に、この時期は対象地域全域が平坦地化する時期に相当しており、居住空間としての土地利用が容易に行い得るような、地形的条件が整備されたことが推測できるのである。

ところで、集落の主たる構成要素は掘立柱建物跡であるために、その全てについての構築あるいは廃絶の時期を特定することは困難である。そこで、遺構の形態、方向性、集合状態に着目することにより、集落の様態に言及するならば、SB03、SB06（あるいはSB07）、SB08（あるいはSB09）、SB11を各々主屋とする小型の集合体が散在あるいは結合した状態を示していたことを想定することができるであろう。しかしながら、井戸跡等の付帯施設を伴っていないことと、調査範囲が限定されていたために、全体像を復元するには至っておらず、上記の想定は憶測の域を出ていない。

なお、当該時期においては、SB05と土坑墓（ST01）の関係に注目する必要があると考えている。埋葬施設と家屋が併設される様態は高松市空港跡地遺跡Ⅲ－6区の調査においても確認されている⁽¹⁾が、墓地の管理あるいは追善用の施設としては古段階の資料であることから、寺院内墓地形成以前の過渡的な墓制としての位置付けを行うことができるのではなかろうか。

註(1) 廣瀬常雄・他『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3年度』、1992年。

さて、集落は鎌倉時代まで断続的に営まれたことが判明しているが、構成要素が減少する一方で、従前の非生活空間の居住空間としての利用がさらに進行する状態を見ることができる。この現象については、単一集落の規模が拡大したか、あるいは小規模集落がさらに増加・分散したことを要因として想定することができるが、結論を導くまでには至っていない。特に、井戸跡の検出例が少ないことが、集落の形態復元をより困難にしていると考えている。

ところで、調査対象地の西端地域において検出した土坑（S K35）は、希少な資料である銅鏡（いわゆる和鏡）と現中国製青磁を埋納していただけに留まらず、石群と覆土が混在する広範囲の上部構造を有していたことと、北・東方向の周辺部分に矩形の周溝状の遺構を伴っていたことが特筆できる。その性格については、判然としていないが、非日常的な特殊遺構であることを疑問視する余地はないであろう。

さらに、当該時期の特徴は、前代に比して溝状遺構の開削が頻繁であることが指摘できる。なかでも、現地表面に観察することができる方形の土地区画の基準軸の方向性に酷似した規格的な流路（S D21・23～26・34～36・38～41）は、上記の基準軸の位置にも大抵的に合致することから、現行の土地利用の原初的な形態として出現したことが推察できる。しかしながら、それらの開削の目的が単一遺跡内部の生活環境の整備に留まるのか、あるいは隣接する遺跡地を含む地域全体に視点を置いていたのかについては、資料の蓄積を待たなければならないであろう。

⑤ 鎌倉時代以降

前代の集落の廃絶後、前記の明治24年の地形図の判読により、対象地全域が農耕地としての利用が確認できるまでの期間については、遺跡の変遷を知る資料は欠如している。しかしながら、局所的に耕地の開墾活動により生じた溝状遺構が遺存する事実から、やはり農耕地として利用された可能性を検討することができると考えている。しかも、当該時期における大規模な土地改変もしくは自然現象による変動の痕跡が認められないことと、現行の土地区画が前代以降、極めて整然と維持されている事実は、土地利用の保守性を暗示していると考えられるのではないだろうか。

(2) 香川県出土の曲物について——資料集成と研究課題——

本遺跡の井戸跡（SE05）からは、井筒として利用された曲物桶が2個体分出土している。そこで、近年のとりわけ平野部における発掘調査により、加速度的に増加する傾向にある木製品のうち、曲物について管見に触れることができる資料を収集することにより、今後の調査及び研究活動の基礎的資料としたいと考えている。

平成5年度末現在、香川県において曲物は13遺跡から130個体分の出土が確認できる。その内容は讃岐国府跡以外、全ていわゆる集落遺跡からの採取資料であり、必然的に溝状あるいは流路遺構、もしくは自然の河川と低湿地状の地形において採取された資料が87点と全体に占める比率が高いことが判る。しかしながら、これら以外の資料の大部分（42点）の出土位置が井戸跡である事実については、各種の生活遺構のなかでも、同遺構が保水性に優れるために最適の埋蔵環境であることと、同遺物が井筒としての利用形態を示すことに起因することの結論を容易に得ることができる。

さて、曲物の使途（種類）については、岩井宏實、南博史氏等の諸先学による先駆的な業績があり、考古資料についてもそれを決定することが相当可能になっている。特に、南氏の絵画資料の形態と規模の類型化による、考古資料の使途の復元作業⁽¹⁾に関する業績は今日においてもその有効性は決して衰えていないと評価することができるのである。また、同氏の蒸し器としての曲物の使途についての指摘⁽²⁾は、同遺物が原形を完全に維持した状態で出土することが極めて希有であることから、断片的な資料の使途を特定しようとする試みとして示唆に富むと考えている。

すなわち、本県の出土資料は原形を完全に留めている資料がわずかに2例（延命遺跡資料番号4、下川津遺跡資料番号64）であり、他は側板あるいは底板のみが遺存する断片資料であることから、上記の研究の方向性が今後の指針となることは疑う余地はない。

また、採取された資料については、詳細な観察により、側板の湾曲及び接合方法、側板と底板の結合方法、「まわしの側板」あるいは「へぎ板」装着の是非と方法等において特性を認めることができる。したがって、それらの技術的側面における類別作業を行うことにより、製作技術の系譜を明らかにすることも全く不可能な作業ではないと考えている。さらに、同遺物が「桧物師」と呼称される職能民により製作された事実から、同作業は職能集団の動態を解明する有効な方法となるであろう。

註(1) 南 博史「絵巻物による曲物の一考察」『平安博物館研究紀要 第7輯』, 1982年。

(2) 南 博史「遺跡出土の曲物製コンキ」『京都文化博物館研究紀要 朱雀 第4集』, 1991年。同「曲物製コンキ」『考古学ジャーナル 第354号』, 1992年。

第10表 香川県出土の曲物一覧表

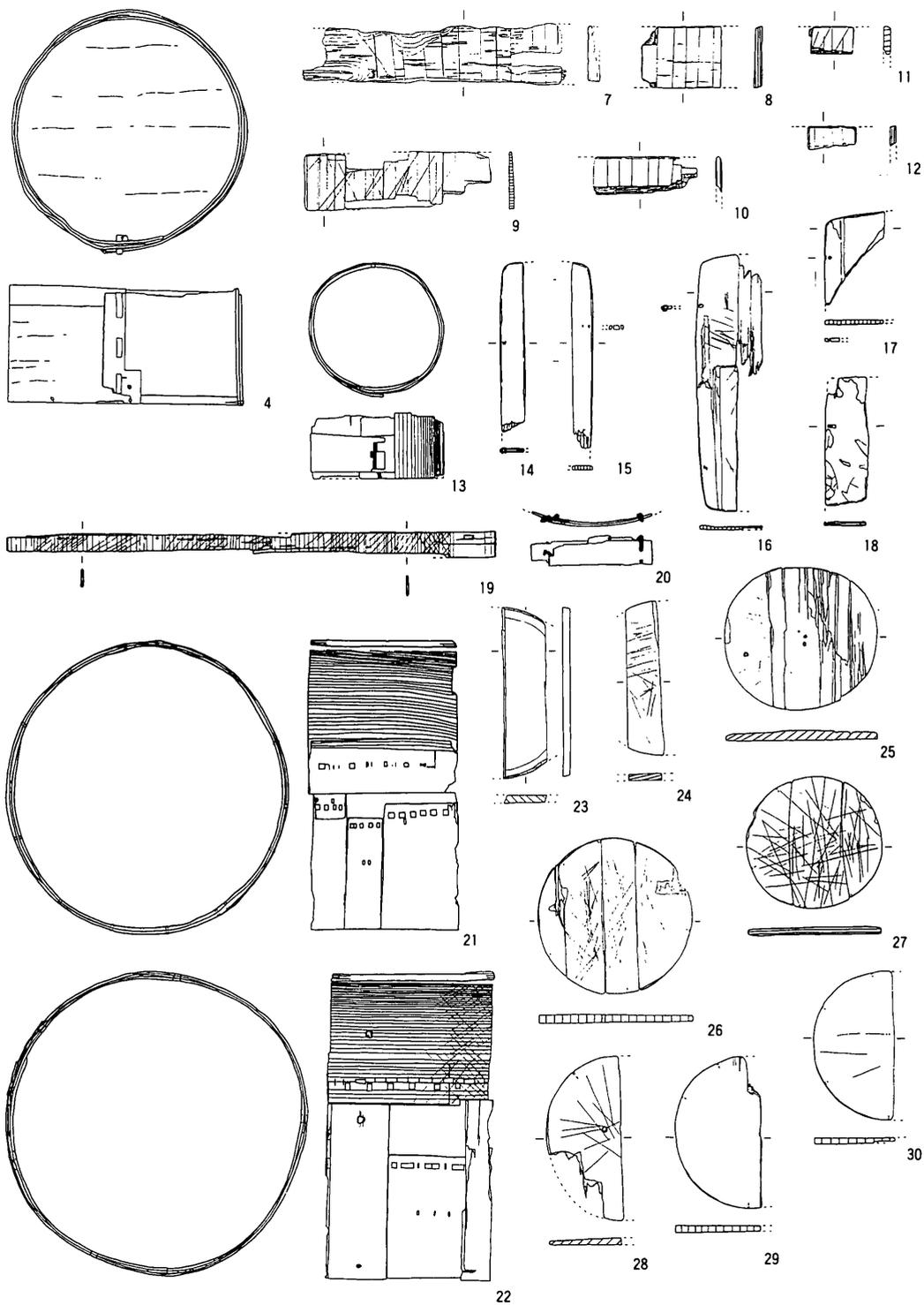
番号	遺跡名称	所在地	出土遺構	時期	特記事項	材質	文献
1	延命遺跡	三豊郡豊中町八反地	井戸跡(S E01)	13世紀後半	円形。底板が欠損。詳細不明。井筒に転用。	-	1
2	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。詳細不明。井筒に転用。	-	1
3	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。詳細不明。井筒に転用。	-	1
4	〃	〃	〃	〃	円形。完存。口径21cm。器高10.5cm。手桶。	-	1
5	龍川四条遺跡	善通寺市原田町、木徳町	井戸跡(S E01)	13世紀後半	円形。底板が欠損。口径48.8cm。器高31.6cm。井筒に転用。本書第4章収録。	-	2
6	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径48.4cm。器高24.4cm。井筒に転用。本書第4章収録。	-	2
7	郡家原遺跡	丸亀市三条町、郡家町	S D05流路C	9世紀	側板の一部分。器高3.6cm。	-	3
8	〃	〃	〃	〃	側板の一部分。器高3.6cm。	-	3
9	〃	〃	〃	〃	側板の一部分。器高3.4cm。	-	3
10	〃	〃	〃	〃	側板の一部分。	-	3
11	〃	〃	〃	〃	側板の一部分。	-	3
12	〃	〃	〃	〃	側板の一部分。	-	3
13	下川津遺跡	坂出市川津町	溝状遺構(SDⅢ71)	10～12世紀	円形。底板が欠損。口径15cm。器高7cm。	-	4
14	〃	〃	〃	〃	長方形。側板が欠損。	-	4
15	〃	〃	〃	〃	長方形。側板が欠損。	-	4
16	〃	〃	〃	〃	長方形。側板が欠損。	-	4
17	〃	〃	〃	〃	長方形。側板が欠損。	-	4
18	〃	〃	〃	〃	長方形。側板が欠損。	-	4
19	〃	〃	〃	〃	円形か。底板が欠損。器高30cm。	-	4
20	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。器高32cm。	-	4
21	〃	〃	井戸跡(S DⅢ05)	12世紀後半～13世紀	円形。底板が欠損。口径48.6cm。器高27cm。井筒に転用。	-	4
22	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径51.6cm。器高33cm。井筒に転用。	-	4
23	〃	〃	第1低地帯流路2	7世紀初頭～8世紀前半	円形。側板が欠損。底径20.4cm。	ヒノキ	4
24	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径18.1cm。	ヒノキ	4
25	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径18.1cm。	ヒノキ	4
26	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径18.3cm。	ヒノキ	4
27	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径16.1cm。	ヒノキ	4
28	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径19.7cm。穿孔。	ヒノキ	4
29	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径18.2cm。	ヒノキ	4
30	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径17.8cm。	ヒノキ	4
31	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径24.7cm。	ヒノキ	4
32	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径19.5cm。	ヒノキ	4
33	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径17.7cm。	ヒノキ	4
34	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径17.0cm。	ヒノキ	4
35	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径15.6cm。	ヒノキ	4
36	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径17.0cm。	スギ	4
37	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径19.6cm。	ヒノキ	4
38	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径15.8cm。	ヒノキ	4
39	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径33.4cm。	ヒノキ	4
40	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径29.9cm。	ヒノキ	4
41	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径25.6cm。	ヒノキ	4
42	〃	〃	〃	〃	円形か。側板が欠損。	ヒノキ	4
43	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径29.3cm。	ヒノキ	4
44	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径30.2cm。	ヒノキ	4
45	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径31.0cm。	ヒノキ	4
46	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径26.9cm。	ヒノキ	4
47	〃	〃	〃	〃	円形か。側板が欠損。	ヒノキ	4
48	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径27.9cm。	ヒノキ	4
49	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径23.2cm。	ヒノキ	4
50	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径23.7cm。	ヒノキ	4
51	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径25.2cm。	ヒノキ	4
52	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径30.4cm。	ヒノキ	4
53	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。径25.8cm。器高6.4cm。	ヒノキ	4
54	〃	〃	〃	〃	側板接合部小片。	ヒノキ	4
55	〃	〃	第1低地帯流路5上部	6世紀後半～7世紀	円形。側板が欠損。径19.8cm。	ヒノキ	4
56	〃	〃	〃	〃	円形か。側板が欠損。	ヒノキ	4
57	〃	〃	第1低地帯流路2南	7世紀後半～8世紀初頭	円形。側板が欠損。径16.6cm。	ヒノキ	4

番号	遺跡名称	所在地	出土遺構	時期	特記事項	材質	文献
58	下川津遺跡	坂出市川津町	第1低地帯流路2南	7世紀後半～8世紀初頭	円形。側板が欠損。径16.4cm。	ヒノキ	4
59	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径16.2cm。	ヒノキ	4
60	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径16.4cm。	ヒノキ	4
61	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径31.4cm。	ヒノキ	4
62	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径25.1cm。	ヒノキ	4
63	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径18.5cm。	ヒノキ	4
64	〃	〃	第2低地帯流路2	9世紀	円形。完存。径18cm。器高7.4cm。黒漆塗布。	ヒノキ	4
65	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径14.2cm。	ヒノキ	4
66	〃	〃	第1低地帯流路3	7世紀末～8世紀初頭	円形。側板が欠損。径17.7cm。	ヒノキ	4
67	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径16.6cm。	ヒノキ	4
68	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。	ヒノキ	4
69	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径16.8cm。	ヒノキ	4
70	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径17.0cm。	ヒノキ	4
71	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径16cm。	ヒノキ	4
72	〃	〃	〃	〃	円形か。側板が欠損。	ヒノキ	4
73	〃	〃	第1低地帯流路5北	6世紀後半～7世紀	円形。側板が欠損。径15.2cm。	ヒノキ	4
74	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径31.8cm。	ヒノキ	4
75	〃	〃	〃	〃	円形か。側板が欠損。	サワラ	4
76	〃	〃	第1低地帯流路5南	8世紀末～9世紀	円形。側板が欠損。径21.1cm。	ヒノキ	4
77	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径19.1cm。	ヒノキ	4
78	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。径16.8cm。	ヒノキ	4
79	〃	〃	第3低地帯流路2	8世紀後半?	円形。側板が欠損。径18.9cm。	-	4
80	〃	〃	第4低地帯	不詳	円形。側板が欠損。径15.8cm。	ヒノキ	4
81	〃	〃	不明	不詳	円形。側板が欠損。径16.1cm。	-	4
82	〃	〃	第4低地帯流路4	11世紀～13世紀?	円形か。底板が欠損。	ヒノキ	4
83	〃	〃	第1低地帯流路2	7世紀初頭～8世紀後半	楕円形。側板が欠損。長径57.1cm。短径12.8cm。	ヒノキ	4
84	〃	〃	第1低地帯流路3	7世紀末～8世紀初頭	楕円形。側板が欠損。長径18.1cm。短径18.4cm。	ヒノキ	4
85	〃	〃	第1低地帯流路5南	8世紀末～9世紀	楕円形。側板が欠損。長径66.1cm。短径20.5cm。	ヒノキ	4
86	〃	〃	第1低地帯流路3	7世紀末～8世紀初頭	楕円形。側板が欠損。長径21.3cm。短径5.2cm。	ヒノキ	4
87	〃	〃	第1低地帯流路5南	8世紀末～9世紀	長方形。側板が欠損。長径43.5cm。短径9.1cm。	ヒノキ	4
88	〃	〃	第1低地帯流路2	7世紀初頭～8世紀後半	長方形。長径19.0cm。短径6.3cm。	ヒノキ	4
89	〃	〃	第1低地帯流路5南	8世紀末～9世紀	長方形。側板が欠損。長径26.4cm。短径3.5cm。	ヒノキ	4
90	〃	〃	第4低地帯流路6	11世紀末～13世紀	長方形。側板が欠損。長径29.8cm。短径6.2cm。	ヒノキ	4
91	川津中塚遺跡	坂出市川津町	溝状遺構(SDⅡ38)	10世紀	円形。側板が欠損。底径約40cm。	スギ	5
92	川津東山田遺跡	坂出市川津町	井戸跡(S E 01)	平安時代	円形。底板が欠損。詳細不明。井筒に転用。	-	6
93	〃	〃	溝状遺構(SD01)	〃	底板が欠損。詳細不明。	-	6
94	讃岐国府跡	坂出市府中町	井戸跡	平安時代終末～鎌倉時代前半	円形。底板が欠損。口径約40cm。器高約26～29cm。井筒に転用。	-	7
95	〃	〃	〃	平安時代終末	円形。底板が欠損。口径約45cm。井筒に転用。	-	8
96	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径約45cm。井筒に転用。	-	8
97	〃	〃	〃	不詳	不詳。	-	8
98	〃	〃	〃	12世紀後半～13世紀	円形。側板の一部分。	-	9
99	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径19cm。	-	9
100	〃	〃	〃	〃	円形か。側板の一部分。	-	9
101	太田下・須川遺跡	高松市太田下町	自然河川	弥生時代後期	円形。蓋板か。側板が欠損。直径18cm。穿孔。	-	10
102	東山崎・水田遺跡	高松市東山崎町	井戸跡(C地区SE05)	16世紀前半～終末	円形。底板が欠損。口径45.6cm。器高8.5cm。井筒に転用。	-	11
103	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径45.5cm。器高15.7cm。井筒に転用。	-	11
104	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径42.3cm。器高7.5cm。井筒に転用。	-	11

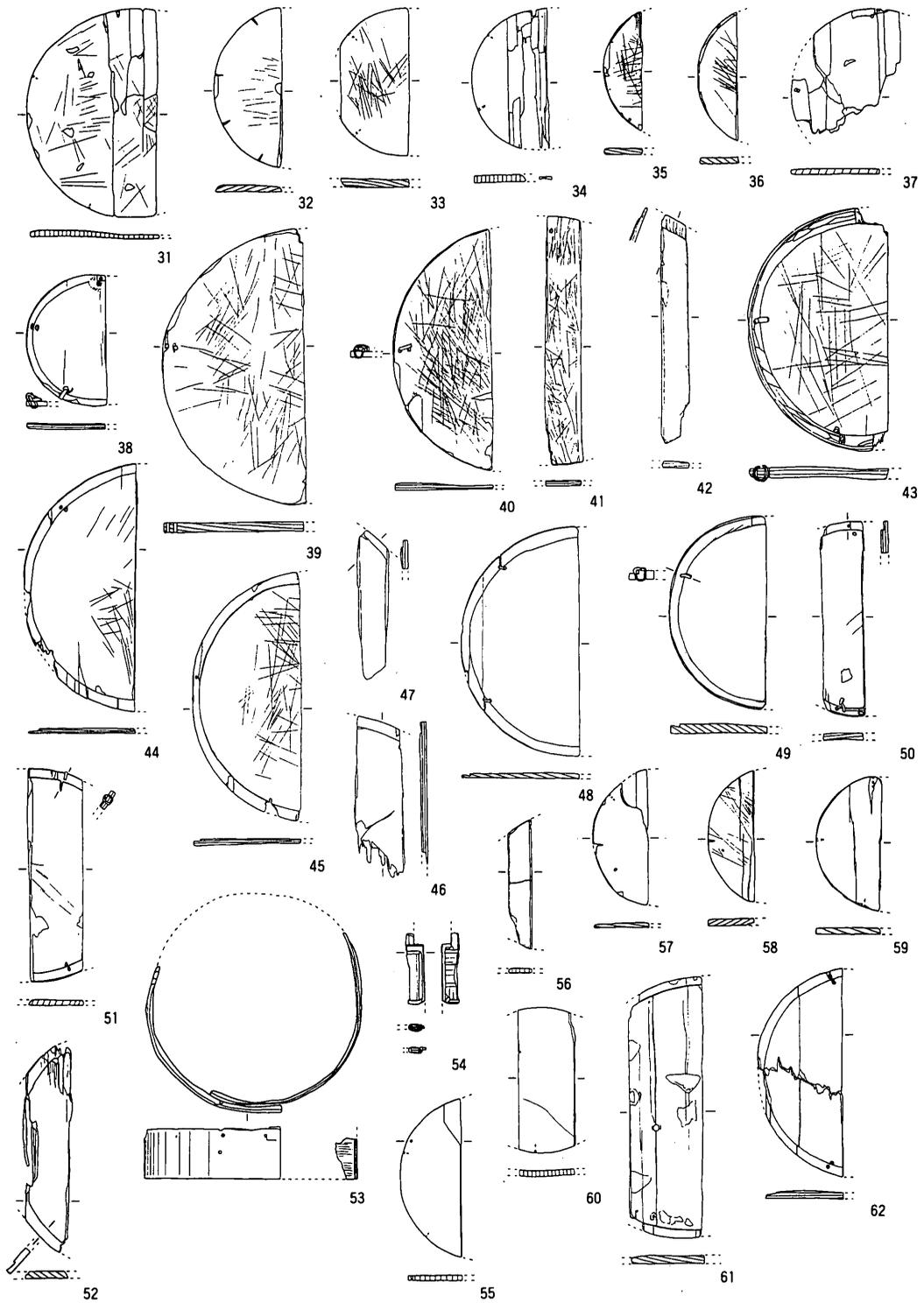
番号	遺跡名称	所在地	出土遺構	時期	特記事項	材質	文献
105	東山崎・水田遺跡	高松市東山崎町	井戸跡(C地区SE05)	16世紀前半～終末	円形。底板が欠損。口径46.6cm。器高6.5cm。井筒に転用。	—	11
106	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径45.9cm。器高5.2cm。井筒に転用。	—	11
107	〃	〃	井戸跡(E地区SE03)	〃	円形か。底板が欠損。器高5.5cm。	—	11
108	〃	〃	井戸跡(E地区SE05)	13世紀	円形。底板が欠損。口径35.6cm。器高23cm。井筒に転用。	ヒメ属類似種	11
109	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径40.6cm。器高10.0cm。井筒に転用。	ヒメ属の一種	11
110	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径40.3cm。器高11.1cm。井筒に転用。	スギ類似種	11
111	〃	〃	〃	〃	詳細不明。	—	11
112	〃	〃	井戸跡(E地区SE07)	13世紀後半	円形。底板が欠損。口径44.6cm。器高9.1cm。井筒に転用。	ヒメ属類似種	11
113	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径44.7cm。器高10.1cm。井筒に転用。	スギ類似種	11
114	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径46.6cm。器高8.7cm。井筒に転用。	ヒメ属類似種	11
115	〃	〃	〃	〃	詳細不明。	—	11
116	前田東・中村遺跡	高松市前田東町	井戸跡	9世紀～10世紀	円形。底板が欠損。口径39.4cm。器高11.6cm。井筒に転用。	—	12
117	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径37.6cm。器高18.4cm。井筒に転用。	—	12
118	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径36.0cm。器高6.8cm。井筒に転用。	—	12
119	〃	〃	〃	11世紀～12世紀	円形。底板が欠損。口径30.2cm。器高16.4cm。井筒に転用。	—	12
120	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径33.0cm。器高8cm。井筒に転用。	—	12
121	〃	〃	〃	〃	円形。底板が欠損。口径30.4cm。器高20.0cm。井筒に転用。	—	12
122	〃	〃	〃	12世紀	円形。底板が欠損。口径39.0cm。器高7.6cm。井筒に転用。	—	12
123	〃	〃	〃	13世紀～14世紀	円形。底板が欠損。口径52.8cm。器高14.8cm。井筒に転用。	—	12
124	〃	〃	〃	不詳	円形。底板が欠損。口径46.0cm。器高7.8cm。	—	12
125	〃	〃	〃	不詳	円形。底板が欠損。口径39.6cm。器高8.1cm。	—	12
126	柞田八丁遺跡	観音寺市柞田町	井戸跡(S E01)	近世	楕円形。側板が欠損。底長径13.0cm。底短径11.4cm。	—	13
127	金蔵寺下所遺跡	普通寺市金蔵寺町	自然河川(S R02)	奈良時代	円形。側板が欠損。底径20.6cm。	—	14
128	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径12.0cm。	—	14
129	〃	〃	〃	〃	円形。側板が欠損。底径13.2cm。	—	14
130	大浦浜遺跡	坂出市樫石	K-28区曲物土坑	平安時代後半～鎌倉時代	円形。口径45cm。器高17cm。井戸水溜めに転用か。	—	15

(文献)

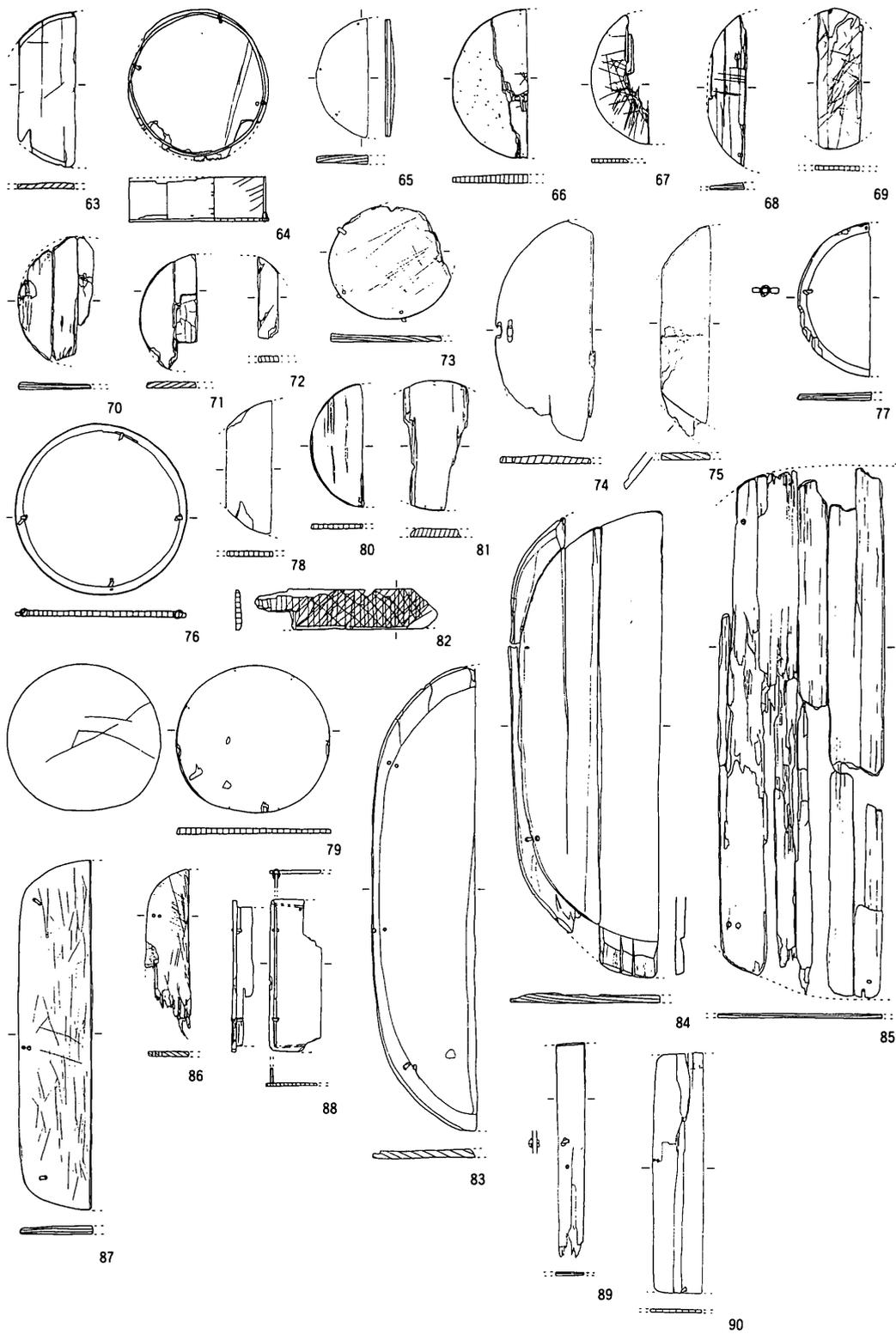
- 1 片桐孝浩「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第八冊 延命遺跡」, 1990年。
- 2 森下英治・大林修三・白川悦代「龍川四条遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』, 1991年。
- 3 真鍋昌宏・岡 敦憲・山下平重「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十三冊 郡家原遺跡」, 1993年。
- 4 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也・他「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VII 下川津遺跡」, 1990年。
- 5 西岡達哉・山下平重「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十四冊 川津中塚遺跡」, 1994年。
- 6 岡 敦憲・森下友子「川津東山田遺跡Ⅱ区」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』, 1991年。
- 7 牟礼良典・斉藤賢一・渡部明夫「讃岐国府跡(第5次調査)」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度』, 1980年。
- 8 藤好史郎「国府跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』, 1981年。
- 9 今井和彦「讃岐国府跡発掘調査」『坂出市内遺跡発掘調査報告書』, 1993年。
- 10 北山健一郎・森下友子・他「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須川遺跡」, 1994年。(1994年刊行予定。)
- 11 大山真充・森下友子・蔵本晋司・他「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡」, 1992年。
- 12 森 格也・古野徳久・他「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡」, 1994年。(1994年刊行予定。)
- 13 片桐孝浩・磯崎 寛「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五冊 石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡」, 1988年。
- 14 廣瀬常雄「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十冊 金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡」, 1994年。
- 15 大山真充・真鍋昌宏・他「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V 大浦浜遺跡」, 1988年。



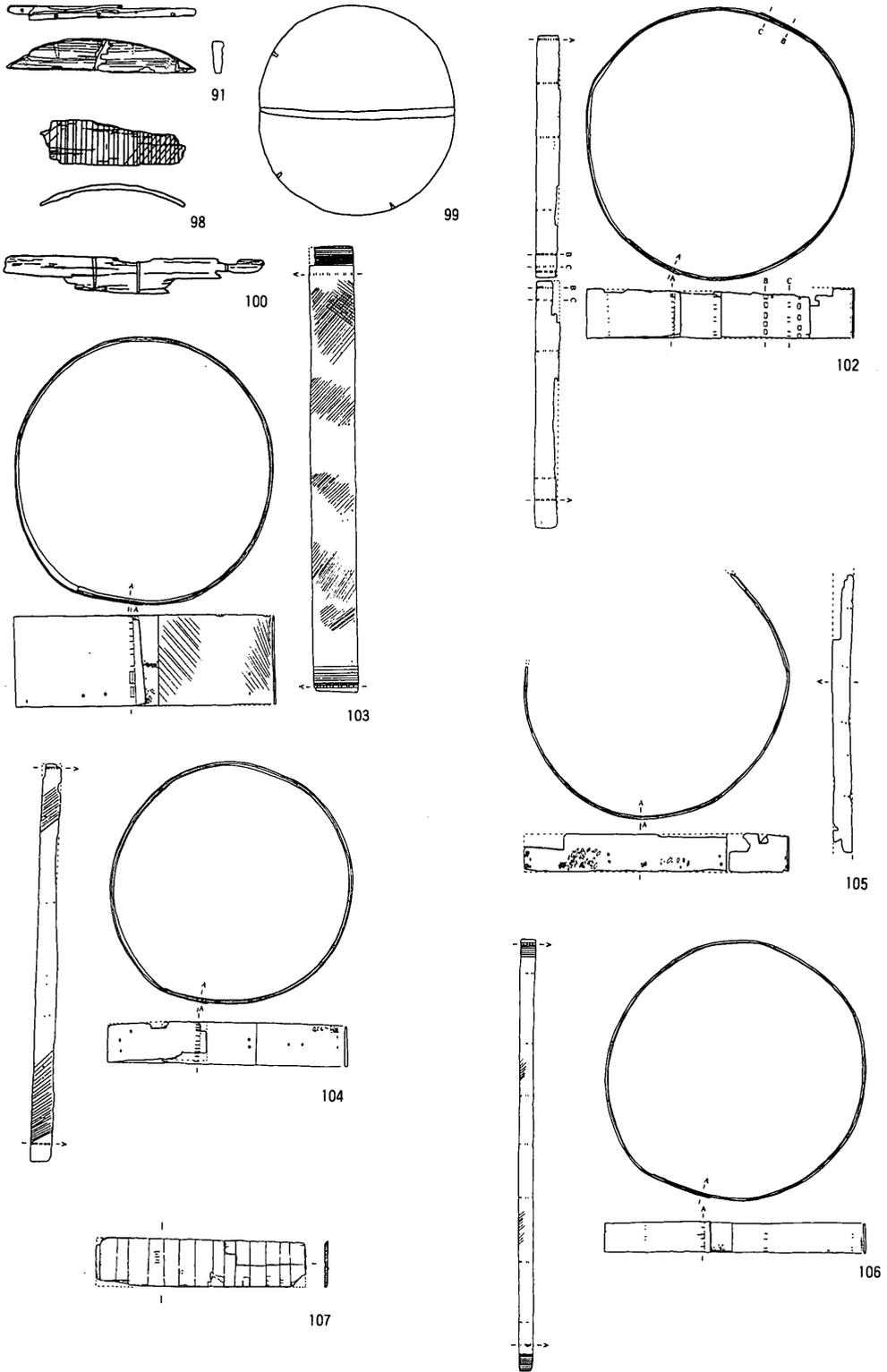
第139図 香川県出土の曲物実測図① (4 : 1/6、7~12・21・22 : 1/4、
14~20・23~30 : 1/8 各文献より複写)



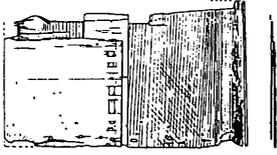
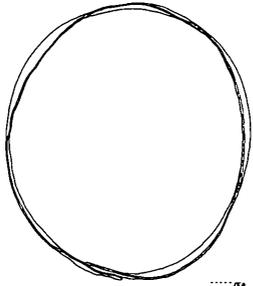
第140図 香川県出土の曲物実測図② (31~62 : 1/8 各文献より複写)



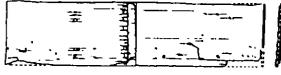
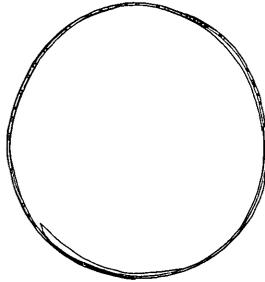
第141図 香川県出土の曲物実測図③ (63~90 : 1/8 各文献より複写)



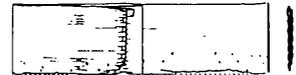
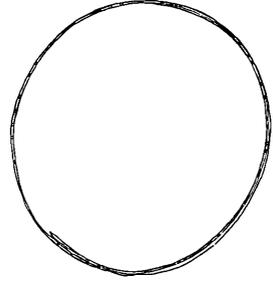
第142図 香川県出土の曲物実測図④ (91 : 1/8、98~100 : 1/6、102~106 : 1/24
 (但し側板展開図は1/12)、107 : 1/8 各文献より複写)



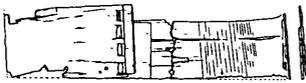
108



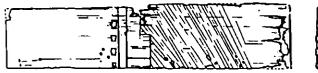
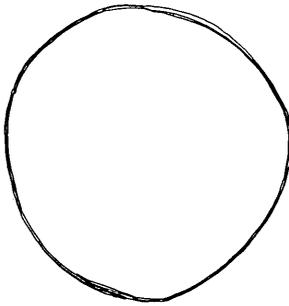
109



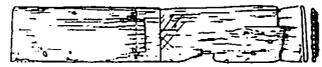
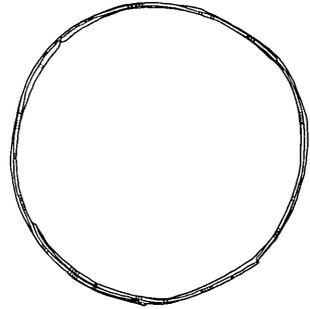
110



112



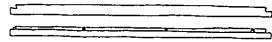
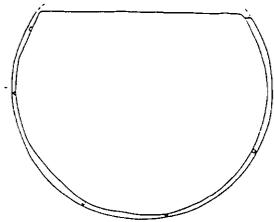
113



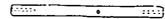
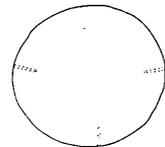
114



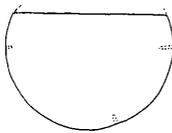
126



127



128



129

第143図 香川県出土の曲物実測図⑤ (108~110・112~114 : 1/12、
126~129 : 1/6 各文献より複写)

第5章 自然科学調査の成果

龍川四条遺跡出土木製品の樹種（付載：川津中塚遺跡出土木製品の樹種）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

香川県では、これまでに下川津遺跡、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡、郡家一里屋遺跡、空港跡地遺跡等で出土した木製品について樹種同定が行われてきた。また、永井遺跡や林・坊城遺跡では、自然木の樹種同定や花粉分析等による古植生の検討が行われている。その結果、県内における過去の用材選択の実態や古植生が明らかになりつつある。

樹種同定の成果を見ると、柱材や井戸材等の建築材には、時代を問わずマツ属複雑管束亜属（二葉松類）、モミ属、コウヤマキ等の針葉樹が多く用いられ、広葉樹材ではサクラ属、コナラ属コナラ節等が僅かに同定されているのみである。また、板状の加工を行う木製品にも針葉樹が多く、スギ、モミ属、ヒノキ属等が同定されている。林・坊城遺跡では、板材に多数の広葉樹材が同定されているが、全てコナラ属コナラの樹皮であった。コナラ亜属の樹皮をどのような用途の板材として利用したのかは定かでないが、他地域でこれまでに当社が行った調査の中にも同様の例がいくつか見られることから、過去に何らかの板材として広く利用されていたことが推定される。

全体を通してみると、用途によって使用される樹種に違いがあり、その傾向は時代や遺跡の立地に関わらず共通している。このことから、用途に応じた「適材適所の木材選択」が行われていたことが推定される。しかし、その全容を把握するには、今後さらなる資料蓄積が必要と考えられる。

今回の調査では、善通寺市龍川四条遺跡から出土した木製品について樹種同定を行い、過去の用材選択に関する検討と資料蓄積を行う。（編集者加筆：本報告書作成作業中に、上記業者に委託中の坂出市川津中塚遺跡出土の木製品の樹種同定結果が入手できたために、本章に並記して報告するものとする。なお、同遺跡については、1994年3月に『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十四冊 川津中塚遺跡』として報告している。）

I. 龍川四条遺跡

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の遺物を包含する旧河道（S R02）の河床から横倒しの状態出土した杭材と思われる木材1点と、古代末の遺物を包含する旧河道（S R01）の埋積土中から出土した作業台と考えられる木製品1点である。なお、作業台と考えられる木製品については、どのような目的に用いられたものか、詳細は不明である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製した。作製したプレパラートは生物顕微鏡で観察・同定した。

(3) 結果

2点の試料は、杭材と思われる木製品がアオキ，作業台がスギにそれぞれ同定された。スギとアオキの主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は、主として「原色日本植物図鑑 木本編< I・II >」（北村・村田，1971,1979）にしたがい，一般的な性質については「木の事典 第2巻，第7巻」（平井，1979—1982）も参考にした。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科

試料名：S R01 作業台

早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広く，年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射仮導管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で，また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり，長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく，加工は容易，保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ，葉は線香・抹香の原料にもなる。

・アオキ (*Aucuba japonica*) ミズキ科

試料名：S R02 杭材？

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独まれに複合する。導管は階段穿孔を有し、段数は20～30。放射組織は大型で異性Ⅱ型、1～5細胞幅、韌細胞が認められる。柔組織はほとんど目立たない。年輪界は不明瞭。

アオキは日本特産種で、全土の林内に普通の常緑低木で、また植栽される。材の用途は特に知られていない。

(4) 考察

弥生時代後期の杭材と思われる木製品は、アオキに同定された。本試料が杭材とすれば、その用途から、遠方より木材を搬入したのではなく、遺跡周辺で得られる木材を利用したと推定される。県内では、これまでに林・坊城遺跡で3点の杭材の同定を行っている。しかし、全体的に資料数が少なく、現時点で杭材の用途選択がどのような基準で行われていたのか把握することは困難である。今後さらに資料を蓄積する必要がある。

古代末の作業台は、スギであった。木製品の実測図を見ると、断定はできないが木材を放射方向に割った柾目板に加工しているようである。同定されたスギは、その木材組織の特徴から板状の加工が比較的容易にできる。そのため、作業台のように平坦面を必要とする製品の素材としては、適した木材と考えられる。

<引用文献>

平井信二（1979-1981）木の事典 第2巻，第7巻．かなえ書房．

北村四郎・村田 源（1971,1979）原色日本植物図鑑 木本編<Ⅰ・Ⅱ>．453P., 545 P., 保育社．

Ⅱ．川津中塚遺跡

(1) 試料

試料は、10世紀中頃の溝状遺構（SDⅡ38）から出土した木製品3点（曲物桶底板・木製錘A・木製錘B）と、平安時代後半～鎌倉時代頃と推定される2軒の掘立柱建物跡（SBⅡ46，SBⅡ26）から出土した柱材各1点（柱材A・柱材B）である。このうち、柱材Aは炭化材である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

炭化材は、試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

(3) 結果

同定結果を表1に示す。5点の試料のうち、木製錘A・木製錘Bの2点は環孔材の形態をもつ広葉樹材であることが観察できるが、劣化が著しく、樹種を特定するには至らなかった。他の3点は、曲物桶底板と柱材Bがスギ、柱材Aがコナラ属コナラ亜属クスギ節の一種に同定された。スギとクスギ節の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は、主として「原色日本植物図鑑 木本編<Ⅱ>」（北村・村田，1979）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第2巻，第7巻」（平井，1979-1982）も参考にした。

表1 川津中塚遺跡出土木製品の樹種同定結果

試料名称	出土遺構	遺構略称	時期	樹種名
曲物桶底板	溝状遺構	SD II 38	10世紀中頃	スギ
木製錘A	溝状遺構	SD II 38	10世紀中頃	広葉樹（環孔材）
木製錘B	溝状遺構	SD II 38	10世紀中頃	広葉樹（環孔材）
柱材A	掘立柱建物跡	SB II 46	鎌倉時代頃か	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
柱材B	掘立柱建物跡	SB II 26	平安時代頃か	スギ

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科

試料名：SD II 38 曲物桶底板，SB II 26 柱材B

前記の内容と同様であるため、省略する（編集者加筆）。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

ブナ科

試料名：SB II 46 柱材 A

環孔材で孔圏部は1～3列，孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。導管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと，複合放射組織とがある。

クヌギ節は，コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で，果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟するグループで，クヌギ (*Quercus acutissima* Carruthers) とアベマキ (*Q. variabilis* Blume) の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に，アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが，中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で，材は重硬である。古くから薪炭材として利用され，人里近くに萌芽林として造林されることも多く，薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・楯木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり，果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で，樹皮の Cork 層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが，さらに重い。用途もクヌギと同様であるが，樹皮が厚いため薪材にはむかず，炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

(4) 考察

5点の木製品のうち，木製錘2点は，木材組織の観察から異なる樹種であることが推定されるが，樹種の特定はできなかった。そのため，今回は木錘の用途選択について検討を行うことはできない。これまでに樹種同定が行われた各地の木錘をみると，アカガシ亜属やシノキ等の広葉樹材が多くみられる（島地・伊東，1988）。同様の傾向は，下川津遺跡で行われた木錘の樹種同定結果にも見られる（島地・林，1990）。今回の結果は，広葉樹が用いられているという点で，これまでの傾向と調和的といえる。しかし，今回の試料は，少なくとも島地・伊東（1988）や下川津遺跡で記録されている樹種ではない。なお，報告されている樹種は，硬い材質をもつ樹種が多く，本遺跡でもそのような木材を選択して利用していたことが推定される。

曲物桶底板はスギであった。同様な用途にスギが用いられる例は，下川津遺跡や東山崎・水田遺跡で報告されている（島地・林，1990；能城・鈴木，1990）。スギ以外の樹種もコウヤマキやヒノキ属等針葉樹のみであり，針葉樹材が多用されていたことが推定される。

また、底板だけでなく側板や蓋材にも同様の傾向が見られる。この傾向は、島地・伊東（1988）や伊東（1990）でも示されており、曲物にスギやヒノキ属の材を利用することが香川県だけでなく、全国的にみられたことが推定される。

柱材は、スギとクヌギ節であった。香川県内で行われた掘立柱建物の柱材の樹種同定では、マツ属複維管束亜属を中心とした針葉樹材が多くみられる。しかし、今回のようにスギが柱材に使用されていた例は知られていない。反対にクヌギ節が柱材に使用されていた例は、下川津遺跡で報告されている（島地・林，1990）。また、クヌギ節と同じコナラ亜属のコナラ節が東山崎・水田遺跡で報告されている（編集者註）。針葉樹材と広葉樹材では、材質だけでなく外見も大きく異なる。針葉樹と広葉樹の両用については、建物の性格等により樹種を使い分けていた可能性もある。しかし、現時点では断定することはできない。

<引用文献>

平井信二（1979,1980）木の事典 第2巻，第7巻．かなえ書房．

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料．No .26, P. 91-189.

北村四郎・村田 源（1979）原色日本植物図鑑 木本編<Ⅱ>．545p.，保育社．

能城修一・鈴木三男（1990）昭和63年度調査の分析委託結果．「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡 第2分冊」，p. 533-567，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団．

島地 謙・林 昭三（1990）昭和61年度調査の分析委託結果．「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡 第2分冊」，p. 520-532，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団．

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296 p. 雄山閣．

（編集者註：東山崎・水田遺跡については1992年11月に『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 東山崎・水田遺跡』として，報告書が刊行されている。）

第6章 ま と め

龍川四条遺跡の発掘調査により、以下の知見を得ることができたことは特筆すべきであると考えている。

まず第一は、従前より現善通寺市域においては、縄文時代後・晩期頃の網目状に迷走する自然河川の埋没が知られており、これに新たな流路の存在を追加した点である。特にA地区において検出したSR03は、埋積作用の進行が緩慢であり、現景観の形成に及ぼした影響が絶大であると結論することができるのである。また、同河川からは相当量の縄文土器を採取することができたことから、従来の資料の絶対量の欠如を補い、土器編年あるいは土器組成の研究等に寄与することが期待できるであろう。

第二は、本遺跡地が生活空間の一部としての属性を有した時期が、弥生時代後期頃に比定し得る点である。既に稲木遺跡、龍川五条遺跡、三条番ノ原遺跡、郡家原遺跡等における発掘調査の結果、当該地域において集落が加速度的に出現・拡充する時期が、同時期頃に相当することが検証されており、本遺跡についても従来の生活活動域から隔絶した位置を保つことは不可能であったことが推測できるのである。しかしながら、埋積途上にある河川及び低地状の地形の存在が、居住空間としての土地利用を困難にしていたことが判明している。

第三に、奈良時代頃に集落の初現を認めている。その形成位置は自然河川の自然堤防状の地形を示す狭小な地域であるために、その規模を拡大するまでには至らなかったことが推察できるのである。

第四は、本遺跡地における本格的な集落は、平安時代後半から鎌倉時代頃までの期間に形成された点が指摘できる。特に、初期における集落が、少数の建物遺構による小規模な構成体が単独、あるいは複合する形態を示すのに対して、後出した集落は、異質な構造物を含む広範な集合体として存在したことが想定できるのである。しかも、後者は井戸跡と埋葬遺構及びそれに類する特殊遺構を伴っていることが判明しており、村落の景観復元に有効な情報を提供したと評価することができるであろう。

また、当該時期に開削が盛行した溝状遺構は、現存する土地区画の基軸に酷似した位置と方向性を示しており、いわゆる条里遺構の出現時期を検証する資料として有効であると考えている。

第五は、上記の集落の廃絶後、無住地の状態が相当期間継続することにより、今日的な景観を形成するに至った点が挙げられるが、土地利用の実態については、全く明らかにすることができていない。

第11表 掘立柱建物跡一覽表

遺構名称	位置	構造		規模 (cm)		主軸方位	特記事項	挿図番号	図版番号
		梁行	桁行	梁行	桁行				
S B 01	G 7区	2間	3間	330	415	N-23.75°-E		第38図	図版13③
S B 02	H 7区	1間	2間	395	395	N-63°-E		第39図	図版14
S B 03	K・L11区	2間	4間	415	888	N-63°-E		第72,81図	図版43, 65
S B 04	K・L11区	1間	2間	132	431	N-64.5°-E		第73図	図版44①
S B 05	J・K10区	2間	2間	302	520	N-63°-E	総柱構造	第74図	図版44②
S B 06	M12区	1間	3間	340	552	N-59°-E		第75,81図	図版45①
S B 07	M12区	1間以上	3間以上	170	525	N-59°-E		第76図	図版45②
S B 08	M・N12区	1間	2間	355	642	N-63°-E		第77図	図版46①
S B 09	M・N12区	2間	3間	356	597	N-64°-E		第78図	図版46②
S B 10	M・N12区	1間	2間	333	340	N-29°-W		第79,81図	図版47, 67
S B 11	P13・14区	1間	2間	379	478	N-65.5°-E	庇状施設	第80,81図	図版48①, 65
S B 12	M 8・9区	3間	4間	657	941	N-65°-E	総柱構造	第82,85図	図版48②
S B 13	N11区	1間	2間	376	400	N-60.5°-E		第83,85図	図版49①, 80①
S B 14	K11区	1間	3間	352	615	N-64°-E		第84,85図	図版49②, 64, 74

第12表 土 坑一覽表

遺構名称	位 置	平面形態	規模 (cm)			主軸方位	特記事項	挿図番号	図版番号
			長径	短径	深さ				
S K 01	D 4 区	北半部:隅丸方形 南半部:不整形	45	32	13以上	N-11.5°-E		第35図	図版12③
S K 02	G 7 区	隅丸長方形	130	54	33	N-73.0°-E	埋葬施設か	第41図	図版15②
S K 03	G 7 区	楕 円 形	150	110	25	N-67.0°-E		第42図	
S K 04	G 7 区	不整形	160	125	35	N-37.0°-E		第42図	
S K 05~27については本文第3章第3節(6)の第7, 8表中に記載している。									
S K 28	L 10 区	不整隅丸方形	128	126	11	N-55.0°-E		第86図	図版53①
S K 29	O 12 区	隅丸正方形	137	132	52	N-25.0°-W		第87, 89図	図版53②
S K 30	O・P 12区	隅丸正方形	164	140	31	E-W		第88, 89図	図版54①, 64
S K 31	L 11 区	長楕円形	185	101	11	N-8.5°-W	生活廃棄物 廃棄用施設 あるいは埋 葬 施 設 か	第90図	
S K 32	O 12 区	不整長楕円形	115	61	35	N-85.0°-E		第91図	
S K 33	O 13 区	長 方 形	167	90	6	N-30.0°-W	埋葬施設か	第92図	
S K 34	O 14 区	隅丸長方形	90	75	19	N-63.0°-E		第93図	
S K 35	I 7 区	隅丸長方形	128	87	30	N-24.0°-W		第94, 95, 97図	図版54②, 55, 76, 80②, 82
S K 36	O 11 区	長楕円形	118	54	11	N-31.5°-W		第96, 98図	
S K 37	I・J 7区	不整隅丸長方形	90	80	11	N-38.0°-E		第96, 99図	

第13表 土坑墓一覧表

遺構名称	位置	平面形態	規模 (cm)			主軸方位	特記事項	挿図番号	図版番号
			長径	短径	深さ				
ST01	J10区	隅丸長方形か	200以上	94	12	N-23.5°-W		第100図	図版52

第14表 井戸跡一覧表

遺構名称	位置	ほりかた 平面形態	規模 (cm)			特記事項	挿図番号	図版番号
			長径	短径	深さ			
SE01~04については本文第3章第3節(6)の第8表中に記載している。								
SE05	J7区	不整形円形	360	298	187	井筒は曲物桶 2個体を転用	第101~107図	図版50~51, 69~ 72, 81

第15表 B地区土器・陶器・磁器類・土製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
332	70	—	SR08	縄文土器 浅鉢形土器	体部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/2	0.1~1.0mmの砂 粒を多く含む	
333	70	—	SR08	縄文土器 深鉢形土器	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰黄 2.5 Y 7/2	0.2~1.0mmの砂 粒を多く含む	沈線文
334	70	—	SR08	縄文土器 深鉢形土器	体部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：黒褐 2.5 Y 3/1	0.5~1.5mmの砂 粒を多く含む	沈線文
340	81	65	SB03	土師器 皿	口縁部 7/8 体・底部 8/8	外面：横ナア 回転ヘラ切り 内面：横・仕上げナア	内外面：橙 7.5 Y R 7/6	0.3~0.5mmの砂 粒を多く含む	
341	81	—	SB03	土師器 皿	底部 2/8	外面：横・仕上げナア 内面：仕上げナア	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
342	81	—	SB03	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナア 内面：横ナア	内外面：浅黄 2.5 Y 7/3	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
343	81	—	SB03	土師器 土鍋	体部 1/8	外面：横板ナア 内面：横ナア	外面：明赤褐 5 Y R 3/4 内面：灰黄褐 10 Y R 4/2	0.5~2.5mmの砂 粒を多く含む	
346	81	—	SB06	土師器 土鍋 脚		外面：摩耗	外面：明褐 7.5 Y R 5/8	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
347	81	67	SB10	黒色土器 碗	底部 8/8	外面：摩耗 横ナア 回転ヘラ切り 内面：摩耗	外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6 内面：オリブ黒 5 Y 3/1	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
348	81	—	SB11	土師器 碗	口縁部 2/8	外面：横・斜ナア 内面：横・斜ナア	内外面：灰白 10 Y R 8/2	0.3~0.5mmの砂 粒を多く含む	
349	81	65	SB11	土師器 皿	口縁・体・底 部 4/8	外面：横ナア 回転ヘラ切り 内面：横・仕上げナア	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 4/8	精緻	貫子状原体 圧痕
350	81	—	SB11	黒色土器 碗	口縁・体部 1/8	外面：摩耗 横ヘラ磨き 回転ナア 内面：横・斜ヘラ磨き	外面：灰白 2.5 Y 8/2 内面：黒 2.5 Y 2/1	精緻	
351	81	—	SB11	須恵器 甕	体部破片	外面：格子タタキ目 内面：摩耗	内外面：黄灰 2.5 Y 4/1	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
352	85	—	SB12	土師器 碗	底部 1/8	外面：横・仕上げナア 回転ヘラ切り 内面：横ナア	外面：明赤褐 5 Y R 5/6 内面：暗褐 7.5 Y R 3/3	0.1~0.5mmの砂 粒を多く含む	
353	85	—	SB12	土師器 皿	底部 2/8	外面：横ナア 回転ヘラ切り 内面：仕上げナア	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6	精緻	貫子状原体 圧痕
354	85	—	SB12	土師器 土釜	体部破片	外面：斜ハケ目 内面：横・斜ナア	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.5~1.5mmの砂 粒を多く含む	
355	85	—	SB12	瓦質土器 碗	口縁部破片	外面：横ナア 内面：横ヘラ磨き 横ナア	内外面：黄灰 2.5 Y 3/1	0.1~0.3mmの砂 粒を含む	
356	85	—	SB13	土師器 碗	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/2	0.5~0.7mmの砂 粒を含む	
357	85	—	SB13	土師器 土鍋	体部 1/8	外面：指頭痕 縦ハケ目 縦・横ナア 内面：横ナア 指頭痕	外面：灰黄褐 10 Y R 4/2 内面：にぶい黄橙 10 Y R 6/3	0.2~1.0mmの砂 粒を多く含む	
359	85	64	SB14	土師器 碗	口縁部破片 体部 2/8 底部 4/8	外面：横ナア 回転ヘラ切り 内面：仕上げナア	内外面：浅黄褐 10 Y R 8/4	精緻	
360	85	—	SB14	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転ナア 回転ヘラ切り 内面：回転ナア	内外面：橙 5 Y R 7/6	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
361	85	—	SB14	土師器 皿	底部破片	外面：横ナア 回転ヘラ切り 内面：仕上げナア	内外面：黄橙 7.5 Y R 7/8	0.3~0.5mmの砂 粒を多く含む	
362	85	74	SB14	須恵器 捏鉢	底部 4/8	外面：横ナア 斜ハケ目 回転糸切り 内面：横・仕上げナア	内外面：灰白 5 Y 7/1	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
363	89	—	SK29	須恵器 高杯	脚部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
364	89	64	SK30	土師器 杯	口縁部 7/8 底部 8/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	精緻	
365	89	—	SK30	黒色土器 碗	口縁部破片 体部 2/8	外面：摩耗 内面：斜ヘラ磨き（摩耗）	外面：浅黄褐 10 Y R 8/3 内面：黒 10 Y R 2/1	1.5~2.0mmの砂 粒を多く含む	
366	89	—	SK30	須恵器 杯	口縁部破片 体部 1/8 底部 3/8	外面：回転ヘラ切り 横・仕上げナデ 内面：回転・仕上げナデ	内外面：灰 N 5/	0.2~0.4mmの砂 粒を含む	
367	96	—	SK36	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
368	96	—	SK36	須恵器(亀山 焼) 甕	体部破片	外面：格子タタキ目 内面：横・斜ナデ	外面：灰白 5 Y 7/1 内面：灰 N 5/	精緻	
369	96	—	SK37	土師器 皿	底部破片	外面：回転ヘラ切り 摩耗 内面：仕上げナデ	内外面：浅黄褐 7.5 Y R 8/3	精緻	
370	96	—	SK37	土師器 皿	底部破片	外面：摩耗 回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ	内外面：7.5 Y R 浅黄橙 8/3	0.5~0.7mmの砂 粒を含む	
372	97	76	SK35	青 磁 碗	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 7/ 釉：緑灰 10 G Y 6/1	精緻	選弁文
375	103	—	SE05	土師器 碗	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：横ヘラ磨き	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
376	103	—	SE05	土師器 碗	口縁部破片	外面：摩耗 回転・横ナデ 内面：摩耗 横ヘラ磨き	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
377	103	—	SE05	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転ヘラ切り 回転・横ナデ 内面：仕上げナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	見込み部分 に重ね焼き 痕跡
378	103	—	SE05	土師器 碗	底部 2/8	外面：仕上げ・横ナデ 内面：仕上げナデ	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/3	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
379	103	—	SE05	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：縦ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	精緻	
380	103	—	SE05	土師器 碗	底部 2/8	外面：仕上げ・回転ナデ 内面：回転ヘラ切り	内外面：灰白 2.5 Y 8/1	精緻	削り出し高 台か
381	103	—	SE05	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転ヘラ切り 回転・横ナデ 内面：仕上げナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
382	103	—	SE05	土師器 皿	底部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	精緻	
383	103	—	SE05	土師器 皿	底部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：淡黄 2.5 Y 8/3	精緻	
384	103	—	SE05	土師器 皿	口縁部 1/8	外面：仕上げ・回転ナデ 内面：横ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
385	103	—	SE05	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：回転ナデ 指頭痕 内面：回転ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	0.2~0.5mmの砂 粒を多く含む	
386	103	—	SE05	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横・縦ナデ 内面：横ナデ	外面：黒褐 10 Y R 3/2 内面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.3~1.5mmの砂 粒を多く含む	
387	103	69	SE05	瓦 器 碗	口縁部 6/8 底部 2/8	外面：指頭痕 横ナデ 内面：ヘラ磨き	外面：灰白 5 Y 7/2 外面：オリーブ黒 7.5 Y 3/ 内面：黒 2.5 Y 2/1	精緻	
388	103	—	SE05	瓦 器 碗	口縁部 1/8	外面：横ヘラ磨き 指頭痕 内面：横ヘラ磨き	内外面：黒 N 2/	精緻	
389	103	—	SE05	瓦 器 碗	口縁部 1/8	外面：摩耗 指頭痕 内面：摩耗 横ヘラ磨き	内外面：灰 5 Y 5/1	精緻	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
390	103	—	SE05	瓦 器 椀	口縁部破片	外面：回転ナデ 指頭痕 内面：摩耗	内外面：灰 5 Y 5/1	精緻	
391	103	—	SE05	瓦 器 椀	口縁部破片	外面：回転ナデ 指頭痕 内面：縦・横・斜ヘラ磨き	外面：暗灰黄 2.5 Y 5/2 内面：黒褐 2.5 Y 3/1	精緻	
392	103	70	SE05	瓦 器 椀	底部 1/8	外面：斜・横・仕上げナデ 内面：横ナデ ヘラ磨き	内外面：黒 2.5 Y 2/1	精緻	
393	103	—	SE05	瓦 器 椀	底部 1/8	外面：仕上げ・回転ナデ 内面：ヘラ磨き	内外面：黒 N 1.5/	精緻	
394	103	—	SE05	瓦 器 椀	底部 3/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：ヘラ磨き	内外面：黒 2.5 Y 2/1	精緻	
395	103	—	SE05	瓦 器 椀	底部 2/8	外面：横ナデ 指頭痕 内面：ヘラ磨き	内外面：黒褐 2.5 Y 3/1	精緻	
396	103	71	SE05	瓦 器 皿	口縁部～ 底部 8/8	外面：回転ナデ 指頭痕 内面：ヘラ磨き	内外面：黒 2.5 Y 2/1	0.5～1.0mmの砂 粒を含む	
397	103	72	SE05	瓦 器 皿	口縁部～ 底部 2/8	外面：回転ナデ 指頭痕 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
398	103	—	SE05	瓦 器 皿	口縁部破片	外面：回転・横ナデ 指頭痕 内面：横ヘラ磨き	内外面：灰 N 4/	精緻	
399	103	—	SE05	須恵器 壺	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	0.2～0.5mmの砂 粒を含む	
402	109	—	SD15	弥生土器 甕形土器	口縁部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 6/8	1.0～3.0mmの砂 粒を多く含む	
403	109	—	SD15	弥生土器 甕形土器	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	外面：橙 5 Y R 6/8 内面：黒 7.5 Y R 2/1	1.0～1.5mmの砂 粒を多く含む	
406	112	—	SD19	弥生土器 壺形土器	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：摩耗	内外面：にぶい黄褐 10 Y R 5/4	0.5～2.0mmの砂 粒を多く含む	
407	112	—	SD19	弥生土器 壺形土器	口縁部 1/8	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.0～1.5mmの砂 粒を多く含む	
408	112	—	SD19	弥生土器 壺形土器	体部 2/8	外面：縦・斜ハケ目 内面：摩耗	内外面：にぶい黄褐 10 Y R 6/4	1.0～3.0mmの砂 粒を多く含む	
409	112	—	SD19	弥生土器 甕形土器	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：にぶい黄褐 10 Y R 5/4	1.0～3.0mmの砂 粒を多く含む	
410	112	—	SD19	弥生土器 甕形土器	口縁部 1/8	外面：横ナデ 内面：斜ヘラ削り 横ナデ	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.0～2.0mmの砂 粒を含む	
411	112	—	SD19	弥生土器 甕形土器	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	0.5～1.0mmの砂 粒を多く含む	
412	112	—	SD19	弥生土器 甕形土器	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.2～0.3mmの砂 粒を含む	
413	112	—	SD19	弥生土器 器台 (支脚)形土器	底部 2/8	外面：指頭痕 内面：指頭痕	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	0.5～3.0mmの砂 粒を多く含む	
415	112	—	SD20	弥生土器 甕形土器	底部 2/8	外面：斜ハケ目 摩耗 内面：斜ヘラ削り	内外面：黒褐 10 Y R 3/1	1.0～5.0mmの砂 粒を多く含む	
416	112	—	SD20	弥生土器 高杯形土器	杯部破片	外面：縦ナデ 内面：仕上げナデ	内外面：橙 5 Y R 6/8	精緻	
417	117	—	SD21	土師器 土釜	口縁部破片	外面：斜ハケ目 (摩耗) 内面：横ナデ	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.5～2.0mmの砂 粒を多く含む	
418	117	—	SD24	土師器 土釜	口縁部 1/8	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	内外面：橙 5 Y R 6/8	0.2～0.5mmの砂 粒を多く含む	
419	117	—	SD27	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：黄褐 10 Y R 5/6	0.5～1.5mmの砂 粒を多く含む	
420	117	—	SD25	土師器 皿	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
421	117	—	SD25	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ヘラ切り 仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
422	117	—	SD25	須恵器 甕	体部破片	外面：右上りタタキ目 カキ目 内面：青海波文	内外面：灰白 N 7/	精緻	
423	117	—	SD31	土師器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	精緻	
424	117	—	SD31	土師器 土釜	口縁部破片	外面：斜ハケ目 横ナデ 内面：斜ハケ目 横ナデ	内外面：にひ黄橙 10 Y R 7/4	1.0~1.5mmの砂粒を多く含む	
425	117	—	SD32	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 摩耗 内面：横ナデ	内外面：にひ赤褐 5 Y R 4/3	0.1~1.0mmの砂粒を多く含む	
426	117	—	SD32	土師器 土釜脚		外面：指頭痕	外面：橙 5 Y R 6/8	0.2~0.5mmの砂粒を多く含む	
427	117	—	SD32	土師器 土釜脚		外面：指頭痕	外面：灰黄 2.5 Y 7/2	0.2~0.5mmの砂粒を多く含む	
428	117	—	SD32	土師器 土釜脚		外面：指頭痕	外面：明赤褐 5 Y R 5/8	0.5~1.5mmの砂粒を多く含む	
430	117	—	SD33	土師器 杯	口縁・底部2/8	外面：摩耗 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 7/6	2.0~5.0mmの砂粒を含む	
431	117	—	SD33	土師器 杯	底部 2/8	外面：横・仕上げナデ 内面：横・仕上げナデ	内外面：浅黄 2.5 Y 7/4	精緻	
432	117	—	SD33	土師器 皿	口縁・底部1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	精緻	
433	117	—	SD33	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.5~1.0mmの砂粒を含む	
434	117	—	SD33	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
435	117	—	SD33	須恵器 杯	底部破片	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 7/	精緻	
436	117	—	SD33	須恵器 甕	体部破片	外面：右上りタタキ目 内面：青海波文	外面：灰 N 5/ 内面：灰白 N 7/	精緻	
437	117	—	SD34	須恵器 蓋	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 7/	1.0mmの砂粒を含む	
438	117	—	SD37	土師器 杯	底部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：橙 7.5 Y R 7/6	0.1~0.2mmの砂粒を含む	
439	119	—	SD38	土師器 杯	口縁~底部2/8	外面：回転ヘラ切り 仕上げ・回転ナデ 摩耗 内面：仕上げ・回転ナデ 摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	精緻	
440	119	63	SD38	土師器 碗	口縁部 1/8 底部 4/8	外面：回転ナデ 横ヘラ磨き 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ 横ヘラ磨き	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
441	119	—	SD38	土師器 碗	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：横ヘラ磨き	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
442	119	—	SD38	土師器 碗	体部 1/8	外面：ヘラ磨き 横ナデ 内面：ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
443	119	—	SD38	土師器 碗	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 10 Y R 7/1	精緻	
444	119	—	SD38	土師器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 摩耗 内面：摩耗 回転ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	
445	119	—	SD38	土師器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 横ヘラ磨き 内面：回転・斜ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	

遺物 番号	押図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
446	119	—	SD38	土師器 椀	底部 1/8	外面：回転・斜・仕上げナデ 内面：仕上げナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
447	119	—	SD38	土師器 椀	底部 2/8	外面：回転ヘラ切り 横・仕上げナデ 内面：仕上げナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
448	119	—	SD38	土師器 椀	底部 1/8	外面：回転ナデ 内面：仕上げナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
449	119	—	SD38	土師器 皿	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 摩耗 内面：回転ナデ 指頭痕	外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6 内面：灰白 10 Y R 8/2	0.1~0.2mmの砂粒を含む	
450	119	—	SD38	土師器 皿	口縁・体・底部 1/8	外面：横・仕上げナデ 内面：横ナデ 摩耗	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6	精緻	
451	119	—	SD38	土師器 皿	底部破片	外面：横ナデ 摩耗 内面：横ナデ 摩耗	内外面：赤褐 10 R 6/6	1.0~1.5mmの砂粒を含む	
452	119	—	SD38	土師器 皿	底部 1/8	外面：摩耗 内面：横ナデ	外面：灰黄褐 10 Y R 5/2 内面：にぶい褐 7.5 Y R 6/3	0.2~0.5mmの砂粒を多く含む	
453	119	—	SD38	土師器 皿	底部 2/8	外面：回転ヘラ切り 横ナデ 摩耗 内面：摩耗	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	2.0~3.0mmの砂粒を含む	
454	119	—	SD38	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横・縦ナデ 内面：横・斜ナデ	外面：黒褐 5 Y R 3/1 内面：橙 5 Y R 6/8	0.3~0.5mmの砂粒を多く含む	
455	119	—	SD38	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横・斜ナデ	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/3	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む	
456	119	—	SD38	黒色土器 椀	底部 1/8	外面：横ナデ 摩耗 内面：ヘラ磨き	外面：浅黄橙 10 Y R 8/3 内面：黒 5 Y 2/1	0.1~0.2mmの砂粒を含む	
457	119	—	SD38	黒色土器 椀	底部 1/8	外面：回転ナデ 内面：ヘラ磨き	外面：浅黄橙 10 Y R 8/3 内面：黒褐 10 Y R 3/1	0.5~1.0mmの砂粒を含む	
458	119	—	SD38	須恵器 蓋	口縁部 2/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰 N 5/ 内面：灰 N 6/	精緻	
459	119	—	SD38	須恵器 杯	口縁部破片 体部 1/8 底 部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転・仕上げナデ	内外面：灰 7.5 Y 5/1	精緻	
460	119	—	SD38	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
461	119	—	SD38	須恵器 皿	口縁部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
462	119	—	SD38	須恵器 壺	体部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	沈線文3条
463	120	—	SD38	須恵器 甕	体部 2/8	外面：右よりタタキ目 内面：横ナデ 指頭痕	内外面：暗灰 N 3/	1.0~3.0mmの砂粒を含む	
464	120	—	SD39	土師器 椀	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
465	120	—	SD39	土師器 土鍋 脚		外面：ナデ	外面：橙 5 Y R 6/6	1.0~2.0mmの砂粒を多く含む	
466	120	—	SD39	須恵器 壺	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：黒褐 5 Y R 3/1	0.1~0.2mmの砂粒を多く含む	
467	123	—	SD40	土師器 皿	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 6/8	精緻	
468	123	—	SD40	土師器 土釜	体部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.0~2.0mmの砂粒を多く含む	
469	123	—	SD40	緑釉陶器 椀	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 7.5 Y 5/1 釉：オリーブ黒 10 Y 3/2	精緻	
470	123	—	SD40	陶 器 壺	体部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰赤 10 R 4/2	0.5~1.0mmの砂粒を含む	沈線文5条

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
471	123	-	SD41	土師器 皿	底部破片	外面：横・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ	内外面：浅黄橙 7.5 YR 8/6	精緻	
472	123	68	SD41	瓦 器 碗	口縁・体部2/8 底部 8/8	外面：指頭痕 回転ヘラ切り 横ナデ 内面：摩耗	内外面：オリーブ黒 7.5 Y 3/1	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
473	123	-	SD42	須恵器 捏鉢	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	1.0~4.0mmの砂 粒を含む	
474	123	-	SD43~ 45	瓦 器 碗	底部 1/8	外面：摩耗 横ナデ 内面：摩耗	内外面：灰 N 4/	精緻	
475	123	-	SD46	土師器 皿	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：縦ハケ目	外面：橙 5 YR 7/6 内面：灰白 10 YR 8/2	精緻	
476	123	-	SD46	瓦 器 碗	底部 2/8	外面：横・斜・仕上げナデ 内面：ヘラ磨き	内外面：暗灰 N 3/	精緻	
477	124	-	SX02	弥生土器 壘形土器	口縁部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗 指頭痕	外面：にぶい黄橙 10 YR 5/6 内面：明赤橙 5 YR 5/6	2.0~3.0mmの砂 粒を多く含む	
478	124	-	SX03	土師器 土鍋	口縁部 2/8	外面：指頭痕 摩耗 内面：横ナデ 指頭痕	外面：黒褐 10 YR 3/1 内面：にぶい黄褐 10 YR 5/3	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
479	124	-	SX03	土師器 土釜	口縁部破片	外面：摩耗 横ハケ目 内面：摩耗	内外面：橙 5 YR 6/8	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
480	124	-	SX03	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕（摩耗）	外面：明褐 7.5 YR 5/6	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
481	124	-	SX04	土師器 土鍋	口縁部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 YR 5/6	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
482	124	-	SX08	土師器 土鍋 脚		外面：ナデ	外面：にぶい褐 7.5 YR 5/4	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
483	124	-	SX09	土師器 土鍋	体部破片	外面：格子タタキ目 内面：摩耗	外面：明赤褐 5 YR 5/8 内面：にぶい黄橙 10 YR 6/4	0.5~1.5mmの砂 粒を多く含む	
485	125	-	SP08	土師器 皿	底部破片	外面：仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ	内外面：にぶい黄褐 10 YR 5/4	0.1~0.3mmの砂 粒を含む	
486	125	-	SP11	土師器 皿	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 YR 8/4	0.1~0.5mmの砂 粒を多く含む	
487	125	-	SP16	土師器 皿	底部破片	外面：横ナデ 回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ	内外面：橙 7.5 YR 6/6	0.2~0.5mmの砂 粒を多く含む	
488	125	-	SP17	白 磁 碗	底部 2/8	外面：回転ナデ 内面：不明	内外面：灰白 10 YR 8/2	精緻	
490	125	-	SP20	土師器 皿	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	内外面：橙 2.5 YR 7/6	精緻	
491	125	-	SP22	瓦 器 碗	底部破片	外面：横ヘラ磨き 横ナデ 内面：仕上げナデ	外面：2.5 Y 2/1 内面：灰黄 2.5 Y 7/2	精緻	
492	125	-	SP23	土師器 皿	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 7.5 YR 8/6	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
493	125	-	SP24	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：オリーブ黒 5 Y 3/1	0.1~0.5mmの砂 粒を含む	
494	125	-	SP28	土師器 皿	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰黄 2.5 Y 7/2	精緻	
495	125	-	SP30	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	外面：にぶい黄橙 10 YR 7/4 内面：橙 7.5 YR 6/6	0.5~1.5mmの砂 粒を含む	
496	125	-	SP33	土師器 碗	口縁部 1/8	外面：横ナデ 内面：横・斜ナデ	内外面：にぶい黄橙 10 YR 7/4	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
497	125	-	SP35	土師器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
498	125	-	SP35	土師器 碗	体部破片	外面：回転ナデ 内面：横ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
499	125	-	SP35	土師器 皿	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/4 内面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.2~0.5mmの砂 粒を多く含む	
500	125	-	SP36	土師器 土鍋	口縁部 1/8	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/3 内面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.1~0.3mmの砂 粒を多く含む	
501	125	-	SP35	須恵器(龟山 焼) 甕	体部破片	外面：左上りタタキ目 内面：横ナデ	内外面：灰 N 5/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
502	125	-	SP36	瓦 器 碗	口縁部破片 底部 2/8	外面：横・斜・仕上げナデ 内面：横・斜ヘラ磨き	内外面：暗灰 N 3/	精緻	
503	125	-	SP40	土師器 皿	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
504	125	-	SP40	土師器 皿	底部破片	外面：回転・仕上げ・横ナデ 内面：仕上げ・回転ナデ	内外面：橙 5 Y R 6/6	0.1~0.3mmの砂 粒を含む	
505	125	-	SP46	瓦 器 碗	口縁部破片	外面：指頭痕 横ナデ 内面：横ヘラ磨き	内外面：暗灰 N 3/	精緻	
506	125	-	SP40	緑釉陶器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 5 Y 7/2	精緻	
507	125	68	SP47	瓦 器 碗	口縁・体部 1/8 底部 8/8	外面：指頭痕 横・斜・仕上 げナデ 内面：横ヘラ磨き	内外面：黒 N 2/	0.1~0.2mmの砂 粒を多く含む	
508	125	-	SP47	瓦 器 碗	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
509	125	-	SP48	土師器 碗	底部 2/8	外面：横ナデ 回転ヘラ切り 摩耗 内面：摩耗	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.2~0.3mmの砂 粒を含む	
510	125	-	SP49	土師器 碗	底部 2/8	外面：横ナデ 回転ヘラ切り 摩耗 内面：摩耗	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.5~2.0mmの砂 粒を含む	
511	125	-	SP51	土師器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：浅黄褐 10 Y R 8/3	精緻	
512	125	-	SP54	瓦 器 碗	口縁部破片	内面：回転ナデ 指頭痕 内面：横・斜ヘラ磨き	内外面：黄灰 2.5 Y 5/1	精緻	
513	126	-	SP56	土師器 皿	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
514	126	-	SP56	土師器 皿	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	
515	126	-	SP56	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/3	0.3~1.0mmの砂 粒を多く含む	
516	126	-	SP59	土師器 皿	体・底部 2/8	外面：摩耗 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 6/6	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
517	126	-	SP63	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：黄橙 7.5 Y R 8/8	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
518	126	-	SP64	須恵器 壺	底部破片	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
519	126	-	SP68	土師器 皿	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
520	126	-	SP69	土師器 碗	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：摩耗	外面：淡赤褐 2.5 Y R 7/4 内面：褐灰 10 Y R 4/1	精緻	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
521	126	—	SP70	土師器 皿	底部 2/8	外面：横・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 7/6	精緻	
522	126	63	SP71	土師器 椀	口縁・体部 4/8 底部 8/8	外面：横・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：横ナデ 指頭痕	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6	0.5～1.0mmの砂 粒を多く含む	
523	126	—	SP71	土師器 椀	口縁部 1/8	外面：横・斜ナデ 内面：横・斜ナデ	外面：浅黄褐 10 Y R 8/3 内面：浅黄褐 7.5 Y R 8/6	0.2～1.0mmの砂 粒を多く含む	
524	126	—	SP72	須恵器 甕	体部破片	外面：左上りタタキ目 内面：指頭痕	内外面：灰 N 5/	0.5～1.0mmの砂 粒を含む	
525	126	—	SP74	土師器 皿	口縁部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：摩耗 回転ナデ	内外面：浅黄褐 7.5 Y R 8/6	精緻	
526	126	—	SP74	土師器 皿	口縁部破片	外面：回転ヘラ切り 摩耗 回転ナデ 内面：摩耗 回転ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/1	精緻	
527	126	—	SP74	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナデ 縦ハケ目 内面：横・斜ナデ 斜ハケ目	外面：にぶい赤褐 5 Y R 4/3 内面：にぶい黄褐 10 Y R 5/4	1.5～2.5mmの砂 粒を多く含む	
528	126	—	SP76	土師器 椀	口縁部 1/8	外面：摩耗 回転・横・斜ナデ 内面：摩耗 回転ナデ 横・斜ヘラ磨き	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	
529	126	—	SP76	須恵器 甕 (捏鉢)	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
530	126	—	SP77	黒色土器 椀	底部 2/8	外面：摩耗 内面：ヘラ磨き	外面：浅黄褐 10 Y R 8/3 内面：オリブ黒 5 Y 3/1	0.2～0.5mmの砂 粒を含む	
531	126	67	SP76	黒色土器 椀	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ ヘラ磨き	外面：灰白 2.5 Y 8/2 内面：黒 7.5 Y 2/1	0.5～1.0mmの砂 粒を含む	
532	127	—	SP80	土師器 皿	口縁部 2/8	外面：横ナデ 回転ヘラ切り 内面：横・仕上げナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	
533	127	—	SP83	土師器 椀	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	0.1～0.2mmの砂 粒を含む	
534	127	—	SP84	土師器 土釜 脚		外面：ナデ	外面：橙 5 Y R 6/6	1.0～1.5mmの砂 粒を多く含む	
535	127	—	SP85	土師器 椀	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：橙 7.5 Y R 7/6	精緻	
536	127	—	SP86	土師器 皿	底部破片	外面：回転ヘラ切り 横・仕上げナデ 内面：回転・仕上げナデ	内外面：にぶい橙 7.5 Y R 7/4	精緻	
537	127	—	SP87	土師器 皿	口縁 ～底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	内外面：にぶい橙 7.5 Y R 7/4	0.5～1.0mmの砂 粒を多く含む	
538	127	—	SP87	土師器 椀	口縁部 1/8	外面：回転・斜ナデ 内面：縦・横・斜ヘラ磨き	内外面：淡黄 2.5 Y 8/3	精緻	
539	127	—	SP87	土師器 椀	口縁部 2/8	外面：回転ナデ 横・斜ヘラ磨き 内面：横ナデ 横ヘラ磨き	内外面：灰白 10 Y R 8/2	0.5～1.0mmの砂 粒を多く含む	
540	127	—	SP88	土師器 皿	口縁部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	0.5～1.0mmの砂 粒を含む	
541	127	—	SP88	土師器 皿	口縁部 3/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：橙 5 Y R 7/6	精緻	
567	130	—	O 11 区 第 3 層	土師器 杯	口縁部破片	外面：摩耗 内面：回転ナデ	外面：にぶい赤褐 5 Y R 5/4 内面：赤 10 R 5/8	2.0～3.0mmの砂 粒を含む	

遺物 番号	押図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
568	130	—	O 13 区 第3層	土師器 杯	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	1.0~1.5mmの砂 粒を含む	
569	130	—	O 11 区 第3層	土師器 杯	底部 1/8	外面：横・斜・仕上げナテ 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：灰白 N 8/	1.0~1.5mmの砂 粒を含む	
570	130	—	M 12 区 第3層	土師器 杯	底部 2/8	外面：横・仕上げナテ 内面：横ナテ	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	精緻	
571	130	—	Q 13 区 第3層	土師器 杯	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
572	130	—	N 10 区 包含層	土師器 碗	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/1	精緻	
573	130	—	P 13 区 第2層	土師器 碗	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	
574	130	—	P 13 区 第3層	土師器 碗	底部 1/8	外面：摩耗 横ナテ 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
575	130	—	P 13 区 第3層	土師器 碗	底部 2/8	外面：摩耗 回転ヘラ切り 内面：剝落	内外面：明黄褐 2.5 Y R 6/6	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
576	130	—	M 10 区 第2層	土師器 碗	底部 1/8	外面：回転・仕上げナテ 内面：回転ナテ	内外面：浅黄 2.5 Y 7/4	精緻	
577	130	—	N 12 区 第2・3層	土師器 碗	底部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
578	130	—	P 13 区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ切り 摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
579	130	—	Q 13 区 第2層	土師器 碗	底部 3/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
580	130	—	N 12 区 第1~3層	土師器 碗	底部破片	外面：回転ナテ 摩耗 回転ヘラ切り 内面：回転ナテ	内外面：赤褐 5 Y R 4/6	精緻	
581	130	—	O 10 区 包含層	土師器 碗	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 Y R 5/8	精緻	
582	130	—	Q 14 区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	外面：灰白 2.5 Y 7/1 内面：橙 7.5 Y R 7/6	0.3~2.0mmの砂 粒を含む	
583	130	—	P 13 区 第3層	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ削り 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 8/6	精緻	
584	130	—	Q-P14 区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：横ナテ 内面：摩耗	内外面：明黄褐 10 Y R 6/6	精緻	
585	130	—	O 11 区 第3層	土師器 碗	底部 4/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	精緻	
586	130	—	O 13 区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/8	精緻	
587	130	—	Q 14 区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：横・斜・仕上げナテ 内面：横・斜・仕上げナテ	外面：明赤褐 5 Y R 5/6 内面：橙 7.5 Y R 6/6	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
588	130	—	Q 14 区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：摩耗 横ナテ 内面：摩耗	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	精緻	
589	130	—	Q 14 区 第2層	土師器 碗	底部 1/8	外面：横ナテ 摩耗 内面：摩耗	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/2	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
590	130	—	P 13 区 第3層	土師器 碗	底部 1/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
591	130	—	N 10区 第2層	土師器 椀	底部 1/8	外面：横・仕上げナテ 内面：仕上げナテ	内外面：にぶい黄褐 2.5 Y 6/4	0.5~2.0mmの砂 粒を含む	
592	130	—	O 13区 第2層	土師器 椀	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
593	130	—	M 10区 第2層	土師器 椀	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰黄 2.5 Y 7/2	0.2~1.0mmの砂 粒を含む	
594	130	—	P 13区 第2層	土師器 椀	底部 1/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ切り 内面：回転ナテ	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
595	130	—	Q 14区 第2層	土師器 椀	底部 1/8	外面：摩耗 仕上げナテ 内面：摩耗	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 6/4	精緻	
596	130	—	O 13区 第3層	土師器 皿	口縁部 1/8	外面：仕上げ・横ナテ 回転ヘラ切り 内面：横・斜ナテ	外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/4 内面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.1~0.2mmの砂 粒を多く含む	
597	130	—	P 12区 第3層	土師器 皿	底部 2/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：褐灰 10 Y R 4/1	0.3~0.5mmの砂 粒を含む	
598	130	—	Q 13区 第2層	土師器 皿	底部 2/8	外面：回転ナテ 回転ヘラ切り 内面：横ナテ 摩耗	外面：灰白 10 Y R 8/2 内面：灰白 2.5 Y 8/1	0.1~0.3mmの砂 粒を多く含む	
599	130	—	O 13区 第4層	土師器 皿	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	外面：浅黄 2.5 Y 7/4 内面：明褐 7.5 Y R 5/6	精緻	
600	130	—	Q 13区 第2層	土師器 皿	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：黒褐 2.5 Y 3/1	0.5~1.5mmの砂 粒を多く含む	
601	130	—	P 13区 第1・2層	土師器 皿	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 N 8/	1.0~1.5mmの砂 粒を含む	
602	130	75②	O 13区 第2層	土師器 皿	底部 1/8	外面：回転ナテ 回転糸切り 内面：摩耗	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6	精緻	
603	130	—	P 13区 第3層	土師器 皿	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	精緻	
604	130	—	P 12区 第3層	土師器 皿	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	精緻	
605	131	—	M 10区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナテ 内面：横ハケ目 横ナテ	内外面：浅黄 2.5 Y 7/4	0.2~3.0mmの砂 粒を含む	
606	131	—	M 9区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナテ (摩耗) 内面：横ナテ (摩耗)	外面：浅黄橙 10 Y R 8/3 内面：明黄褐 10 Y R 7/6	1.0~4.0mmの砂 粒を多く含む	
607	131	—	M 10区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横・横板ナテ 内面：横ナテ	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
608	131	—	N 9区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横・斜ナテ 内面：摩耗	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
609	131	—	P 13区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナテ 摩耗 内面：横ナテ	内外面：橙 7.5 Y R 6/8	1.5~2.0mmの砂 粒を多く含む	
610	131	—	N 9区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横・斜板ナテ 内面：横・斜板ナテ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
611	131	66	P 14区 第3層	土師器 土鍋	口縁部 1/8	外面：横ナテ 内面：横ナテ	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
612	131	—	P 14区 第2層	土師器 土鍋	体部破片	外面：仕上げナテ 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	1.0~3.0mmの砂 粒を多く含む	
613	131	—	O 13区 第2層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナテ 内面：横ナテ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	1.5~2.0mmの砂 粒を含む	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
614	131	—	M 10 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
615	131	—	N 9 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横・斜ナデ	外面：明黄褐 2.5 Y 7/6 内面：明黄褐 10 Y R 6/6	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
616	131	—	N 9 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：摩耗 斜ハケ目 内面：摩耗	外面：黄褐 10 Y R 5/6 内面：明黄褐 2.5 Y 7/6	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
617	131	—	N 9 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.1~0.2mmの砂 粒を多く含む	
618	131	—	M 10 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
619	131	—	N 9 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：指頭痕 横ナデ 内面：指頭痕	内外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6	0.1~3.0mmの砂 粒を含む	
620	131	—	P 13 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横・縦板ナデ 指頭痕 内面：横・横板ナデ	内外面：橙 7.5 Y R 7/6	2.0~3.0mmの砂 粒を多く含む	
621	131	—	P 13 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部 1/8	外面：横・斜ナデ 指頭痕 内面：縦・斜ナデ	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	2.0~4.0mmの砂 粒を多く含む	
622	131	—	Q・P14 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：摩耗	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/4	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
623	131	—	P 13 区 第 3 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 6/4	0.3~1.5mmの砂 粒を多く含む	
624	131	—	Q・P14 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：黄褐 2.5 Y 5/3	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
625	131	—	P 13 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	内外面：赤褐 5 Y R 4/6	1.0~1.5mmの砂 粒を含む	
626	131	—	O 13 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：摩耗	外面：浅黄橙 10 Y R 8/3 内面：橙 7.5 Y R 7/6	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
627	132	—	P 13 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ 指頭痕	内外面：灰褐 5 Y R 4/2	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
628	132	—	O 13 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ	内外面：橙 5 Y R 6/8	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
629	132	—	Q 14 区 第 2 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
630	132	—	O 13 区 第 3 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 指頭痕 内面：横ナデ 横ヘラ削り	内外面：黄褐 10 Y R 5/6	0.1~3.0mmの砂 粒を多く含む	
631	132	—	Q 13 区 第 2 層	土師器 土釜	体部破片	外面：横ナデ 内面：摩耗	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
632	132	—	N 11 区 第 4 層	土師器 土釜	体部破片	外面：縦ハケ目 横ナデ 内面：横ナデ	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	0.5~1.5mmの砂 粒を多く含む	
633	132	—	N 11 区 第 4 層	土師器 土釜	体部破片	外面：横ナデ (摩耗) 内面：横ナデ 横ハケ目	内外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.1~2.0mmの砂 粒を含む	
634	132	—	Q 14 区 第 2 層	土師器 土釜	体部破片	外面：横ナデ 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
635	132	—	Q 14 区 第 2 層	土師器 土釜	体部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：橙 5 Y R 6/8	1.0~4.0mmの砂 粒を多く含む	
636	132	—	O 11 区 第 3 層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 斜ハケ目 内面：摩耗	内外面：にぶい黄褐 10 Y R 5/4	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
637	132	-	M 10区 第2層	土師器 土釜	口縁部破片	外面：横ナデ 摩耗 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
638	132	65	O 10区 第3層	土師器 土鍋 脚		外面：縦ナデ 指頭痕	外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/3	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
639	132	-	P 13区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/4	2.0~4.0mmの砂 粒を多く含む	
640	132	-	O 11区 包含層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	脚部：橙 7.5 Y R 7/6	2.0~5.0mmの砂 粒を多く含む	
641	132	-	P 13区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	外面：灰白 10 Y R 8/2	0.2~0.5mmの砂 粒を多く含む	
642	132	-	P 13区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	外面：橙 7.5 Y R 6/6	0.5~1.0mmの砂 粒を多く含む	
643	132	-	M 10区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕 (摩耗)	外面：明黄褐 10 Y R 7/6	0.1~0.2mmの砂 粒を多く含む	
644	132	-	N 10区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕 ナデ	外面：黄褐 10 Y R 5/6	0.2~0.5mmの砂 粒を多く含む	
645	132	65	O 13区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	外面：明赤褐 5 Y R 5/6	0.3~0.5mmの砂 粒を多く含む	
646	132	65	O 13区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/4	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
647	132	-	M 10区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕	外面：明褐 7.5 Y R 5/6	0.2~1.5mmの砂 粒を多く含む	
648	132	-	N 10区 第2層	土師器 土鍋 脚		外面：指頭痕 (摩耗)	外面：明黄褐 10 Y R 7/6	0.3~0.5mmの砂 粒を多く含む	
649	132	-	M 10区 第2層	土師器 摺鉢	口縁部 1/8	外面：横ナデ 指頭痕 (摩耗) 内面：横ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	0.1~3.0mmの砂 粒を多く含む	
650	132	-	M 10区 第2層	土師器 摺鉢	底部 1/8	外面：縦ナデ・仕上げナデ 指頭痕 内面：横ハケ目	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
651	133	-	N 11区 第3層	黒色土器 碗	底部 4/8	外面：縦・横ナデ 回転ヘラ切り 斜ハケ目 内面：ヘラ磨き	外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/4 内面：黒褐 2.5 Y 3/1	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
652	133	-	O 13区 第4層	黒色土器 碗	底部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	外面：灰白 2.5 Y 7/1 内面：黒褐 2.5 Y 3/1	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
653	133	-	O 13区 第2層	黒色土器 碗	底部 2/8	外面：摩耗 内面：摩耗	外面：にぶい黄褐 10 Y R 7/3 内面：黒 10 Y R 2/1	精緻	
654	133	-	N 12区 第1~3層	黒色土器 碗	底部 1/8	外面：横ナデ 内面：摩耗	外面：浅黄橙 10 Y R 8/3 内面：黒褐 2.5 Y 3/1	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
655	133	70	M 10区 第2層	瓦 器 碗	口縁部 2/8	外面：横ナデ 指頭痕 ヘラ磨き 内面：横・斜ナデ ヘラ磨き	内外面：灰 N 5/	精緻	
656	133	-	N 13区 包含層	瓦 器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 摩耗 内面：摩耗	内外面：黒 7.5 Y 2/1	0.5~2.0mmの砂 粒を含む	
657	133	-	Q 14区 第2層	瓦 器 碗	口縁部 1/8	外面：横・斜ナデ 指頭痕 内面：横ナデ 摩耗	内外面：オリープ黒 10 Y 3/1	精緻	
658	133	-	P 14区 第2層	瓦 器 碗	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 5 Y 7/1	精緻	
659	133	73	Q 14区 第2層	灰釉陶器 碗	底部 2/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 5 Y 7/1	精緻	

遺物 番号	博覧 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
660	133	73	Q 14 区 第 2 層	灰釉陶器 段皿	口縁部 2/8	外面：回転ナデ 摩耗 内面：回転ナデ 摩耗	内外面：灰白 N 8/ 釉：灰白 7.5 Y 8/2	精緻	
661	133	—	N 12 区 第 2-3 層	須恵器 蓋	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.3~0.5mm の砂 粒を含む	
662	133	—	N 12 区 第 1-3 層	須恵器 蓋	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.5~1.0mm の砂 粒を含む	
663	133	—	Q 14 区 第 2 層	須恵器 蓋	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	1.0~1.5mm の砂 粒を含む	
664	133	—	P 13 区 第 3 層	須恵器 蓋	口縁部破片	外面：回転ナデ 回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
665	133	—	O 11 区 第 3 層	須恵器 蓋	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
666	133	—	M 12 区 第 3 層	須恵器 蓋	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
667	133	—	O 10 区 第 3 層	須恵器 蓋	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
668	133	—	O 13 区 第 4 層	須恵器 蓋	体部破片	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
669	133	—	P 13 区 第 3 層	須恵器 蓋	つまみ部 8/8	外面：回転ナデ 横ヘラ削り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	1.0~1.5mm の砂 粒を含む	
670	133	—	O 10 区 第 4 層	須恵器 蓋	つまみ部 8/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ削り 内面：仕上げナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
671	133	—	N 12 区 第 3 層	須恵器 杯身	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
672	133	—	N 12 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
673	133	—	Q 13 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 3/8	外面：回転・横・斜ナデ 回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ	内外面：灰白 10 Y R 7/1	0.1~0.2mm の砂 粒を含む	
674	133	—	O 11 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.1~0.2mm の砂 粒を含む	
675	133	—	N 12 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 5 Y 7/1	2.0~5.0mm の砂 粒を含む	
676	133	—	P 14 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.2~0.5mm の砂 粒を含む	
677	133	—	O 11 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
678	133	—	N 12 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	1.0~1.5mm の砂 粒を含む	
679	133	—	P 13 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
680	133	—	O 13 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器種	残存率	形態・手法上の特徴	色調	胎土	備考
681	133	-	Q 14区 第2層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.1~0.3mmの砂 粒を含む	
682	133	-	P 13区 第3層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・横ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転・横ナデ	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
683	133	-	O 13区 第3層	須恵器 杯	底部破片	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
684	133	-	Q 14区 第2層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰 N 6/ 内面：にぶい橙 5 Y R 6/3	精緻	
685	133	-	P 13区 第3層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
686	133	-	N 12区 第2・3層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
687	133	-	Q 14区 第2層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 10 Y 6/1	精緻	
688	133	-	P 13区 第1・2層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
689	133	-	N 12区 第2・3層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 7/	0.1~0.5mmの砂 粒を含む	
690	133	-	Q 14区 第2層	須恵器 杯	底部破片	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
691	133	-	O 10区 第3層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/1	精緻	
692	133	-	N 11区 第3層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ（摩耗）	内外面：灰白 N 7/	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
693	134	-	N 12区 第1・2層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
694	134	-	N 12区 第3層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 摩耗 内面：回転・仕上げナデ	内外面：灰白 7.5 Y 7/1	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
695	134	-	N 12区 第3層	須恵器 杯	底部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
696	134	-	N 12区 第3層	須恵器 杯	底部破片	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
697	134	-	M 12区 第3層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
698	134	-	Q 14区 第2層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
699	134	-	P 13区 第2層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 4/	0.3~0.5mmの砂 粒を多く含む	
700	134	-	Q 14区 第2層	須恵器 杯	底部 3/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
701	134	-	Q 13区 第2層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	内外面：灰白 N 7/	精緻	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
702	134	-	Q 14 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：摩耗 内面：摩耗	外面：灰 N 5/ 内面：灰白 N 7/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
703	134	-	Q 14 区 第 2 層	須恵器 杯	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
704	134	-	P 13 区 第 1・2 層	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 4/	精緻	
705	134	-	Q 14 区 第 2 層	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
706	134	-	P 13 区 第 3 層	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
707	134	-	Q 13 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 5 Y 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
708	134	-	N 12 区 第 2・3 層	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰 N 4/ 内面：灰白 N 7/	精緻	
709	134	-	N 12 区 第 1・2 層	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.3~0.5mmの砂 粒を含む	
710	134	-	Q 14 区 第 2 層	須恵器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
711	134	-	P 13 区 第 1・2 層	須恵器 杯	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
712	134	-	O 13 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転・仕上げナデ	内外面：灰 5 Y 5/	精緻	
713	134	-	O 13 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り（摩耗） 内面：回転ナデ	内外面：灰白 5 Y 7/1	精緻	
714	134	-	O 10 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：横ナデ 回転ヘラ切り 内面：横ナデ	内外面：灰 7.5 Y 6/1	0.3~0.5mmの砂 粒を含む	
715	134	-	Q 14 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	精緻	簀子状原体 圧痕
716	134	-	P 14 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/4 内面：灰白 5 Y 7/1	精緻	
717	134	-	Q 14 区 第 2 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 8/	精緻	
718	134	-	O 10 区 第 3 層	須恵器 杯	底部破片	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
719	134	-	N 12 区 第 2・3 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 5 Y 7/1	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
720	134	-	N 12 区 第 3 層	須恵器 杯	底部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
721	134	-	M 12 区 第 1 層	須恵器 杯	底部 2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 7/1	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
722	134	75⑦	P 13 区 第 1・2 層	須恵器 皿	底部 3/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
723	134	-	Q 14 区 第 1・2 層	須恵器 皿	底部 2/8	外面：摩耗 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	

遺物 番号	押図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
724	134	-	O 10区 第3層	須恵器 皿	底部2/8	外面：回転ヘラ切り 回転・仕上げナデ 内面：横・斜ナデ	内外面：灰白 N 8/	精緻	
725	134	-	O 10区 第3層	須恵器 皿	底部2/8	外面：回転ヘラ切り 回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/1	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
726	134	-	Q 14区 第2層	須恵器 皿	底部2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 5 Y 6/1	精緻	
727	134	-	O 11区 第3層	須恵器 皿	底部破片	外面：回転ヘラ切り 横・斜ナデ 内面：横・斜ナデ	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
728	134	-	O 11区 第3層	須恵器 皿	口縁~ 底部破片	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り (摩耗) 内面：回転ナデ 摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
729	134	-	O 13区 第3層	須恵器 皿	底部3/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
730	134	-	P 13区 第1・2層	須恵器 皿	口縁部破片	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	
731	134	-	Q 14区 第2層	須恵器 皿	底部1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 7/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
732	134	-	Q 14区 第2層	須恵器 皿	口縁部1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
733	135	-	N 13区 包含層	須恵器 壺か	口縁部3/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：灰 N 4/ 内面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
734	135	-	M 12区 第3層	須恵器 壺	体部2/8	外面：回転・縦ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
735	135	-	P 13区 第3層	須恵器 壺	体部1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.5~1.0mmの砂 粒を含む	
736	135	-	N 10区 第2層	須恵器 壺	口縁部1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	釉：暗オリーブ 7.5 Y 4/3 内面：灰 N 6/	0.1~0.3mmの砂 粒を含む	
737	135	-	O 13区 第4層	須恵器 壺	底部2/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
738	135	-	O 12区 第2層	須恵器 壺	底部2/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ切り 摩耗 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 7/	0.3~0.5mmの砂 粒を含む	
739	135	-	P 13区 第3層	須恵器 壺	底部1/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ削り 格子タタキ目 内面：横板ナデ	内外面：灰 N 8/	0.2~0.5mmの砂 粒を含む	
740	135	-	P 13区 第3層	須恵器 壺	底部破片	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	外面：暗灰 N 3/ 内面：灰 N 6/	精緻	
741	135	-	Q 13区 第2層	須恵器 壺	体部破片	外面：回転ナデ 格子タタキ目 内面：回転ナデ 青海波文	内外面：灰 N 6/	精緻	
742	135	-	Q 14区 第2層	須恵器 壺	体部1/8	外面：右上りタタキ目 カキ目 内面：青海波文 回転ナデ	内外面：灰 N 6/	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	ヘラ状原体 圧痕
743	135	-	O 12区 包含層	須恵器(東部産 系) 控鉢	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横・斜ナデ	内外面：オリーブ灰 2.5 GY 5/1	0.1~0.3mmの砂 粒を含む	
744	135	-	Q 14区 第2層	須恵器 鉢	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 6/	精緻	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器 種	残存率	形態・手法上の特徴	色 調	胎 土	備 考
745	135	—	P 14区 第2層	須臾器 器台	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	櫛描き波状 文
746	136	—	O 13区 第2層	陶 器(備前 焼) 壺	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：褐灰 5 Y R 4/1	0.3~1.0mmの砂 粒を多く含む	
747	136	—	O 11区 包含層	陶 器 壺	体部破片	外面：回転ナデ 指頭痕 内面：回転ナデ	外面：黄灰 2.5 Y 4/1 内面：にぶい褐 7.5 Y R 5/4	1.0~1.5mmの砂 粒を含む	
748	136	—	N 11区 第1層	青 磁 碗	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	釉：灰オリーブ 7.5 Y 6/1 内面：灰白 5 Y 7/1	精緻	
749	136	—	P 14区 第2層	青 磁 碗	体部 2/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	内面：灰白 N 7/ 釉：灰オリーブ 7.5 Y 5/2	精緻	
750	136	76	O 10区 第3層	青 磁 碗	体部破片	外面：横ヘラ削り 内面：回転ナデ	外面：灰オリーブ 7.5 Y 5/2 内面：灰白 N 7/	精緻	
751	136	—	P 13区 第3層	青 磁 碗	底部 4/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	外面：灰白 10 Y 8/1 釉：灰オリーブ 7.5 Y 6/2	精緻	
752	136	—	M 10区 第2層	飯箱壺形土 製品		外面：指頭痕 内面：指頭痕	外面：明赤灰 2.5 Y R 7/2 内面：浅黄橙 10 Y R 8/3	1.0~1.5mmの砂 粒を多く含む	
753	136	75③	Q 14区 第1・2層	漁網鉢		外面：ナデ	内外面：にぶい黄 2.5 Y 6/3	1.0~2.0mmの砂 粒を多く含む	
754	136	—	N 11区 第3層	移動式甕		外面：横ナデ 縦・斜ハケ目 内面：横ナデ	外面：にぶい黄橙 10 Y R 7/4 内面：橙 2.5 Y R 6/8	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
760	137	—	I-J6-8区 第3層	土師器 碗	口縁部 1/8	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：灰白 2.5 Y 8/2	精緻	
761	137	—	I-J6-8区 第3層	土師器 碗	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
762	137	—	I-J6-8区 第3層	土師器 碗	底部 2/8	外面：回転ヘラ切り 仕上げ・横ナデ 内面：仕上げナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
763	137	—	I-J6-8区 第3層	土師器 碗	底部 8/8	外面：横・仕上げナデ 内面：摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
764	137	—	I-J6-8区 第3層	土師器 碗	底部 6/8	外面：横・仕上げナデ 回転ヘラ切り 内面：摩耗	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
765	137	—	I 8区 第2層	土師器 碗	底部 2/8	外面：横ナデ 内面：摩耗	外面：黄褐 10 Y R 5/6 内面：黄褐 2.5 Y 5/4	精緻	
766	137	—	I 8区 包含層	土師器 皿	口縁~ 底部破片	外面：横・仕上げナデ 内面：横ナデ	内外面：橙 5 Y R 7/6	0.1~0.2mmの砂 粒を含む	
767	137	—	I-J6-8区 第3層	土師器 皿	口縁部 1/8 底部 8/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：淡黄 2.5 Y 8/3	0.7~1.0mmの砂 粒を多く含む	
768	137	—	I-J6-8区 第2層	土師器 皿	口縁~底部 2/8	外面：回転ヘラ切り 仕上げ・斜・回転ナデ 内面：仕上げ・回転ナデ	外面：浅黄橙 7.5 Y R 8/6 内面：浅黄橙 10 Y R 8/3	1.0~2.0mmの砂 粒を含む	
769	137	—	I-J6-8区 第1層	土師器 皿	底部 1/8	外面：回転ヘラ切り 仕上げ・回転ナデ 内面：仕上げ・回転ナデ	内外面：にぶい黄橙 10 Y R 6/3	0.1~0.3mmの砂 粒を多く含む	
770	137	—	I-J6-8区 第2層	土師器 皿	底部 1/8	外面：回転ナデ 回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/3	精緻	
771	137	—	H-I 8区 第3層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ 摩耗	内外面：明黄褐 10 Y R 6/6	1.0~3.0mmの砂 粒を多く含む	

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	器種	残存率	形態・手法上の特徴	色調	胎土	備考
772	137	-	I 8 区 第2層	土師器 土鍋	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ナデ	内外面：浅黄褐 7.5 Y R 8/4	0.5~1.5mmの砂粒を多く含む	
773	137	-	I-J6-8区 第1層	土師器 土鍋	体部 1/8	外面：摩耗 格子タタキ目 内面：摩耗	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	1.0~2.0mmの砂粒を多く含む	
774	137	-	I-J6-8区 第2層	土師器 土鍋	口縁部 1/8	外面：指頭痕 内面：剥落	内外面：明赤褐 5 Y R 5/6	1.0~1.3mmの砂粒を多く含む	
775	137	65	I-J6-8区 包含層	土師器 土鍋 脚		外面：ナデ 内面：指頭痕 横・斜ハケ目	内外面：明褐 7.5 Y R 5/6	1.0~1.5mmの砂粒を多く含む	
776	137	-	I-J6-8区 第1層	土師器 土鍋 脚		外面：ナデ	外面：橙 2.5 Y R 6/8	1.0~1.5mmの砂粒を多く含む	
777	137	-	I 8 区 包含層	土師器 土釜 脚		外面：指頭痕	外面：橙 5 Y R 6/6	0.5~1.5mmの砂粒を多く含む	
778	137	-	I-J6-7区 包含層	黒色土器 碗	口縁部破片	外面：横ナデ 内面：横ヘラ磨き	外面：灰白 2.5 Y 8/1 内面：黒褐 2.5 Y 3/1	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む	
779	137	-	I-J6-8区 第1層	瓦器 碗	体・底部 2/8	外面：指頭痕 回転・仕上げ ナデ 回転ヘラ切り 内面：斜ヘラ磨き	内外面：灰 N 5/	精緻	
780	137	-	I-J6-8区 第3層	瓦器 碗	体・底部 1/8	外面：指頭痕 回転ナデ 摩耗 内面：摩耗	内外面：暗灰 N 3/	精緻	
781	137	-	I 8 区 第4層	須惠器 杯身	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰白 N 7/	0.5~1.0mmの砂粒を含む	
782	137	-	I-J6-8区 第2層	須惠器 杯	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内外面：灰 N 5/	精緻	
783	137	-	I 8 区 包含層	須惠器 杯	底部破片	外面：回転ヘラ切り 仕上げ・回転ナデ 内面：仕上げ・回転ナデ	内外面：灰白 N 7/	0.2~0.3mmの砂粒を含む	
784	137	-	H-I 8 区 包含層	須惠器 壺	体部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 指頭痕	内外面：灰 N 5/	精緻	
785	137	-	H-I 8 区 第3層	須惠器 甕	体部破片	外面：格子タタキ目 横ナデ 内面：板状原体圧痕 指頭痕	外面：灰 N 6/ 内面：灰白 5 Y 7/1	精緻	
786	137	-	H-I 8 区 第3層	須惠器(龟山 焼) 甕	体部破片	外面：格子タタキ目 内面：横・縦ナデ	外面：黒 N 2/ 内面：灰 N 5/	0.1~0.2mmの砂粒を多く含む	
787	137	-	I-J6-7区 包含層	須惠器 控鉢	口縁部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転・回転板ナデ	内外面：灰白 N 8/	0.2~0.5mmの砂粒を多く含む	
788	137	-	I-J6-8区 第3層	白磁 碗	底部 3/8	外面：回転・仕上げナデ 回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	内外面：灰白 10 Y R 8/2	精緻	
790	-	66	SD19	土師器 碗(器台)	口縁部 1/8	外面：回転・仕上げナデ 内面：回転ナデ	内外面：浅黄橙 10 Y R 8/4	精緻	

第16表 B地区石製品観察表

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重量 (g)	備考
70	—	335	S R 08	打製石斧	17.7	7.5	2.0	サヌカイト	289.8	
70	—	336	S R 08	打製石斧	10.3	7.3	1.9	サヌカイト	140.1	
71	—	337	S R 08	打製石斧	11.9	4.4	1.7	サヌカイト	92.8	
71	—	338	S R 08	打製石鏃	1.7	1.1	0.3	サヌカイト	1.1	
71	79①	339	S R 08	磨石	9.2	7.1	6.2	花崗岩	394.9	
109	78②	404	S D 15	打製石鏃	17.6	8.7	2.3	粘板岩	416.1	
109	—	405	S D 16	打製石庖丁 (打製石斧)	5.5	7.6	1.6	サヌカイト	82.5	
112	—	414	S D 19	打製刃器	4.8	4.4	0.9	サヌカイト	23.0	
117	79②	429	S D 32	砥石	10.7	8.7	3.3	サヌカイト	436.0	
124	—	484	S X 12	打製石鏃	2.3	1.2	0.3	サヌカイト	0.7	
128	77	542	O 13区 第3層	打製石庖丁	12.9	5.2	1.3	サヌカイト	73.7	
128	—	543	O 13区 第3層	打製石庖丁	5.6	8.2	1.6	サヌカイト	95.8	
128	—	544	N 10区 包含層	打製石庖丁	4.6	3.1	0.7	サヌカイト	13.3	
128	77	545	Q 13区 第3層	打製刃器	10.3	5.7	0.9	サヌカイト	55.7	
128	—	546	Q 13区 第3層	打製刃器	10.3	4.8	0.9	サヌカイト	45.4	
128	—	547	O 12区 第3層	打製刃器	5.1	8.3	0.8	サヌカイト	47.4	
129	—	548	O 12区 包含層	打製刃器	5.3	3.7	0.7	サヌカイト	22.9	
129	—	549	N 9区 第2層	打製石斧	6.7	5.7	1.3	サヌカイト	48.9	
129	78①	550	N 13区 包含層	打製石鏃	6.9	2.5	0.6	サヌカイト	6.4	

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土遺構	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材 質	重量 (g)	備 考
129	—	551	P 14 区 第 3 層	打製石鏃	1.8	1.7	0.4	サヌカイト	1.7	
129	78①	552	Q 14 区 第 2 層	打製石鏃	3.6	2.2	0.4	サヌカイト	2.8	
129	78①	553	M 10 区 第 2 層	打製石鏃	2.6	1.6	0.2	サヌカイト	0.8	
129	78①	554	Q 14 区 第 2 層	打製石鏃	3.1	2.0	0.3	サヌカイト	1.9	
129	—	555	M 9 区 第 3 層	打製石鏃	3.0	1.5	0.4	サヌカイト	1.2	
129	—	556	N 11 区 第 4 層	打製石鏃	2.7	1.2	0.3	サヌカイト	0.6	
129	—	557	Q 13 区 第 3 層	打製石鏃	2.0	1.5	0.3	サヌカイト	0.5	
129	—	558	N 10 区 包含層	打製石鏃	2.0	1.7	0.4	サヌカイト	0.6	
129	78①	559	O 13 区 第 4 層	打製石鏃	3.1	1.6	0.4	サヌカイト	1.5	
129	78①	560	P 13 区 第 3 層	打製石鏃	1.9	1.6	0.3	サヌカイト	0.7	
129	—	561	Q 13 区 第 3 層	打製石鏃	1.7	1.2	0.3	サヌカイト	0.6	
129	—	562	Q 14 区 第 2 層	打製石鏃	2.1	1.4	0.4	サヌカイト	0.9	
129	—	563	M 9 区 包含層	打製石鏃	2.3	1.6	0.3	サヌカイト	1.0	
129	78①	564	O 13 区 第 2 層	打製石鏃	3.0	1.9	0.4	サヌカイト	1.7	
129	—	565	P 13 区 第 2 層	砥 石	6.4	5.3	1.8	粘 板 岩	104.2	
129	—	566	N 12 区 第 3 層	磨製石庖丁	5.0	2.6	0.5	緑色片岩	8.0	
137	—	789	I・J 6～8区 第 2 層	打製石鏃	1.3	1.0	0.2	サヌカイト	0.3	
—	77	791	溝状遺構	打製石庖丁	5.4	11.8	1.4	サヌカイト	101.1	
—	78①	792	溝状遺構	打製石鏃	2.4	2.0	0.5	サヌカイト	0.9	

第 17 表 金属製品観察表

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重量 (g)	備考
81	—	344	S B 06	釘	3.6	0.7	0.5	鉄	—	
81	—	345	S B 06	不明	6.3	3.8	0.8	鉄	—	
85	80 ①	358	S B 13	刀子	11.5	2.4	0.6	鉄	—	
96	—	371	S K 37	釘	2.4	0.6	0.4	鉄	—	
97	80 ②	373	S K 35	鏡	—	10.5	0.2	銅	—	板状木製品に癒着
125	—	489	S P 17	釘	4.0	0.4	0.3	鉄	—	
136	—	755	Q 14 区 第 1・2 層	釘	3.5	0.7	0.4	鉄	—	
136	—	756	O 11 区 第 3 層	不明	6.4	2.2	1.7	鉄	—	
136	—	757	Q 14 区 第 1・2 層	不明	1.9	4.1	0.5	鉄	—	
136	—	758	Q 13 区 第 3 層	不明	2.2	1.1	0.4	鉄	—	
136	—	759	N 9 区 第 2 層	不明	4.7	2.7	0.1	銅	—	

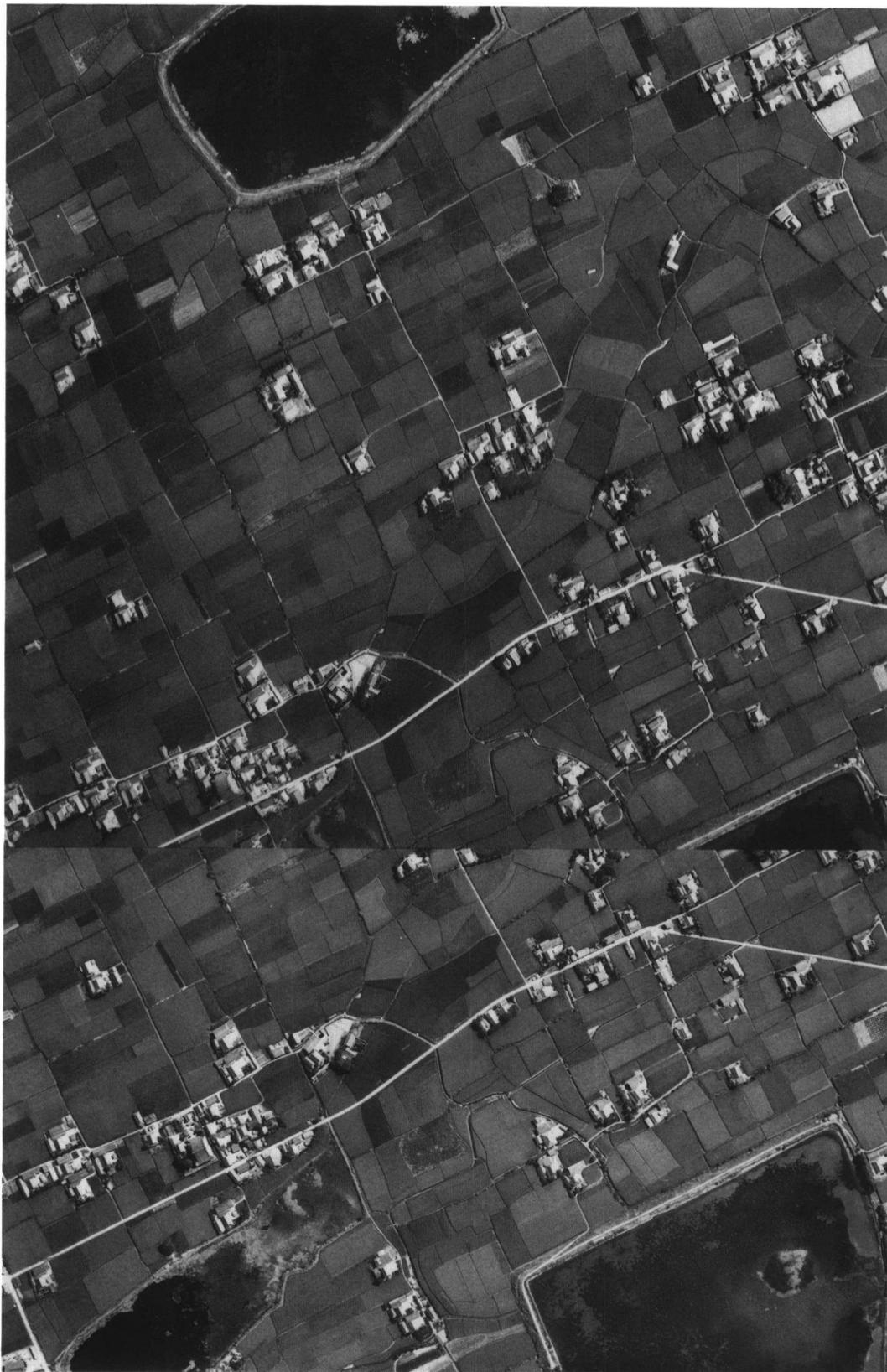
第 18 表 木製品観察表

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	出土 遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
95	80 ②	374	S K 35	板状木製品	16.3	11.2	0.6	銅鏡に癒着
105 106	81	400	S E 05	曲物桶	器高 31.0	口径 49.6	—	底板が欠損 井筒に転用
107	81	401	S E 05	曲物桶	器高 26.2	口径 48.8	—	底板が欠損 井筒に転用

圖 版



龍川四条遺跡周辺空中写真(1) (建設省国土地理院空中写真 S I - 62 - 4)
(C11B - 11・12を使用, 左が北, 1962年撮影)



龍川四条遺跡周辺空中写真(2) (建設省国土地理院空中写真 S I - 62 - 4)
(C11B - 12・13を使用, 左が北, 1962年撮影)



① A地区調査前風景（西方から）



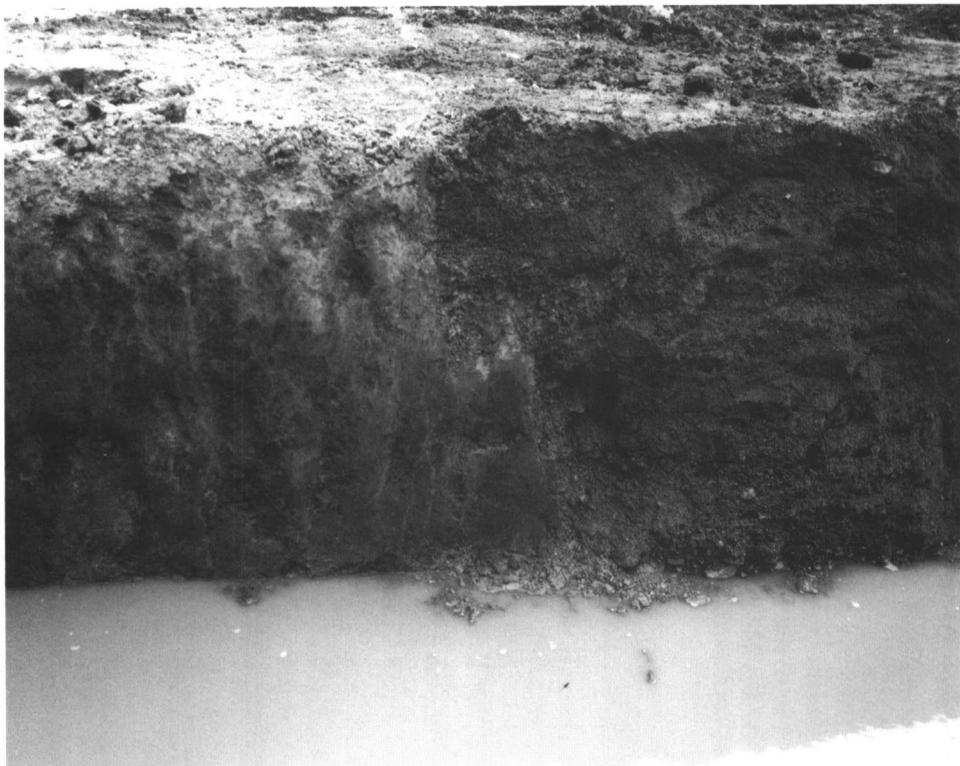
② A地区遠景(1)（南方から）



① A地区遠景(2) (北方から)



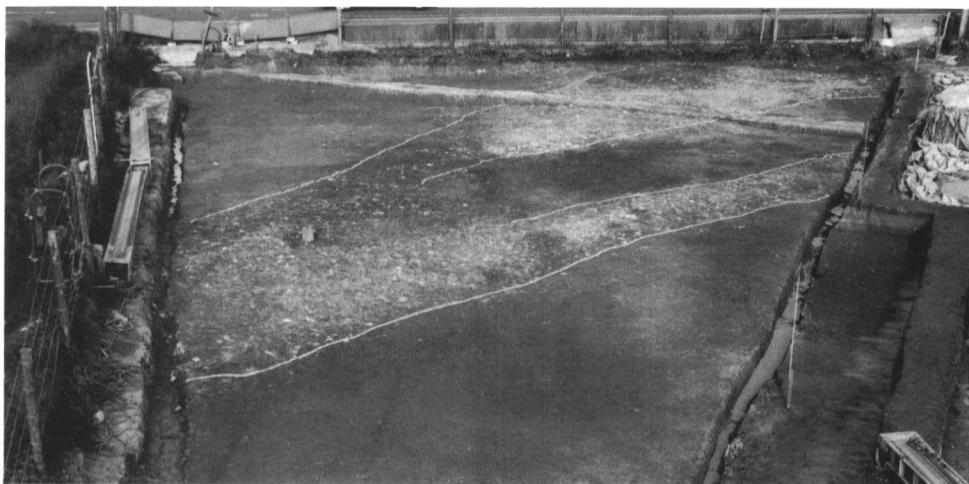
② A地区遠景(3) (西方から)



① 開析谷西肩断面



② 開析谷西肩検出状況（東南から）



① 開析谷埋積土上面



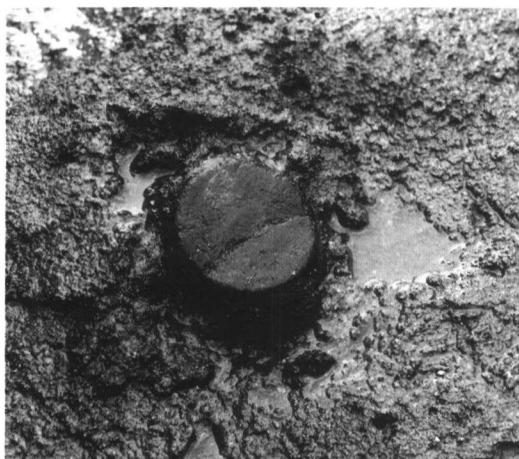
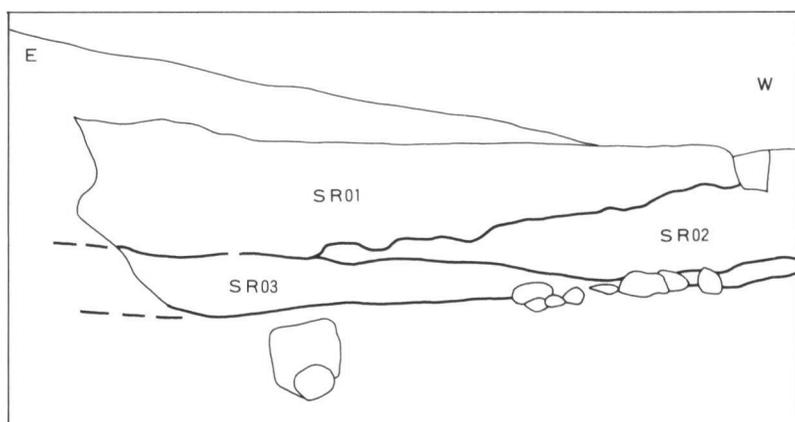
② 開析谷断面（上部）



③ Gライン土層断面（その1）



① Gライン土層断面
(その2)



② S R03遺物出土状況 (その1)



③ S R03遺物出土状況 (その2)



① SR02掘削状況（北西から）



② SR02遺物出土状況



① SR01掘削状況（北西から）



② SR01遺物出土状況（その1）



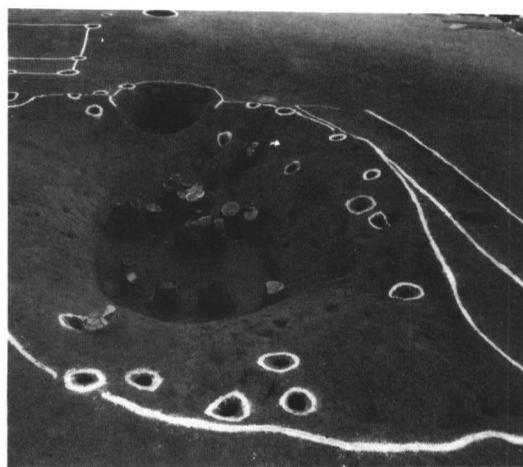
③ SR01遺物出土状況（その2）



① SR01遺物出土状況（その3）



② SR01遺物出土状況（その4）



① 下川津遺跡第4低地帯流路6遺物出土状況

② 延命遺跡八反地地区SK-18遺物出土状況



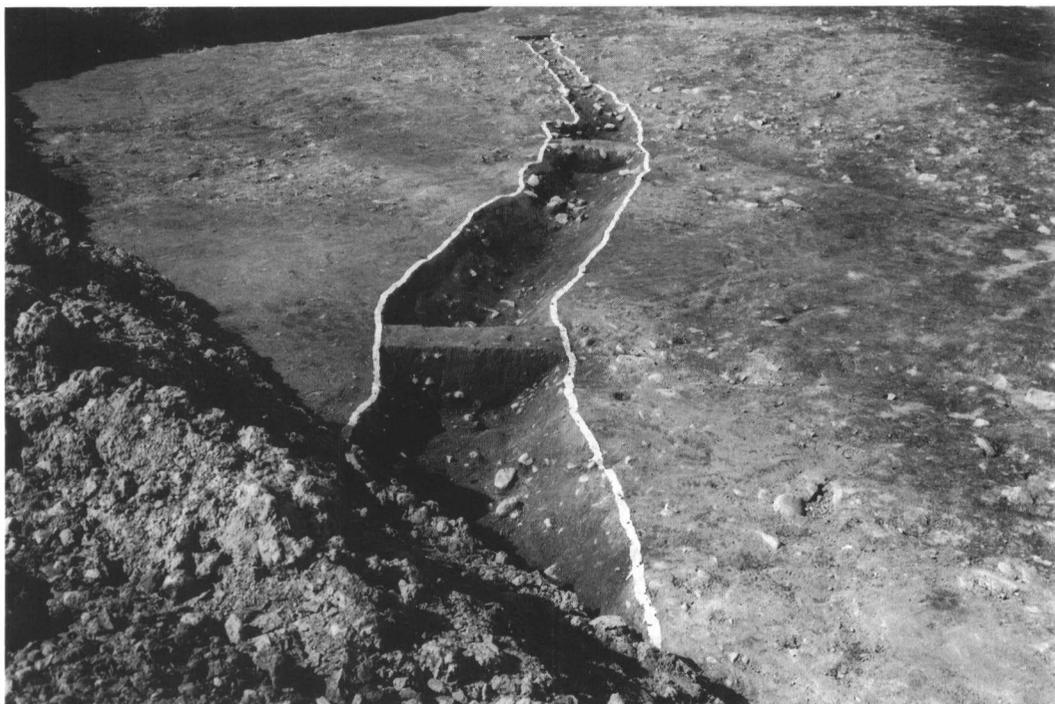
③ SR04掘削状況（東南から）



④ SD01掘削状況（南から）



⑤ SD01断面



① S D02掘削状況（東から）



② S K01掘削状況



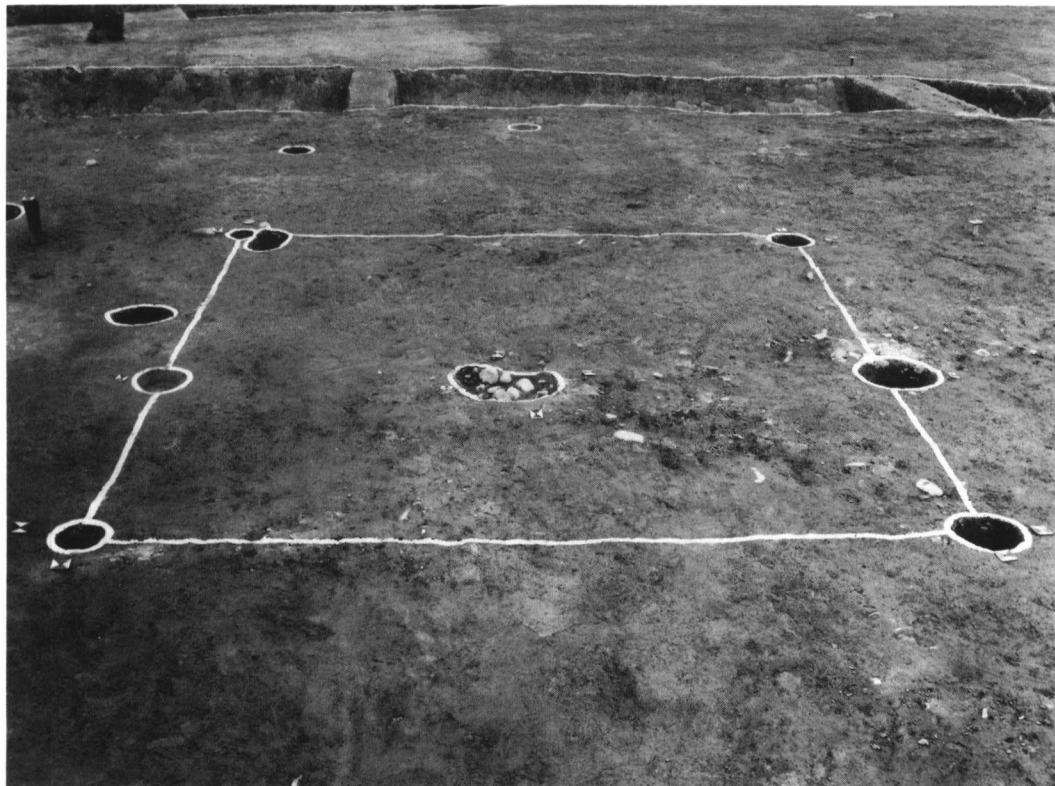
① 東部地区土層断面



② 作業風景



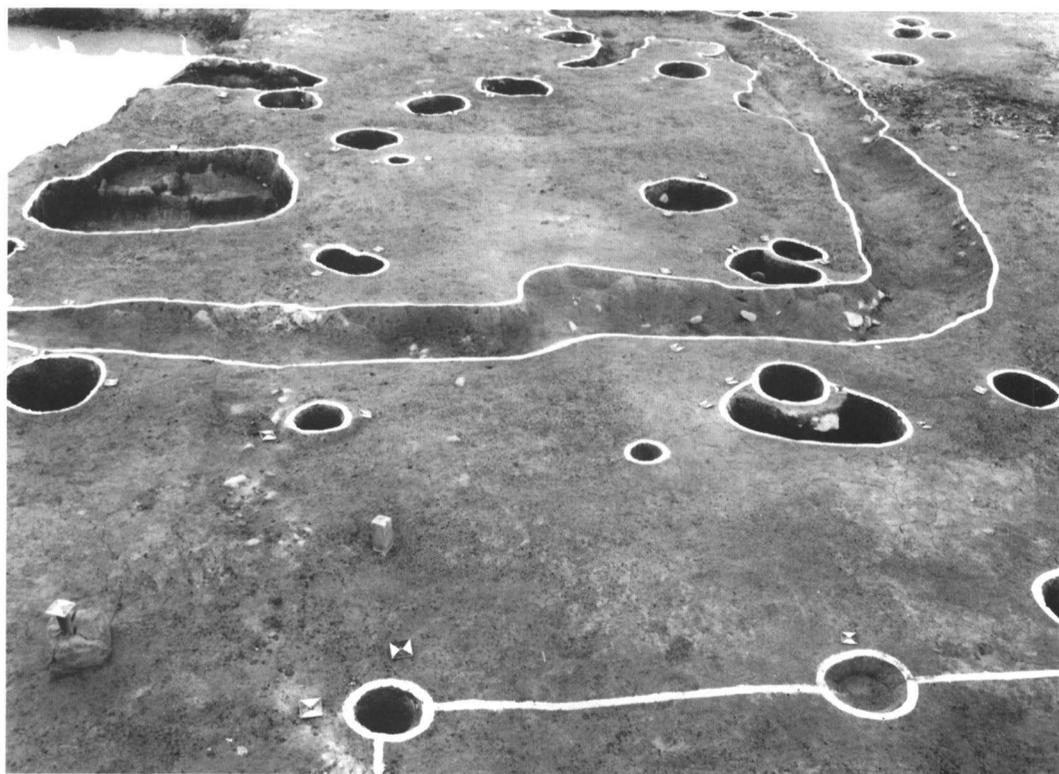
③ SB01掘削状況（東から）



① S B02掘削状況（西から）



② S B02遺物出土状況



① 東部地区ピット集中部掘削状況



② SP33掘削状況



① S K 02掘削状況



② S D 07・08掘削状況



① SD07掘削状況



② SD07断面



③ SD07遺物出土状況



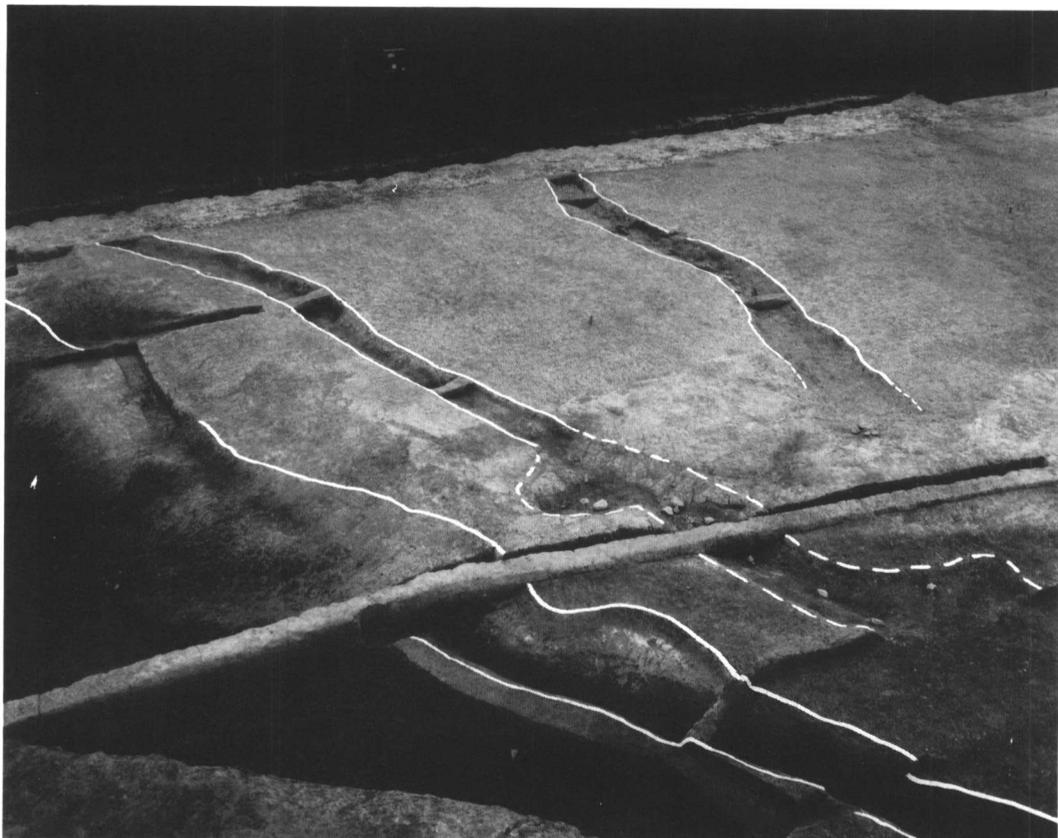
① S D 08掘削状況



② S D 08断面



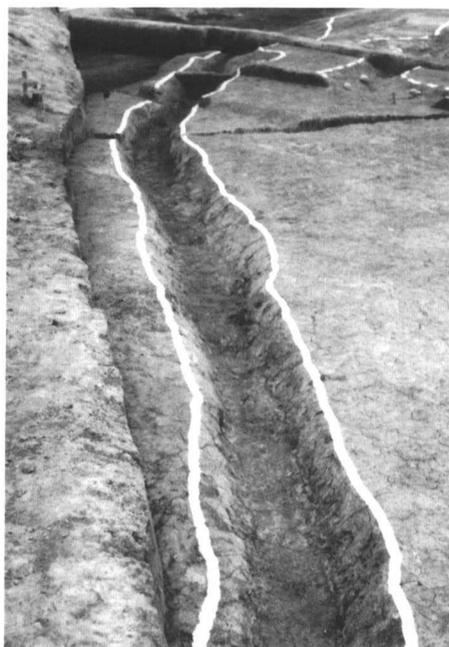
③ S D 08遺物出土状況



① S D03・04・05掘削状況



② S D04断面・遺物出土状況



③ S D05掘削状況



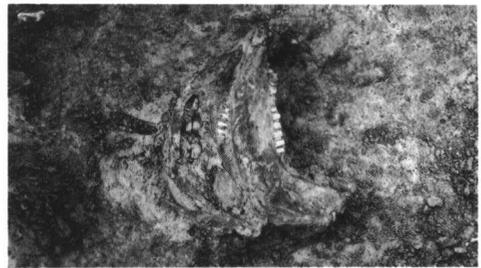
① 土取り跡・S D06掘削状況



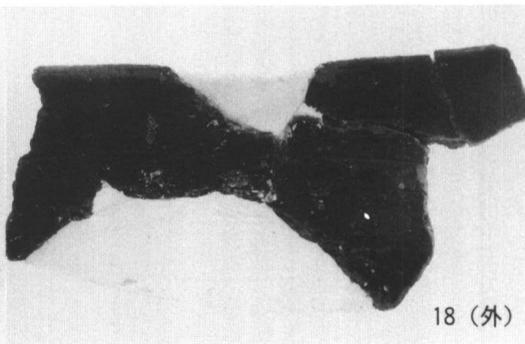
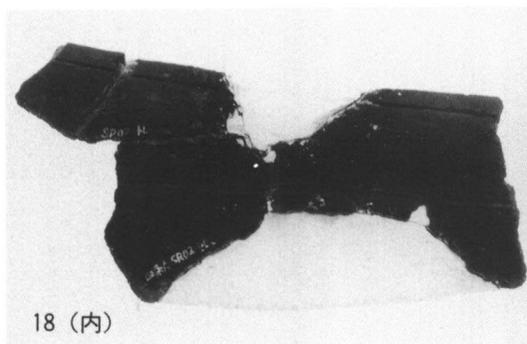
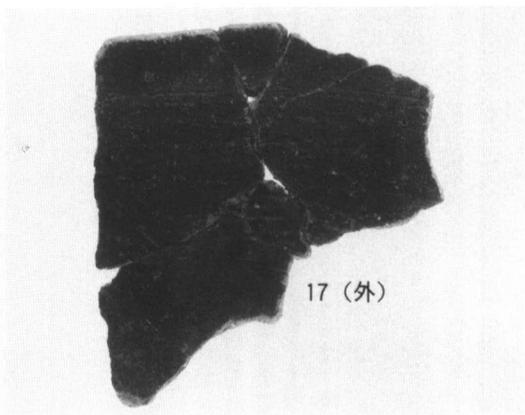
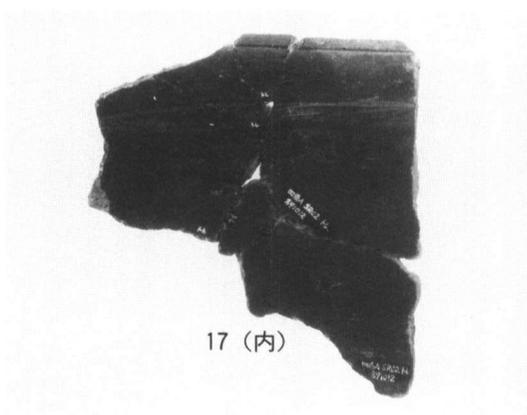
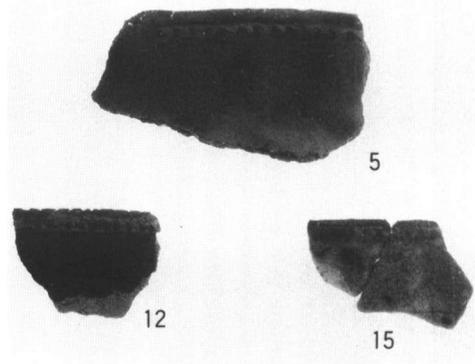
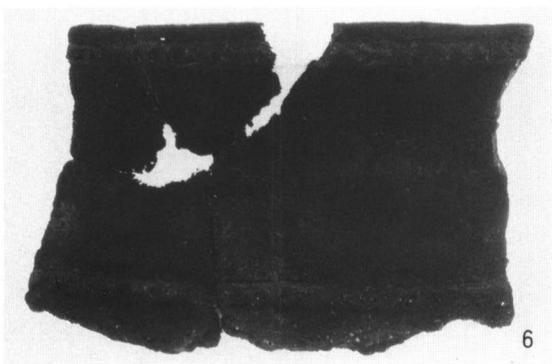
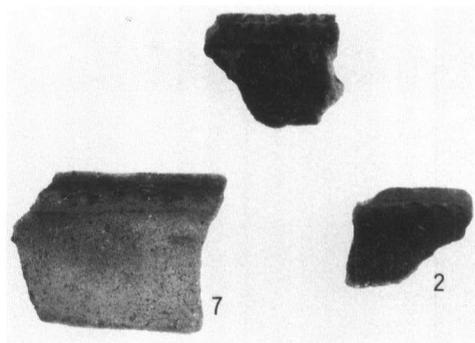
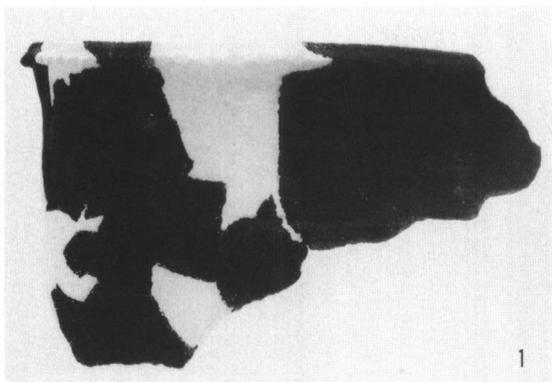
② S X01掘削状況



③ S D06断面



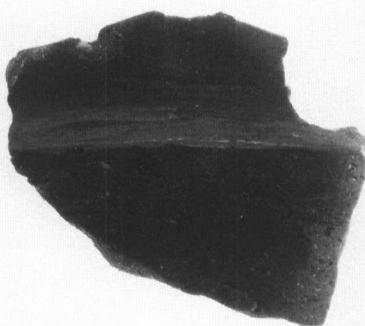
④ 獣骨出土状況



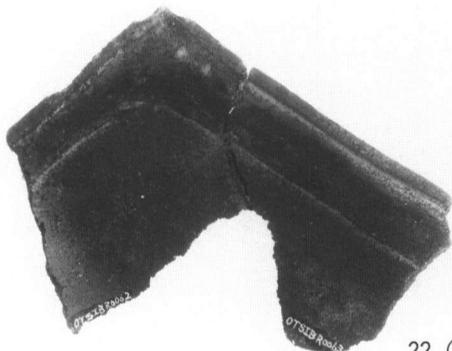
S R03出土遺物 (その1)



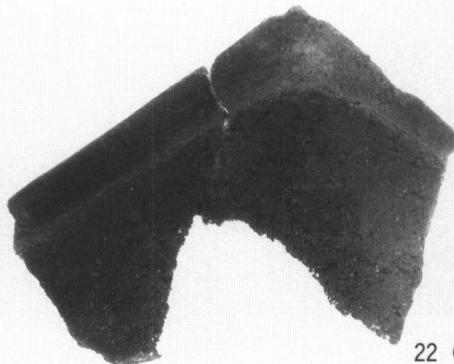
21 (内)



21 (外)



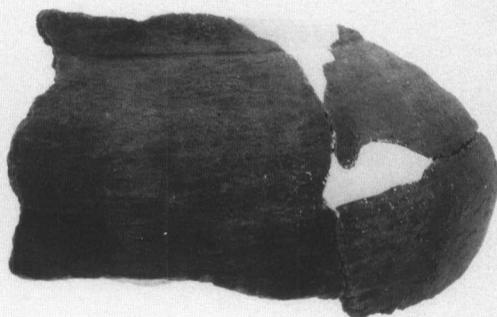
22 (内)



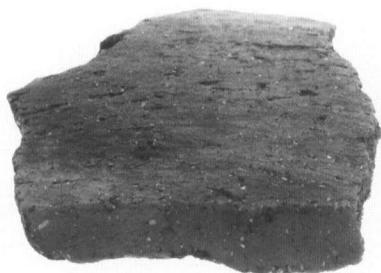
22 (外)



26 (内)



26 (外)



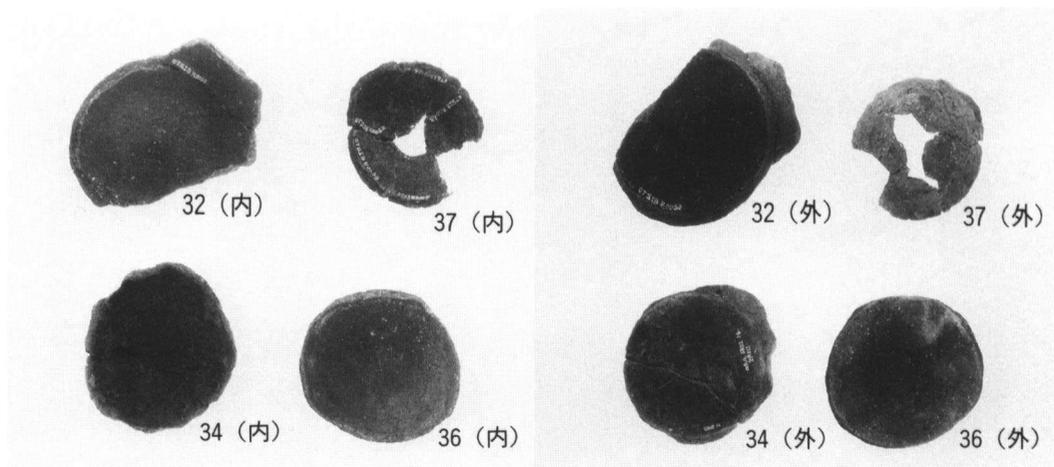
29



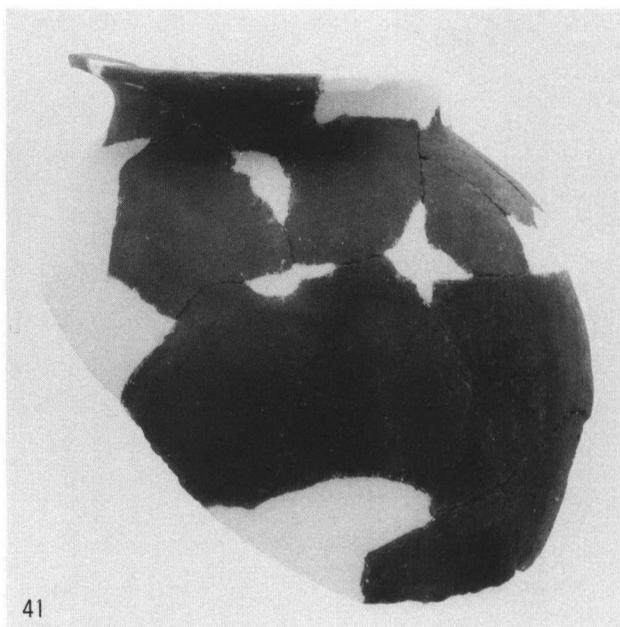
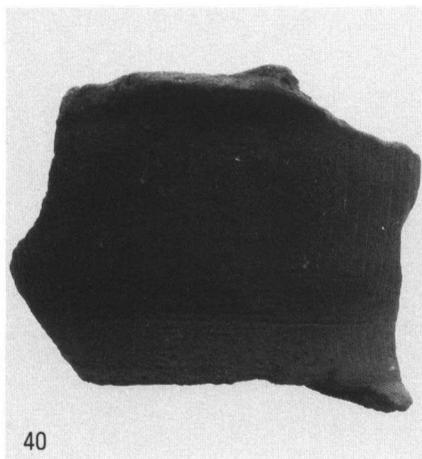
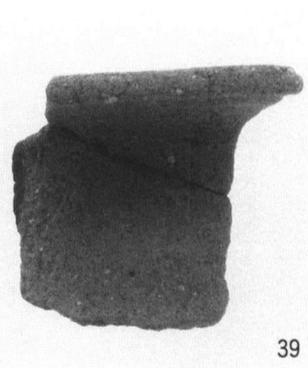
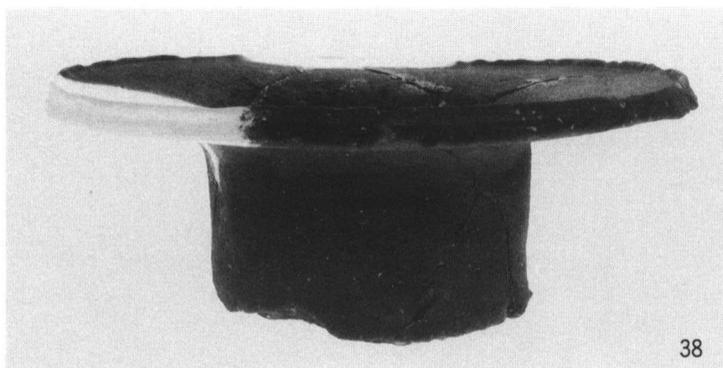
30



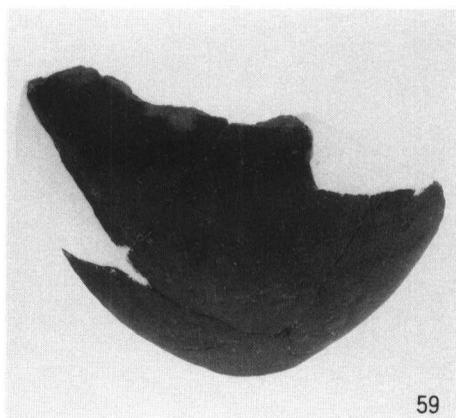
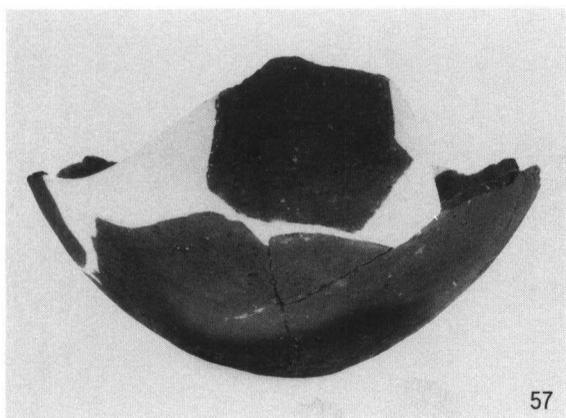
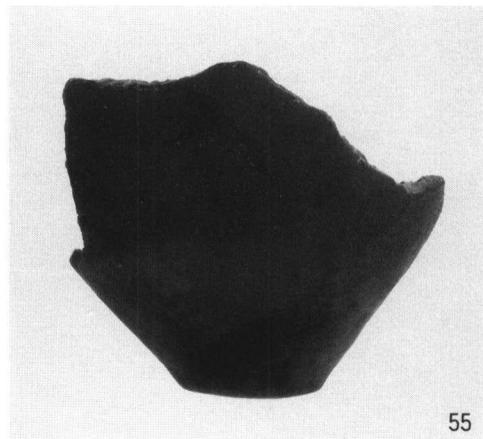
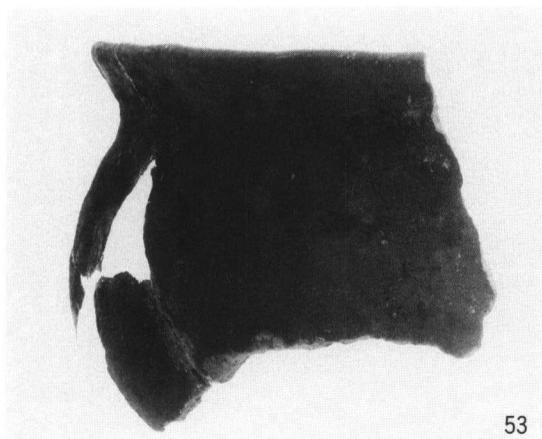
31

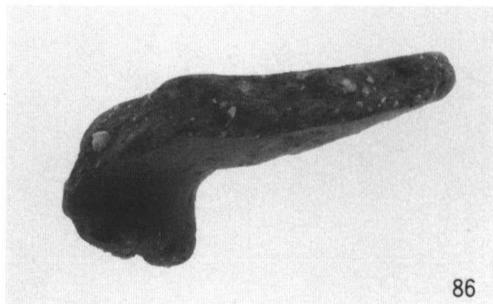
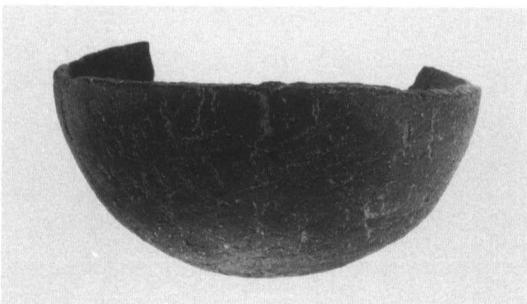
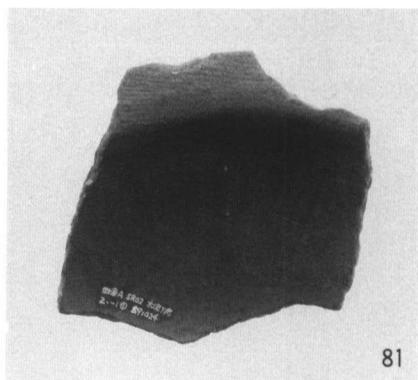
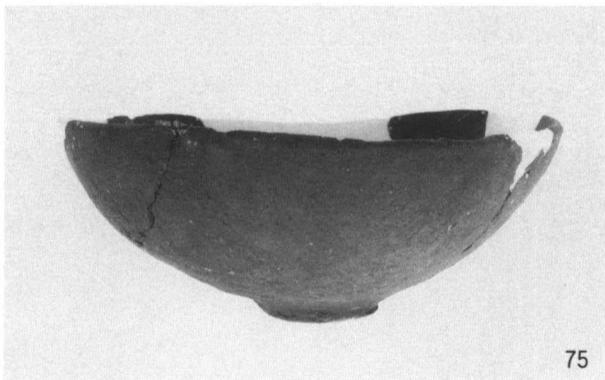
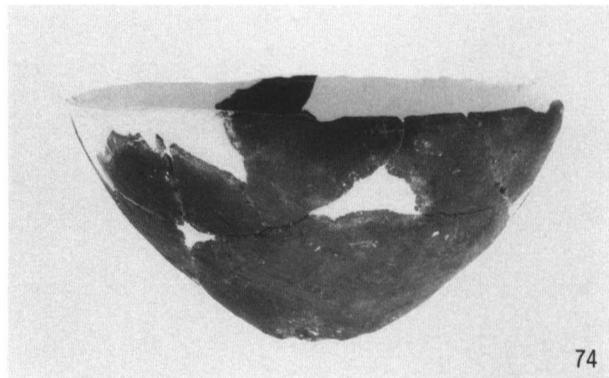
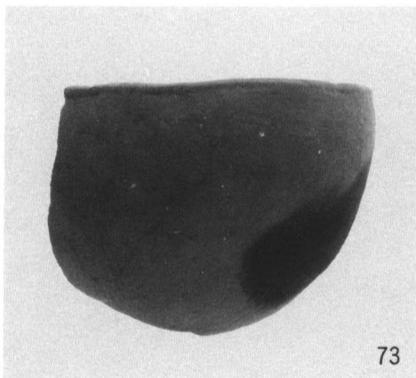
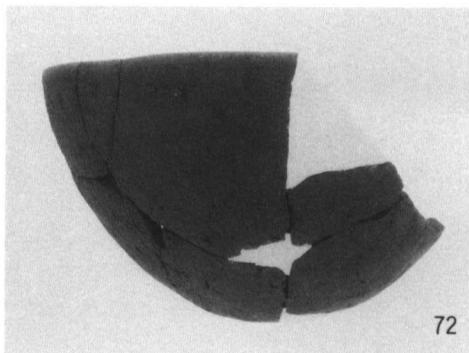
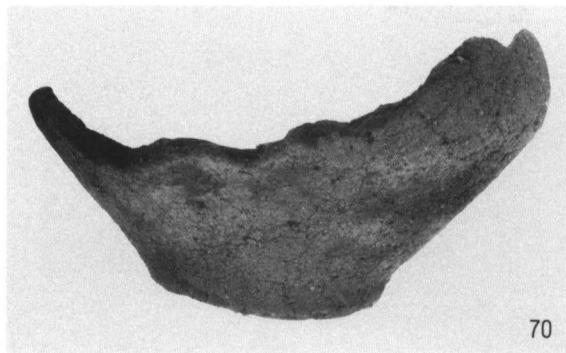


① S R03出土遺物 (その3)

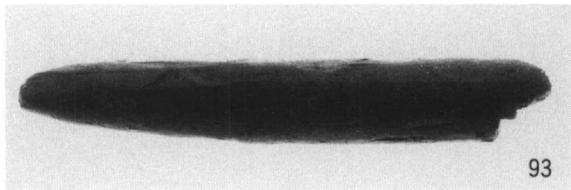
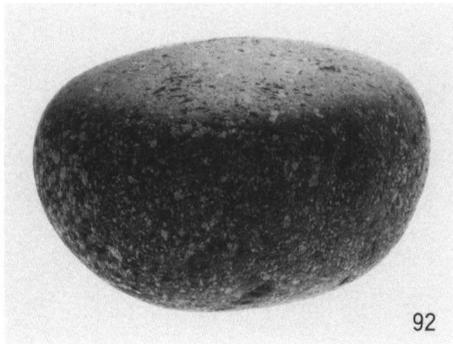
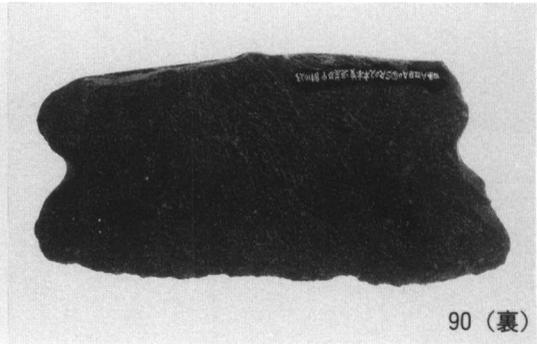
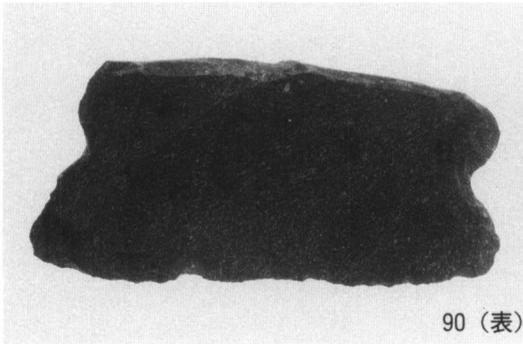
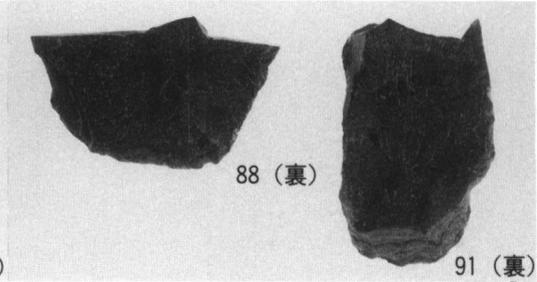
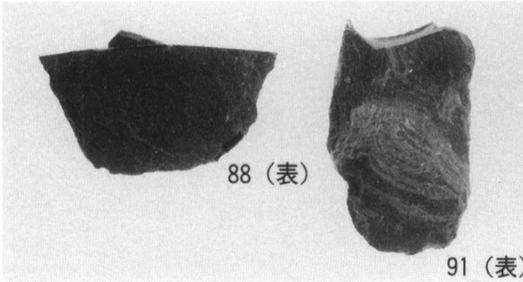
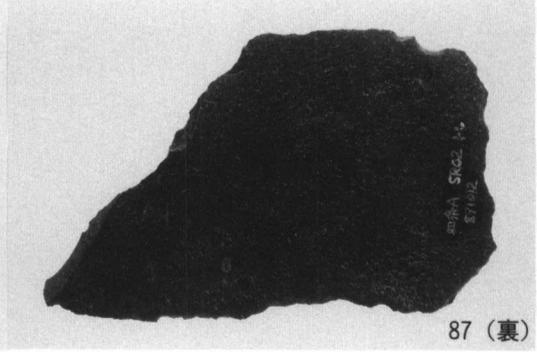
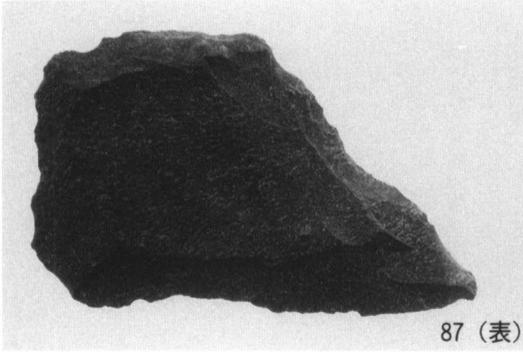


② S R02出土遺物 (その1)

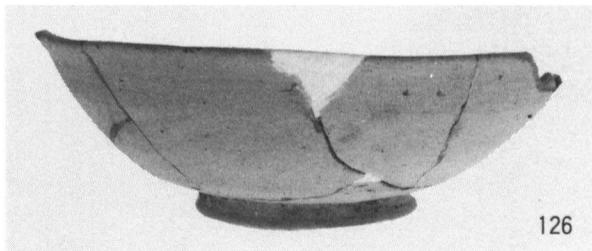
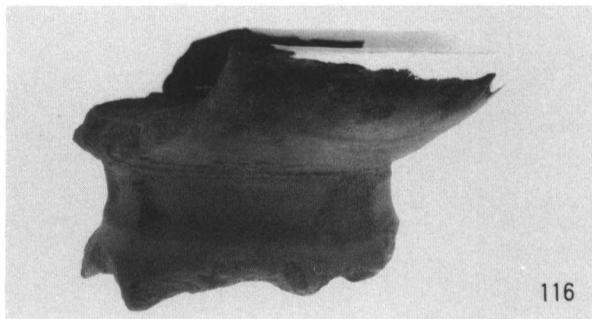
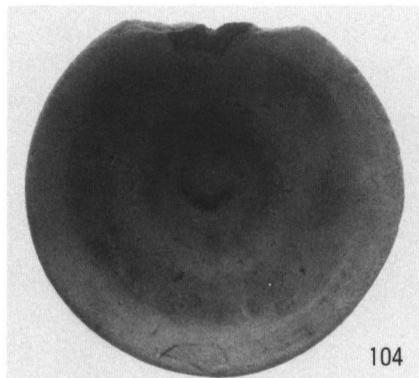
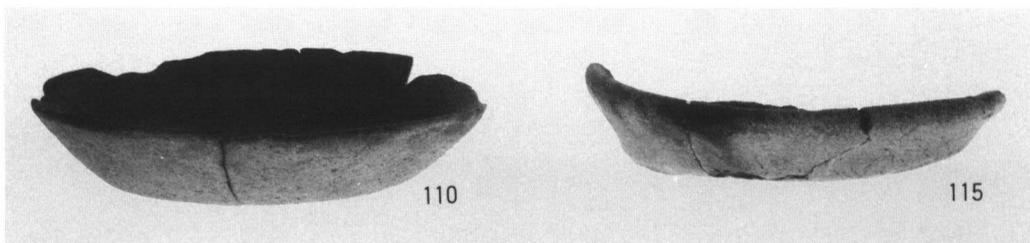
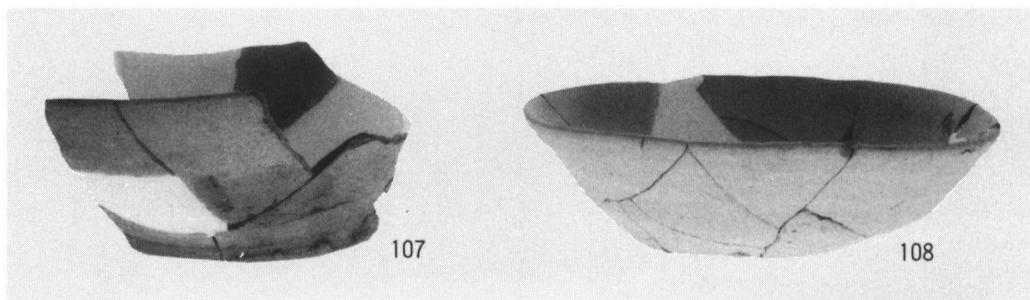
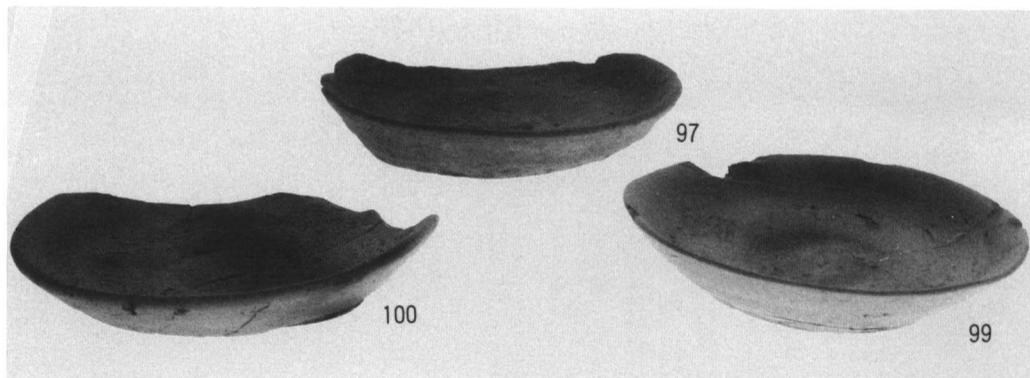




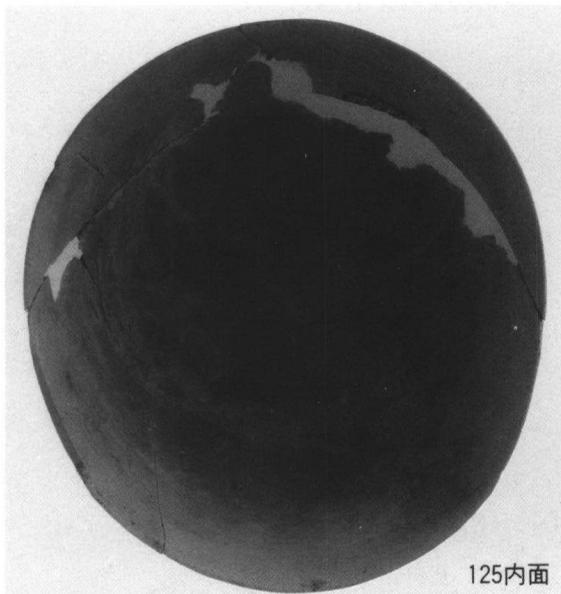
S R02出土遺物 (その3)



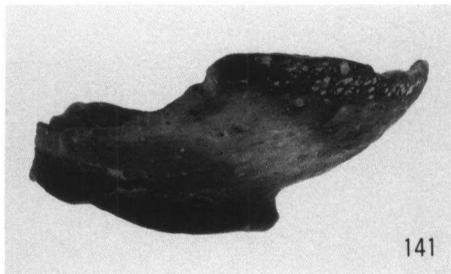
S R02出土遺物 (その4)



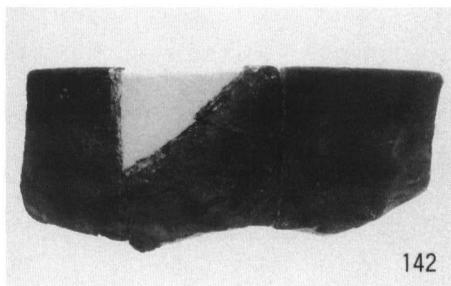
S R01出土遺物（その1）



125内面



141



142



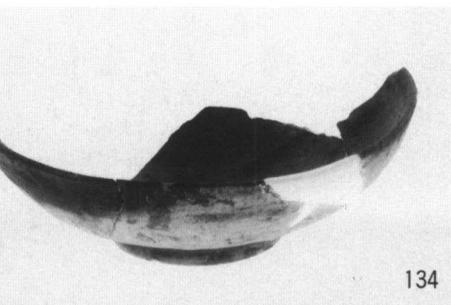
125



144



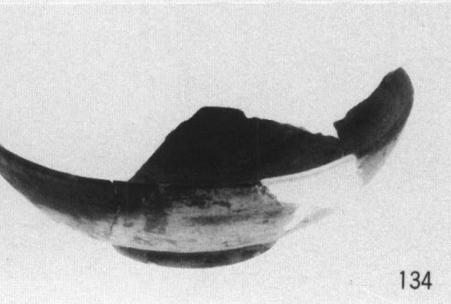
133



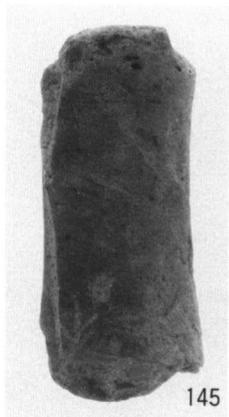
134



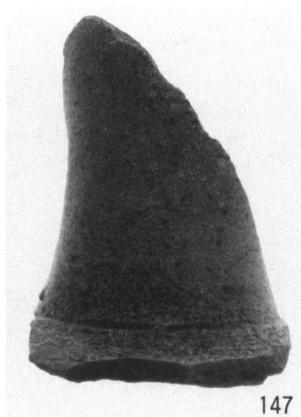
133



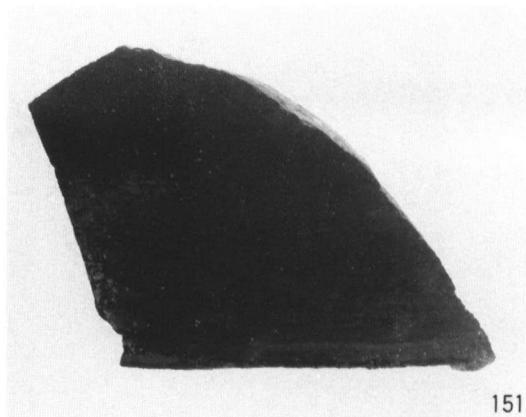
134



145



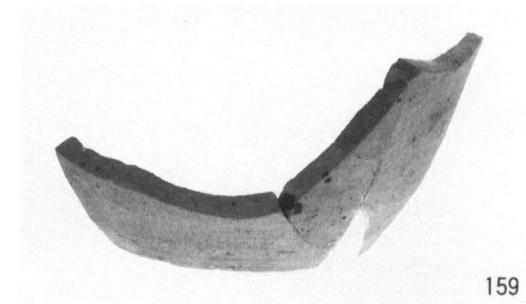
147



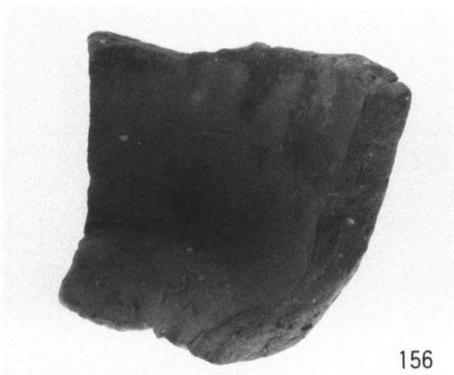
151



153



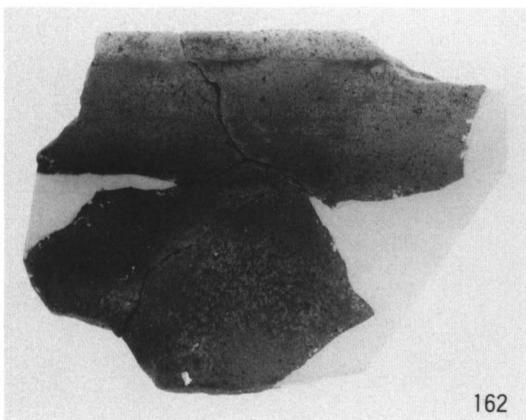
159



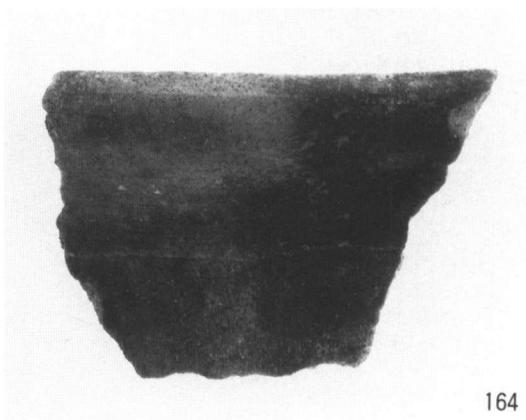
156



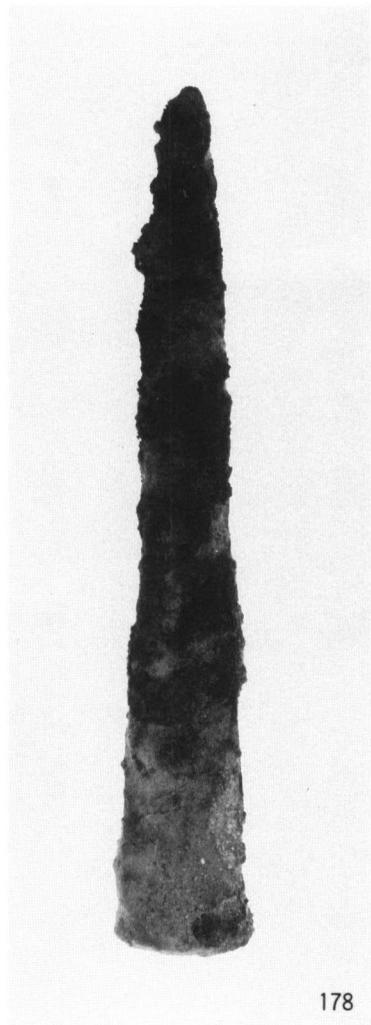
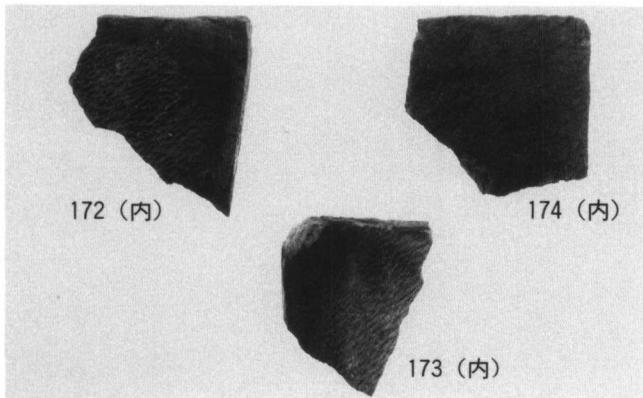
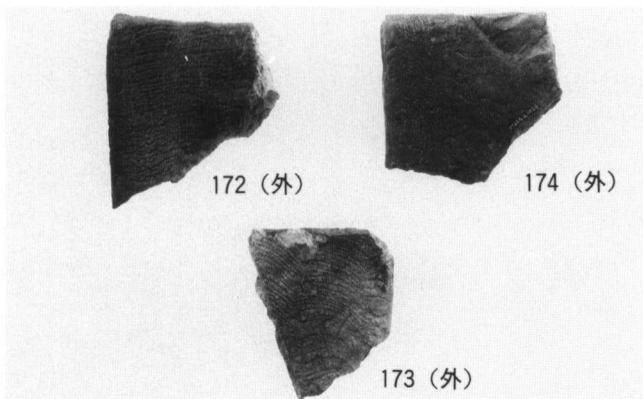
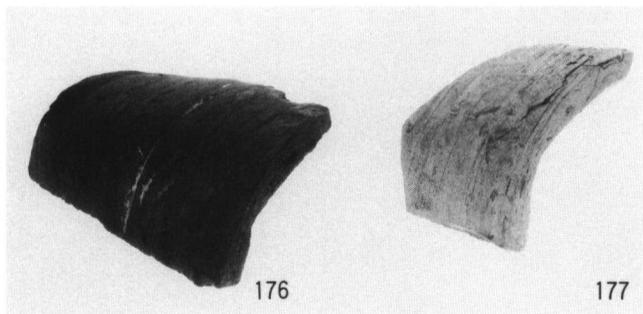
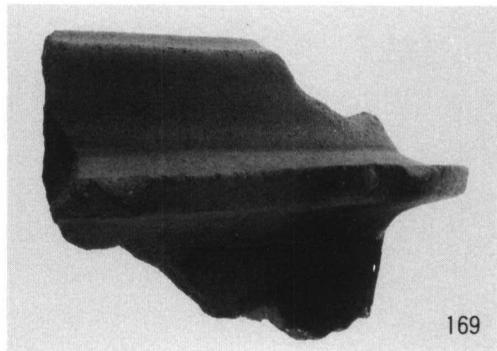
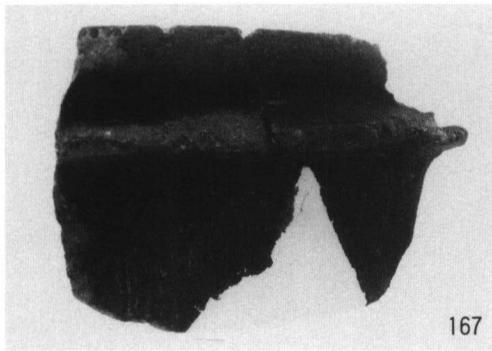
157



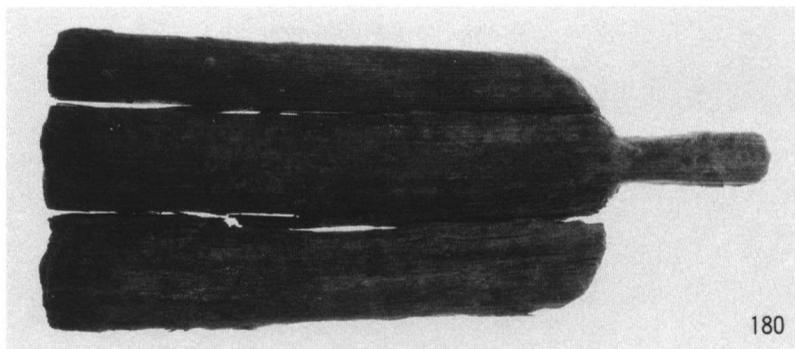
162



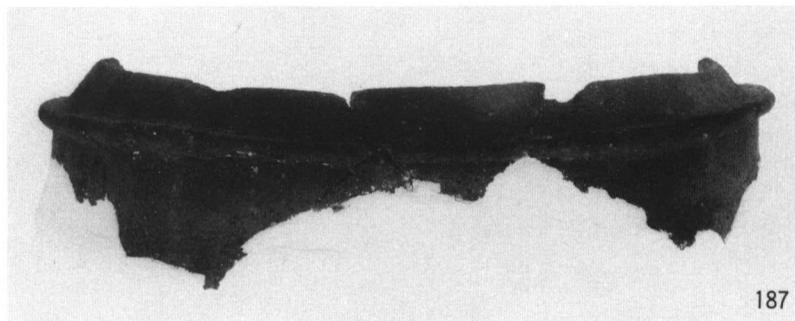
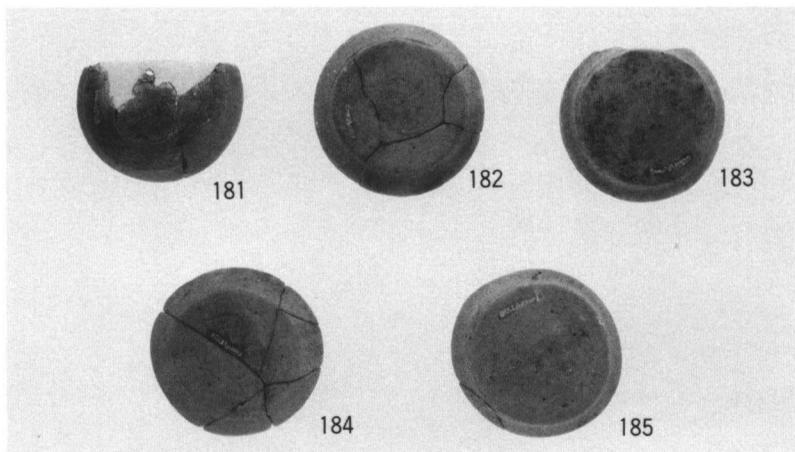
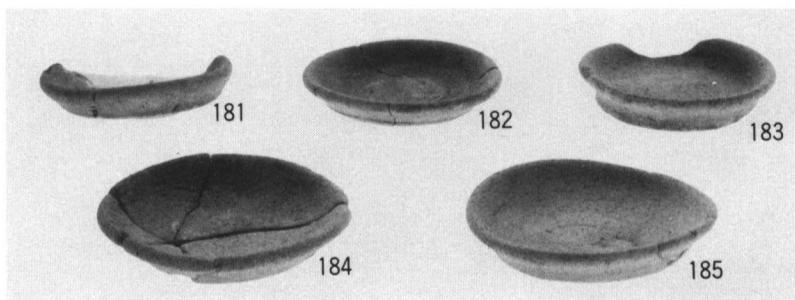
164



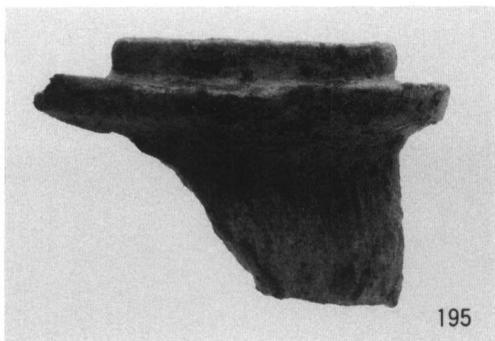
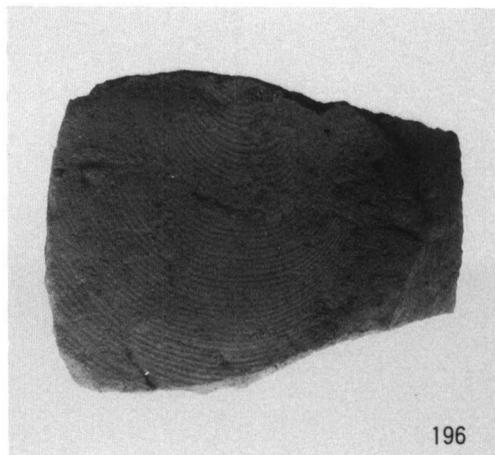
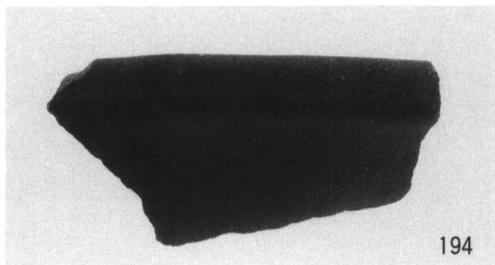
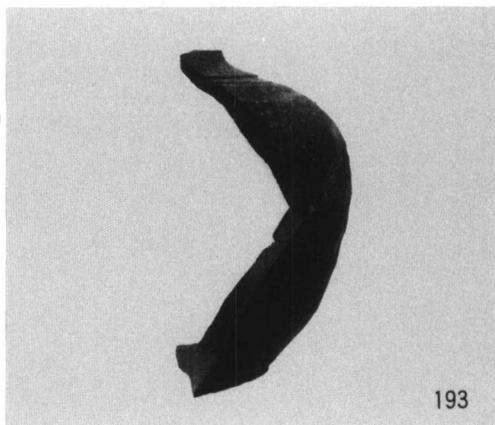
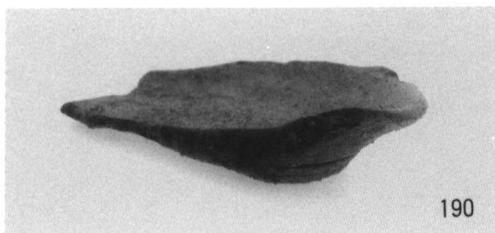
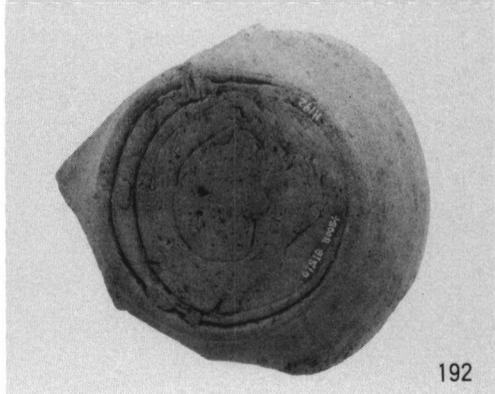
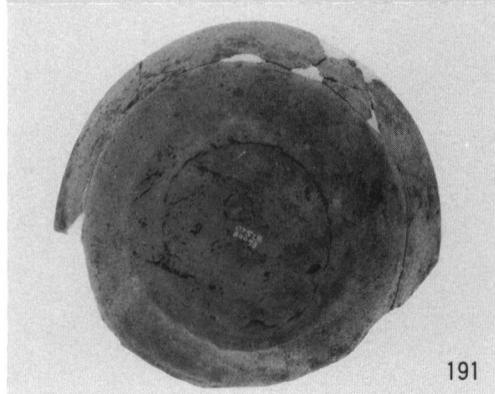
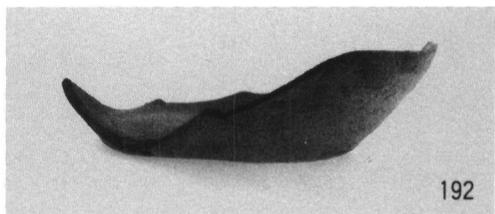
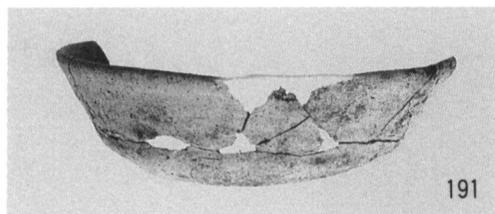
S R01出土遺物 (その4)



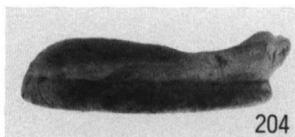
① S R01出土遺物 (その5)



② S K01出土遺物



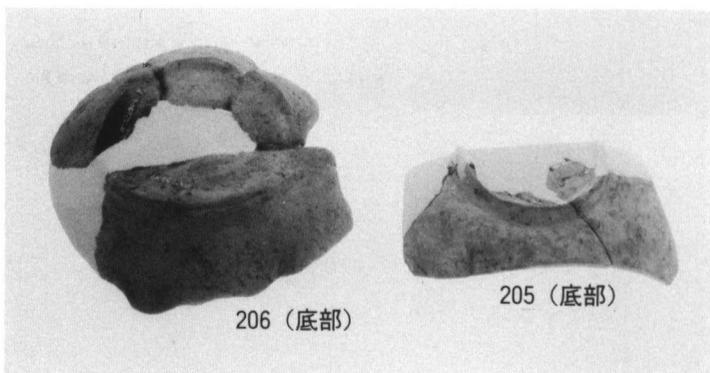
SB02 (190~193), SP33 (194, 195), SP50 (196) 出土遺物



204

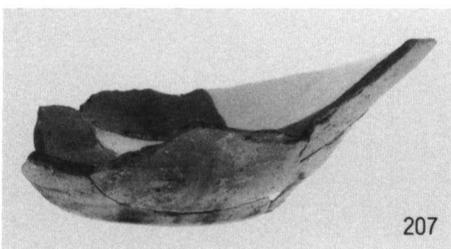


204 (底部)

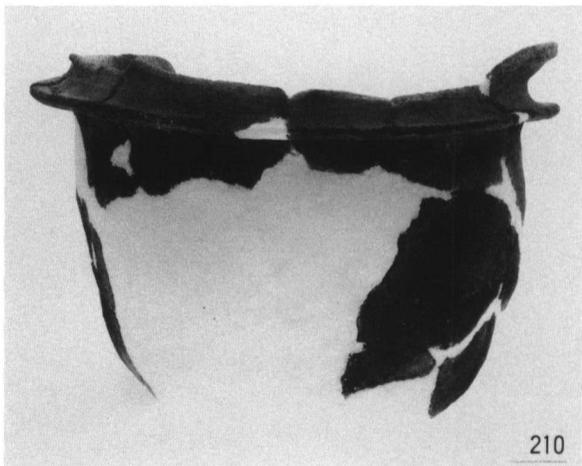


206 (底部)

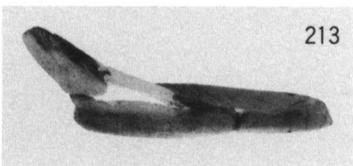
205 (底部)



207



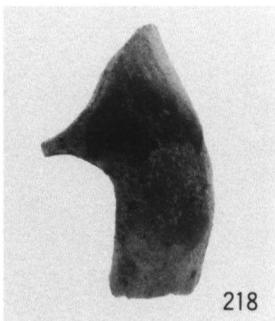
210



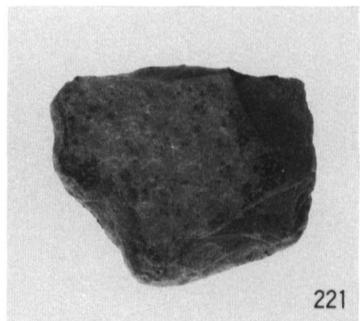
213



213 (底部)

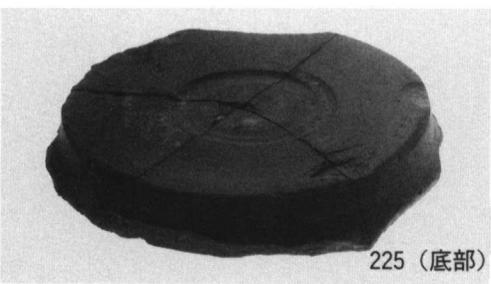


218

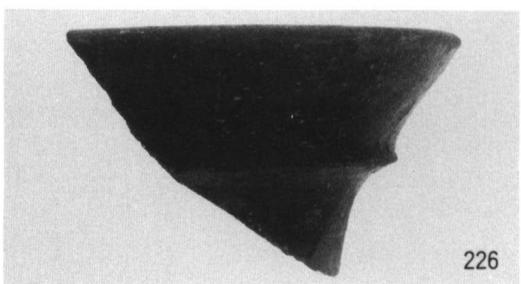


221

① S D07出土遺物

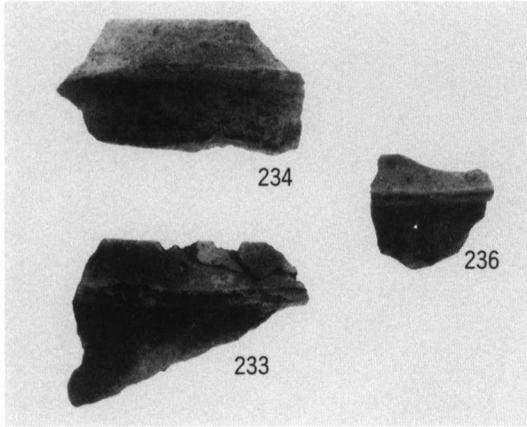


225 (底部)

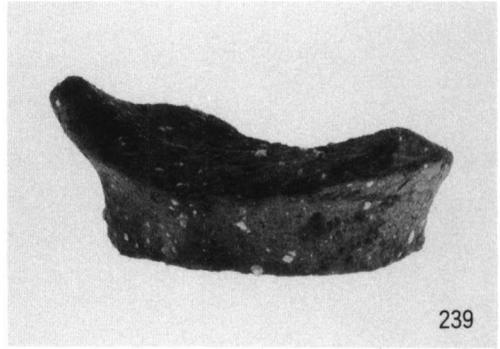


226

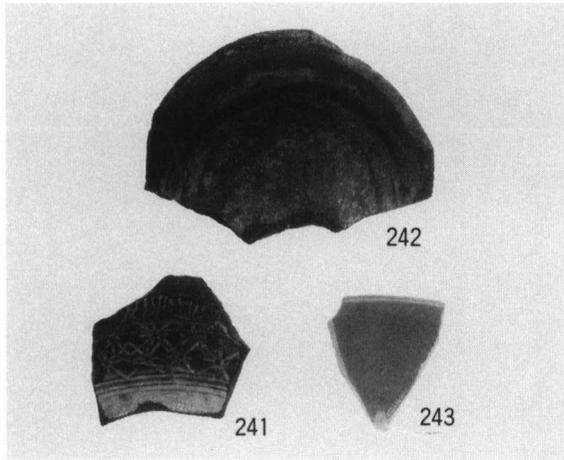
② S D08出土遺物



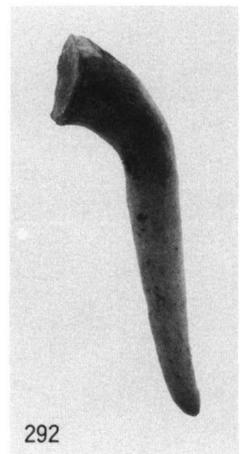
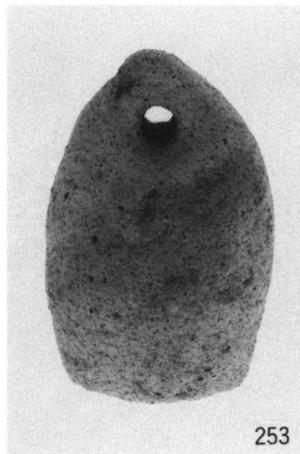
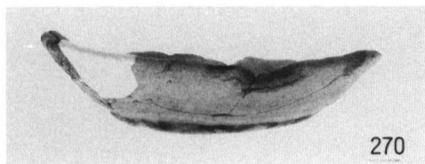
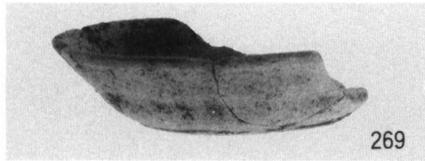
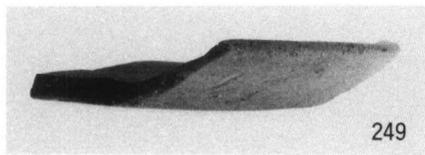
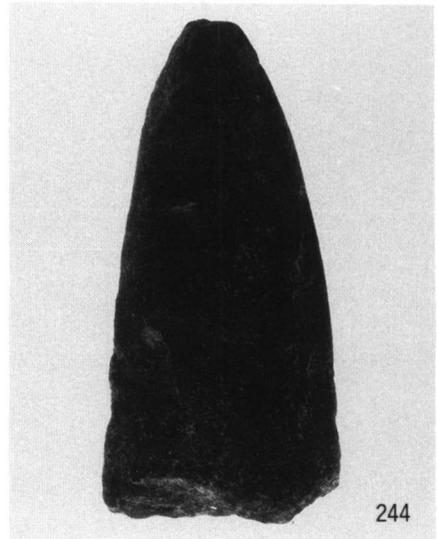
① S D10出土遺物



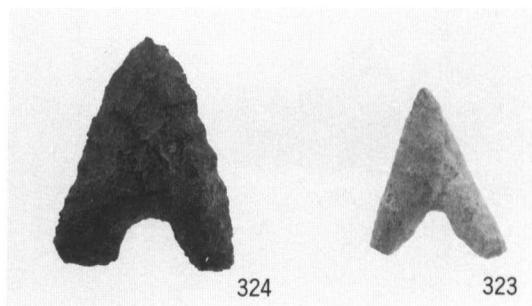
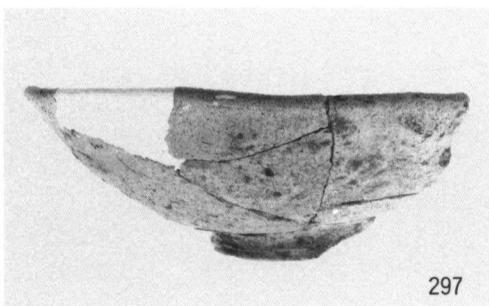
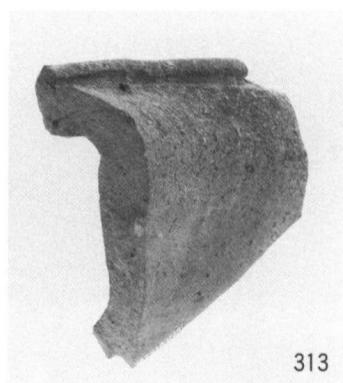
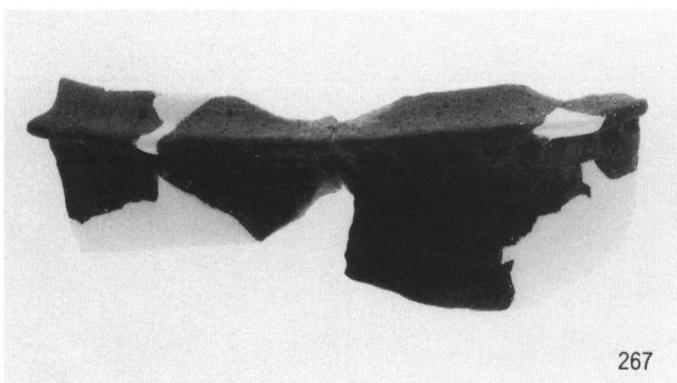
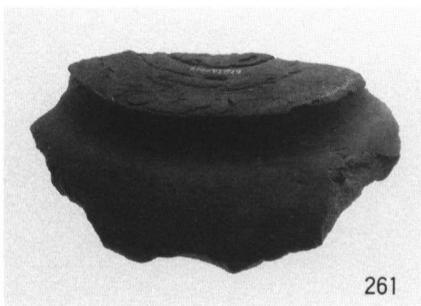
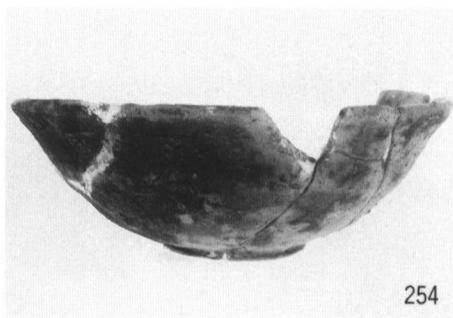
② S D03出土遺物



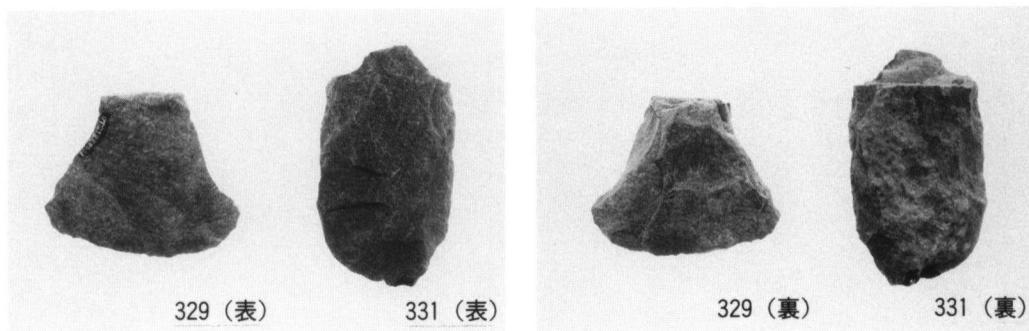
③ S D06出土遺物



④ 包含層出土遺物 (その1)



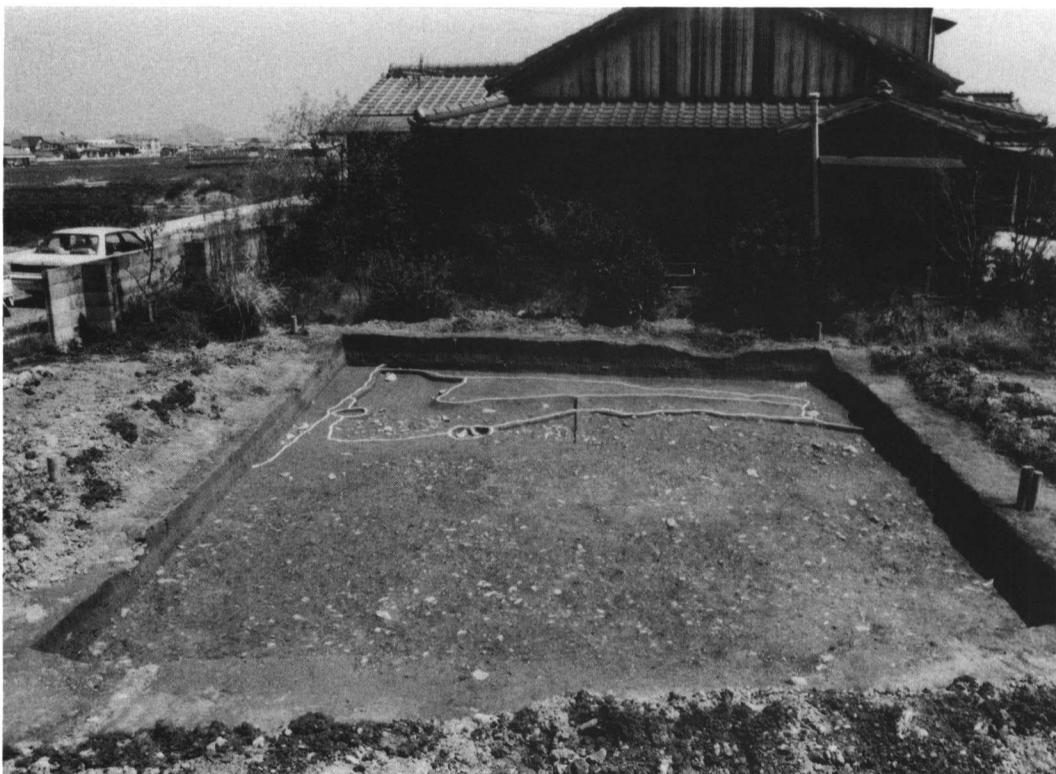
包含層出土遺物（その2）



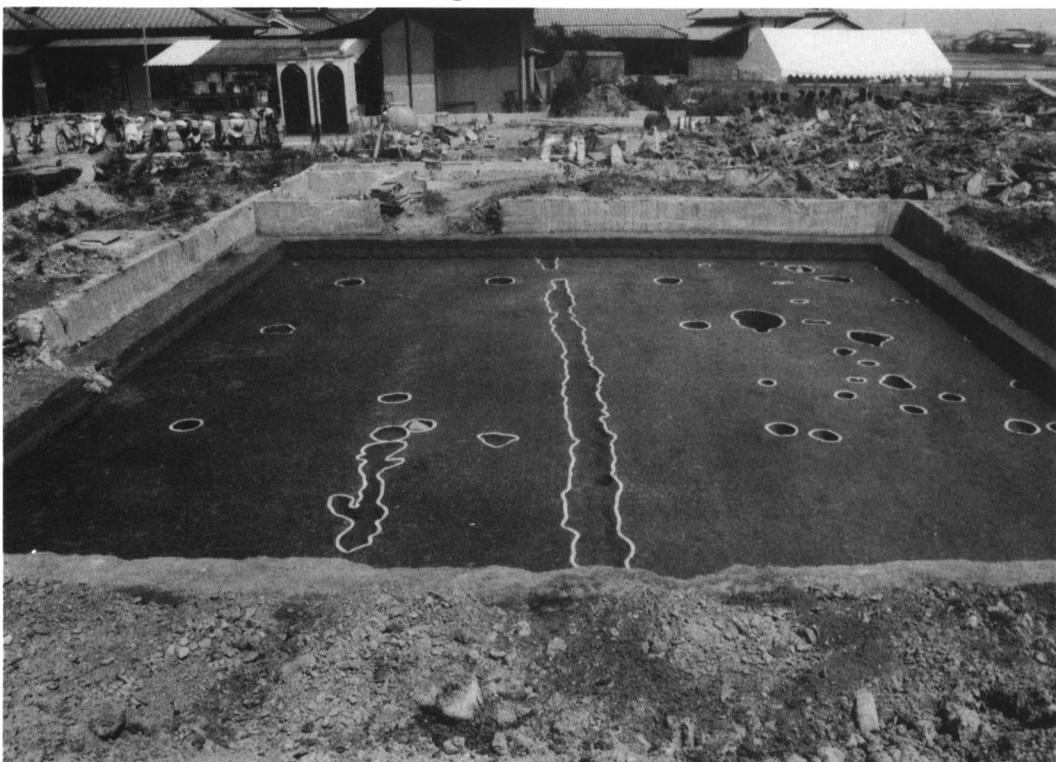
① 包含層出土遺物（その3）



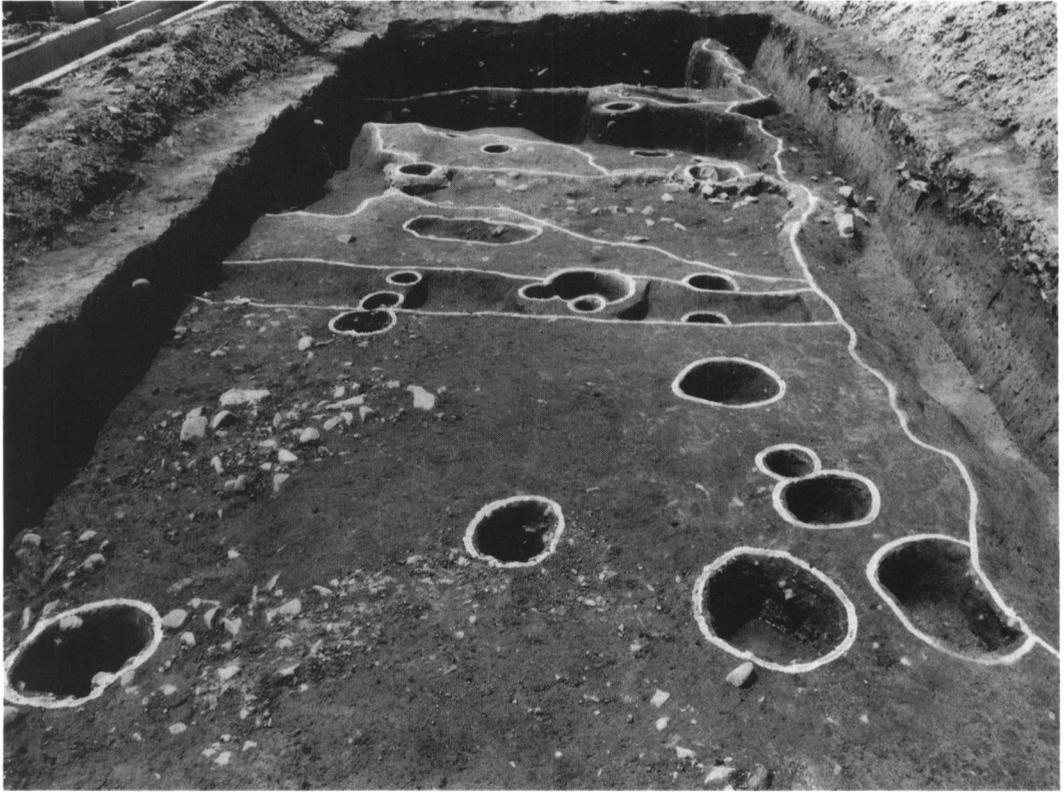
② 包含層出土獣骨（牛）



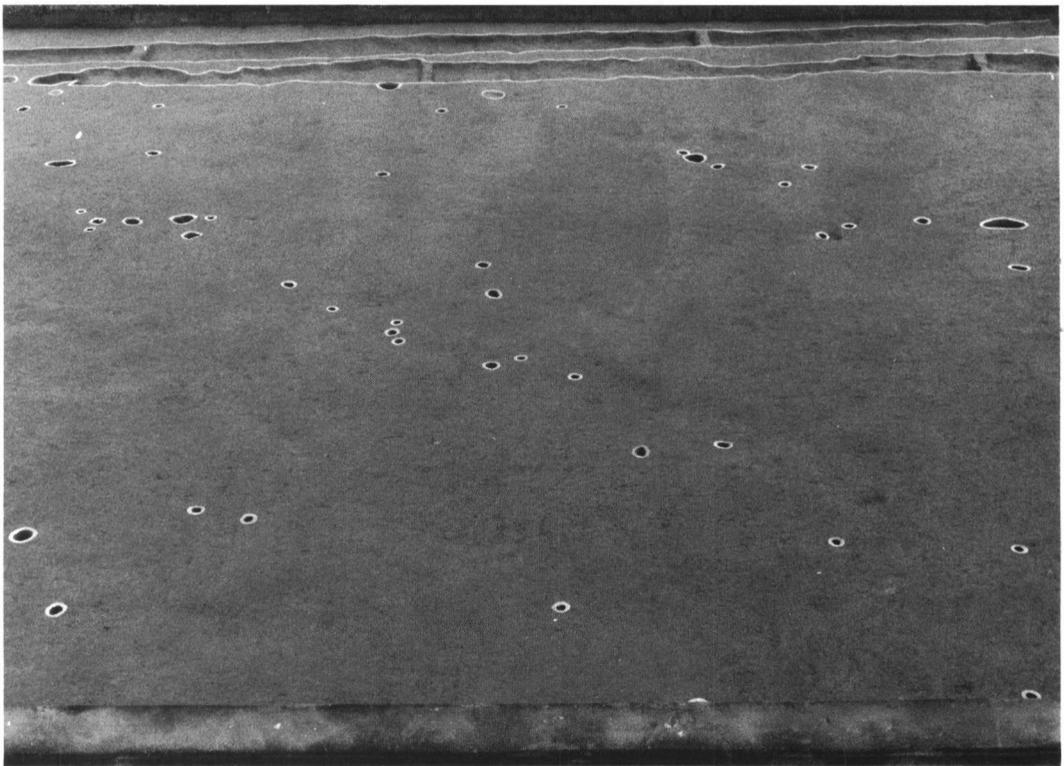
① H・I 8区



② I・J 8区



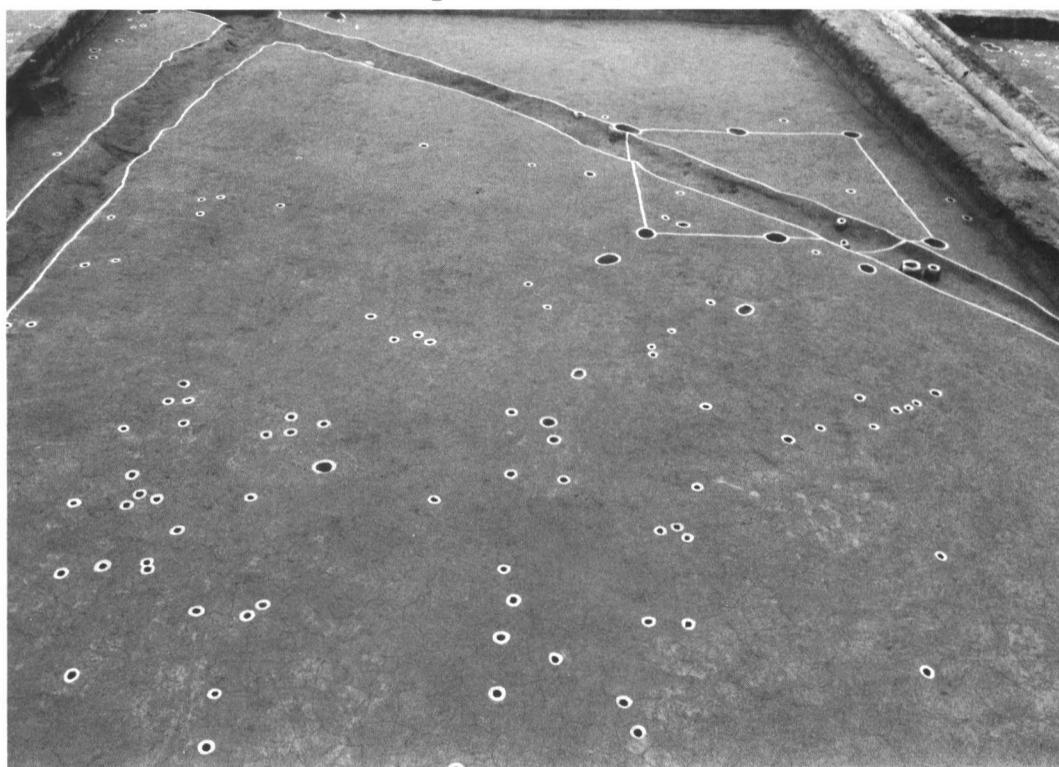
① I·J 6·7区



② M·N 9·10区



① L・M11・12区



② N10・11区